

View 管理

VMware Horizon 7 7.0



vmware®

最新の技術ドキュメントは、VMware の Web サイト (<https://docs.vmware.com/jp/>) でご確認ください。このドキュメントに関するご意見およびご感想は、docfeedback@vmware.com までお送りください。

VMware, Inc.
3401 Hillview Ave.
Palo Alto, CA 94304
www.vmware.com

ヴァイエルムウェア株式会社
105-0013 東京都港区浜松町 1-30-5
浜松町スクエア 13F
www.vmware.com/jp

Copyright © 2019 VMware, Inc. All rights reserved. [著作権および商標情報](#)。

目次

View 管理 12

1 View Administrator の使用 13

- View Administrator と View 接続サーバ 13
- View Administrator へのログイン 14
- View Administrator インターフェイスの使用のヒント 15
- View Administrator でのテキスト表示のトラブルシューティング 16

2 View 接続サーバを構成しています 18

- vCenter Server および View Composer の構成 18
 - View Composer AD 操作のユーザー アカウントの作成 18
 - vCenter Server インスタンスの View への追加 19
 - View Composer 設定を構成する 21
 - View Composer ドメインを構成する 23
 - vSphere でリンク クローン仮想マシンのディスク領域を再利用できるようにする 24
 - vCenter Server 用に View Storage Accelerator を構成する 25
 - vCenter Server と View Composer の同時操作の制限 27
 - リモート デスクトップ ログオン ストームをサポートするための同時電源操作レートの設定 28
 - デフォルトの SSL 証明書のサムプリントを受け入れる 28
 - View からの vCenter Server インスタンスの削除 30
 - View からの View Composer の削除 30
 - 競合している vCenter Server の一意の ID 31
- View 接続サーバのバックアップ 32
- クライアント セッションの設定の構成 32
 - クライアント セッションおよび接続のオプションの設定 32
 - Data Recovery パスワードを変更する 33
 - クライアント セッションのグローバル設定 33
 - クライアント セッションおよび接続のグローバル セキュリティ設定 36
 - View コンポーネントのメッセージ セキュリティ モード 38
 - 安全なトンネルと PCoIP Secure Gateway の構成 41
 - Blast Secure Gateway の構成 42
 - SSL 接続を中間サーバにオフロードする 43
 - View 接続サーバまたはセキュリティ サーバ ホスト用のゲートウェイの場所の構成 45
- View 接続サーバの無効化または有効化 46
- 外部 URL の編集 47
- カスタマー エクスペリエンス プログラムに参加または参加を取り消す 48
- View LDAP ディレクトリ 49

3 スマート カード認証の設定 51

- スマート カードを使用したログイン 51
- View 接続サーバでのスマート カード認証の構成 52
 - 証明機関の証明書の取得 53
 - Windows からの CA 証明書の取得 53
 - サーバ信頼ストア ファイルへの CA 証明書の追加 54
 - View 接続サーバの構成プロパティの変更 55
 - View Administrator でのスマート カード設定の構成 56
- サードパーティ製ソリューションでのスマート カード認証の構成 59
- スマート カード認証用の Active Directory を準備する 59
 - スマート カード ユーザーの UPN の追加 60
 - Enterprise NTAAuth ストアにルート証明書を追加する 60
 - 信頼されたルート証明機関へのルート証明書の追加 61
 - 中間証明機関への中間証明書の追加 61
- スマート カード認証の構成の検証 62
- スマート カードでの証明書失効チェックの使用 63
 - CRL チェックを使用したログイン 64
 - OCSP による証明書失効チェックを使用したログイン 64
 - CRL チェックの構成 65
 - OCSP による証明書失効チェックの構成 65
 - スマート カードでの証明書失効チェックのプロパティ 66

4 他のタイプのユーザー認証の設定 68

- 2 要素認証の使用 68
 - 2 要素認証を用いたログイン 69
 - View Administrator で 2 要素認証を有効にする 69
 - RSA SecurID アクセス拒否のトラブルシューティング 71
 - RADIUS アクセス拒否のトラブルシューティング 72
- SAML 認証の使用 72
 - VMware Identity Manager 統合用の SAML 認証の使用 73
 - View Administrator での SAML 認証子の構成 73
 - View 接続サーバでのサービス プロバイダ メタデータの有効期間の変更 76
 - View 接続サーバをサービス プロバイダとして使用可能にするための SAML メタデータの生成 77
 - 複数の動的 SAML 認証子の応答時間に関する注意事項 77
- バイオメトリクス認証の構成 77

5 認証情報を必要としないユーザー認証 79

- Windows ベースの Horizon Client で使用できる現在のユーザーとしてログイン機能を使用 79
- モバイルおよび Mac 版 Horizon Client での認証情報の保存 80
 - Horizon Client の認証情報を保存するようにタイムアウト制限を構成 80
- True SSO の設定 81

True SSO のアーキテクチャの特定	82
エンタープライズ認証局の設定	84
True SSO とともに使用する証明書テンプレートの作成	86
登録サーバのインストールおよび設定	88
登録サービス クライアント証明書のエクスポート	89
登録サーバでの登録サービス クライアント証明書のインポート	91
True SSO と連携するための SAML 認証の構成	92
True SSO のための View 接続サーバの構成	93
True SSO 構成のコマンドライン リファレンス	95
True SSO の詳細構成設定	99
システム健全性ダッシュボードを使用した True SSO に関する問題のトラブルシューティング	102

6 ロールベースの委任管理の構成 106

ロールと権限の概要	106
アクセス グループを使用したプールおよびファーム管理の委任	107
異なるアクセス グループの異なる管理者	108
同じアクセス グループの異なる管理者	108
権限の概要	108
管理者の管理	109
管理者の作成	110
管理者の削除	111
権限の管理と確認	111
権限の追加	111
権限の削除	112
権限の確認	113
アクセス グループの管理と確認	113
アクセス グループの追加	114
別のアクセス グループへのデスクトップ プールまたはファームの移動	114
アクセス グループの削除	115
アクセス グループ内のデスクトップ プール、アプリケーション プール、またはファームの確認	115
アクセス グループ内の vCenter 仮想マシンの確認	115
カスタム ロールの管理	116
カスタム ロールの追加	116
カスタム ロールの権限の変更	116
カスタム ロールの削除	117
定義済みのロールと権限	117
定義済みの管理者ロール	118
グローバル権限	119
オブジェクト固有の権限	120
内部権限	120
一般的なタスクに必要な権限	121

- プール管理のための権限 121
- マシン管理のための権限 121
- 通常ディスク管理のための権限 122
- ユーザーと管理者の管理のための権限 122
- 一般的な管理タスクと管理コマンドのための権限 123
- 管理者ユーザーおよびグループに関するベスト プラクティス 123

7 View Administrator および Active Directory のポリシーの構成 125

- View Administrator でのポリシーの設定 125
 - グローバル ポリシー設定の構成 126
 - デスクトップ プールのポリシーの構成 126
 - ユーザーのポリシーの構成 127
 - View ポリシー 127
- View グループ ポリシー管理用テンプレート ファイルの使用 128
 - View ADM および ADMX テンプレート ファイル 129
 - View Server 構成 ADM テンプレート設定 130
 - View Common の構成 ADM テンプレート設定 131

8 View コンポーネントの保守 134

- View 構成データのバックアップと復元 134
 - View 接続サーバと View Composer のデータのバックアップ 134
 - View 接続サーバと View Composer の構成データの復元 138
 - View Composer データベースのデータをエクスポート 142
- View コンポーネントの監視 143
- マシンのステータスの監視 144
- View サービスの概要 144
 - View サービスの停止と開始 145
 - View 接続サーバ ホスト上のサービス 145
 - セキュリティ サーバ上のサービス 146
- 製品のライセンス キーの変更 147
- 製品ライセンスの使用状況の監視 147
 - 製品ライセンスの使用状況データのリセット 148
- Active Directory からの一般的なユーザー情報の更新 148
- 別のマシンへの View Composer の移行 149
 - View Composer 移行に関するガイドライン 150
 - 既存のデータベースを含む View Composer を移行する 151
 - リンク クローン仮想マシンがない View Composer の移行 152
 - RSA 鍵の移行のための Microsoft .NET Framework の準備 154
 - 新しい View Composer サービスへの RSA 鍵コンテナの移行 154
- View 接続サーバ インスタンス、セキュリティ サーバ、または View Composer で証明書を更新する 155
- カスタマー エクスペリエンス改善プログラムによって収集される情報 157

VMware によるプライバシーの保護	157
カスタマー エクスペリエンス向上プログラムによって収集されたデータのプレビュー	158
カスタマー エクスペリエンス向上プログラムに関するその他の情報	158
VMware が収集する View のグローバル データ	159
VMware によって収集される View 接続サーバ データ	160
VMware によって収集されるセキュリティ サーバ データ	162
VMware によって収集されるデスクトップ プール データ	163
VMware によって収集されるマシン データ	166
VMware によって収集される vCenter Server データ	168
VMware によって収集される ThinApp データ	169
VMware によって収集される Cloud Pod アーキテクチャ情報	169
VMware によって収集される Horizon Client データ	170
VMware によって収集されるデータ	172

9 View Composer のリンククローン デスクトップ仮想マシンの管理 174

マシンの更新によるリンク クローン サイズの削減	174
マシンの更新操作	175
リンク クローン デスクトップの更新	176
リンク クローンの再構成のための親仮想マシンの準備	177
リンククローン仮想マシンの再構成	177
再構成によるリンク クローンの更新	179
失敗した再構成の修正	180
リンククローン仮想マシンの再分散	181
論理ドライブ間のリンク クローンの再分散	182
リンク クローン仮想マシンを別のデータストアへ移行する	183
再分散操作の後のリンク クローン ディスクのファイル名	184
View Composer 通常ディスクの管理	184
View Composer 通常ディスク	184
View Composer 通常ディスクの切断	185
別のリンク クローンへの View Composer 通常ディスクの接続	186
View Composer 通常ディスクのプールまたはユーザーの編集	186
切断された通常ディスクによるリンク クローンの再作成	187
vSphere からの通常ディスクのインポートによるリンク クローンの復元	188
切断された View Composer 通常ディスクの削除	189

10 デスクトップ プール、マシン、セッションの管理 190

インスタントクローン デスクトップ プールの管理	190
インスタントクローン デスクトップ プールのイメージの変更	190
ブッシュイメージ操作のモニター	191
ブッシュイメージ操作の再スケジュールまたはキャンセル	191
デスクトップ プールの管理	191

デスクトップ プールの編集	192
既存のデスクトップ プールの設定の変更	192
既存のデスクトップ プールの固定の設定	194
名前付けパターンによってプロビジョニングされる自動プールのサイズの変更	195
名前のリストによってプロビジョニングされる自動プールへのマシンの追加	196
デスクトップ プールの無効化または有効化	197
自動デスクトップ プールのプロビジョニングの無効化または有効化	197
Adobe Flash の品質とスロットルの設定	198
Adobe Flash の品質とスロットル	198
デスクトップ プールの削除	199
デスクトップ マシンを含むデスクトップ プールの削除を許可しない View の構成	200
仮想マシンベースのデスクトップの管理	201
ユーザーへのマシンの割り当て	201
専用マシンからのユーザーの割り当て解除	202
メンテナンス モードでの既存のマシンのカスタマイズ	202
仮想マシン デスクトップ ステータスの監視	203
vCenter Server 仮想マシンのステータス	203
仮想マシン デスクトップの削除	205
インスタントクローン デスクトップのリカバリ	206
非管理対象マシンの管理	206
手動プールへの非管理対象マシンの追加	207
手動デスクトップ プールからの非管理対象マシンを削除する	207
登録済みのマシンを View から削除する	208
非管理対象マシンのステータス	208
リモート デスクトップ セッションとアプリケーション セッションの管理	209
外部ファイルへの View 情報のエクスポート	210

11 アプリケーション プール、ファームおよび RDS ホストの管理 212

アプリケーション プールの管理	212
アプリケーション プールの編集	212
アプリケーション プールの削除	213
ファームの管理	213
ファームの編集	213
ファームの削除	214
ファームの無効化または有効化	214
自動ファームの再構成	214
RDS ホストの管理	216
RDS ホストの編集	217
手動ファームに RDS ホストを追加する	217
ファームから RDS ホストを削除する	217
View からの RDS ホストの削除	218

RDS ホストの無効化または有効化	218
RDS ホストの監視	218
RDS ホストのステータス	219
RDS デスクトップでの Internet Explorer による Adobe Flash のスロットルの構成	220
RDS ホストの負荷分散の構成	221
負荷値およびマップされた負荷設定	221
負荷分散機能の制約	221
RDS ホストの負荷分散スクリプトの作成	222
RDS ホストでの VMware Horizon View スクリプト ホスト サービスの有効化	223
RDS ホストでの負荷分散スクリプトの構成	224
負荷分散スクリプトの検証	225
負荷分散セッションの配置の例	225
アプリケーション プールのアンチアフィニティ ルールの構成	228
アンチアフィニティ機能の制約	229

12 View Administrator での ThinApp アプリケーションの管理 230

ThinApp アプリケーションに対する View の要件	230
アプリケーション パッケージのキャプチャと格納	231
アプリケーションのパッケージ化	232
Windows ネットワーク共有の作成	232
アプリケーション リポジトリの登録	233
View Administrator への ThinApp アプリケーションの追加	233
ThinApp テンプレートの作成	234
マシンまたはデスクトップ プールへの ThinApp アプリケーションの割り当て	235
ThinApp アプリケーションを割り当てるためのベスト プラクティス	236
複数のマシンへの ThinApp アプリケーションの割り当て	237
マシンに複数の ThinApp アプリケーションを割り当てる	237
複数のデスクトップ プールへの ThinApp アプリケーションの割り当て	238
デスクトップ プールへの複数の ThinApp アプリケーションの割り当て	239
マシンまたはデスクトップ プールへの ThinApp テンプレートの割り当て	240
ThinApp アプリケーション割り当ての確認	241
MSI パッケージ情報の表示	242
View Administrator での ThinApp アプリケーションの保守	243
複数のマシンからの ThinApp アプリケーション割り当ての削除	243
マシンからの複数の ThinApp アプリケーション割り当ての削除	244
複数のデスクトップ プールからの ThinApp アプリケーション割り当ての削除	244
デスクトップ プールからの複数の ThinApp アプリケーション割り当ての削除	245
View Administrator からの ThinApp アプリケーションの削除	245
ThinApp テンプレートの変更または削除	246
アプリケーション リポジトリの削除	246
View Administrator での ThinApp アプリケーションの監視とトラブルシューティング	246

- アプリケーション リポジトリを登録できない 247
- ThinApp アプリケーションを View Administrator に追加できない 247
- ThinApp テンプレートを割り当てることができない 248
- ThinApp アプリケーションがインストールされない 248
- ThinApp アプリケーションがアンインストールされない 249
- MSI パッケージが無効 250
- ThinApp 構成例 250

13 キオスク モードのクライアントの設定 252

- キオスク モードのクライアントの構成 253
 - キオスク モードのクライアントのための Active Directory および View の準備 254
 - キオスク モードのクライアントに対するデフォルト値の設定 255
 - クライアント デバイスの MAC アドレスの表示 256
 - キオスク モードのクライアント用アカウントの追加 257
 - キオスク モードのクライアントの認証の有効化 258
 - キオスク モードのクライアントの構成の確認 260
 - キオスク モードのクライアントからリモート デスクトップへの接続 261

14 View のトラブルシューティング 264

- システム健全性の監視 264
- View でのイベントの監視 265
 - View イベント メッセージ 265
- View の診断情報の収集 266
 - Horizon Agent 用のデータ収集ツール バンドルの作成 266
 - Horizon Client の診断情報の保存 267
 - サポート スクリプトを使用した View Composer の診断情報の収集 268
 - View 接続サーバの診断情報の収集 268
 - コンソールからの Horizon Agent、Horizon Client、または View 接続サーバの診断情報の収集 269
- サポート要求の更新 270
- セキュリティ サーバと View 接続サーバのペアリングの失敗のトラブルシューティング 271
- View Server の証明書失効チェックのトラブルシューティング 272
- スマート カードでの証明書失効チェックのトラブルシューティング 273
- トラブルシューティングの追加情報 273

15 vdmadmin コマンドの使用 274

- vdmadmin コマンドの使用法 276
 - vdmadmin コマンドでの認証 276
 - vdmadmin コマンドの出力形式 277
 - vdmadmin コマンド オプション 277
- A オプションを使用した Horizon Agent のログの構成 278
- A オプションを使用した IP アドレスの上書き 281

- C オプションを使用した View 接続サーバ グループの名前の設定 282
- F オプションを使用した外部セキュリティ プリンシパルの更新 283
- H オプションを使用した健全性モニターの一覧表示および詳細表示 283
- I オプションを使用した View の動作レポートの一覧表示および結果表示 285
- l オプションを使用した Syslog 形式での View イベント ログ メッセージの生成 286
- L オプションを使用した専用マシンの割り当て 288
- M オプションを使用したマシンに関する情報の表示 290
- M オプションを使用した仮想マシン上のディスク領域の再利用 291
- N オプションを使用したドメイン フィルタの構成 292
- ドメイン フィルタの構成 295
 - ドメインを含めるフィルタ処理の例 296
 - ドメイン除外のフィルタ処理の例 297
- O および -P オプションを使用して資格を持たないユーザーのマシンとポリシーを表示する 299
- Q オプションを使用したキオスク モードのクライアントの構成 301
- R オプションを使用したマシンの最初のユーザーの表示 306
- S オプションを使用した View 接続サーバ インスタンスまたはセキュリティ サーバのエントリの削除 307
- T オプションの使用による管理者の 2 番目の認証情報の提供 308
- U オプションを使用したユーザーに関する情報の表示 309
- V オプションを使用した仮想マシンのロック解除またはロック 310
- X オプションを使用した LDAP エントリ コリジョンの検出と解決 312

View 管理

本マニュアル『View の管理』では、View Administrator での View 接続サーバの構成、管理者の作成、ユーザー認証の設定、ポリシーの構成、VMware ThinApp[®] アプリケーションの管理方法など、VMware Horizon[®] 7 を構成および管理する方法について説明します。また、View コンポーネントを保守およびトラブルシューティングする方法についても説明します。

対象読者

本書に記載されている情報は、VMware Horizon 7 を構成および管理するすべての方を対象としています。本書に記載されている情報は、仮想マシンのテクノロジーとデータセンターの操作に精通した、経験豊富な Windows または Linux システム管理者向けに書かれています。

View Administrator の使用

View Administrator は、View 接続サーバを構成し、リモート デスクトップおよびアプリケーションを管理するための Web インターフェイスです。

View Administrator、View コマンドレット、および `vdmadmin` で実行できる操作の比較については、『View の統合』ドキュメントを参照してください。

注: Horizon 7 では、View Administrator は Horizon Administrator と呼ばれます。このドキュメントでは、Horizon Administrator を View Administrator と呼びます。

この章には、次のトピックが含まれています。

- [View Administrator と View 接続サーバ](#)
- [View Administrator へのログイン](#)
- [View Administrator インターフェイスの使用のヒント](#)
- [View Administrator でのテキスト表示のトラブルシューティング](#)

View Administrator と View 接続サーバ

View Administrator では View の Web ベースの管理インターフェイスが提供されます。

View 接続サーバは、レプリカ サーバまたはセキュリティ サーバとして機能する複数のインスタンスを持つことができます。View のデプロイ環境によっては、View 接続サーバの各インスタンスで View Administrator インターフェイスを使用できます。

View 接続サーバで View Administrator を使用する場合、次のベスト プラクティスを使用します。

- View 接続サーバのホスト名と IP アドレスを使用して、View Administrator にログインします。View Administrator インターフェイスを使用して、View 接続サーバおよび関連するセキュリティ サーバやレプリカ サーバを管理します。
- ポッド環境では、すべての管理者が同じ View 接続サーバのホスト名と IP アドレスを使用して View Administrator にログインしていることを確認します。ロード バランサのホスト名と IP アドレスを使用して、View Administrator の Web ページにアクセスしないでください。

注: セキュリティ サーバではなく、Access Point アプライアンスを使用する場合は、Access Point REST API を使用して Access Point アプライアンスを管理する必要があります。詳細については、Access Point をデプロイして構成するを参照してください。

View Administrator へのログイン

初期構成タスクを実行するには、View Administrator にログインする必要があります。View Administrator には、安全な (SSL) 接続を使用してアクセスします。

前提条件

- View 接続サーバが専用コンピュータにインストールされていることを確認します。
- View Administrator でサポートされている Web ブラウザを使用していることを確認します。View Administrator の要件については、『View インストールドキュメント』を参照してください。

手順

- 1 Web ブラウザを開き、次の URL を入力します。*server*は、View 接続サーバ インスタンスのホスト名です。

https://*server*/admin

注: ホスト名が解決できないときに View 接続サーバ インスタンスにアクセスする必要がある場合は、IP アドレスを使用できます。ただし、通信するホストは、View 接続サーバ インスタンスに対して構成された SSL 証明書に一致しないため、アクセスがブロックされたりアクセスのセキュリティが低下したりします。

View Administrator へのアクセスは、View 接続サーバ コンピュータで構成されている証明書のタイプによって異なります。

View 接続サーバ ホストで Web ブラウザを開く場合、**https://localhost** ではなく、**https://127.0.0.1** を使用して接続します。この方法で localhost 解決における潜在的な DNS 攻撃を回避することにより、セキュリティが向上します。

オプション	説明
View 接続サーバ用に CA によって署名された証明書を構成しています。	最初に接続するときに、Web ブラウザで View Administrator が表示されます。
View 接続サーバによって提供されたデフォルトの自己署名証明書が構成されます。	最初に接続したときに、Web ブラウザによって、アドレスに関連付けられているセキュリティ証明書が、信頼された証明機関から発行されていないことを警告するページが表示される場合があります。 [無視] をクリックして、現在の SSL 証明書の使用を続けます。

- 2 View Administrator アカウントにアクセスするための認証情報を持つユーザーとしてログインします。

スタンドアロンの View 接続サーバ インスタンス、または複製されたグループにおける最初の View 接続サーバ インスタンスをインストールするときに、View Administrator アカウントを指定します。View Administrator アカウントとしては、View 接続サーバ コンピュータ上のローカル Administrators グループ (BUILTIN \Administrators)、またはドメイン ユーザー/グループのアカウントを指定できます。

View Administrator にログインした後、[View 構成] - [管理者] を使用して、View Administrator のロールを持つユーザーおよびグループのリストを変更できます。

View Administrator インターフェイスの使用のヒント

View Administrator のユーザー インターフェイス機能を使用すると、View ページ内を移動したり、View オブジェクトの検索、フィルタ処理、および並べ替えを行ったりすることができます。

View Administrator には、多くの一般的なユーザー インターフェイス機能があります。たとえば、各ページの左側のナビゲーション ペインから、View Administrator のその他のページに直接移動できます。検索フィルタでは、検索対象のオブジェクトに関連するフィルタ条件を選択できます。

[表 1-1. View Administrator のナビゲーションおよび表示機能](#) で、View Administrator の使用に役立つ、その他のいくつかの機能について説明します。

表 1-1. View Administrator のナビゲーションおよび表示機能

View Administrator 機能	説明
View Administrator ページで前および次に移動	<p>以前表示した View Administrator ページに戻るには、ブラウザの [戻る] ボタンをクリックします。現在のページに戻るには、[進む] ボタンをクリックします。</p> <p>View Administrator ウィザードまたはダイアログ ボックスの使用中にブラウザの [戻る] ボタンをクリックすると、View Administrator のメイン ページに戻ります。ウィザードまたはダイアログに入力した情報は失われます。</p> <p>View 5.1 リリースより前の View バージョンでは、View Administrator 内を移動するときにブラウザの [戻る] ボタンおよび [進む] ボタンを使用できませんでした。ナビゲーションのため、View Administrator ウィンドウ内に独自の [戻る] ボタンと [進む] ボタンが提供されていました。これらのボタンは View 5.1 リリースで削除されました。</p>
View Administrator ページのブックマーク	<p>ブラウザで View Administrator ページをブックマークできます。</p>
複数列の並べ替え	<p>複数列の並べ替えを使用して、さまざまな方法で View オブジェクトを並べ替えることができます。</p> <p>View Administrator の表の一番上の行にある見出しをクリックして、その見出しに基づいて View オブジェクトをアルファベット順に並べ替えます。</p> <p>たとえば [リソース] - [マシン] ページで [デスクトップ プール] をクリックすると、デスクトップを含むプールに基づいてデスクトップを並べ替えることができます。</p> <p>[1] が見出しの隣に表示されます。これはその列が一次的な並べ替え列であることを示します。見出しを再びクリックすると、並べ替え順序を逆にすることができます。並べ替え順序は、上または下矢印によって示されます。</p> <p>二次的な項目によって View オブジェクトを並べ替えるには、<Ctrl> キーを押しながら別の見出しをクリックします。</p> <p>たとえば、マシン表では、[ユーザー] をクリックして、デスクトップが割り当てられたユーザーに基づいて二次的な並べ替えを実行できます。二次的な見出しの隣には [2] が表示されます。この例では、デスクトップはプールによって並べ替えられ、各プール内ではユーザーによって並べ替えられます。</p> <p><Ctrl> キーを押しながら続けてクリックすると、表内のすべての列を重要性の高い順に並べ替えることができます。</p> <p>並べ替え項目の選択を解除するには、<Ctrl> + <Shift> キーを押しながらクリックします。</p> <p>たとえば、特定の状態で、特定のデータソースに保存されている、プール内のデスクトップを表示できます。[リソース] - [マシン] を選択して、[データストア] 見出しをクリックし、Ctrl キーを押しながら [ステータス] 見出しをクリックすることができます。</p>

View Administrator 機能	説明
表の列のカスタマイズ	<p>選択した列の非表示や最初の列のロックによって、View Administrator の表の列の表示をカスタマイズできます。この機能を使用すると、多くの列を含む [カタログ] - [デスクトップ プール] などの大きな表の表示を管理できます。</p> <p>列のヘッダを右クリックすると、次のアクションを実行できるコンテキスト メニューが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 選択した列を非表示。 ■ 列をカスタマイズ。ダイアログに表内のすべての列が表示されます。表示または非表示にする列を選択できます。 ■ 最初の列をロック。このオプションにより、多くの列を含む表を横にスクロールするときに、左側の列が表示されたままになります。たとえば [カタログ] - [デスクトップ プール] ページで、横にスクロールして他のデスクトップの特性を表示するときに、デスクトップ ID は表示されたままになります。
View オブジェクトの選択および View オブジェクトの詳細の表示	<p>View オブジェクトが表示される View Administrator の表で、オブジェクトを選択したり、オブジェクトの詳細を表示したりできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ オブジェクトを選択するには、表のオブジェクトの行内をクリックします。ページの上部にある、オブジェクトを管理するメニューとコマンドがアクティブになります。 ■ オブジェクトの詳細を表示するには、オブジェクトの行の左セルをダブルクリックします。新しいページに、オブジェクトの詳細が表示されます。 <p>たとえば、[カタログ] - [デスクトップ プール] ページで個々のプールの行内をクリックすると、プールに関連するコマンドがアクティブになります。</p> <p>左の列の [ID] セルをダブルクリックすると、プールに関する詳細を含む新しいページが表示されます。</p>
詳細表示のためのダイアログ ボックスの展開	<p>View Administrator ダイアログ ボックスを展開して、表の列にデスクトップ名やユーザー名などの詳細を表示できます。</p> <p>ダイアログ ボックスを展開するには、ダイアログ ボックスの右下隅のドットの上にマウスを置き、角をドラッグします。</p>
View オブジェクトのコンテキスト メニューの表示	<p>View Administrator の表で View オブジェクトを右クリックして、コンテキスト メニューを表示できます。コンテキスト メニューから、選択した View オブジェクトで動作するコマンドにアクセスできます。</p> <p>たとえば [カタログ] - [デスクトップ プール] ページで、デスクトップ プールを右クリックして、[追加]、[編集]、[削除]、[プロビジョニングを無効 (有効) にする] などのコマンドを表示できます。</p>

View Administrator でのテキスト表示のトラブルシューティング

Web ブラウザが Windows 以外のオペレーティング システム (Linux、UNIX、Mac OS など) で実行されている場合、View Administrator でテキストが正しく表示されません。

問題

View Administrator インターフェイスのテキストが正しく表示されません。たとえば、単語の中央にスペースが表示されます。

原因

View Administrator には、Microsoft 固有のフォントが必要です。

コンピュータに Microsoft 固有のフォントをインストールします。

現在、Microsoft の Web サイトでは Microsoft フォントが配布されていませんが、独立系の Web サイトからダウンロードできます。

View 接続サーバを構成しています

View 接続サーバをインストールし、初期構成を実行したら、vCenter Server インスタンスおよび View Composer サービスを View 展開に追加し、管理者責任を委任するためのロールを設定し、構成データのバックアップをスケジュール設定できます。

この章には、次のトピックが含まれています。

- [vCenter Server および View Composer の構成](#)
- [View 接続サーバのバックアップ](#)
- [クライアント セッションの設定の構成](#)
- [View 接続サーバの無効化または有効化](#)
- [外部 URL の編集](#)
- [カスタマー エクスペリエンス プログラムに参加または参加を取り消す](#)
- [View LDAP ディレクトリ](#)

vCenter Server および View Composer の構成

仮想マシンをリモート デスクトップとして使用するには、vCenter Server と通信するように View を構成する必要があります。リンク クローン デスクトップ プールを作成および管理するには、View Administrator で View Composer 設定を構成する必要があります。

View 用のストレージ設定も構成できます。ESXi ホストに対して、リンク クローン仮想マシンでディスク領域を再利用するように構成できます。ESXi ホストで仮想マシンのデータをキャッシュできるようにするには、vCenter Server の View Storage Accelerator を有効にする必要があります。

View Composer AD 操作のユーザー アカウントの作成

View Composer を使用する場合、View Composer が Active Directory で特定の操作を実行できるようになるユーザー アカウントを、Active Directory で作成する必要があります。View Composer では、リンク クローン仮想マシンを Active Directory ドメインに参加させるためにこのアカウントが必要です。

セキュリティのため、View Composer で使用するためのユーザー アカウントを別に作成する必要があります。別のアカウントを作成することで、他の目的のために定義されている追加権限がアカウントに付与されないようにすることができます。このアカウントには、指定された Active Directory コンテナ内のコンピュータ オブジェクトを追加および削除するために必要な最小限の権限を付与できます。たとえば、View Composer アカウントにはドメイン管理者権限は必要ありません。

手順

- 1 Active Directory で、View 接続サーバ ホストと同じドメインまたは信頼されたドメインにユーザー アカウントを作成します。
- 2 リンク クローン コンピュータ アカウントを中に作成する、またはリンク クローン コンピュータ アカウントを移動する先の Active Directory コンテナで、[コンピュータ オブジェクトの作成] 権限、[コンピュータ オブジェクトの削除] 権限、および [すべてのプロパティの書き込み] 権限をアカウントに追加します。

次のリストでは、ユーザー アカウントに必要なすべての権限を示します。デフォルトで割り当てられる権限も含まれます。

- 内容の一覧表示
- すべてのプロパティの読み取り
- すべてのプロパティの書き込み
- アクセス許可の読み取り
- パスワードのリセット
- コンピュータ オブジェクトの作成
- コンピュータ オブジェクトの削除

注: デスクトップ プールの[Allow reuse of pre-existing computer accounts]設定を選択する場合、必要な権限はより少なくなります。次の権限がユーザー アカウントに割り当てられていることを確認します。

- 内容の一覧表示
 - すべてのプロパティの読み取り
 - アクセス許可の読み取り
 - パスワードのリセット
-

- 3 ユーザー アカウントの権限が Active Directory コンテナおよびコンテナのすべての子オブジェクトに適用されることを確認します。

次のステップ

[vCenter Server を追加] ウィザードで View Composer ドメインを構成するとき、およびリンク クローン デスクトップ プールを構成して展開するとき、View Administrator でこのアカウントを指定します。

vCenter Server インスタンスの View への追加

View 展開内の vCenter Server インスタンスに接続するように View を構成する必要があります。vCenter Server は、View がデスクトップ プールで使用する仮想マシンを作成して管理します。

vCenter Server インスタンスをリンク モード グループ内で実行する場合は、各 vCenter Server インスタンスを個別に View に追加する必要があります。

View は、安全なチャネル (SSL) を使用して vCenter Server インスタンスに接続します。

前提条件

- View 接続サーバの製品ライセンス キーをインストールします。
- View をサポートするのに必要な vCenter Server で、操作を実行する権限のある vCenter Server ユーザーを準備します。View Composer を使用するには、このユーザーに権限を追加する必要があります。

View のための vCenter Server ユーザーの構成の詳細については、『View のインストール』を参照してください。

- TLS/SSL サーバ証明書が vCenter Server ホストにインストールされていることを確認します。本番環境で、信頼された証明機関 (CA) によって署名された有効な証明書をインストールします。

テスト環境では、vCenter Server でインストールされたデフォルト証明書を使用できますが、vCenter Server を View に追加する際に証明書サムプリントを受け入れる必要があります。

- 複製されたグループ内のすべての View 接続サーバ インスタンスが、vCenter Server ホストにインストールされているサーバ証明書のルート CA 証明書を信頼していることを確認します。ルート CA 証明書が、View 接続サーバ ホスト上の Windows ローカル コンピュータの証明書ストア内の [信頼されたルート証明機関] - [証明書] フォルダにあるかどうか確認します。このフォルダにない場合、ルート CA 証明書を Windows ローカル コンピュータの証明書ストアにインポートします。

『View インストール ガイド』の「ルート証明書と中間証明書を Windows 証明書ストアにインポートする」を参照してください。

- vCenter Server インスタンスに ESXi ホストが含まれていることを確認します。vCenter Server インスタンスでホストが構成されていない場合、そのインスタンスを View に追加することはできません。
- vSphere 5.5 以降のリリースにアップグレードする場合、vCenter Server ユーザーとして使用するドメイン管理者アカウントが、vCenter Server のローカル ユーザーによって vCenter Server にログインするために明示的に指定された権限であったことを確認してください。
- View で FIPS モードを使用する予定の場合は、vCenter Server 6.0 以降および ESXi 6.0 以降のホストを使用していることを確認してください。

詳細については、『View のインストール』ドキュメントで「FIPS モードでの View のインストール」を参照してください。

- vCenter Server と View Composer の操作数の上限を決定する設定について理解しておきます。[vCenter Server と View Composer の同時操作の制限およびリモート デスクトップ ログオン ストームをサポートするための同時電源操作レートの設定](#)を参照してください。

手順

- 1 View Administrator で、[View 構成] - [サーバ]の順に選択します。
- 2 [vCenter Servers] タブで、[追加] をクリックします。

- 3 [vCenter Server 設定] の [サーバ アドレス] テキスト ボックスに、vCenter Server インスタンスの完全修飾ドメイン名 (FQDN) を入力します。

FQDN にはホスト名とドメイン名が含まれます。たとえば、FQDN の **myserverhost.companydomain.com** で、**myserverhost** はホスト名で、**companydomain.com** はドメインです。

注: DNS 名または URL を使用してサーバを入力すると、View は管理者が以前に IP アドレスを使用して View にこのサーバを追加したかどうかを確認する DNS 検索を実行しません。vCenter Server をその DNS 名と IP アドレスの両方で追加すると、競合が発生します。

- 4 vCenter Server ユーザーの名前を入力します。
例: **domain\user** または **user@domain.com**
- 5 vCenter Server ユーザーのパスワードを入力します。
- 6 (オプション) この vCenter Server インスタンスの説明を入力します。
- 7 TCP のポート番号を入力します。
デフォルトのポートは 443 です。
- 8 [詳細設定] で、vCenter Server と View Composer の同時操作の制限を設定します。
- 9 [次へ] をクリックして [View Composer 設定] ページを表示します。

次のステップ

View Composer 設定を構成します。

- vCenter Server インスタンスが署名された SSL 証明書で構成されていて、View 接続サーバがルート証明書を信頼している場合、[vCenter Server を追加] ウィザードで [View Composer 設定] ページが表示されます。
- vCenter Server インスタンスがデフォルト証明書で構成されている場合、最初に既存の証明書のサムプリントを受け入れるかどうかを決定する必要があります。[デフォルトの SSL 証明書のサムプリントを受け入れる](#)を参照してください。

View で複数の vCenter Server インスタンスを使用している場合、この手順を繰り返してその他の vCenter Server インスタンスを追加します。

View Composer 設定を構成する

View Composer を使用するには、View に VMware Horizon View Composer サービスへの接続を許可する設定を構成する必要があります。View Composer は個別のホストにインストールすることも、vCenter Server と同じホストにインストールすることもできます。

それぞれの VMware Horizon View Composer サービスと vCenter Server インスタンスが 1 対 1 で対応している必要があります。1 つの View Composer サービスは 1 つの vCenter Server インスタンスのみと一緒に作動できます。1 つの vCenter Server インスタンスは 1 つの VMware Horizon View Composer サービスにのみ関連付けることができます。

初期の View 展開後に、View 展開の規模拡大または変化に対応するために、VMware Horizon View Composer サービスを新しいホストに移行できます。初期の View Composer 設定は View Administrator で編集できますが、確実に移行を成功させるためには追加の手順を実行する必要があります。別のマシンへの View Composer の移行を参照してください。

前提条件

- リンク クローンを含む Active Directory ドメインに仮想マシンを追加したり、ドメインから仮想マシンを削除したりするための権限を付与されたユーザーが Active Directory に作成されていることを確認します。View Composer AD 操作のユーザー アカウントの作成を参照してください。
- vCenter Server に接続するように View を構成したことを確認します。そのためには、[vCenter Server を追加] ウィザードで [vCenter Server の情報] ページを完了する必要があります。vCenter Server インスタンスの View への追加を参照してください。
- この VMware Horizon View Composer サービスがまだ別の vCenter Server インスタンスに接続するように構成されていないことを確認します。

手順

- 1 View Administrator で、[vCenter Server を追加] ウィザードで [vCenter Server の情報] ページを完了します。
 - a [View 構成] - [サーバ] を選択します。
 - b [vCenter Servers] タブで、[追加] をクリックして vCenter Server 設定を指定します。
- 2 [View Composer 設定] ページで、View Composer を使用していない場合、[View Composer を使用しない] を選択します。

[View Composer を使用しない] を選択した場合、その他の View Composer 設定が非アクティブになります。[次へ] をクリックすると、[vCenter Server を追加] ウィザードで [ストレージ設定] ページが表示されます。[View Composer ドメイン] ページは表示されません。
- 3 View Composer を使用している場合、View Composer ホストの場所を選択します。

オプション	説明
View Composer が vCenter Server と同じホストにインストールされます。	<ol style="list-style-type: none"> a [View Composer を vCenter Server と一緒にインストール] を選択します。 b ポート番号が vCenter Server に VMware Horizon View Composer サービスをインストールしたときに指定したポートと同じであることを確認します。デフォルトのポート番号は 18443 です。
View Composer が個別のホストにインストールされます。	<ol style="list-style-type: none"> a [スタンドアロン View Composer Server] を選択します。 b View Composer server アドレスのテキスト ボックスに、View Composer ホストの完全修飾ドメイン名 (FQDN) を入力します。 c View Composer ユーザーの名前を入力します。 例: domain.com\user または user@domain.com d View Composer ユーザーのパスワードを入力します。 e ポート番号が VMware Horizon View Composer サービスをインストールしたときに指定したポートと同じであることを確認します。デフォルトのポート番号は 18443 です。

- 4 [次へ] をクリックして [View Composer ドメイン] ページを表示します。

次のステップ

View Composer ドメインを構成します。

- View Composer インスタンスが署名された SSL 証明書で構成されていて、View 接続サーバがルート証明書を信頼している場合、[vCenter Server を追加] ウィザードで [View Composer ドメイン] ページが表示されます。
- View Composer インスタンスがデフォルト証明書で構成されている場合、最初に既存の証明書の拇印を受け入れるかどうかを決定する必要があります。[デフォルトの SSL 証明書のサムプリントを受け入れる](#)を参照してください。

View Composer ドメインを構成する

View Composer がリンク クローン デスクトップを展開する Active Directory ドメインを構成する必要があります。View Composer 用に複数のドメインを構成できます。最初に vCenter Server と View Composer の設定を View に追加した後で、View Administrator で vCenter Server インスタンスを編集することでさらに View Composer ドメインを追加できます。

前提条件

- Active Directory 管理者は、AD 操作に必要な View Composer ユーザーを作成する必要があります。このドメイン ユーザーには、リンク クローンを含んでいる Active Directory ドメインから仮想マシンを追加または削除する権限が必要です。このユーザーに必要な権限の詳細については、[View Composer AD 操作のユーザー アカウントの作成](#)を参照してください。
- View Administrator で、[vCenter Server を追加] ウィザードで [vCenter Server の情報] ページと [View Composer 設定] ページを完了していることを確認します。

手順

- 1 [View Composer ドメイン] ページで、[追加] をクリックして、AD 操作に必要な View Composer ユーザーのアカウント情報を追加します。
- 2 Active Directory ドメインのドメイン名を入力します。
例：**domain.com**
- 3 View Composer ユーザーの（ドメイン名を含む）ドメイン ユーザー名を入力します。
例：**domain.com\admin**
- 4 アカウントのパスワードを入力します。
- 5 [OK] をクリックします。
- 6 リンク クローン プールを展開する他の Active Directory ドメインでの権限を持つドメイン ユーザー アカウントを追加するには、前記の手順を繰り返します。
- 7 [次へ] をクリックして [ストレージ設定] ページを表示します。

次のステップ

仮想マシンのディスク領域再利用を有効にして、View 用に View Storage Accelerator を構成します。

vSphere でリンク クローン仮想マシンのディスク領域を再利用できるようにする

vSphere 5.1 以降では、View 用にディスク領域再利用機能を有効にできます。vSphere 5.1 からは、View がリンク クローン仮想マシンを効率的なディスク形式で作成するようになりました。これにより、ESXi ホストはリンク クローン内で使用されていないディスク領域を再利用できるようになり、リンク クローンに必要なストレージ容量の合計を削減できます。

ユーザーがリンク クローン デスクトップを操作するたびに、クローンの OS ディスクが大きくなり、最終的には完全 クローン デスクトップとほとんど同じディスク領域を使用する場合があります。ディスク領域再利用により、リンク クローンを更新または再構成しなくても、OS ディスクのサイズを減らすことができます。仮想マシンがパワーオンされ、ユーザーがリモート デスクトップを操作している間に、領域を再利用することができます。

ディスク領域再利用は、ログオフ時の更新などのストレージ節約戦略を利用できない展開にとって特に便利です。たとえば、ユーザー アプリケーションを専用リモート デスクトップにインストールするナレッジ ワークの場合、リモート デスクトップが更新または再構成されたときに、個人用アプリケーションが失われることがあります。View はディスク領域再利用により、最初にプロビジョニングされたときの小さなサイズとほぼ同じサイズにリンク クローンを保つことができます。

この機能には、効率的なディスク フォーマットとスペース再利用操作の 2 つのコンポーネントがあります。

vSphere 5.1 以降の環境では、親の仮想マシンが仮想ハードウェア バージョン 9 以降の場合、View は領域再利用操作が有効になっているかどうかにかかわらず、領域効率の高い OS ディスクでリンク クローンを作成します。

領域再利用操作を有効にするには、View Administrator を使用して vCenter Server 用の領域再利用を有効にして、個別のデスクトップ プール用に仮想マシンのディスク領域を再利用する必要があります。vCenter Server 用の領域再利用設定には、vCenter Server インスタンスによって管理されるすべてのデスクトップ プールでこの機能を無効にするためのオプションがあります。vCenter Server 用にこの機能を無効にすると、デスクトップ プール レベルの設定が上書きされます。

以下のガイドラインは、領域再利用機能に適用されます。

- リンク クローン内の領域効率の高い OS ディスクでのみ使用できます。
- これは、View Composer 通常ディスクには影響しません。
- vSphere 5.1 以降、および仮想ハードウェア バージョン 9 以降の仮想マシンのみで機能します。
- 完全クローン デスクトップでは使用できません。
- SCSI コントローラを備えた仮想マシンで使用できます。IDE コントローラはサポートされていません。

ネイティブ NFS スナップショット テクノロジー (VAAI) は、領域効率の高いディスクが使用されている仮想マシンを含むプールでサポートされていません。

前提条件

- vCenter Server および ESXi ホストについて、クラスタにすべての ESXi ホストが含まれ、ダウンロード パッチ ESXi510-201212001 以降を適用済みの ESXi 5.1 以降が搭載されたバージョン 5.1 であることを確認します。

手順

- 1 View Administrator で、[ストレージ設定] ページの前に表示される [vCenter Server を追加] ウィザード ページを完了します。
 - a [View 構成] - [サーバ] を選択します。
 - b [vCenter Servers] タブで、[追加] をクリックします。
 - c [vCenter Server の情報] ページ、[View Composer 設定] ページ、[View Composer ドメイン] ページを完了します。
- 2 [ストレージ設定] ページで、[領域再利用を有効にする] が選択されていることを確認します。

View 5.2 以降の新規インストールを実行している場合は、領域再利用がデフォルトで選択されています。You must select if you are upgrading to View 5.1 以前のリリースから View 5.2 以降にアップグレードしている場合は、[領域再利用を有効にする] を選択する必要があります。

次のステップ

[ストレージ設定] ページで、View Storage Accelerator を構成します。

View でディスク領域再利用の構成を終了するには、デスクトップ プール用の領域再利用をセットアップします。

vCenter Server 用に View Storage Accelerator を構成する

vSphere 5.0 以降では、仮想マシンのディスク データをキャッシュするよう ESXi ホストを構成できます。この View Storage Accelerator と呼ばれている機能は、ESXi ホストで Content Based Read Cache (CBRC) 機能を使用します。多くの仮想マシンが起動しているかウイルス対策スキャンが一度に実行される場合に I/O ストームが発生することがありますが、View Storage Accelerator により、I/O ストーム時の View のパフォーマンスが向上します。この機能は、管理者またはユーザーがアプリケーションまたはデータを頻繁にロードする場合にも役立ちます。ホストは、OS 全体またはアプリケーションをストレージ システムから何度も読み取るのではなく、共通のデータ ブロックをキャッシュから読み取ることができます。

ブート ストーム中の IOPS 数を減らすことにより、View Storage Accelerator によるストレージ アレイの要求が抑えられ、これにより View 展開をサポートするためのストレージ I/O 帯域幅が小さくなります。

この手順で説明しているように、View Administrator の vCenter Server ウィザードで View Storage Accelerator 設定を選択することで、ESXi ホストでのキャッシュ機能を有効にします。

View Storage Accelerator がそれぞれのデスクトップ プール用にも構成されていることを確認します。デスクトップ プールで操作するには、View Storage Accelerator を vCenter Server とそれぞれのデスクトップ プールで有効にする必要があります。

View Storage Accelerator は、デフォルトでデスクトップ プール用に有効になっています。この機能は、プールを作成または編集するときに無効または有効に設定できます。デスクトップ プールを初めて作成するときにこの機能を有効にすることをお勧めします。既存のプールを編集してこの機能を有効にする場合は、リンク クローンをプロビジョニングする前に、新しいレプリカとそのダイジェスト ディスクが作成されていることを確認する必要があります。新しいレプリカは、プールを新しいスナップショットに再構成するか、プールを新しいデータストアに再分散することによって作成できます。ダイジェスト ファイルは、デスクトップ プール内の仮想マシンがパワーオフされているときにのみ構成できます。

リンク クローンを含むデスクトップ プールと、フル仮想マシンを含むプールで View Storage Accelerator を有効にすることができます。

View Storage Accelerator は、View レプリカ階層を使用する構成で機能するようになり、レプリカはリンク クローンでなく別のデータストアに保存されます。View レプリカ階層で View Storage Accelerator を使用するパフォーマンスの利点は実質的には大きくありませんが、特定の容量に関わる利点は別のデータストアにレプリカを保存することによって実現できる場合があります。したがって、この組み合わせがテストおよびサポートされます。

重要: この機能を使用する計画であり、いくつかの ESXi ホストを共有する複数の View ポッドを使用している場合は、共有 ESXi ホストのすべてのプールについて View Storage Accelerator 機能を有効にする必要があります。複数ポッドの設定に一貫性がない場合は、共有 ESXi ホストの仮想マシンが不安定になることがあります。

前提条件

- vCenter Server ホストおよび ESXi ホストのバージョンが 5.0 以降であることを確認します。
ESXi クラスタで、すべてのホストのバージョンが 5.0 以降であることを確認します。
- vCenter Server の [ホスト] > [構成] > [詳細] 設定の権限が vCenter Server ユーザに割り当てられていることを確認します。
『View のインストール』の、vCenter Server ユーザーに必要な View および View Composer の権限について説明しているトピックを参照してください。

手順

- 1 View Administrator で、[ストレージ設定] ページの前に表示される [vCenter Server を追加] ウィザード ページを完了します。
 - a [View 構成] - [サーバ] を選択します。
 - b [vCenter Servers] タブで、[追加] をクリックします。
 - c [vCenter Server の情報] ページ、[View Composer 設定] ページ、[View Composer ドメイン] ページを完了します。
- 2 [ストレージ設定] ページで、[View Storage Accelerator を有効にする] チェック ボックスがオンになっていることを確認します。
デフォルトでは、このチェック ボックスはオンになっています。
- 3 デフォルトのホスト キャッシュ サイズを指定します。
デフォルトのキャッシュ サイズは、この vCenter Server インスタンスで管理されるすべての ESXi ホストに適用されます。
デフォルト値は 1,024 MB です。キャッシュ サイズは、100 MB ~ 2,048 MB の範囲でなければなりません。
- 4 個別の ESXi ホスト向けに別のキャッシュ サイズを指定するには、ESXi ホストを選択して、[キャッシュ サイズの編集] をクリックします。
 - a [ホスト キャッシュ] ダイアログ ボックスで、[デフォルトのホスト キャッシュ サイズを上書き] のチェック ボックスをオンにします。
 - b [ホスト キャッシュ サイズ] の値を 100 MB ~ 2,048 MB の範囲で入力し、[OK] をクリックします。

- 5 [ストレージ設定] ページで、[次へ] をクリックします。
- 6 [終了] をクリックして、vCenter Server、View Composer、ストレージ設定を View に追加します。

次のステップ

クライアント セッションおよび接続用の設定を構成します。[クライアント セッションの設定の構成](#)を参照してください。

View で View Storage Accelerator 設定を完了するには、デスクトップ プール用に View Storage Accelerator を構成します。『View でのデスクトップ プールとアプリケーション プールの設定』の「デスクトップ プール用に View Storage Accelerator を構成する」を参照してください。

vCenter Server と View Composer の同時操作の制限

vCenter Server を View に追加する場合、または vCenter Server 設定を編集する場合には、vCenter Server と View Composer で実行される同時操作の最大数を設定するオプションをいくつか構成できます。

これらのオプションは、[vCenter Server の情報] ページの [詳細設定] パネルで構成します。

表 2-1. vCenter Server と View Composer の同時操作の制限

設定	説明
[最大同時 vCenter プロビジョニング操作数]	View 接続サーバがこの vCenter Server インスタンスでフル仮想マシンのプロビジョニングと削除のために出すことができる同時要求の最大数を指定します。 デフォルト値は 20 です。 この設定はフル仮想マシンにのみ適用されます。
[最大同時電源操作数]	この vCenter Server インスタンス内の View 接続サーバによって管理されている仮想マシンで同時に実行できる電源操作 (起動、シャットダウン、サスペンドなど) の最大数を決定します。 デフォルト値は 50 です。 この設定の値を計算するためのガイドラインについては、 リモート デスクトップ ログオン ストームをサポートするための同時電源操作レートの設定 を参照してください。 この設定は、フル仮想マシンとリンク クローンに適用されます。
[最大同時 View Composer メンテナンス操作数]	この View Composer インスタンスによって管理されているリンク クローンで同時に実行できる、View Composer の更新、再構成、再分散などの操作の最大数を決定します。 デフォルト値は 12 です。 メンテナンス操作を開始する前に、アクティブなセッションが存在するリモート デスクトップからログオフする必要があります。メンテナンス操作の開始直後にユーザーを強制的にログオフさせた場合、ログオフが必要なリモート デスクトップ上の同時操作の最大数は、構成値の半分にになります。たとえば、この設定を 24 に構成して、ユーザーを強制的にログオフさせた場合、ログオフが必要なリモート デスクトップ上の同時操作の最大数は 12 です。 この設定はリンク クローンにのみ適用されます。
[最大同時 View Composer プロビジョニング操作数]	この View Composer インスタンスによって管理されているリンク クローンで同時に実行できる作成および削除操作の最大数を指定します。 デフォルト値は 8 です。 この設定はリンク クローンにのみ適用されます。

リモート デスクトップ ログオン ストームをサポートするための同時電源操作レートの設定

[最大同時電源操作数] 設定は、vCenter Server インスタンスのリモート デスクトップ仮想マシンで使用可能な同時電源操作の最大数を制御します。この最大数はデフォルトで 50 に設定されています。この値は、多くのユーザーが同時にデスクトップにログインするときのピーク時パワーオン率をサポートするように変更できます。

ベスト プラクティスとして、この設定の適切な値を判断するためにパイロット段階を実施できます。プランニングのガイドラインについては、『View アーキテクチャ プランニング ガイド』の「アーキテクチャ設計の要素と計画のガイドライン」を参照してください。

必要な同時電源操作の数は、デスクトップがパワーオンになるピーク率と、デスクトップがパワーオンになり、起動し、接続可能になるのに要する時間に基づきます。一般的に、推奨される電源操作の最大数は、デスクトップの開始に要した合計時間にピーク時パワーオン率を掛け合わせたものです。

たとえば、平均的なデスクトップは起動に 2 ～ 3 分要します。したがって、同時電源操作の最大数はピーク時パワーオン率の 3 倍にする必要があります。デフォルト設定の 50 は、毎分 16 台のデスクトップのピーク時パワーオン率をサポートできることを見込んでいます。

システムは、デスクトップが起動するまで最大 5 分待機します。起動にこれ以上の時間を要すると、他のエラーが発生する可能性があります。万一来備えて、同時電源操作の最大数をピーク時パワーオン率の 5 倍に設定できます。控えめに考えて、デフォルト設定の 50 は、毎分 10 台のデスクトップのピーク時パワーオン率をサポートします。

ログオン、つまりデスクトップのパワーオン操作は、通常、特定の時間範囲で正規分散されて行われます。時間範囲の中間にパワーオン操作が発生し、パワーオン操作の 40% が時間範囲の 6 分の 1 で発生すると仮定して、ピーク時パワーオン率を概算することができます。たとえば、ユーザーが午前 8:00 から午前 9:00 の間にログオンすると、時間範囲は 1 時間であり、ログオンの 40% は午前 8:25 から午前 8:35 までの 10 分間に発生します。ユーザーが 2,000 人いる場合、そのうち 20% がデスクトップをパワーオフしており、400 台のデスクトップのパワーオン操作の 40% がこの 10 分間に発生することになります。ピーク時パワーオン率は、毎分 16 台のデスクトップになります。

デフォルトの SSL 証明書のサムプリントを受け入れる

vCenter Server および View Composer インスタンスを View に追加する場合、vCenter Server および View Composer インスタンス用に使用される SSL 証明書が有効で、View 接続サーバによって信頼されていることを確認する必要があります。vCenter Server および View Composer でインストールされるデフォルトの証明書が存在する場合、これらの証明書のサムプリントを受け入れるかどうかを決定する必要があります。

vCenter Server または View Composer インスタンスが CA によって署名された証明書で構成され、ルート証明書が View 接続サーバによって信頼される場合、この証明書のサムプリントを受け入れる必要はありません。操作は何も必要ありません。

デフォルト証明書を CA によって署名された証明書に置換するにもかかわらず View 接続サーバがルート証明書を信頼していない場合、証明書のサムプリントを受け入れるかどうかを決定する必要があります。サムプリントとは、証明書の暗号化ハッシュです。サムプリントは、提示された証明書が以前に受け入れられた証明書など、別の証明書と同じものであるかどうかを素早く判別するために使用されます。

注: 同じ Windows Server ホストに vCenter Server と View Composer をインストールする場合、同じ SSL 証明書を使用できますが、各コンポーネントで証明書を個別に構成する必要があります。

SSL 証明書の構成の詳細については、『View のインストール』ガイドの「View Server の SSL 証明書の構成」を参照してください。

まず、View Administrator で vCenter Server の追加ウィザードを使用して、vCenter Server と View Composer を追加します。証明書が信頼されておらず、サムプリントを受け入れなければ、vCenter Server および View Composer を追加できません。

これらのサーバが追加されたら、[vCenter Server の編集] ダイアログ ボックスで再構成できます。

注: 旧リリースからアップグレードする場合、そして vCenter Server または View Composer 証明書が信頼されていない場合、または信頼されている証明書を信頼されていない証明書と置き換える場合は、証明書のサムプリントを受け入れる必要もあります。

View Administrator ダッシュボードで、vCenter Server または View Composer のアイコンが赤に変わり、[無効な証明書が検出されました] ダイアログ ボックスが表示されます。[検証] をクリックして、表示される手順に従う必要があります。

同様に View Administrator では、View 接続サーバ インスタンスごとに使用する SAML 認証システムを構成できます。SAML サーバの証明書が View 接続サーバによって信頼されていない場合、証明書のサムプリントを受け入れるかどうかを決定する必要があります。サムプリントを受け入れなければ、View で SAML 認証システムを構成できません。SAML 認証システムが構成されると、[View 接続サーバの編集] ダイアログ ボックスで再構成できます。

手順

- 1 View Administrator で [無効な証明書が検出されました] ダイアログ ボックスが表示されたら、[証明書を表示] をクリックします。
- 2 [証明書情報] ウィンドウで証明書のサムプリントを調べます。
- 3 vCenter Server または View Composer インスタンス用に構成された証明書のサムプリントを調べます。
 - a vCenter Server または View Composer ホストで、MMC スナップインを開始し、Windows 証明書ストアを開きます。
 - b vCenter Server または View Composer の証明書に移動します。
 - c [証明書の詳細] タブをクリックして証明書のサムプリントを表示します。同様に、SAML 認証システムの証明書のサムプリントを調べます。必要に応じて、SAML 認証システム ホストで上記の手順を行います。
- 4 [証明書情報] ウィンドウのサムプリント (two occurrences) が vCenter Server または View Composer インスタンスのサムプリント (two occurrences) と一致することを確認します。

同様に、SAML 認証システムについてもサムプリントが一致するかどうかを調べます。

- 5 証明書のサムプリントを受け入れるかどうかを決定します。

オプション	説明
サムプリントが一致しています。	[許可] をクリックしてデフォルト証明書を使用します。
サムプリントが一致していません。	[拒否] をクリックします。 一致しない証明書のトラブルシューティングを行います。たとえば、vCenter Server または View Composer で正しくない IP アドレスを指定した可能性があります。

View からの vCenter Server インスタンスの削除

View と vCenter Server インスタンス間の接続を削除できます。これを行うと、View は、vCenter Server インスタンスで作成された仮想マシンを管理しなくなります。

前提条件

vCenter Server インスタンスに関連付けられているすべての仮想マシンを削除します。[デスクトップ プールの削除](#)を参照してください。

手順

- 1 [View 構成] - [サーバ] をクリックします。
- 2 [vCenter Server] タブで、vCenter Server インスタンスを選択します。
- 3 [削除] をクリックします。

View がこの vCenter Server インスタンスによって管理される仮想マシンにアクセスできなくなることを警告するダイアログが表示されます。

- 4 [OK] をクリックします。

View は、vCenter Server インスタンスで作成された仮想マシンにアクセスできなくなります。

View からの View Composer の削除

vCenter Server インスタンスに関連付けられている VMware Horizon View Composer サービスと View との接続を削除できます。

View Composer への接続を無効にする前に、View Composer によって作成されたすべてのリンク クローン仮想マシンを View から削除する必要があります。View では、関連付けられたリンク クローンが残っている場合は、View Composer を削除できません。View Composer への接続を無効にすると、View で新しいリンク クローンをプロビジョニングまたは管理できなくなります。

手順

- 1 View Composer によって作成されたリンク クローン デスクトップ プールを削除します。
 - a View Administrator で、[カタログ] - [デスクトップ プール] を選択します。
 - b リンク クローン デスクトップ プールを選択して、[削除] をクリックします。
 リンク クローン デスクトップ プールが View から完全に削除されることを警告するダイアログ ボックスが表示されます。リンク クローン仮想マシンが通常ディスクを使用して構成されている場合、通常ディスクを切断または削除できます。
 - c [OK] をクリックします。
 仮想マシンが vCenter Server から削除されます。さらに、関連付けられた View Composer データベース エントリおよび View Composer によって作成されたレプリカも削除されます。
 - d View Composer によって作成された各リンク クローン デスクトップ プールに対して、これらの手順を繰り返します。
- 2 [View 構成] - [サーバ] を選択します。
- 3 [vCenter Server] タブで、View Composer が関連付けられている vCenter Server インスタンスを選択します。
- 4 [編集] をクリックします。
- 5 [View Composer Server 設定] で [編集] をクリックし、[View Composer を使用しない] を選択して [OK] をクリックします。

この vCenter Server インスタンスでリンク クローン デスクトップ プールを作成することはできなくなりますが、vCenter Server インスタンスでフル仮想マシン デスクトップ プールの作成と管理を引き続き行うことができます。

次のステップ

別のホストに View Composer をインストールし、View を再構成して新しい VMware Horizon View Composer サービスに接続する場合は、特定の追加手順を実行する必要があります。[リンク クローン仮想マシンがない View Composer の移行](#)を参照してください。

競合している vCenter Server の一意の ID

環境内に複数の vCenter Server インスタンスが構成されている場合は、新しいインスタンスを追加しようとすると、一意の ID が競合しているために失敗することがあります。

問題

View に vCenter Server インスタンスを追加しようとしています。新しい vCenter Server インスタンスの一意の ID が既存のインスタンスと競合しています。

原因

2 つの vCenter Server インスタンスが同じ一意の ID を使用することはできません。vCenter Server の一意の ID は、デフォルトではランダムに生成されますが、編集できます。

解決方法

- 1 vSphere Client で、[管理] - [vCenter Server 設定] - [ランタイムの設定] をクリックします。
- 2 新しい一意の ID を入力し、[OK] をクリックします。

vCenter Server の一意の ID 値を編集する方法の詳細については、vSphere のドキュメントを参照してください。

View 接続サーバのバックアップ

View 接続サーバの初期構成が完了したら、View と View Composer の構成データの定期的なバックアップをスケジュール設定する必要があります。

View 構成のバックアップと復元については、[View 構成データのバックアップと復元](#)を参照してください。

クライアント セッションの設定の構成

View 接続サーバ インスタンスまたは複製されたグループによって管理されるクライアント セッションおよび接続に影響を与えるグローバル設定を構成できます。セッション タイムアウトの長さを設定したり、ログイン前メッセージや警告メッセージを表示したり、セキュリティ関連のクライアント接続オプションを設定したりすることができます。

クライアント セッションおよび接続のオプションの設定

グローバル設定を構成して、クライアント セッションおよび接続の動作方法を決定します。

グローバル設定は、単一の View 接続サーバ インスタンスに固有ではありません。スタンドアロン View 接続サーバ インスタンスまたは複製されたインスタンスのグループによって管理されるすべてのクライアント セッションに影響します。

また、Horizon クライアントとリモート デスクトップの間でトンネリングされていない直接接続を使用するように View 接続サーバ インスタンスを構成することもできます。直接接続の構成方法については、[安全なトンネルと PCoIP Secure Gateway の構成](#)を参照してください。

前提条件

グローバル設定について理解しておきます。[クライアント セッションのグローバル設定](#)および [クライアント セッションおよび接続のグローバル セキュリティ設定](#)を参照してください。

手順

- 1 View Administrator で、[View 構成] - [グローバル設定] を選択します。
- 2 全般設定またはセキュリティ設定のどちらを構成するかを選びます。

オプション	説明
全般的なグローバル設定	[全般] ペインで、[編集] をクリックします。
グローバル セキュリティ設定	[セキュリティ] ペインで、[編集] をクリックします。

- 3 グローバル設定を構成します。
- 4 [OK] をクリックします。

次のステップ

インストール中に指定したデータ リカバリ パスワードを変更できます。[Data Recovery パスワードを変更する](#)を参照してください。

Data Recovery パスワードを変更する

View 接続サーババージョン 5.1 以降をインストールするときに、データ リカバリ パスワードを指定します。インストール後、このパスワードは View Administrator で変更できます。パスワードは、View LDAP 構成をバックアップから復元する場合に必要です。

View 接続サーバをバックアップすると、View LDAP 構成が暗号化された LDIF データとしてエクスポートされます。暗号化されたバックアップ View 構成を復元するには、データ リカバリ パスワードを入力する必要があります。

パスワードは 1 文字から 128 文字の間にする必要があります。安全なパスワードの生成に関する組織のベスト プラクティスに従ってください。

手順

- 1 View Administrator で、[View 構成] - [グローバル設定] を選択します。
- 2 [セキュリティ] ペインで、[データ リカバリのパスワードを変更] をクリックします。
- 3 新しいパスワードを 2 回入力します。
- 4 (オプション) パスワードを忘れた場合のヒントを入力します。

注: データ リカバリのパスワードは、View 構成データがバックアップされるようにスケジュールを設定する際にも変更できます。[View 構成バックアップのスケジュール](#)を参照してください。

次のステップ

vdmimport ユーティリティを使用してバックアップの View 構成を復元する際には、この新しいパスワードを指定します。

クライアント セッションのグローバル設定

一般的なグローバル設定により、セッション タイムアウトの長さ、SSO の有効性およびタイムアウト制限、View Administrator でのステータス更新、ログイン前メッセージと警告メッセージが表示されるかどうか、View Administrator が Windows Server をリモート デスクトップ用にサポートされるオペレーティング システムとして扱うかどうか、およびその他の設定が決定されます。

以下の表の設定の変更はただちに有効になります。View 接続サーバまたは Horizon Client の再起動は不要です。

表 2-2. クライアント セッションの全般的なグローバル設定

設定	説明
[View Administrator セッション タイムアウト]	<p>セッションがタイムアウトする前にアイドル状態の View Administrator セッションがどれだけ続くかを決定します。</p> <p>重要: View Administrator セッション タイムアウトを長い分数に設定すると、View Administrator が不正に使用されるリスクが増します。アイドル状態のセッションを長時間許可する場合は用心してください。</p> <p>デフォルトでは、View Administrator セッション タイムアウトは 30 分です。セッション タイムアウトは 1 分から 4320 分 (72 時間) の間で設定できます。</p>
[ユーザーの強制切断]	<p>ユーザーが View にログインしてから指定した時間 (分) が経過すると、すべてのデスクトップとアプリケーションが切断されます。すべてのデスクトップとアプリケーションは、ユーザーがそれらをいつ開いたかにかかわらず同時に切断されます。</p> <p>アプリケーションのリモート処理をサポートしないクライアントでは、この設定の値が [なし] または 1200 分よりも長い場合、最大タイムアウト値である 1200 分が適用されます。</p> <p>デフォルトは、[600 分後] です。</p>
[シングル サインオン (SSO)]	<p>SSO が有効な場合、View にはユーザーの認証情報がキャッシュされるため、ユーザーは Windows リモート セッションにログインするための認証情報を指定せずにリモート デスクトップまたはアプリケーションを起動できます。デフォルトは [有効化] です</p> <p>Horizon 7 以降で導入されている True SSO 機能を使用する場合は、SSO を有効にする必要があります。True SSO では、ユーザーが Active Directory 認証情報以外の認証形式を使用してログインする場合、ユーザーが VMware Identity Manager にログインした後に、キャッシュされた認証情報ではなく短期間の証明書が True SSO 機能によって生成されます。</p> <p>注: デスクトップが Horizon Client から起動し、セキュリティ ポリシーに基づきユーザーまたは Windows のいずれかによりロックされた場合、デスクトップで View Agent 6.0 以降または Horizon Agent 7.0 以降が実行されている場合は、View 接続サーバはユーザーの SSO 認証情報を破棄します。ユーザーはログイン認証情報を指定して新しいデスクトップまたは新しいアプリケーションを起動するか、または切断されたデスクトップまたはアプリケーションに再接続する必要があります。SSO を再度有効にするには、View 接続サーバから切断するか、または Horizon Client を終了し、View 接続サーバに再接続する必要があります。ただし、デスクトップが Workspace Portal または VMware Identity Manager から起動してロックされている場合、SSO 認証情報は破棄されません。</p>
<p>[アプリケーションをサポートするクライアント。]</p> <p>[ユーザーがキーボードとマウスを使用しなくなった場合に、アプリケーションを切断し、SSO 認証情報を破棄する:]</p>	<p>クライアント デバイスで、キーボードやマウスが使用されなくなった場合にアプリケーション セッションを保護します。[経過時間...分] に設定した場合、指定された時間 (分) ユーザーのアクティビティがないと、View により、すべてのアプリケーションが切断され、SSO 認証情報は破棄されます。デスクトップセッションは切断されません。ユーザーは、再度ログインして切断されたアプリケーションに再接続するか、新しいデスクトップまたはアプリケーションを起動する必要があります。</p> <p>この設定は True SSO 機能にも適用されます。SSO 認証情報が破棄されると、ユーザーは Active Directory 認証情報の入力を求められます。ユーザーが Active Directory 認証情報を使用せずに VMware Identity Manager にログイン済みで、入力すべき Active Directory 認証情報がわからない場合は、ログアウトしてから VMware Identity Manager にログインし直してリモート デスクトップとアプリケーションにアクセスできます。</p> <p>重要: アプリケーションとデスクトップの両方が開いて、タイムアウトによりアプリケーションが切断されている場合でも、デスクトップは接続されたままになることを認識しておく必要があります。ユーザーはデスクトップの保護のためにこのタイムアウトに依存することがないようにしてください。</p> <p>[なし] に設定すると、ユーザーのアクティビティがなくても、View によるアプリケーションの切断や SSO 認証情報の破棄は行われません。</p> <p>デフォルトは [なし] です。</p>

設定	説明
<p>[その他のクライアント。]</p> <p>[SSO 認証情報の破棄:]</p>	<p>指定した時間（分）が経過すると、SSO 認証情報は破棄されます。この設定は、アプリケーションのリモート処理をサポートしていないクライアント用です。[経過時間...分] に設定した場合、クライアント デバイスでのユーザー アクティビティにかかわらず、View ヘログイン後指定時間（分）が経過したら、ユーザーはデスクトップへ再度ログインしてデスクトップに接続する必要があります。</p> <p>[なし] に設定すると、ユーザーが Horizon Client を閉じるまで、または [ユーザーの強制切断] タイムアウトに達するまで、このどちらが先であっても、View は SSO 認証情報を保存します。</p> <p>デフォルトは、[15 分後] です。</p>
[ステータスの自動更新を有効にする]	<p>ステータスの更新が、View Administrator の左上隅にあるグローバル ステータス ペインに数分ごとに表示されるかどうかを指定します。また、View Administrator のダッシュボード ページも数分ごとに更新されます。</p> <p>デフォルトでは、この設定は有効になっていません。</p>
[ログイン前メッセージを表示する]	<p>Horizon Client ユーザーがログインしたときに免責事項または別のメッセージを表示します。</p> <p>[グローバル設定] ダイアログ ボックスのテキスト ボックスに情報または指示を入力します。</p> <p>メッセージを表示しない場合は、チェック ボックスをオフのままにします。</p>
[強制的にログオフする前に警告を表示する]	<p>スケジュール設定された更新や、デスクトップの更新操作などの即座の更新が開始されようとしているためにユーザーが強制的にログオフされる場合、警告メッセージを表示します。この設定では、警告を表示してからユーザーがログオフするまでの待機時間も指定します。</p> <p>警告メッセージを表示するにはチェック ボックスをオンにします。</p> <p>警告を表示してからユーザーがログオフするまでの待機時間を分単位で入力します。デフォルトは 5 分です。</p> <p>警告メッセージを入力します。次のデフォルト メッセージを使用できます。</p> <div> <p>お使いのデスクトップは、重要なアップデートがスケジュールされているため、5 分後にシャットダウンされます。保存していない作業を今すぐ保存してください。</p> </div>
[Windows Server デスクトップを有効にする]	<p>デスクトップとして使用できる Windows Server 2008 R2 および Windows Server 2012 R2 マシンを選択できるかどうかを指定します。この設定が有効な場合、View Administrator では、View server コンポーネントがインストールされているマシンを含む、使用可能なすべての Windows Server マシンが表示されます。</p> <p>注: Horizon Agent ソフトウェアは、セキュリティ サーバ、View 接続サーバ、View Composer を含む他の View server ソフトウェア コンポーネントと同じ仮想マシンまたは物理マシンにインストールすることはできません。</p>

設定	説明
[HTML Access のタブを閉じるときに認証情報をクリーンアップする]	<p>リモート デスクトップやアプリケーションに接続するタブや、HTML Access クライアントのデスクトップとアプリケーションの選択ページに接続するタブをユーザーが閉じるときに、キャッシュからユーザーの認証情報を削除します。</p> <p>この設定が有効である場合、View は、次の HTML Access クライアントのシナリオにおいても認証情報をキャッシュから削除します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ユーザーが、デスクトップおよびアプリケーションの選択ページやリモート セッション ページを更新する。 ■ サーバから自己署名証明書が提示されており、ユーザーがリモート デスクトップやアプリケーションを起動し、セキュリティの警告が表示されるときにユーザーがその証明書を受け入れる。 ■ リモート セッションが含まれるタブで URI コマンドをユーザーが実行する。 <p>この設定が無効である場合、証明書はキャッシュに残ります。デフォルトでは、この機能は無効になっています。</p> <p>注: この機能は、Horizon 7 バージョン 7.0.2 以降で利用できます。</p>
[Mirage サーバの構成]	<p>Mirage:mirage://server-name:port または mirages://server-name:port という形式で サーバの URL を指定できるようにします。(server-name は完全修飾ドメイン名)。ポート番号を指定しないと、デフォルトのポート番号 8000 が使用されます。</p> <p>注: デスクトップ プール設定に Mirage サーバを指定することで、このグローバル設定をオーバーライドできます。</p> <p>Mirage クライアントのインストール時に Mirage サーバを指定する代わりに、View Administrator で Mirage サーバを指定することもできます。View Administrator での Mirage サーバの指定をサポートしているのはどの Mirage バージョンかを確認するには、https://www.vmware.com/support/pubs/mirage_pubs.html で公開されている Mirage ドキュメントを参照してください。</p>

クライアント セッションおよび接続のグローバル セキュリティ設定

グローバル セキュリティ設定によって、割り込み後にクライアントを再認証するかどうか、メッセージ セキュリティ モードを有効にするかどうか、セキュリティ サーバ接続に IPSec を使用するかどうかが決まります。

View に対するすべての Horizon Client 接続および View Administrator 接続には、SSL が必要です。View の展開でロード バランサまたはその他のクライアントが接続する中間サーバが使用されている場合、SSL をそれらにオフロードしてから、それぞれの View 接続サーバ インスタンスおよびセキュリティ サーバで非 SSL 接続を構成できます。[SSL 接続を中間サーバにオフロードする](#)を参照してください。

表 2-3. クライアント セッションおよび接続のグローバル セキュリティ 設定

設定	説明
[ネットワークへの割り込み後に安全なトンネル接続を再認証する]	<p>Horizon Client がリモート デスクトップへの安全なトンネル接続を使用する場合、ネットワークへの割り込み後にユーザー認証情報を再認証する必要があるかどうかを指定します。</p> <p>この設定を選択すると、安全なトンネル接続に割り込みが入った場合に、Horizon Client では再接続する前にユーザーの再認証が必要になります。</p> <p>この設定により、セキュリティが強化されます。たとえば、ラップトップが盗まれて別のネットワークに移動された場合、認証情報を入力しなければ、ユーザーはリモート デスクトップに自動的にアクセスできません。</p> <p>この設定を選択しない場合は、クライアントがリモート デスクトップに再接続するときに、ユーザーの再認証を要求しません。</p> <p>安全なトンネルが使用されていない場合、この設定は効果がありません。</p>
[メッセージ セキュリティ モード]	<p>コンポーネント間で JMS メッセージを送信するために使用されるセキュリティ メカニズムを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ モードが [有効] に設定されている場合、View コンポーネント間で渡される JMS メッセージの署名と検証が行われます。 ■ モードが [拡張済み] に設定されている場合、手動で認証された SSL JMS 接続と、JMS トピックに対するアクセス制御によってセキュリティが確保されます。 <p>詳細については、以下を参照してください。View コンポーネントのメッセージ セキュリティ モード。</p> <p>新規インストールの場合、メッセージ セキュリティ モードはデフォルトで [拡張済み] に設定されています。前のバージョンからアップグレードする場合は、前のバージョンで使用されていた設定が維持されます。</p>
[拡張セキュリティのステータス] (読み取り専用)	<p>[メッセージ セキュリティ モード] が [有効] から [拡張済み] に変更された場合に表示される読み取り専用フィールド。変更は段階的に行われるため、このフィールドにはフェーズを通じた進捗が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [MessageBus の再起動待機中] が最初のフェーズです。この状態は、手動でポッド内のすべての View 接続サーバ インスタンスを再起動するか、ポッド内のすべての View 接続サーバ ホストの VMware Horizon View Message Bus コンポーネント サービスを再起動するまで、表示されません。 ■ 次の段階は [拡張の保留] です。すべての View Message Bus コンポーネント サービスが再起動されると、すべてのデスクトップ サーバおよびセキュリティ サーバに対して、システムはメッセージ セキュリティ モードを [拡張済み] に変更する処理を開始します。 ■ 最後の段階は [拡張済み] であり、すべてのコンポーネントが [拡張済み] メッセージ セキュリティ モードを使用するようになったことを示します。 <p>vdmutil コマンドライン ユーティリティを使用して進捗を監視することもできます。vdmutil ユーティリティを使用した JMS メッセージ セキュリティ モードの構成を参照してください。</p>
[セキュリティ サーバの接続に IPSec を使用]	<p>セキュリティ サーバと View 接続サーバ インスタンス間の接続に Internet Protocol Security (IPSec) を使用するかどうかを決定します。</p> <p>デフォルトでは、セキュリティ サーバ接続に対して安全な接続 (IPSec を使用) が有効になっています。</p>

注: 以前の View リリースから View 5.1 以降にアップグレードした場合は、グローバル設定 [クライアント接続に SSL が必要] が View Administrator に表示されます。ただしアップグレード前に View 構成でこの設定が無効になっている場合に限ります。SSL は View へのすべての Horizon Client 接続および View Administrator 接続に必要であるため、この設定は View 5.1 以降のバージョンの新規インストールには表示されません。またこの設定が以前の View 構成で既に有効になっている場合は、アップグレード後にこの設定が表示されることはありません。

アップグレード後、[クライアント接続に SSL が必要] 設定を有効にしない場合、Horizon Client からの HTTPS 接続は失敗します。ただし HTTP を使用して前方接続を行うように構成された中間デバイスに接続する場合は、この限りではありません。[SSL 接続を中間サーバにオフロードする](#)を参照してください。

View コンポーネントのメッセージ セキュリティ モード

メッセージ セキュリティ モードを設定して、JMS メッセージが View コンポーネント間を通過するときに使用されるセキュリティ メカニズムを指定できます。

[表 2-4. メッセージ セキュリティ モードのオプション](#)に、メッセージ セキュリティ モードを構成する場合に選択できるオプションを示します。オプションを設定するには、グローバル設定ダイアログ ウィンドウの [メッセージ セキュリティ モード] リストから選択します。

表 2-4. メッセージ セキュリティ モードのオプション

オプション	説明
[無効]	メッセージ セキュリティ モードを無効にします。
[混在]	<p>メッセージ セキュリティ モードは有効ですが、実行されません。</p> <p>このモードを使用して、View 環境内の View 3.0 よりも前のコンポーネントを検出できます。View 接続サーバによって生成されるログ ファイルには、これらのコンポーネントへの参照が含まれています。この設定は推奨されません。アップグレードする必要のあるコンポーネントを検出する場合にのみ、この設定を使用してください。</p>
[有効]	<p>メッセージ署名と暗号化の組み合わせを使用して、メッセージ セキュリティ モードが有効になります。署名がないか無効な場合、あるいは署名された後でメッセージが変更された場合、JMS メッセージは拒否されます。</p> <p>JMS メッセージの中には、認証情報などの機密情報を含むために暗号化されるものもあります。[有効] 設定を使用すると、IPSec を使用して、View 接続サーバ インスタンス間、および View 接続サーバ インスタンスとセキュリティ サーバ間のすべての JMS メッセージを暗号化することもできます。</p> <p>注: View 3.0 よりも前の View コンポーネントは、その他の View コンポーネントと通信することはできません。</p>
[拡張済み]	<p>すべての JMS 接続に SSL が使用されます。JMS アクセス制御も有効になっているため、デスクトップ、セキュリティ サーバ、および View 接続サーバ インスタンスは特定のトピックに関する JMS のみを送受信できます。</p> <p>Horizon 6 バージョン 6.1 よりも前の View コンポーネントは、View 接続サーバ 6.1 インスタンスと通信することができません。</p> <p>注: このモードを使用するには、DMZ ベースのセキュリティ サーバと、それらとペアになっている View 接続サーバ インスタンスの間で TCP ポート 4002 が開かれている必要があります。</p>

View をシステムに初めてインストールしたときのメッセージ セキュリティ モードは、[拡張済み] に設定されています。前のリリースから View をアップグレードしても、メッセージセキュリティ モードは既存の設定のまま変更されません。

重要: アップグレードされた View 環境を [有効] から [拡張済み] に変更する場合は、最初にすべての View 接続サーバ インスタンス、セキュリティ サーバ、および View デスクトップを Horizon 6 バージョン 6.1 以降のリリースにアップグレードする必要があります。設定を [拡張済み] に変更した後、新しい設定が段階的に実行されます。

- 1 手動で ポッド内のすべての View 接続サーバ ホストの VMware Horizon View Message Bus コンポーネント サービスを手動で再起動するか、View 接続サーバ インスタンスを再起動する必要があります。
- 2 サービスが再起動されたら、View 接続サーバ インスタンスによってモードが [拡張済み] に変更され、すべてのデスクトップおよびセキュリティ サーバ上のメッセージ セキュリティ モードが再構成されます。
- 3 View Administrator で進行状況を監視するには、[View 構成] - [グローバル設定] に移動します。

すべてのコンポーネントで [拡張済み] モードへの移行が行われたら、[セキュリティ] タブの [拡張セキュリティのステータス] 項目に [拡張済み] が表示されます。

または、`vdmutil` コマンド ライン ユーティリティを使用して進捗を監視することもできます。[vdmutil ユーティリティを使用した JMS メッセージ セキュリティ モードの構成](#)を参照してください。

Horizon 6 バージョン 6.1 よりも前の View コンポーネントは、拡張済みモードを使用する View 接続サーバ 6.1 インスタンスと通信できません。

アクティブな View 環境を [無効化] から [有効化] に変更する場合や、[有効化] から [無効化] に変更する場合は、しばらく [混在] モードにしてから、最終的なモードに変更します。たとえば、現在のモードが [無効化] の場合に、1 日だけ [混在] モードに変更してから、[有効化] に変更します。[混在] モードの場合は、メッセージに署名が添付されますが、検証されません。このため、メッセージ モードの変更を環境全体に伝達できます。

vdmutil ユーティリティを使用した JMS メッセージ セキュリティ モードの構成

`vdmutil` コマンドライン インターフェイスを使用し、JMS メッセージが View コンポーネント間で渡されるときに使用されるセキュリティ メカニズムを構成し、管理できます。

ユーティリティの構文と場所

`vdmutil` コマンドで、以前のバージョンの View に同梱されていた `lmvutil` コマンドと同じ処理を実行できます。また、`vdmutil` コマンドには、使用するメッセージ セキュリティ モードの決定や全 View コンポーネントを拡張モードに変更する処理の進行状況の監視を行うオプションがあります。Windows コマンド プロンプトで、次の形式の `vdmutil` コマンドを使用します。

```
vdmutil command_option [additional_option argument] ...
```

使用できる追加のオプションは、コマンド オプションによって異なります。このトピックでは、メッセージ セキュリティ モードのオプションについて説明します。Cloud Pod アーキテクチャに関するその他のオプションについては、『View Cloud Pod アーキテクチャの管理』ドキュメントを参照してください。

デフォルトの場合、vdmutil コマンドの実行可能ファイルのパスは C:\Program Files\VMware\VMware View\Server\tools\bin です。コマンドラインにパスを入力するのを避けるには、PATH 環境変数にパスを追加します。

認証

管理者ロールを持つユーザーとしてコマンドを実行する必要があります。View Administrator を使用して Administrators ロールをユーザーに割り当てることができます。6 章 [ロールベースの委任管理の構成](#)を参照してください。

vdmutil コマンドには、認証に使用するユーザー名、ドメイン、およびパスワードを指定するオプションがあります。

表 2-5. vdmutil コマンド認証オプション

オプション	説明
--authAs	View 管理ユーザーの名前。domain\username またはユーザー プリンシパル名 (UPN) 形式を使用しないでください。
--authDomain	View オプションで指定された --authAs 管理者ユーザーの完全修飾ドメイン名。
--authPassword	View オプションで指定された --authAs 管理者ユーザーのパスワード。パスワードの代わりに "*" を入力すると、vdmutil コマンドでパスワードが要求され、機密性の高いパスワードはコマンドラインのコマンド履歴に残りません。

認証オプションは、--help および --verbose を除くすべての vdmutil コマンド オプションを指定して使用する必要があります。

JMS メッセージ セキュリティ モード専用のオプション

次の表は、vdmutil の JMS メッセージ セキュリティ モードを表示、設定、または監視するコマンドライン オプションのみを一覧で示しています。特定のオプションで使用可能な引数のリストについては、--help コマンドライン オプションを使用してください。

vdmutil コマンドは、操作が成功すると 0 を返し、失敗すると操作の失敗に固有の 0 以外のコードを返します。vdmutil コマンドは標準エラー出力にエラー メッセージを書き込みます。操作で出力が生成されたり、--verbose オプションを使用して詳細なログ記録が有効になっていると、vdmutil コマンドは標準出力に米国英語で出力を書き込みます。

表 2-6. vdmutil コマンド オプション

オプション	説明
--activatePendingConnectionServerCertificates	ローカル ボットの View 接続サーバ インスタンスの保留中セキュリティ証明書をアクティベーションします。
--countPendingMsgSecStatus	拡張モードへ、または拡張モードからの移行を阻んでいるマシンの数をカウントします。
--createPendingConnectionServerCertificates	ローカル ボットの View 接続サーバ インスタンスの新しい保留中セキュリティ証明書を作成します。

オプション	説明
--getMsgSecLevel	ローカル ポッドの拡張されたメッセージセキュリティ ステータスを取得します。このステータスは View 環境内のすべてのコンポーネントに対して、JMS メッセージセキュリティ モードを [有効] から [拡張済み] に変更するプロセスに関連します。
--getMsgSecMode	ローカル ポッドのメッセージセキュリティ モードを取得します。
--help	vdmutil コマンドのオプションを一覧表示します。--help を、--setMsgSecMode --help などの特定のコマンドで使用することもできます。
--listMsgBusSecStatus	ローカル ポッドの 全接続サーバのメッセージ バス セキュリティ ステータスを一覧表示します。
--listPendingMsgSecStatus	拡張モードへ、または拡張モードからの移行を阻んでいるマシンを一覧表示します。デフォルトでは、25 エントリに制限されます。
--setMsgSecMode	ローカル ポッドのメッセージセキュリティ モードを設定します。
--verbose	詳細ログを有効にします。このオプションは、詳細なコマンド出力を取得する他のオプションに追加できます。vdmutil コマンドで、標準出力への書き込みが行われます。

安全なトンネルと PColP Secure Gateway の構成

安全なトンネルが有効になっている場合は、ユーザーがリモート デスクトップに接続すると、Horizon Client は View 接続サーバまたはセキュリティ サーバ ホストへの 2 番目の HTTPS 接続を作成します。

PColP Secure Gateway が有効になっている場合は、ユーザーが PColP 表示プロトコルを使用してリモート デスクトップに接続すると、Horizon Client は View 接続サーバまたはセキュリティ サーバ ホストへのさらに安全な接続を作成します。

注: Horizon 6 バージョン 6.2 以降のリリースでは、Horizon 6 サーバおよびデスクトップへの安全な外部アクセスのために、セキュリティ サーバではなく Access Point アプライアンスを使用できます。Access Point アプライアンスを使用する場合、View 接続サーバ インスタンスで Secure Gateway を無効にしてこれらのゲートウェイを Access Point アプライアンスで有効にする必要があります。詳細については、Access Point をデプロイして構成するを参照してください。

安全なトンネルまたは PColP Secure Gateway が有効になっていない場合、セッションは、View 接続サーバまたはセキュリティ サーバ ホストをバイパスして、クライアント システムとリモート デスクトップ仮想マシンの間で直接確立されます。このタイプの接続を直接接続といいます。

重要: 外部クライアントに安全な接続を提供する一般的なネットワーク構成には、セキュリティ サーバが含まれています。View Administrator を使用してセキュリティ サーバ上で安全なトンネルや PColP Secure Gateway を有効または無効にするには、そのセキュリティ サーバと対になっている View 接続サーバ インスタンスを編集する必要があります。

外部クライアントが View 接続サーバ ホストに直接接続するネットワーク構成では、View Administrator で View 接続サーバ インスタンスを編集して、安全なトンネルや PColP Secure Gateway を有効または無効にする必要があります。

前提条件

- PCoIP Secure Gateway を有効にする場合は、View 接続サーバ インスタンスおよびペアのセキュリティ サーバが View 4.6 以降であることを確認します。
- PCoIP Secure Gateway をすでに有効にしている View 接続サーバ インスタンスに対してセキュリティ サーバをペアにする場合は、セキュリティ サーバが View 4.6 以降であることを確認します。

手順

- 1 View Administrator で、[View 構成] - [サーバ]の順に選択します。
- 2 [接続サーバ] タブで、View 接続サーバ インスタンスを選択して [編集] をクリックします。
- 3 安全なトンネルの使用を設定します。

オプション	説明
安全なトンネルを有効にする	[マシンへの安全なトンネル接続を使用する] を選択します。
安全なトンネルを無効にする	[マシンへの安全なトンネル接続を使用する] の選択を解除します。

デフォルトでは、安全なトンネルは有効になっています。

- 4 PCoIP Secure Gateway の使用を設定します。

オプション	説明
PCoIP Secure Gateway を有効にする	[マシンへの PCoIP 接続に PCoIP Secure Gateway を使用する] を選択します
PCoIP Secure Gateway を無効にする	[マシンへの PCoIP 接続に PCoIP Secure Gateway を使用する] の選択を解除します

デフォルトでは、PCoIP Secure Gateway は無効になっています。

- 5 [OK] をクリックして変更を保存します。

Blast Secure Gateway の構成

View Administrator では、HTML Access、または VMware Blast 表示プロトコルを使用するクライアント接続を介してリモート デスクトップおよびアプリケーションに安全にアクセスできるように、Blast Secure Gateway の使用を構成できます。

注: また、セキュリティ サーバではなく、Access Point アプライアンスを使用して、Horizon 7 サーバおよびデスクトップに安全に外部アクセスすることもできます。Access Point アプライアンスを使用する場合、View 接続サーバ インスタンスで Secure Gateway を無効にしてこれらのゲートウェイを Access Point アプライアンスで有効にする必要があります。詳細については、Access Point をデプロイして構成するを参照してください。

Blast Secure Gateway が有効になっていない場合、クライアント デバイスおよびクライアント Web ブラウザは、VMware Blast Extreme プロトコルを使用して、リモート デスクトップ仮想マシンおよびアプリケーションに直接接続することで、Blast Secure Gateway をバイパスします。

重要: 外部ユーザーに安全な接続を提供する一般的なネットワーク構成には、セキュリティ サーバが含まれています。セキュリティ サーバで Blast Secure Gateway を有効または無効にするには、セキュリティ サーバとペアになっている View 接続サーバ インスタンスを編集する必要があります。外部ユーザーが View 接続サーバ ホストに直接接続する場合、その View 接続サーバ インスタンスを編集して Blast Secure Gateway を有効または無効にします。

前提条件

ユーザーが VMware Identity Manager を使用してリモート デスクトップを選択する場合、VMware Identity Manager がインストールされ、View 接続サーバで使用するために構成されており、View 接続サーバが SAML 2.0 認証サーバとペアになっていることを確認します。

手順

- 1 View Administrator で、[View 構成] - [サーバ]の順に選択します。
- 2 [接続サーバ] タブで、View 接続サーバ インスタンスを選択して [編集] をクリックします。
- 3 Blast Secure Gateway の使用を構成します。

オプション	説明
Blast Secure Gateway を有効にする	[Blast Secure Gateway を使用してマシンに Blast 接続する] を選択します。
Blast secure Gateway を無効にする	[Blast Secure Gateway を使用してマシンに Blast 接続する] を選択解除します。

Blast Secure Gateway はデフォルトで有効になります。

- 4 [OK] をクリックして変更を保存します。

SSL 接続を中間サーバにオフロードする

Horizon Client は HTTPS を使用して View に接続する必要があります。Horizon Client が View 接続サーバ インスタンスまたはセキュリティ サーバにロード バランサなどの中間サーバを経由して接続する場合、SSL を中間サーバにオフロードすることができます。

SSL オフロード サーバの証明書を View サーバにインポートする

SSL 接続を中間サーバにオフロードする場合、中間サーバの証明書を View 接続サーバ インスタンスまたは中間サーバに接続するセキュリティ サーバにインポートする必要があります。同じ SSL サーバ証明書が、オフロードする中間サーバと、中間サーバに接続する、オフロードされる各 View server の両方に存在している必要があります。

セキュリティ サーバを展開する場合、中間サーバおよびそれに接続するセキュリティ サーバに、同じ SSL 証明書が必要です。同じ SSL 証明書を、セキュリティ サーバとペアリングされて中間サーバに直接接続していない View 接続サーバ インスタンスにインストールする必要はありません。

セキュリティ サーバを展開しない場合、またはいくつかのセキュリティ サーバおよび外部に接続している View 接続サーバインスタンスを含む混在ネットワーク環境の場合、中間サーバおよびそれに接続する View 接続サーバインスタンスに同じ SSL 証明書が必要です。

中間サーバの証明書が View 接続サーバインスタンスまたはセキュリティ サーバにインストールされていないと、クライアントは View への接続を検証できません。この場合、View server によって送信された証明書のサムプリントが、Horizon Client が接続している中間サーバの証明書と一致しません。

負荷分散を SSL オフロードと混同しないようにしてください。この前提条件は、一部のタイプの負荷分散を含む、SSL オフロードを提供するように構成されたすべてのデバイスに適用されます。ただし、純粋な負荷分散には、デバイス間の証明書のコピーは必要ありません。

View サーバへの証明書のインポートの詳細については、『View インストール』の「署名付きサーバ証明書を Windows Certificate Store にインポートする」を参照してください。

クライアントを SSL オフロード サーバにポイントするように View Server の外部 URL を設定する

SSL が中間サーバにオフロードされ、Horizon Client デバイスが安全なトンネルを使用して View に接続する場合は、安全なトンネルの外部 URL を、クライアントが中間サーバへのアクセスに使用できるアドレスに設定するようにします。

中間サーバに接続する View 接続サーバインスタンスまたはセキュリティ サーバの外部 URL 設定を構成します。

セキュリティ サーバを展開する場合、それらのセキュリティ サーバに外部 URL が必要ですが、セキュリティ サーバとペアになる View 接続サーバインスタンスには外部 URL は必要ありません。

セキュリティ サーバを展開しない場合や、セキュリティ サーバや外部向けの View 接続サーバインスタンスがいくつか集まった混合ネットワーク環境を利用している場合には、中間サーバに接続する View 接続サーバインスタンスに外部 URL が必要です。

注: PCoIP Secure Gateway (PSG) または Blast Secure Gateway から SSL 接続をオフロードすることはできません。PCoIP 外部 URL と Blast Secure Gateway 外部 URL は、PSG と Blast Secure Gateway をホストするコンピュータへの接続をクライアントに許可する必要があります。中間サーバと View server 間に SSL 接続を要求する予定がない限り、中間サーバをポイントするように PCoIP 外部 URL と Blast 外部 URL をリセットすることは避けてください。

外部 URL の構成についての詳細は、『View のインストール』の「PCoIP Secure Gateway 接続およびトンネル接続用の外部 URL の構成」を参照してください。

中間サーバからの HTTP 接続を許可する

SSL が中間サーバにオフロードされる場合、View 接続サーバインスタンスまたはセキュリティ サーバが、クライアントが接続する中間デバイスからの HTTP 接続を許可するように構成できます。中間デバイスは Horizon Client 接続の HTTPS を受け入れる必要があります。

View サーバと中間デバイスとの HTTP 接続を許可するには、HTTP 接続が許可される各 View 接続サーバインスタンスおよびセキュリティ サーバに `locked.properties` ファイルを構成する必要があります。

View サーバと中間デバイスとの間の HTTP 接続が許可されたとしても、View での SSL を無効にすることはできません。View サーバは HTTP 接続と同様に HTTPS 接続を引き続き受け入れます。

注: Horizon クライアントがスマート カード認証を使用する場合、クライアントは View 接続サーバまたはセキュリティ サーバに対し直接 HTTPS 接続を行う必要があります。SSL オフロードはスマート カード認証ではサポートされていません。

手順

- 1 View 接続サーバ ホストまたはセキュリティ サーバ ホスト上で、SSL ゲートウェイ構成フォルダ内の `locked.properties` ファイルを作成または編集します。

例: `install_directory¥¥View¥¥¥¥.properties`
- 2 View server のプロトコルを構成するには、`serverProtocol` プロパティを追加して、`http` に設定します。

値 `http` は小文字で入力する必要があります。
- 3 (オプション) プロパティを追加して、デフォルト以外の HTTP リスニング ポートおよびネットワーク インターフェイスを View server に構成します。
 - HTTP リスニング ポートを 80 から変更するには、`serverPortNonSSL` を、中間デバイスの接続先に構成されている別のポート番号に設定します。
 - View server に複数のネットワーク インターフェイスがあり、サーバに 1 つのインターフェイスのみで HTTP 接続をリスンさせる場合、`serverHostNonSSL` をそのネットワーク インターフェイスの IP アドレスに設定します。
- 4 `locked.properties` ファイルを保存します。
- 5 変更を反映するため、View 接続サーバ サービスまたはセキュリティ サーバ サービスを再起動してください。

例: `locked.properties` ファイル

このファイルにより View server への非 SSL HTTP 接続が許可されます。View server のクライアントが接続しているネットワーク インターフェイスの IP アドレスは 10.20.30.40 です。サーバはデフォルトのポート 80 を使用して HTTP 接続をリスンします。その値 `http` は小文字である必要があります。

```
serverProtocol=http
serverHostNonSSL=10.20.30.40
```

View 接続サーバまたはセキュリティ サーバ ホスト用のゲートウェイの場所の構成

デフォルトのゲートウェイの場所は、View 接続サーバ インスタンスでは `Internal` に設定され、セキュリティ サーバでは `External` に設定されています。デフォルトのゲートウェイの場所を変更するには、`locked.properties` ファイルの `gatewayLocation` プロパティを設定します。

ゲートウェイの場所により、リモート デスクトップの ViewClient_Broker_GatewayLocation レジストリ キーの値が決定されます。この値をスマート ポリシーで使用すると、ユーザーが企業ネットワーク内から、または企業ネットワーク以外からリモート デスクトップに接続した場合にのみ有効になるポリシーを作成できます。詳細については、『View でのデスクトップ プールとアプリケーション プールの設定』ドキュメントの「スマート ポリシーの使用」を参照してください。

手順

- 1 View 接続サーバ ホストまたはセキュリティ サーバ ホスト上で、SSL ゲートウェイ構成フォルダ内の `locked.properties` ファイルを作成または編集します。

例: `install_directory\VMware\VMware View\Server\sslgateway\conf\locked.properties`

`locked.properties` ファイルのプロパティは、大文字と小文字が区別されます。

- 2 次の行を `locked.properties` ファイルに追加します。

`gatewayLocation=value`

`value` は、`External` または `Internal` のいずれかになります。`External` は、企業ネットワークの外部のユーザーがゲートウェイを使用できることを示します。`Internal` は、企業ネットワークの内部のユーザーのみがゲートウェイを使用できることを示します。

例: `gatewayLocation=External`

- 3 `locked.properties` ファイルを保存します。
- 4 変更を反映するため、VMware Horizon View 接続サーバ サービスまたは VMware Horizon View セキュリティ サーバ サービスを再起動してください。

View 接続サーバの無効化または有効化

View 接続サーバ インスタンスを無効にして、ユーザーがリモート デスクトップやアプリケーションにログインできないようにすることができます。インスタンスを無効にした後、再度有効にすることができます。

View 接続サーバ インスタンスを無効にしても、現在リモート デスクトップやアプリケーションにログインしているユーザーは影響を受けません。

インスタンスを無効にするとユーザーがどのような影響を受けるかは、View の展開によって決まります。

- 単一でスタンドアロンの View 接続サーバ インスタンスの場合、ユーザーはリモート デスクトップまたはアプリケーションにログインできません。View 接続サーバに接続できません。
- これが複製された View 接続サーバ インスタンスの場合は、ユーザーを別の複製されたインスタンスにルーティングできるかどうかはネットワーク トポロジによって決まります。別のインスタンスにアクセスできる場合、ユーザーはリモート デスクトップやアプリケーションにログインできます。

手順

- 1 View Administrator で、[View 構成] - [サーバ] を選択します。
- 2 [接続サーバ] タブで、View 接続サーバ インスタンスを選択します。

3 [無効化] をクリックします。

[有効化] をクリックすることによって、インスタンスを再び有効にすることができます。

外部 URL の編集

View Administrator を使用して、View 接続サーバ インスタンスおよびセキュリティ サーバの外部 URL を編集できます。

デフォルトでは、View 接続サーバまたはセキュリティ サーバ ホストに接続できるクライアントは、同じネットワーク内に存在するトンネル クライアントだけです。ネットワークの外部で実行されているトンネル クライアントは、クライアントで解決できる URL を使用して View 接続サーバまたはセキュリティ サーバ ホストに接続する必要があります。

ユーザーが PCoIP 表示プロトコルを使用してリモート デスクトップに接続した場合には、Horizon Client はさらに View 接続サーバ ホストまたはセキュリティ サーバ ホスト上の PCoIP Secure Gateway に接続することができます。PCoIP Secure Gateway を使用するには、クライアント システムが View 接続サーバ ホストまたはセキュリティ サーバ ホストに到達するための IP アドレスにアクセスする必要があります。この IP アドレスは PCoIP 外部 URL に指定します。

さらにもう 1 つは、Blast Secure Gateway 経由で安全な接続を行えるようにするための URL です。

安全なトンネルの外部 URL、PCoIP 外部 URL、および Blast 外部 URL は、このホストに到達するためにクライアント システムで使用されるアドレスでなければなりません。

注: View 接続サーバ 4.5 以降にアップグレードされていないセキュリティ サーバの外部 URL を編集することはできません。

手順

1 View Administrator で、[View 構成] - [サーバ]の順に選択します。

オプション	アクション
View 接続サーバ インスタンス	[接続サーバ] タブで View 接続サーバ インスタンスを選択し、[編集] をクリックします。
セキュリティ サーバ	[セキュリティ サーバ] タブでセキュリティ サーバを選択し、[編集] をクリックします。

2 [外部 URL] テキスト ボックスに安全なトンネルの外部 URL を入力します。

URL には、プロトコル、クライアントで解決可能なホスト名、およびポート番号が含まれている必要があります。

例 : https://view.example.com:443

注: ホスト名が解決できないときに View 接続サーバ インスタンスまたはセキュリティ サーバにアクセスする必要がある場合は、IP アドレスを使用できます。ただし、通信するホストは、View 接続サーバ インスタンスまたはセキュリティ サーバに対して構成された SSL 証明書に一致しないため、アクセスがブロックされたりアクセスのセキュリティが低下したりします。

- 3 [PCoIP 外部 URL] テキスト ボックスに、PCoIP Secure Gateway の外部 URL を入力します。

PCoIP 外部 URL は、IP アドレスとポート番号 4172 の組み合わせとして指定します。プロトコル名は含めないでください。

例 : 10.20.30.40:4172

URL には、クライアント システムがこのセキュリティ サーバまたは View 接続サーバ インスタンスに到達する際に使用できる IP アドレスとポート番号を含める必要があります。

- 4 [Blast 外部 URL] テキスト ボックスに Blast Secure Gateway の外部 URL を入力します。

URL には、HTTPS プロトコル、クライアントが解決可能なホスト名、およびポート番号が含まれている必要があります。

例 : <https://myserver.example.com:8443>

デフォルトでは、URL には安全なトンネル外部 URL の FQDN およびデフォルトのポート番号 8443 が含まれます。URL には、このホストに到達するためにクライアント システムで使用できる FQDN とポート番号を含める必要があります。

- 5 このダイアログのすべてのアドレスでクライアント システムがこのホストに到達できることを確認します。
- 6 [OK] をクリックして変更を保存します。

外部 URL はすぐに更新されます。変更を反映するために View 接続サーバ サービスまたはセキュリティ サーバ サービスを再起動する必要はありません。

カスタマー エクスペリエンス プログラムに参加または参加を取り消す

View 接続サーバを新しい構成でインストールする場合は、カスタマー エクスペリエンス向上プログラムに参加することを選択できます。インストール後に参加に関する考えが変わったら、View Administrator を使用して、プログラムに参加したり参加を取り消したりすることができます。

プログラムに参加すると、VMware は、ユーザー要件に対する対応を向上させるために、お客様の展開に関する匿名データを収集します。企業が特定できるような情報は収集されません。

匿名のフィールドを含め、データが収集されたフィールドのリストを確認するには、次を参照してください。

[カスタマー エクスペリエンス改善プログラムによって収集される情報](#)。

手順

- 1 View Administrator で、[View 構成] - [製品のライセンスと使用状況] を選択します。
- 2 [ユーザー使用環境改善プログラム] ペインで、[編集設定] をクリックします。
- 3 [VMware に匿名のデータを送信] チェックボックスをオンまたはオフにすることで、プログラムに参加するか参加を取り消すかを指定します。
- 4 (オプション) 参加する場合は、組織の地理的な位置、業種、従業員数を選択できます。
- 5 [OK] をクリックします。

View LDAP ディレクトリ

View LDAP は、View 構成情報すべてのデータ リポジトリです。View LDAP は、View 接続サーバのインストールによって提供される、組み込み Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) ディレクトリです。

View LDAP には、View で使用される標準 LDAP ディレクトリ コンポーネントが含まれます。

- View のスキーマ定義
- ディレクトリ情報ツリー (DIT) の定義
- アクセス制御リスト (ACL)

View LDAP には、View オブジェクトを表すディレクトリ エントリが含まれます。

- アクセス可能な各デスクトップを表すリモート デスクトップ エントリ。各エントリには、デスクトップの使用が許可されている、Active Directory 内の Windows ユーザーおよびグループの外部セキュリティ プリンシパル (FSP) エントリへの参照が含まれています。
- まとめて管理される複数のデスクトップを表すリモート デスクトップ プール エントリ。
- 各リモート デスクトップの vCenter Server 仮想マシンを表す仮想マシン エントリ。
- 構成設定を格納するための View コンポーネント エントリ。

View LDAP には、他の View コンポーネントに自動化と通知サービスを提供する、一連の View プラグイン DLL も含まれています。

注: セキュリティ サーバ インスタンスには、View LDAP ディレクトリは含まれていません。

LDAP レプリケーション

View 接続サーバの複製されたインスタンスをインストールするときは、View が既存の View 接続サーバ インスタンスから View LDAP 構成データをコピーします。複製されたグループのすべての View 接続サーバ インスタンスで、同一の View LDAP 構成データが維持されます。1 つのインスタンスで構成が変更されると、更新された情報が他のインスタンスにコピーされます。

複製されたインスタンスで障害が発生した場合は、グループ内の他のインスタンスが動作を続行します。障害が発生したインスタンスが活動を再開した場合、停止中に発生した変更で構成が更新されます。Horizon 7 以降のリリースでは、レプリケーションのステータス チェックが 15 分ごとに実行され、各インスタンスが複製されたグループの他のサービスと通信できるかどうか、およびグループ内の他のサーバから LDAP の更新を取得できるかどうかが決まります。

View Administrator のダッシュボードを使用して、レプリケーションのステータスを確認できます。ダッシュボードで View 接続サーバ インスタンスに赤色のアイコンがある場合は、アイコンをクリックするとレプリケーションのステータスが表示されます。次のいずれかの理由で、複製が失敗することがあります。

- ファイアウォールによって通信がブロックされている
- View 接続サーバ インスタンスで VMware VDMDS サービスが停止している
- VMware VDMDS DSA オプションによって複製がブロックされている
- ネットワークの問題が発生している

デフォルトでは、レプリケーションのチェックは 15 分ごとに実行されます。チェック間隔を変更するには、View 接続サーバインスタンスで ADSI Edit を使用します。分数を設定するには、[DC=vdi,DC=vmware,DC=int] に接続して、[CN=Common,OU=Global,OU=Properties] オブジェクトの [pae-ReplicationStatusDataExpiryInMins] 属性を編集します。

[pae-ReplicationStatusDataExpiryInMins] 属性値は、10 ～ 1440 分（1 日）の範囲で設定する必要があります。属性が 10 分未満の値に設定されている場合、View では 10 分として扱われます。属性が 1440 分を超える値に設定されている場合、View では 1440 分として扱われます。

スマート カード認証の設定

セキュリティを強化するため、ユーザーと管理者がスマート カードを使用して認証できるように、View 接続サーバーインスタンスまたはセキュリティ サーバを構成できます。

スマート カードは、コンピュータ チップを搭載した小型のプラスチック カードです。ミニチュア コンピュータのようなこのチップは、秘密鍵および公開鍵の証明書など、データの安全なストレージを備えています。米国国防省が使用するスマート カードの 1 種には、Common Access Card (CAC) というカードがあります。

スマート カード認証では、クライアント コンピュータに接続されたスマート カード リーダにユーザーまたは管理者がスマート カードを差し込み、PIN を入力します。スマート カード認証は、個人が持っているもの（スマート カード）と個人が知っていること (PIN) の両方を検証することによって、2 要素認証を提供します。

スマート カード認証を実装するためのハードウェア要件およびソフトウェア要件については、『View のインストール』を参照してください。Microsoft TechNet の Web サイトでは、Windows システム用にスマート カード認証を計画して実装する方法についての詳細情報が提供されています。

スマート カードを使用するには、クライアント マシンにスマート カード ミドルウェアおよびスマート カード リーダが必要です。スマート カードに証明書をインストールするには、コンピュータを登録ステーションとして動作するように設定する必要があります。特定のタイプの Horizon Client がスマート カードをサポートするかどうかの詳細については、Horizon Client ドキュメント (https://www.vmware.com/support/viewclients/doc/viewclients_pubs.html) を参照してください。

この章には、次のトピックが含まれています。

- スマート カードを使用したログイン
- View 接続サーバでのスマート カード認証の構成
- サードパーティ製ソリューションでのスマート カード認証の構成
- スマート カード認証用の Active Directory を準備する
- スマート カード認証の構成の検証
- スマート カードでの証明書失効チェックの使用

スマート カードを使用したログイン

ユーザーまたは管理者がスマート カード リーダにスマート カードを差し込むと、クライアント オペレーティング システムが Windows の場合、スマート カードのユーザー証明書がクライアント システムのローカル証明書ストアにコピーされます。ローカル証明書ストアの証明書は、Horizon Client を含め、クライアント コンピュータ上で実行されているすべてのアプリケーションで利用可能です。

スマート カード認証が構成されている View 接続サーバ インスタンスまたはセキュリティ サーバへの接続をユーザーまたは管理者が開始すると、信頼された証明機関 (CA) のリストがその View 接続サーバ インスタンスまたはセキュリティ サーバからクライアント システムに送信されます。クライアント システムは信頼された CA のリストを使用可能なユーザー 証明書と照合し、適切な証明書を選択してから、ユーザーまたは管理者にスマート カード PIN の入力を要求します。有効なユーザー 証明書が複数ある場合、クライアント システムはユーザーまたは管理者に証明書の選択を求めます。

そのユーザー 証明書がクライアント システムから View 接続サーバ インスタンスまたはセキュリティ サーバに送信され、証明書の信頼および有効期間を確認することによって証明書が検証されます。一般に、ユーザー 証明書が署名されていて有効であれば、ユーザーおよび管理者は正常に認証されます。証明書失効チェックが構成されている場合、失効した証明書を持つユーザーまたは管理者は認証できません。

環境によっては、ユーザーのスマート カード証明書を複数の Active Directory ドメインのユーザー アカウントにマップできます。ユーザーは管理者権限のある複数のアカウントを持っている場合がありますが、その場合、スマート カードでログインするときの [ユーザー名のヒント] フィールドで使用するアカウントを指定する必要があります。Horizon Client のログイン ダイアログ ボックスで [ユーザー名のヒント] フィールドを表示させるには、管理者は、View Administrator の接続サーバ インスタンスでスマート カード ユーザー名のヒント機能を有効にする必要があります。次に、スマート カード ユーザーは、スマート カードでログインするときに、[ユーザー名のヒント] フィールドにユーザー名または UPN を入力できます。

外部アクセスを安全にするために Access Point アプライアンスを使用している環境では、スマート カード ユーザー名のヒント機能をサポートするように Access Point アプライアンスを構成する必要があります。スマート カード ユーザー名のヒント機能は、Access Point 2.7.2 以降でのみサポートされます。Access Point でスマート カード ユーザー名のヒント機能を有効にする情報については、『Access Point の導入および設定』を参照してください。

Horizon Client でのスマート カード認証では、表示プロトコルの切り替えがサポートされていません。Horizon Client でのスマート カードによる認証後に、表示プロトコルを変更するには、ユーザーはログオフして、再度ログインする必要があります。

View 接続サーバでのスマート カード認証の構成

スマート カード認証を構成するには、ルート証明書を取得してサーバ信頼ストア ファイルに追加し、View 接続サーバの構成プロパティを変更して、スマート カード認証の設定を構成する必要があります。使用する環境によっては、追加の手順が必要になることがあります。

手順

1 証明機関の証明書の取得

ユーザーまたは管理者が提示したスマート カード上のすべての信頼されたユーザー 証明書について、該当するすべての CA (証明機関) の証明書を取得する必要があります。これらの証明書にはルート証明書が含まれ、ユーザーのスマート カード証明書が中間証明機関によって発行された場合には中間証明書が含まれる場合があります。

2 Windows からの CA 証明書の取得

CA が署名したユーザー 証明書またはそれを含むスマート カードがあり、Windows でルート証明書が信頼される場合は、そのルート証明書を Windows からエクスポートできます。ユーザー 証明書の発行元が中間証明機関である場合は、その証明書をエクスポートできます。

3 サーバ信頼ストア ファイルへの CA 証明書の追加

信頼するすべてのユーザーおよび管理者のサーバ信頼ストア ファイルに、ルート証明書と中間証明書のいずれかまたは両方を追加する必要があります。View 接続サーバ インスタンスおよびセキュリティ サーバは、この情報を使用してスマート カード ユーザーおよび管理者を認証します。

4 View 接続サーバの構成プロパティの変更

スマート カード認証を有効にするには、View 接続サーバまたはセキュリティ サーバ ホストの View 接続サーバ構成プロパティを変更する必要があります。

5 View Administrator でのスマート カード設定の構成

View Administrator を使用して、スマート カード認証のさまざまなシナリオに対応する設定を指定できます。

証明機関の証明書の取得

ユーザーまたは管理者が提示したスマート カード上のすべての信頼されたユーザー証明書について、該当するすべての CA（証明機関）の証明書を取得する必要があります。これらの証明書にはルート証明書が含まれ、ユーザーのスマート カード証明書が中間証明機関によって発行された場合には中間証明書が含まれる場合があります。

ユーザーおよび管理者によって提示されたスマート カード上の証明書に署名した CA のルート証明書または中間証明書を持っていない場合、CA が署名したユーザー証明書またはそれを含むスマート カードから証明書をエクスポートできます。[Windows からの CA 証明書の取得](#)を参照してください。

手順

◆ CA の証明書は次のいずれかの発行元から取得します。

- Microsoft Certificate Services を実行する Microsoft IIS サーバ。Microsoft IIS のインストール、証明書の発行、および組織内での証明書配布の詳細については、Microsoft TechNet の Web サイトを参照してください。
- 信頼された CA の公開ルート証明書。これは、スマート カード インフラストラクチャがすでに使用されていて、スマート カードの配布および認証方法が標準化されている環境で最もよく利用されるルート証明書の発行元です。

次のステップ

ルート証明書と中間証明書のいずれかまたは両方をサーバ信頼ストア ファイルに追加します。

Windows からの CA 証明書の取得

CA が署名したユーザー証明書またはそれを含むスマート カードがあり、Windows でルート証明書が信頼される場合は、そのルート証明書を Windows からエクスポートできます。ユーザー証明書の発行元が中間証明機関である場合は、その証明書をエクスポートできます。

手順

- 1 ユーザー証明書がスマート カード上にある場合は、そのスマート カードをリーダーに挿入して、ユーザー証明書を個人用ストアに追加します。

ユーザー証明書が個人用ストアに表示されない場合は、リーダー ソフトウェアを使用してユーザー証明書をファイルにエクスポートします。このファイルは、この操作の手順 4 で使用されます。

- 2 Internet Explorer で [ツール] - [インターネット オプション] を選択します。
- 3 [コンテンツ] タブで [証明書] をクリックします。
- 4 [個人] タブで、使用する証明書を選択し、[表示] をクリックします。

ユーザー証明書がリストに表示されない場合は、[インポート] をクリックして手動でファイルからインポートします。証明書がインポートされると、その証明書をリストから選択できます。

- 5 [証明のパス] タブで、ツリーの最上位にある証明書を選択して [証明書を表示] をクリックします。

ユーザー証明書が信頼階層の一部として署名されている場合は、署名する証明書が別の上位の証明書によって署名されていることがあります。親証明書（ユーザー証明書に実際に署名した証明書）をルート証明書として選択してください。場合によっては発行元が中間 CA となります。

- 6 [詳細] タブで [ファイルにコピー] をクリックします。

[証明書のエクスポート ウィザード] が表示されます。

- 7 [次へ] - [次へ] をクリックし、エクスポートするファイルの名前と場所を入力します。
- 8 [次へ] をクリックして、指定した場所にファイルをルート証明書として保存します。

次のステップ

CA 証明書をサーバ信頼ストア ファイルに追加します。

サーバ信頼ストア ファイルへの CA 証明書の追加

信頼するすべてのユーザーおよび管理者のサーバ信頼ストア ファイルに、ルート証明書と中間証明書のいずれかまたは両方を追加する必要があります。View 接続サーバ インスタンスおよびセキュリティ サーバは、この情報を使用してスマート カード ユーザーおよび管理者を認証します。

前提条件

- ユーザーまたは管理者が提示したスマート カード上の証明書への署名に使用したルート証明書または中間証明書を取得します。 [証明機関の証明書の取得](#) および [Windows からの CA 証明書の取得](#) を参照してください。

重要: ユーザーのスマート カード証明書が中間証明機関によって発行された場合、これらの証明書には中間証明書が含まれることがあります。

- keytool ユーティリティが、View 接続サーバまたはセキュリティ サーバ ホストのシステム パスに追加されていることを確認します。詳細については、『View のインストール』を参照してください。

手順

- 1 View 接続サーバまたはセキュリティ サーバ ホストで、keytool ユーティリティを使用して、ルート証明書または中間証明書のいずれかまたは両方をサーバ信頼ストア ファイルにインポートします。

例：

```
keytool -import -alias alias -file root_certificate -keystore truststorefile.key
```

このコマンドでは、*alias*は信頼ストア ファイル内の新しいエントリの大文字と小文字を区別する一意の名前で、*root_certificate*は取得またはエクスポートしたルート証明書または中間証明書です。また、*truststorefile.key*はルート証明書の追加先の信頼ストア ファイルの名前です。ファイルが存在しない場合、現在のディレクトリに作成されます。

注: keytool ユーティリティによって、信頼ストア ファイルのパスワードの作成を求められる場合があります。後で信頼ストア ファイルにさらに証明書を追加する必要がある場合は、このパスワードの入力が求められます。

- 2 View 接続サーバまたはセキュリティ サーバ ホストの SSL ゲートウェイ構成フォルダに、信頼ストア ファイルをコピーします。

例: `install_directory\VMware\VMware View\Server\sslgateway\conf\truststorefile.key`

次のステップ

View 接続サーバの構成プロパティを変更して、スマート カード認証を有効にします。

View 接続サーバの構成プロパティの変更

スマート カード認証を有効にするには、View 接続サーバまたはセキュリティ サーバ ホストの View 接続サーバ構成プロパティを変更する必要があります。

前提条件

信頼されたすべてのユーザー証明書の CA（認証局）証明書をサーバ信頼ストア ファイルに追加します。これらの証明書にはルート証明書が含まれ、ユーザーのスマート カード証明書が中間認証局によって発行された場合には中間証明書が含まれる場合があります。

手順

- 1 View 接続サーバ ホストまたはセキュリティ サーバ ホスト上で、SSL ゲートウェイ構成フォルダ内の `locked.properties` ファイルを作成または編集します。

例: `install_directory\VMware\VMware View\Server\sslgateway\conf\locked.properties`

- 2 `locked.properties` ファイルに `trustKeyfile`、`trustStoretype`、および `useCertAuth` プロパティを追加します。
 - a `trustKeyfile` に信頼ストア ファイルの名前を設定します。
 - b `trustStoretype` に **jks** を設定します。
 - c `useCertAuth` に **true** を設定して、証明書認証を有効にします。
- 3 変更を反映するため、View 接続サーバ サービスまたはセキュリティ サーバ サービスを再起動してください。

例：locked.properties ファイル

例に示すファイルでは、すべての信頼されたユーザーのルート証明書がある場所としてファイル `lonqa.key` が指定され、信頼ストアのタイプが `jks` に設定され、証明書認証が有効になります。

```
trustKeyfile=lonqa.key
trustStoretype=jks
useCertAuth=true
```

次のステップ

View 接続サーバ インスタンスでスマート カード認証を構成した場合は、View Administrator でスマート カード認証の設定を構成します。セキュリティ サーバではスマート カード認証設定を構成する必要はありません。View 接続サーバ インスタンスに構成された設定は、ペアになっているセキュリティ サーバにも適用されます。

View Administrator でのスマート カード設定の構成

View Administrator を使用して、スマート カード認証のさまざまなシナリオに対応する設定を指定できます。

これらの設定を View 接続サーバ インスタンスで構成すると、その設定はペアになっているセキュリティ サーバにも適用されます。

前提条件

- View 接続サーバ ホストの View 接続サーバ構成プロパティを変更します。
- Horizon Client が直接 View 接続サーバまたはセキュリティ サーバのホストに対して HTTPS 接続を確立していることを確認します。SSL を中間デバイスにオフロードしている場合、スマート カード認証はサポートされません。

手順

- 1 View Administrator で、[View 構成] - [サーバ]の順に選択します。
- 2 [接続サーバ] タブで、View 接続サーバ インスタンスを選択して [編集] をクリックします。

3 リモート デスクトップ ユーザーおよびアプリケーション ユーザーのスマート カード認証を構成するには、次の手順を実行します。

- a [認証] タブで、[View 認証] セクションの [ユーザー用スマート カード認証] ドロップダウン メニューから構成オプションを選択します。

オプション	アクション
不許可	View 接続サーバインスタンスでのスマート カード認証が無効になります。
オプション	ユーザーはスマート カード認証またはパスワード認証を使用して View 接続サーバ インスタンスに接続できます。スマート カード認証が失敗した場合、ユーザーはパスワードを入力する必要があります。
必須	View 接続サーバインスタンスに接続するときにユーザーはスマート カード認証を使用する必要があります。 スマート カード認証が必須の場合は、View 接続サーバ インスタンスに接続する際に [現在のユーザーとしてログイン] チェック ボックスをオンにしたユーザーの認証が失敗します。これらのユーザーは、View 接続サーバにログインする際にスマート カードと PIN を使用して再認証する必要があります。 注: スマート カード認証を設定すると、Windows パスワード認証は利用できなくなりますが、他の認証は利用できます。SecurID が有効になっている場合は、ユーザーは SecurID とスマート カード認証の両方による認証を求められます。

- b スマート カード取り外しポリシーを構成します。

スマート カード認証が [不許可] に設定されている場合は、スマート カード取り外しポリシーを構成できません。

オプション	アクション
ユーザーがスマート カードを取り外したら、View 接続サーバにらユーザーを切断する。	[スマート カードを取り出すときはユーザー セッションを切断します] チェック ボックスをオンにします。
ユーザーがスマート カードを取り外しても View 接続サーバへの接続を維持して、再認証しなくても新しいデスクトップまたはアプリケーション セッションを開始できるようにする。	[スマート カードを取り出すときはユーザー セッションを切断します] チェック ボックスをオフにします。

ユーザーが [現在のユーザーとしてログイン] チェック ボックスをオンにして View 接続サーバ インスタンスに接続している場合は、スマート カードでクライアント システムにログインしている場合であっても、スマート カード取り外しポリシーは適用されません。

- c スマート カードのユーザー名のヒント機能を構成する。

スマート カード認証が [不許可] に設定されている場合は、スマート カードのユーザー名のヒント機能を構成できません。

オプション	アクション
ユーザーが 1 つのスマート カード証明書を 使用して、複数のユーザー アカウントを認証 できるようにする。	[スマート カード ユーザー名のヒントを許可します] チェック ボックスをオンにします。
ユーザーが 1 つのスマート カード証明書を 使用して、複数のユーザー アカウントを認証 できないようにする。	[スマート カード ユーザー名のヒントを許可します] チェック ボックスをオフにします。

- 4 View Administrator にログインする管理者にスマート カード認証を構成するには、[認証] タブをクリックし、[View 管理認証] セクションで [管理者用スマート カード認証] ドロップダウン メニューから構成オプションを選択します。

オプション	アクション
不許可	View 接続サーバ インスタンスでのスマート カード認証が無効になります。
オプション	管理者はスマート カード認証またはパスワード認証を使用して View Administrator にログインできます。スマート カード認証が失敗した場合、管理者はパスワードを入力する必要があります。
必須	管理者は View Administrator にログインするときにスマート カード認証を使用する必要があります。

- 5 [OK] をクリックします。

- 6 View 接続サーバ サービスを再起動します。

スマート カードの設定に対する変更を反映するには、View 接続サーバ サービスを再起動する必要があります。1 つだけ例外があります。スマート カード認証の設定は、View 接続サーバ サービスを再起動せずに、[オプション] と [必須] の間で変更できます。

スマート カードの設定を変更しても、現在ログインしているユーザーおよび管理者に影響はありません。

次のステップ

必要に応じて、スマート カード認証のために Active Directory を準備します。[スマート カード認証用の Active Directory を準備する](#)を参照してください。

スマート カード認証の構成を検証します。[スマート カード認証の構成の検証](#)を参照してください。

サードパーティ製ソリューションでのスマート カード認証の構成

ロード バランサやゲートウェイなどのサードパーティ製ソリューションは、スマート カードの X.590 証明書と暗号化された PIN が含まれる SAML アサーションを渡すことで、スマート カード認証を実行できます。

このトピックでは、証明書がパートナー デバイスによって検証された後に関連する X.590 証明書を View 接続サーバに提供するためのサードパーティ製ソリューションの設定に伴うタスクについて概説します。この機能では SAML 認証を使用するため、タスクの 1 つとして View Administrator で SAML 認証子を作成します。

Access Point でのスマート カード認証の構成については、『Access Point をデプロイして構成する』を参照してください。

手順

- 1 サードパーティ製ゲートウェイまたはロード バランサ用の SAML 認証子を作成します。

[View Administrator での SAML 認証子の構成](#)を参照してください。

- 2 View 接続サーバのメタデータの有効期間を延長して、リモート セッションが 24 時間経過後に終了されないようにします。

[View 接続サーバでのサービス プロバイダ メタデータの有効期間の変更](#)を参照してください。

- 3 必要に応じて、View 接続サーバからサービス プロバイダのメタデータを使用するようにサードパーティ製デバイスを構成します。

サードパーティ製デバイスの製品ドキュメントを参照してください。

- 4 サードパーティ製デバイスでスマート カード設定を構成します。

サードパーティ製デバイスの製品ドキュメントを参照してください。

スマート カード認証用の Active Directory を準備する

スマート カード認証を実装するときは、Active Directory で特定のタスクを実行する必要があります。

■ スマート カード ユーザーの UPN の追加

スマート カード ログインはユーザー プリンシパル名 (UPN) に依存するので、View での認証にスマート カードを使用するユーザーおよび管理者の Active Directory アカウントには有効な UPN が必要です。

■ Enterprise NTAAuth ストアにルート証明書を追加する

CA を使用してスマート カード ログイン証明書またはドメイン コントローラ証明書を発行する場合は、Active Directory でルート証明書を Active Directory の Enterprise NTAAuth ストアに追加する必要があります。Windows ドメイン コントローラがルート CA として機能する場合は、この手順を実行する必要はありません。

■ 信頼されたルート証明機関へのルート証明書の追加

証明機関 (CA) を使用してスマート カード ログイン証明書またはドメイン コントローラ証明書を発行する場合は、Active Directory でルート証明書を信頼されたルート証明機関グループ ポリシーに追加する必要があります。Windows ドメイン コントローラがルート CA として機能する場合は、この手順を実行する必要はありません。

■ 中間証明機関への中間証明書の追加

中間証明機関 (CA) を使用してスマート カード ログイン証明書またはドメイン コントローラ証明書を発行する場合は、Active Directory で中間証明書を中間証明機関グループ ポリシーに追加する必要があります。

スマート カード ユーザーの UPN の追加

スマート カード ログインはユーザー プリンシパル名 (UPN) に依存するので、View での認証にスマート カードを使用するユーザーおよび管理者の Active Directory アカウントには有効な UPN が必要です。

スマート カード ユーザーが属しているドメインが、ルート証明書が発行されたドメインとは異なる場合は、ユーザーの UPN を、信頼された CA のルート証明書に含まれるサブジェクトの別名 (SAN) に設定する必要があります。ルート証明書がスマート カード ユーザーの現在のドメイン内のサーバから発行された場合は、ユーザーの UPN を変更する必要はありません。

注: 証明書が同じドメインから発行された場合であっても、組み込み Active Directory アカウントの UPN を設定することが必要な場合があります。Administrator などの組み込みアカウントには、デフォルトでは UPN は設定されません。

前提条件

- 証明書のプロパティを表示して、信頼された CA のルート証明書に含まれる SAN を取得します。
- Active Directory サーバに ADSI Edit ユーティリティがない場合は、Microsoft の Web サイトから適切な Windows Support Tools をダウンロードし、インストールします。

手順

- 1 Active Directory サーバで ADSI Edit ユーティリティを起動します。
- 2 左ペインで、ユーザーがいるドメインを展開し、CN=Users をダブルクリックします。
- 3 右ペインで、ユーザーを右クリックして [プロパティ] をクリックします。
- 4 userPrincipalName 属性をダブルクリックし、信頼された CA 証明書の SAN 値を入力します。
- 5 [OK] をクリックして属性の設定を保存します。

Enterprise NTAAuth ストアにルート証明書を追加する

CA を使用してスマート カード ログイン証明書またはドメイン コントローラ証明書を発行する場合は、Active Directory でルート証明書を Active Directory の Enterprise NTAAuth ストアに追加する必要があります。Windows ドメイン コントローラがルート CA として機能する場合は、この手順を実行する必要はありません。

手順

- ◆ Active Directory サーバで、certutil コマンドを使用して、証明書を Enterprise NTAAuth ストアに発行します。

例: **certutil -dspublish -f ルート CA 証明書へのパス NTAAuthCA**

CA がこの種の証明書の発行元として信頼されるようになります。

信頼されたルート証明機関へのルート証明書の追加

証明機関（CA）を使用してスマート カード ログイン証明書またはドメイン コントローラ証明書を発行する場合は、Active Directory でルート証明書を信頼されたルート証明機関グループ ポリシーに追加する必要があります。Windows ドメイン コントローラがルート CA として機能する場合は、この手順を実行する必要はありません。

手順

- 1 Active Directory サーバで、Group Policy Management プラグインに移動します。

AD バージョン	ナビゲーション パス
Windows 2003	<ol style="list-style-type: none"> a [スタート] - [すべてのプログラム] - [管理ツール] - [Active Directory ユーザーとコンピュータ] の順に選択します。 b ドメインを右クリックして、[プロパティ] をクリックします。 c [グループ ポリシ] タブで、[開く] をクリックして Group Policy Management プラグインを開きます。 d [既定のドメイン ポリシー] を右クリックし、[編集] をクリックします。
Windows 2008	<ol style="list-style-type: none"> a [スタート] - [管理ツール] - [グループ ポリシーの管理] の順に選択します。 b ドメインを展開し、[デフォルト ドメイン ポリシー] を右クリックして、[編集] をクリックします。

- 2 [コンピュータの構成] セクションを展開し、[Windows 設定¥セキュリティ設定¥開鍵] を開きます。
- 3 [信頼されたルート証明機関] を右クリックして、[インポート] を選択します。
- 4 ウィザードの指示に従ってルート証明書（rootCA.cer など）をインポートし、[OK] をクリックします。
- 5 [グループ ポリシー] ウィンドウを閉じます。

ドメイン内のすべてのシステムの信頼されたルート ストアに、ルート証明書がコピーされます。

次のステップ

中間証明機関（CA）がスマート カード のログイン証明書またはドメイン コントローラ証明書を発行する場合は、Active Directory で中間証明機関のグループ ポリシーに中間証明書を追加します。[中間証明機関への中間証明書の追加](#)を参照してください。

中間証明機関への中間証明書の追加

中間証明機関（CA）を使用してスマート カード ログイン証明書またはドメイン コントローラ証明書を発行する場合は、Active Directory で中間証明書を中間証明機関グループ ポリシーに追加する必要があります。

手順

- 1 Active Directory サーバで、Group Policy Management プラグインに移動します。

AD バージョン	ナビゲーションパス
Windows 2003	<ol style="list-style-type: none"> a [スタート] - [すべてのプログラム] - [管理ツール] - [Active Directory ユーザーとコンピュータ] の順に選択します。 b ドメインを右クリックして、[プロパティ] をクリックします。 c [グループ ポリシ] タブで、[開く] をクリックして Group Policy Management プラグインを開きます。 d [既定のドメイン ポリシー] を右クリックし、[編集] をクリックします。
Windows 2008	<ol style="list-style-type: none"> a [スタート] - [管理ツール] - [グループ ポリシーの管理] の順に選択します。 b ドメインを展開し、[デフォルト ドメイン ポリシー] を右クリックして、[編集] をクリックします。

- 2 [コンピュータの構成] セクションを展開し、[Windows Settings\Security Settings\Public Key] のポリシーを開きます。
- 3 [中間証明機関] を右クリックして、[インポート] を選択します。
- 4 ウィザードの指示に従って中間証明書（intermediateCA.cer など）をインポートし、[OK] をクリックします。
- 5 [グループ ポリシー] ウィンドウを閉じます。

ドメイン内のすべてのシステムの中間証明機関ストアに、中間証明書がコピーされます。

スマート カード認証の構成の検証

スマート カード認証を初めて設定したとき、またはスマート カード認証が正しく動作しないときは、スマート カード認証の構成を検証する必要があります。

手順

- ◆ 各クライアント システムに、スマート カード ミドルウェア、スマート カードとその有効な証明書、およびスマート カード リーダがあることを確認します。エンド ユーザーについては、Horizon Client を所有しているかを確認します。

スマート カードのソフトウェアとハードウェアの構成方法については、スマート カード ベンダから提供されているマニュアルを参照してください。

- ◆ 各クライアント システムで、[スタート] - [設定] - [コントロール パネル] - [インターネット オプション] - [コンテンツ] - [証明書] - [個人] を選択し、スマート カード認証に証明書が使用できることを確認します。

ユーザーまたは管理者がスマート カード リーダにスマート カードを差し込むと、Windows によって証明書がスマート カードからユーザーのコンピュータにコピーされます。クライアント システム上のアプリケーション（Horizon Client を含む）は、これらの証明書を使用できます。

- ◆ View 接続サーバまたはセキュリティ サーバ ホストの `locked.properties` ファイルで、`useCertAuth` プロパティが **true** に設定されていて、スペルが正しいことを確認します。

`locked.properties` ファイルは `install_directory\VMware\VMware View\Server\sslgateway\conf` にあります。`useCertAuth` プロパティのスペルを `userCertAuth` と誤ることがよくあります。

- ◆ View 接続サーバ インスタンスでスマート カード認証を構成した場合は、View Administrator でスマート カード認証の設定を確認します。

a [View 構成] - [サーバ] を選択します。

b [接続サーバ] タブで、View 接続サーバ インスタンスを選択して [編集] をクリックします。

c ユーザーのスマート カード認証を構成した場合は、[認証] タブで、[ユーザー用スマート カード認証] が [オプション] または [必須] に設定されていることを確認します。

d 管理者のスマート カード認証を構成した場合は、[認証] タブで、[管理者用スマート カード認証] が [オプション] または [必須] に設定されていることを確認します。

スマート カードの設定に対する変更を反映するには、View 接続サーバ サービスを再起動する必要があります。

- ◆ スマート カード ユーザーが属しているドメインが、ルート証明書が発行されたドメインとは異なる場合は、ユーザーの UPN が、信頼された CA のルート証明書に含まれる SAN に設定されていることを確認します。

a 証明書のプロパティを表示して、信頼された CA のルート証明書に含まれる SAN を調べます。

b Active Directory サーバで、[スタート] - [管理ツール] - [Active Directory ユーザーおよびコンピュータ] を選択します。

c [ユーザー] フォルダでユーザーを右クリックし、[プロパティ] を選択します。

[アカウント] タブの [ユーザー ログオン名] テキスト ボックスに、UPN が表示されます。

- ◆ スマート カード ユーザーが PCoIP 表示プロトコルまたは VMware Blast 表示プロトコルを選択して、シングルセッション デスクトップに接続する場合は、Smartcard リダイレクトという名前の View Agent または Horizon Agent コンポーネントが単一ユーザー マシンにインストールされていることを確認します。スマート カード機能を使用すると、ユーザーはスマート カードを使用してシングルセッション デスクトップにログインできます。リモート デスクトップ サービス ロールがインストールされた RDS ホストでは、スマート カード機能が自動的にサポートされるため、この機能をインストールする必要はありません。

- ◆ View 接続サーバまたはセキュリティ サーバ ホストの `ドライブ:\Documents and Settings\All Users\Application Data\VMware\VDM\logs` にあるログ ファイルで、スマートカード認証が有効であることを示すメッセージを確認します。

スマート カードでの証明書失効チェックの使用

証明書失効チェックを構成すると、失効したユーザー証明書を持つユーザーがスマート カードを使用して認証されるのを回避できます。証明書は、ユーザーが組織を離れたとき、スマート カードを紛失したとき、別の部門に異動したときなどに失効します。

View は、証明書失効リスト (CRL) および Online Certificate Status Protocol (OCSP) による証明書失効チェックをサポートします。CRL は、証明書を発行した CA によって公開される、失効した証明書のリストです。OCSP は、X.509 証明書の失効ステータスを取得するために使用される証明書検証プロトコルです。

証明書失効チェックは View 接続サーバ インスタンスまたはセキュリティ サーバ上で構成できます。View 接続サーバ インスタンスがセキュリティ サーバと対になっている場合は、セキュリティ サーバ上で証明書失効チェックを構成します。View 接続サーバまたはセキュリティ サーバ ホストから CA にアクセスできる必要があります。

同じ View 接続サーバ インスタンスまたはセキュリティ サーバ上で CRL と OCSP の両方を構成できます。両方のタイプの証明書失効チェックを構成すると、View は最初に OCSP の使用を試行し、OCSP に失敗すると CRL にフォールバックします。CRL が失敗した場合は OCSP にフォールバックしません。

■ CRL チェックを使用したログイン

CRL チェックを構成すると、View によって CRL が構築されて読み取られ、ユーザー証明書の失効ステータスが判別されます。

■ OCSP による証明書失効チェックを使用したログイン

OCSP による証明書失効チェックを構成すると、特定のユーザー証明書の失効ステータスの判別を求める要求が View から OCSP レスポンダに送信されます。View では、OCSP 署名証明書を使用して、OCSP レスポンダから受信した応答が本物であることを確認します。

■ CRL チェックの構成

CRL チェックを構成すると、View によって CRL が読み取られ、スマート カードのユーザー証明書の失効ステータスが判別されます。

■ OCSP による証明書失効チェックの構成

OCSP による証明書失効チェックを構成すると、スマート カードにあるユーザー証明書の失効ステータスの判別を求める検証要求が View から OCSP レスポンダに送信されます。

■ スマート カードでの証明書失効チェックのプロパティ

locked.properties ファイル内の値を設定して、スマート カードでの証明書失効チェックを有効化および構成します。

CRL チェックを使用したログイン

CRL チェックを構成すると、View によって CRL が構築されて読み取られ、ユーザー証明書の失効ステータスが判別されます。

証明書が失効していて、スマート カード認証がオプションになっている場合は、[Enter your user name and password (ユーザー名とパスワードを入力してください)] ダイアログ ボックスが表示され、ユーザーは認証のためにパスワードを入力する必要があります。スマート カード認証が必須の場合は、エラー メッセージが表示され、ユーザーの認証が許可されません。View が CRL を読み取ることができない場合にも、同じイベントが発生します。

OCSP による証明書失効チェックを使用したログイン

OCSP による証明書失効チェックを構成すると、特定のユーザー証明書の失効ステータスの判別を求める要求が View から OCSP レスポンダに送信されます。View では、OCSP 署名証明書を使用して、OCSP レスポンダから受信した応答が本物であることを確認します。

ユーザー証明書が失効していて、スマート カード認証がオプションになっている場合は、[Enter your user name and password (ユーザー名とパスワードを入力してください)] ダイアログ ボックスが表示され、ユーザーは認証のためにパスワードを入力する必要があります。スマート カード認証が必須の場合は、エラー メッセージが表示され、ユーザーの認証が許可されません。

View は、OCSP レスポンドからの応答がない場合、または応答が無効な場合、CRL チェックにフォールバックします。

CRL チェックの構成

CRL チェックを構成すると、View によって CRL が読み取られ、スマート カードのユーザー証明書の失効ステータスが判別されます。

前提条件

CRL チェックに使用される `locked.properties` ファイルのプロパティを理解しておきます。[スマート カードでの証明書失効チェックのプロパティ](#)を参照してください。

手順

- 1 View 接続サーバ ホストまたはセキュリティ サーバ ホスト上で、SSL ゲートウェイ構成フォルダ内の `locked.properties` ファイルを作成または編集します。

例: `install_directory\¥¥View¥¥¥¥.properties`

- 2 `locked.properties` ファイルに `enableRevocationChecking` および `crlLocation` プロパティを追加します。
 - a `enableRevocationChecking` に **true** を設定して、スマート カードでの証明書失効チェックを有効にします。
 - b `crlLocation` に CRL の場所を設定します。この値には、URL またはファイル パスを指定できます。
- 3 変更を反映するため、View 接続サーバ サービスまたはセキュリティ サーバ サービスを再起動してください。

例: `locked.properties` ファイル

例に示すファイルでは、スマート カード認証とスマート カードでの証明書失効チェックが有効になり、CRL チェックが構成され、CRL の場所の URL が指定されます。

```
trustKeyfile=lonqa.key
trustStoretype=jks
useCertAuth=true
enableRevocationChecking=true
crlLocation=http://root.ocsp.net/certEnroll/ocsp-ROOT_CA.crl
```

OCSP による証明書失効チェックの構成

OCSP による証明書失効チェックを構成すると、スマート カードにあるユーザー証明書の失効ステータスの判別を求める検証要求が View から OCSP レスポンドに送信されます。

前提条件

OCSP による証明書失効チェックに使用される `locked.properties` ファイルのプロパティを理解しておきます。[スマート カードでの証明書失効チェックのプロパティ](#)を参照してください。

手順

- 1 View 接続サーバ ホストまたはセキュリティ サーバ ホスト上で、SSL ゲートウェイ 構成フォルダ内の `locked.properties` ファイルを作成または編集します。

例: `install_directory¥¥View¥¥¥¥.properties`

- 2 `locked.properties` ファイルに `enableRevocationChecking`、`enableOCSP`、`ocspURL`、`ocspSigningCert` プロパティを追加します。
 - a `enableRevocationChecking` に **true** を設定して、スマート カードでの証明書失効チェックを有効にします。
 - b `enableOCSP` に **true** を設定して、OCSP による証明書失効チェックを有効にします。
 - c `ocspURL` に OCSP レスポンダの URL を設定します。
 - d `ocspSigningCert` に OCSP レスポンダの署名証明書を含むファイルの場所を設定します。
- 3 変更を反映するため、View 接続サーバ サービスまたはセキュリティ サーバ サービスを再起動してください。

例: `locked.properties` ファイル

例に示すファイルでは、スマート カード認証およびスマート カードでの証明書失効チェックが有効になり、CRL と OCSP の両方の証明書失効チェックが構成され、OCSP レスポンダの場所が指定され、OCSP 署名証明書を含むファイルが特定されます。

```
trustKeyfile=lonqa.key
trustStoretype=jks
useCertAuth=true
enableRevocationChecking=true
enableOCSP=true
allowCertCRLs=true
ocspSigningCert=te-ca.signing.cer
ocspURL=http://te-ca.lonqa.int/ocsp
```

スマート カードでの証明書失効チェックのプロパティ

`locked.properties` ファイル内の値を設定して、スマート カードでの証明書失効チェックを有効化および構成します。

表 3-1. スマート カードでの証明書失効チェックのプロパティ は、証明書取り消し確認用の `locked.properties` のファイル プロパティをリストします。

表 3-1. スマート カードでの証明書失効チェックのプロパティ

プロパティ	説明
enableRevocationChecking	<p>このプロパティを true に設定すると、証明書失効チェックが有効になります。</p> <p>このプロパティを false に設定すると、証明書失効チェックが無効になり、他のすべての証明書失効チェック プロパティが無視されます。</p> <p>デフォルト値は false です。</p>
crlLocation	<p>CRL の場所を指定します。URL またはファイル パスを指定できます。</p> <p>URL を指定しない場合、または指定した URL が無効な場合に、allowCertCRLs が true に設定されているか、または指定されていないと、View はユーザー証明書の CRL のリストを使用します。</p> <p>View が CRL にアクセスできない場合は、CRL チェックが失敗します。</p>
allowCertCRLs	<p>このプロパティを true に設定すると、View はユーザー証明書から CRL のリストを抽出します。</p> <p>デフォルト値は true です。</p>
enableOCSP	<p>このプロパティを true に設定すると、OCSP による証明書失効チェックが有効になります。</p> <p>デフォルト値は false です。</p>
ocspURL	OCSP レスポンドの URL を指定します。
ocspResponderCert	OCSP レスポンドの署名証明書を含むファイルを指定します。View では、この証明書を使用して、OCSP レスポンドから受信した応答が本物であることを確認します。
ocspSendNonce	<p>このプロパティを true に設定すると、応答の繰り返しを回避するために OCSP 要求とともにノンスが送信されます。</p> <p>デフォルト値は false です。</p>
ocspCRLFailover	<p>このプロパティを true に設定すると、View は OCSP 証明書失効チェックが失敗した場合に CRL チェックを使用します。</p> <p>デフォルト値は true です。</p>

他のタイプのユーザー認証の設定

View は、ユーザーおよび管理者を認証および管理するために既存の Active Directory インフラストラクチャを利用します。また、スマート カードに加え、バイオメトリクス認証や、RSA SecurID、RADIUS などの 2 要素認証ソリューションなど他の形式の認証と View を統合して、リモート デスクトップおよびアプリケーション ユーザーを認証することもできます。

この章には、次のトピックが含まれています。

- [2 要素認証の使用](#)
- [SAML 認証の使用](#)
- [バイオメトリクス認証の構成](#)

2 要素認証の使用

ユーザーが RSA SecurID 認証または RADIUS (Remote Authentication Dial-In User Service) 認証を使用しなければならないように、View 接続サーバ インスタンスを構成できます。

- RADIUS サポートは、さまざまな代替 2 要素トークン ベースの認証オプションを提供します。
- View は、オープン標準拡張インターフェイスも提供して、サードパーティ ソリューション プロバイダが詳細認証拡張を View に統合できるようにします。

RSA SecurID や RADIUS などの 2 要素認証ソリューションは、個別のサーバにインストールされた認証マネージャと連携するため、View 接続サーバ ホストにアクセスできるようにこれらのサーバを構成する必要があります。たとえば RSA SecurID を使用する場合、認証マネージャは RSA Authentication Manager になります。RADIUS を使用する場合、認証マネージャは RADIUS サーバになります。

2 要素認証を使用するには、認証マネージャに登録されている RSA SecurID トークンなどのトークンがユーザーごとに必要です。2 要素認証トークンは、一定の間隔で認証コードを生成するハードウェアまたはソフトウェアです。多くの場合、認証には PIN と認証コードの両方に関する知識が必要です。

View 接続サーバ インスタンスが複数ある場合は、一部のインスタンスで 2 要素認証を構成し、他のインスタンスでは別のユーザー認証方法を構成することができます。たとえば、インターネットを介して企業ネットワークの外からリモート デスクトップとアプリケーションにアクセスするユーザーのみに 2 要素認証を構成できます。

View は RSA SecurID Ready プログラムによって認定されており、新規 PIN モード、次のトークン コード モード、RSA Authentication Manager、負荷分散など、SecurID のあらゆる機能をサポートしています。

■ 2 要素認証を用いたログイン

RSA SecurID 認証または RADIUS 認証が有効になっている View 接続サーバ インスタンスにユーザーが接続すると、Horizon Client に特別なログイン ダイアログ ボックスが表示されます。

■ View Administrator で 2 要素認証を有効にする

View Administrator で View 接続サーバの設定を変更して、View 接続サーバ インスタンスで RSA SecurID 認証または RADIUS 認証を有効にします。

■ RSA SecurID アクセス拒否のトラブルシューティング

Horizon Client が RSA SecurID 認証で接続すると、アクセスが拒否されます。

■ RADIUS アクセス拒否のトラブルシューティング

Horizon Client が RADIUS 2 要素認証で接続すると、アクセスが拒否されます。

2 要素認証を用いたログイン

RSA SecurID 認証または RADIUS 認証が有効になっている View 接続サーバ インスタンスにユーザーが接続すると、Horizon Client に特別なログイン ダイアログ ボックスが表示されます。

ユーザーは、特別なログイン ダイアログ ボックスに RSA SecurID または RADIUS 認証ユーザー名とパスコードを入力します。通常、2 要素認証パスコードは PIN とそれに続くトークン コードで構成されます。

- RSA Authentication Manager で、ユーザーが RSA SecurID ユーザー名とパスコードを入力した後に、新しい RSA SecurID PIN の入力が必要な場合は、PIN ダイアログ ボックスが表示されます。新しい PIN を設定した後、ユーザーはログインする前に次のトークン コードを待つよう求められます。システムによって生成された PIN を使用するように RSA Authentication Manager が構成されている場合は、PIN を確認するためのダイアログ ボックスが表示されます。
- View にログインしているときは、RADIUS 認証は RSA SecurID とほとんど同じ働きをします。RADIUS サーバがアクセス チャレンジを発行すると、Horizon Client は次のトークン コードに対し RSA SecurID プロンプトに似たダイアログ ボックスを表示します。RADIUS チャレンジの現在のサポートは、テキスト入力に対するプロンプトの表示に限られます。RADIUS サーバから送信された、いかなるチャレンジ テキストも表示されません。複数の選択肢や画像の選択など、より複雑な形式のチャレンジは、現在サポートされていません。

ユーザーが認証情報を Horizon Client に入力すると、RADIUS サーバは SMS テキスト メッセージまたは電子メール、あるいは他のアウトオブバンド機能を使用してテキストを、コードと共にユーザーの携帯電話に送信できます。ユーザーはこのテキストおよびコードを Horizon Client に入力して、認証を完了することができます。

- RADIUS ベンダーによっては Active Directory からユーザーをインポートする機能が提供されるので、エンドユーザーは、RADIUS 認証ユーザー名およびパスコードを要求される前に、Active Directory 認証情報の入力を最初に要求される場合があります。

View Administrator で 2 要素認証を有効にする

View Administrator で View 接続サーバの設定を変更して、View 接続サーバ インスタンスで RSA SecurID 認証または RADIUS 認証を有効にします。

前提条件

RSA SecurID ソフトウェアや RADIUS ソフトウェアなどの 2 要素認証ソフトウェアを、認証マネージャのサーバにインストールして構成します。

- RSA SecurID 認証の場合、**sdconf.rec** ファイルを RSA Authentication Manager から View 接続サーバインスタンスにエクスポートします。RSA Authentication Manager のドキュメントを参照してください。
- RADIUS 認証の場合、ベンダーの構成に関するドキュメントに従ってください。RADIUS サーバのホスト名または IP アドレス、RADIUS 認証をリスンしているポート番号（通常は 1812）、認証タイプ（PAP、CHAP、MS-CHAPv1 または MS-CHAPv2）、および共有シークレットを書き留めておきます。これらの値を View Administrator に入力します。値をプライマリおよびセカンダリ RADIUS 認証子に入力できます。

手順

- 1 View Administrator で、[View 構成] - [サーバ] を選択します。
- 2 [接続サーバ] タブでサーバを選択し、[編集] をクリックします。
- 3 [認証] タブで、[高度な認証] セクションの [2 要素認証] ドロップダウン リストから、[RSA SecureID] または [RADIUS] を選択します。
- 4 RSA SecurID ユーザー名または RADIUS ユーザー名を Active Directory 内のユーザー名と強制的に一致させるには、[SecurID と Windows のユーザー名を強制的に一致させる] または [2 要素認証と Windows ユーザー名の一致の確認を強制します] を選択します。

このオプションを選択した場合、ユーザーは Active Directory 認証にも同じ RSA SecurID ユーザー名または RADIUS ユーザー名を使用する必要があります。このオプションを選択しない場合は、名前が異なってもかまいません。

- 5 RSA SecurID の場合、[ファイルのアップロード] をクリックして **sdconf.rec** ファイルの場所を入力するか、[参照] をクリックしてファイルを検索します。

6 RADIUS 認証の場合、残りのフィールドを入力します。

- a 最初の RADIUS 認証が、トークン コードのアウトオブバンド伝送をトリガーする Windows 認証を使用し、このトークン コードが RADIUS のチャレンジの一部として使用される場合、[RADIUS と Windows 認証には同じユーザー名とパスワードを使用します] を選択します。

このチェックボックスを選択すると、RADIUS 認証で Windows のユーザー名およびパスワードを使用している場合、RADIUS 認証後にユーザーは Windows 認証情報の入力を求められません。ユーザーは RADIUS 認証後、Windows ユーザー名およびパスワードを再入力する必要はありません。

- b [認証子] ドロップダウン リストから、[新しい認証子の作成] を選択し、ページのすべての項目に入力します。します。

- RADIUS アカウンティングを有効にする必要がない限り、[アカウンティング ポート] は [0] に設定します。RADIUS サーバがアカウンティング データの収集をサポートする場合に限り、このポートをゼロ以外の数字に設定します。RADIUS サーバがアカウンティング メッセージをサポートせず、このポートをゼロ以外の数字に設定すると、メッセージが送信されて無視され、何度も再試行された結果、認証が遅延します。

アカウンティング データは、利用時間およびデータに基づいてユーザーに請求するために使用することができます。アカウンティング データは、統計目的および一般的なネットワーク監視にも使用することができます。

- レルムのプレフィックス文字列を指定すると、RADIUS サーバに送られるときに、その文字列がユーザー名の先頭に配置されます。たとえば、Horizon Client に入力されたユーザー名が **jdoe** で、レルムのプレフィックス **DOMAIN-A** が指定された場合、ユーザー名 **DOMAIN-A\jdoe** が RADIUS サーバに送信されます。同様に、レルムのサフィックスまたはポストフィックスに文字列 **@mycorp.com** を使用する場合、ユーザー名 **jdoe@mycorp.com** が RADIUS サーバに送信されます。

7 [OK] をクリックして変更を保存します。

View 接続サーバサービスの再起動は不要です。必要な構成ファイルが自動的に配布され、構成の設定がすぐに有効になります。

ユーザーが Horizon Client を開き、View 接続サーバへ認証する場合、2 要素認証が求められます。RADIUS 認証の場合、ログイン ダイアログ ボックスに、指定したトークンのラベルを含むテキスト プロンプトが表示されます。

RADIUS 認証設定への変更は、構成が変更された後で開始されるリモート デスクトップおよびアプリケーション セッションに影響を及ぼします。RADIUS 認証設定を変更しても、現在のセッションには影響ありません。

次のステップ

View 接続サーバ インスタンスの複製されたグループがあり、そこでも RADIUS 認証を設定する場合、既存の RADIUS 認証子の構成を再利用することができます。

RSA SecurID アクセス拒否のトラブルシューティング

Horizon Client が RSA SecurID 認証で接続すると、アクセスが拒否されます。

問題

RSA SecurID を使用した Horizon Client 接続で「アクセスが拒否されました」が表示され、RSA Authentication Manager Log Monitor にエラー「ノードの検証に失敗しました」が表示されます。

原因

RSA Agent ホスト ノードの秘密をリセットする必要があります。

解決方法

- 1 View Administrator で、[View 構成] - [サーバ] を選択します。
- 2 [接続サーバ] タブで View 接続サーバを選択し、[編集] をクリックします。
- 3 [認証] タブで [ノード シークレットをクリア] を選択します。
- 4 [OK] をクリックしてノードの秘密をクリアします。
- 5 RSA Authentication Manager を実行しているコンピュータで、[スタート] - [プログラム] - [RSA Security] - [RSA Authentication Manager ホスト モード] を選択します。
- 6 [エージェント ホスト] - [エージェント ホストの編集] を選択します。
- 7 リストから [View 接続サーバ] を選択し、[作成されたノードの秘密] チェック ボックスの選択を解除します。
編集するときは、毎回デフォルトで [作成されたノードの秘密] が選択されます。
- 8 [OK] をクリックします。

RADIUS アクセス拒否のトラブルシューティング

Horizon Client が RADIUS 2 要素認証で接続すると、アクセスが拒否されます。

問題

RADIUS 2 要素認証を使用して Horizon Client 接続を行うと、「アクセスが拒否されました」と表示されます。

原因

RADIUS は RADIUS サーバから応答を受け取ることができず、View がタイムアウトします。

次に、この状況を引き起こしやすい一般的な構成エラーを示します。

- View 接続サーバ インスタンスを RADIUS クライアントとして受け入れるように RADIUS サーバが構成されていない。RADIUS を使用する各 View 接続サーバ インスタンスは、RADIUS サーバでクライアントとして設定する必要があります。詳細は、RADIUS 2 要素認証製品のドキュメントを参照してください。
- View 接続サーバ インスタンス上と RADIUS サーバ上の共有シークレット値が一致していない。

SAML 認証の使用

Security Assertion Markup Language (SAML) は、さまざまなセキュリティ ドメイン間で認証情報および権限情報を記述および交換するための XML ベースの標準です。SAML は、ID プロバイダとサービス プロバイダ間において、SAML アサーションと呼ばれる XML ドキュメントでユーザーに関する情報の受け渡しを行います。

SAML 認証を使用して、View を VMware Workspace Portal、VMware Identity Manager、またはサードパーティ製ロード バランサ/ゲートウェイと統合できます。SSO が有効になっている場合、VMware Identity Manager またはサードパーティ製のデバイスにログインしたユーザーは、第 2 のログイン手順を介せずにリモート デスクトップやアプリケーションを起動できます。SAML 認証を使用して、VMware Access Point またはサードパーティ製のデバイスにスマート カード認証を実装することもできます。

Workspace Portal、VMware Identity Manager、またはサードパーティ製のデバイスに認証の責任を委任するには、View で SAML 認証子を作成する必要があります。SAML 認証子には、View と Workspace Portal、VMware Identity Manager、またはサードパーティ製のデバイス間での信頼とメタデータの交換が含まれます。SAML 認証子を View 接続サーバ インスタンスと関連付けます。

VMware Identity Manager 統合用の SAML 認証の使用

View と VMware Identity Manager (旧名は Workspace Portal) の統合では、SAML 2.0 標準を使用して、シングル サインオン (SSO) 機能に不可欠な相互信頼を確立します。SSO が有効になっている場合、Active Directory 認証情報を使用して VMware Identity Manager または Workspace Portal にログインしたユーザーは、第 2 のログイン手順を経ずにリモート デスクトップやアプリケーションを起動できます。

VMware Identity Manager と View が統合されている場合、ユーザーが VMware Identity Manager にログインしてデスクトップまたはアプリケーション アイコンをクリックするたびに、VMware Identity Manager は一意の SAML アーティファクトを生成します。VMware Identity Manager はこの SAML アーティファクトを使用して、Universal Resource Identifier (URI) を作成します。URI には、デスクトップ プールまたはアプリケーション プールが置かれている View 接続サーバ インスタンス、起動するデスクトップまたはアプリケーション、および SAML アーティファクトについての情報が含まれます。

VMware Identity Manager は SAML アーティファクトを Horizon クライアントに送信し、その後、View 接続サーバ インスタンスにアーティファクトを送信します。View 接続サーバ インスタンスは SAML アーティファクトを使用して、VMware Identity Manager から SAML アサーションを取得します。

View 接続サーバ インスタンスは SAML アサーションを受け取った後、アサーションを検証し、ユーザーのパスワードを復号化し、復号化されたパスワードを使用してデスクトップまたはアプリケーションを起動します。

VMware Identity Manager と View の統合の設定には、View の情報での VMware Identity Manager の構成、および VMware Identity Manager への認証責任を委任するための View の構成が含まれます。

VMware Identity Manager への認証責任を委任するには、View で SAML 認証を作成する必要があります。SAML 認証子には、View と VMware Identity Manager 間での信頼とメタデータの交換が含まれます。SAML 認証子を View 接続サーバ インスタンスと関連付けます。

注: VMware Identity Manager からデスクトップとアプリケーションへのアクセスを提供しようとしている場合、View Administrator のルート アクセス グループで Administrators ロールを持つユーザーとしてデスクトップ プールとアプリケーション プールを作成していることを確認します。ルート アクセス グループ以外で Administrators ロールをユーザーに付与すると、VMware Identity Manager は、View で構成する SAML 認証システムを認識せず、VMware Identity Manager でプールを構成できません。

View Administrator での SAML 認証子の構成

リモート デスクトップおよびアプリケーションを VMware Identity Manager から起動するか、サードパーティ製ロード バランサまたはゲートウェイを通じてリモート デスクトップおよびアプリケーションを接続するには、View

Administrator で SAML 認証子を作成する必要があります。SAML 認証子には、View とクライアントが接続するデバイス間での信頼とメタデータの交換が含まれます。

SAML 認証子を View 接続サーバ インスタンスと関連付けます。展開に複数の View 接続サーバ インスタンスが含まれる場合は、各インスタンスに SAML 認証子を関連付ける必要があります。

1 つの静的認証子と複数の動的認証子を一度にライブにすることができます。vIDM (動的) および Access Point (静的) の認証子を構成して、これらをアクティブ状態に保持できます。これらの認証子のいずれかを通じて接続を行うことができます。

View 接続サーバに複数の SAML 認証子を構成して、すべての認証子を同時にアクティブにできます。ただし、View 接続サーバで構成される各 SAML 認証子のエンティティ ID は異なっている必要があります。

SAML 認証子は本質的に静的な事前定義済みメタデータであるため、ダッシュボードでのステータスは常に緑色です。ステータスが赤色と緑色の間で切り替わるのは、動的認証子のみです。

VMware Access Point アプライアンスの SAML 認証子の構成については、『Access Point をデプロイして構成する』を参照してください。

前提条件

- Workspace Portal、VMware Identity Manager またはサードパーティ製のゲートウェイまたはロード バランサがインストールされて構成されていることを確認します。該当製品のインストール ガイドを参照してください。
- 接続サーバ ホストに、SAML サーバ証明書用の CA が署名したルート証明書がインストールされていることを確認します。VMware では、自己署名の証明書を使用するように SAML 認証子を構成することは推奨されません。証明書認証の詳細については、『View のインストール』を参照してください。
- Workspace Portal サーバ、VMware Identity Manager サーバ、または外部に接しているロード バランサの FQDN または IP アドレスを書き留めます。
- Workspace Portal または VMware Identity Manager を使用している場合、コネクタ Web インターフェ이스の URL を書き留めます。
- SAML メタデータを生成して静的認証子を作成する必要がある Access Point またはサードパーティ製アプライアンスの認証子を作成する場合、デバイスで SAML メタデータを生成する手順を実行し、そのメタデータをコピーします。

手順

- 1 View Administrator で、[構成 > サーバ] を選択します。
- 2 [接続サーバ] タブで、SAML 認証子を関連付けるサーバ インスタンスを選択して [編集] をクリックします。

- 3 [認証] タブで、[VMware Horizon (SAML 2.0 認証子) への認証の委任] ドロップダウン メニューの設定を選択して、SAML 認証子を有効または無効にします。

オプション	説明
無効	SAML 認証は無効です。リモート デスクトップとアプリケーションは、Horizon Client からのみ起動できます。
許可	SAML 認証は有効です。リモート デスクトップとアプリケーションは、Horizon Client と VMware Identity Manager の両方またはサードパーティ製デバイスから起動できます。
必須	SAML 認証は有効です。リモート デスクトップとアプリケーションは、VMware Identity Manager またはサードパーティ製デバイスからのみ起動できます。デスクトップまたはアプリケーションを、Horizon Client から手動で起動できません。

要件に応じて、デプロイ内の各 View 接続サーバインスタンスを異なる SAML 認証設定で構成できます。

- 4 [SAML 認証子の管理] をクリックし、[追加] をクリックします。
- 5 [SAML 2.0 認証子を追加] ダイアログ ボックスで SAML 認証子を構成します。

オプション	説明
タイプ	Access Point またはサードパーティ製デバイスの場合、[静的] を選択します。VMware Identity Manager の場合、[動的] を選択します。動的認証子の場合、メタデータ URL および管理 URL を指定できます。静的認証子の場合、Access Point またはサードパーティ製デバイスでメタデータを生成し、メタデータをコピーして [SAML メタデータ] テキスト ボックスに貼り付けます。
ラベル	SAML 認証子を識別する一意の名前。
説明	SAML 認証子の簡単な説明。この値はオプションです。
メタデータ URL	(動的認証子の場合) SAML ID プロバイダと View 接続サーバインスタンス間で SAML 情報を交換するために必要な情報すべてを取得するための URL。URL <code>https://<YOUR HORIZON SERVER NAME>/SAAS/API/1.0/GET/metadata/idp.xml</code> で、[<YOUR HORIZON SERVER NAME>] をクリックして VMware Identity Manager サーバまたは外部接続ロード バランサ (サードパーティ製デバイス) の FQDN または IP アドレスに置換します。
管理 URL	(動的認証子の場合) SAML ID プロバイダの管理コンソールにアクセスするための URL。VMware Identity Manager の場合、この URL は VMware Identity Manager コネクタ Web インターフェイスを参照している必要があります。この値はオプションです。
SAML メタデータ	(静的認証子の場合) Access Point またはサードパーティ製デバイスから生成およびコピーしたメタデータ テキスト。
接続サーバに有効	認証子を有効にするには、このチェック ボックスをオンにします。複数の認証子を有効にできます。有効になっている認証子のみがリストに表示されます。

- 6 [OK] をクリックして SAML 認証子の構成を保存します。

有効な情報を指定した場合、自己署名の証明書を受け入れるか(推奨されません)、View および VMware Identity Manager またはサードパーティ製デバイスの信頼できる証明書を使用する必要があります。

[SAML 認証子の管理] ダイアログ ボックスには、新しく作成された認証子が表示されます。

- View Administrator ダッシュボードの [システムの健全性] セクションで、[その他のコンポーネント] - [SAML 2.0 認証子] を選択し、追加した SAML 認証子を選択して詳細を確認します。

構成に成功した場合、認証子の健全性は緑色です。証明書が信頼されていない場合、VMware Identity Manager を利用できない場合、またはメタデータ URL が無効な場合、認証子の健全性が赤色で表示されることがあります。証明書が信頼されていない場合は、[検証] をクリックして証明書を検証してから受け入れることができます。

次のステップ

View 接続サーバのメタデータの有効期間を延長して、リモート セッションが 24 時間経過後に終了されないようにします。 [View 接続サーバでのサービス プロバイダ メタデータの有効期間の変更](#) を参照してください。

View 接続サーバでのサービス プロバイダ メタデータの有効期間の変更

有効期間を変更しないと、View 接続サーバは 24 時間後に Access Point や他社の ID プロバイダなどの SAML 認証子から SAML アサーションを受け入れるのを停止し、メタデータの交換を繰り返す必要があります。

この手順を使用して、View 接続サーバが ID プロバイダから SAML アサーションを受け入れるのを停止するまでの日数を指定します。この日数は、現在の有効期間が切れるときに使用されます。たとえば、現在の有効期間が 1 日の場合に 90 日を指定すると、1 日経過後に View 接続サーバは有効期間が 90 日間のメタデータを生成します。

前提条件

お使いのバージョンの Windows オペレーティング システムでの ADSI Edit ユーティリティの使用方法については、Microsoft TechNet Web サイトを参照してください。

手順

- View 接続サーバ ホスト上で ADSI Edit ユーティリティを起動します。
- コンソール ツリーで、[接続] を選択します。
- [識別名または命名規則を選択または入力] テキスト ボックスに、識別名「**DC=vdi, DC=vmware, DC=int**」を入力します。
- [コンピュータ] ペインで、**localhost:389** を選択または入力するか、View 接続サーバ ホストの完全修飾ドメイン名 (FQDN) を入力し、続いてポート 389 を入力します。

例: **localhost:389** または **mycomputer.example.com:389**

- [ADSI Edit] ツリーを展開し、[OU=Properties] を展開して [OU=Global] を選択し、右ペインで [CN=Common] をダブルクリックします。
- [プロパティ] ダイアログ ボックスで、[pae-NameValuePair] 属性を編集して次の値を追加します。

```
cs-samlencryptionkeyvaliditydays=number-of-days
cs-samlsigningkeyvaliditydays=number-of-days
```

この例で、*number-of-days* はリモート View 接続サーバが SAML アサーションを受け入れるのを停止するまでに経過できる日数です。この期間を過ぎると、SAML メタデータを交換するプロセスを繰り返す必要があります。

View 接続サーバをサービス プロバイダとして使用可能にするための SAML メタデータの生成

使用する ID プロバイダに SAML 認証子を作成して有効にすると、View 接続サーバ メタデータの生成が必要になる場合があります。このメタデータは、ID プロバイダである Access Point アプライアンスまたはサードパーティ製ロード バランサでサービス プロバイダを作成するために使用します。

前提条件

Access Point またはサードパーティ製ロード バランサ/ゲートウェイ ID プロバイダの SAML 認証子を作成済みであることを確認します。View Administrator ダッシュボードの [システムの健全性] セクションで、[その他のコンポーネント] - [SAML 2.0 認証子] を選択し、追加した SAML 認証子を選択して詳細を確認します。

手順

- 1 新規のブラウザ タブを開き、View 接続サーバの SAML メタデータを取得するための URL を入力します。

`https://connection-server.example.com/SAML/metadata/sp.xml`

この例で、`connection-server.example.com` は View 接続サーバ ホストの完全修飾ドメイン名です。

このページには、View 接続サーバからの SAML メタデータが表示されます。

- 2 [別名で保存] コマンドを使用して Web ページを XML ファイルに保存します。

たとえば、ページを `connection-server-metadata.xml` という名前のファイルに保存することもできます。このファイルの内容は次のテキストで始まります。

```
<md:EntityDescriptor xmlns:md="urn:oasis:names:tc:SAML:2.0:metadata" ...
```

次のステップ

ID プロバイダで適切な手順を使用して、View 接続サーバ SAML メタデータ内にコピーします。Access Point またはサードパーティ製ロード バランサ/ゲートウェイのドキュメントを参照してください。

複数の動的 SAML 認証子の応答時間に関する注意事項

View 接続サーバ インスタンスで SAML 2.0 認証をオプションまたは必須として構成し、複数の動的 SAML 認証子を View 接続サーバ インスタンスに関連付けている場合に、動的 SAML 認証子のいずれかに到達できなくなると、他の動的 SAML 認証子からリモート デスクトップを起動するための応答時間が長くなります。

他の動的 SAML 認証子でリモート デスクトップを起動するための応答時間を短縮するには、View Administrator を使用して、到達できない動的 SAML 認証子を無効にします。SAML 認証子を無効にする方法については、[View Administrator での SAML 認証子の構成](#)を参照してください。

バイオメトリクス認証の構成

バイオメトリクス認証は、LDAP データベースで `pae-ClientConfig` 属性を編集することで構成できます。

前提条件

お使いのバージョンの Windows サーバでの ADSI Edit ユーティリティの使用方法については、Microsoft TechNet Web サイトを参照してください。

手順

- 1 View 接続サーバ ホスト上で ADSI Edit ユーティリティを起動します。
- 2 [接続設定] ダイアログ ボックスで、[DC=vdi,DC=vmware,DC=int] を選択するか接続します。
- 3 [コンピュータ] ペインで、**localhost:389** を選択または入力するか、View 接続サーバ ホストの完全修飾ドメイン名 (FQDN) を入力し、続いてポート 389 を入力します。

例 : **localhost:389** または **mycomputer.mydomain.com:389**

- 4 オブジェクトの [CN=Common, OU=Global, OU=Properties] で、[pae-ClientConfig] 属性を編集して値 [BioMetricsTimeout=<integer>] を追加します。

次の BioMetricsTimeout 値が有効です。

BioMetricsTimeout 値	説明
0	バイオメトリクス認証はサポートされません。これはデフォルトです。
-1	バイオメトリクス認証は時間制限なしでサポートされます。
任意の正の整数	バイオメトリクス認証はサポートされ、指定した分数の間、使用することができます。

新しい設定はただちに有効になります。View 接続サーバ サービスまたはクライアント デバイスを再起動する必要はありません。

認証情報を必要としないユーザー認証

ユーザーは、クライアント デバイスまたは VMware Identity Manager にログインすれば、Active Directory 認証情報を求められることなくリモート アプリケーションまたはデスクトップに接続できます。

Windows クライアントの場合、管理者は、ユーザーが Active Directory (AD) 認証情報を使用して Windows クライアントにログインすれば、追加の認証情報を入力せずに Horizon Server にログインできるようにセットアップを構成できます。

モバイルおよび Mac クライアントの場合、管理者は、認証情報を保存するように Horizon Server を構成できます。この機能を使用すると、ユーザーはモバイルまたは Mac クライアントに SSO（シングル サインオン）の AD 認証情報を一度入力すれば、この認証情報を記憶しておく必要がなくなります。

VMware Identity Manager の場合、管理者は、AD 認証以外の方法を使用して認証を受けたユーザーが、AD 認証情報を求められることなくリモート デスクトップまたはアプリケーションにログインできるように True SSO を構成できます。

この章には、次のトピックが含まれています。

- [Windows ベースの Horizon Client で使用できる現在のユーザーとしてログイン機能を使用](#)
- [モバイルおよび Mac 版 Horizon Client での認証情報の保存](#)
- [True SSO の設定](#)

Windows ベースの Horizon Client で使用できる現在のユーザーとしてログイン機能を使用

Windows の Horizon Client ユーザーが [現在のユーザーとしてログイン] チェックボックスを選択すると、クライアント システムへのログイン時に入力した認証情報が、View 接続サーバ インスタンスおよびリモート デスクトップへの認証に使用されます。追加のユーザー認証は必要ありません。

この機能をサポートするため、ユーザー認証情報は View 接続サーバ インスタンスとクライアント システムの両方に格納されます。

- View 接続サーバ インスタンスで、ユーザー認証情報は、ユーザー名、ドメイン、オプションの UPN とともにユーザー セッションに暗号化されて保存されます。認証情報は、認証が行われると追加され、セッション オブジェクトが破棄されると削除されます。セッション オブジェクトは、ユーザーがログアウトするか、セッションがタイムアウトになるか、認証が失敗した場合に破棄されます。セッション オブジェクトは揮発性メモリに保存され、View LDAP またはディスク ファイルには保存されません。

- クライアント システムで、ユーザー認証情報は暗号化され、Horizon Client のコンポーネントである Authentication Package のテーブルに保存されます。認証情報は、ユーザーのログイン時にテーブルに追加され、ユーザーのログアウト時にテーブルから削除されます。テーブルは揮発性メモリに存在します。

管理者は、Horizon Client のグループ ポリシー設定を使用して、[現在のユーザーとしてログイン] チェック ボックスを使用可能にするかどうかを制御し、そのデフォルト値を設定することができます。さらに、管理者はグループ ポリシーを使用して、ユーザーが Horizon Client の [現在のユーザーとしてログイン] チェック ボックスをオンにした場合に渡されるユーザー ID と認証情報を受け入れる View 接続サーバ インスタンスを指定することもできます。

「現在のユーザーとしてログイン」機能には次の制限と要件があります。

- View 接続サーバ インスタンスでスマート カード認証が [必須] に設定されている場合、View 接続サーバ インスタンスに接続する際に [現在のユーザーとしてログイン] チェック ボックスを選択したユーザーの認証が失敗します。これらのユーザーは、View 接続サーバにログインする際にスマート カードと PIN を使用して再認証する必要があります。
- クライアントがログインするシステムの時間と、View 接続サーバ ホストの時間が同期している必要があります。
- クライアント システムで、デフォルトの [ネットワーク経由でコンピュータへアクセス] ユーザー権限割り当てを変更する場合は、VMware ナレッジベース (KB) の記事 1025691 の説明に従って変更する必要があります。
- クライアント マシンは、会社の Active Directory サーバと通信できる必要があります。キャッシュされた認証情報は認証に使用されません。たとえば、ユーザーが社外のネットワークからクライアント マシンにログインすると、キャッシュされた認証情報が認証に使用されます。その後ユーザーが最初に VPN 接続を確立しないでセキュリティ サーバや View 接続サーバ インスタンスに接続しようとすると、認証情報の入力が必要で、現在のユーザーとしてログイン機能は機能しません。

モバイルおよび Mac 版 Horizon Client での認証情報の保存

管理者は、View 接続サーバを構成して、モバイルおよび Mac 版 Horizon Client を有効にして、ユーザーのユーザー名、パスワードおよびドメイン情報を記憶させることができます。

モバイルのデバイスの Horizon Client については、この機能により [パスワード保存] チェック ボックスがログイン ダイアログ ボックスに表示されます。Horizon Client for Mac の場合、この機能により [このパスワードを記憶する] チェック ボックスがログイン ダイアログ ボックスに表示されます。

ユーザーが認証情報の保存を選択すると、以後の接続時に Horizon Client のログイン フィールドに認証情報が追加されます。

この機能を有効にするには、View LDAP に値を設定して、クライアントの認証情報の保存時間を示す必要があります。Horizon Client for Mac のバージョン 4.1 以降でのみ、この機能はサポートされます。

注: Windows ベースの Horizon クライアントでは、現在のユーザーとしてログインする機能により、ユーザーに認証情報の入力を複数回求めることを回避できます。

Horizon Client の認証情報を保存するようにタイムアウト制限を構成

View LDAP の値を設定することにより、モバイル デバイスや Mac クライアント システムで、Horizon Client の認証情報の保存時間を示すタイムアウト制限を設定します。タイムアウト制限は分単位で設定します。View 接続サーバ

バインスタンス上で View LDAP を変更すると、レプリケートされたすべての View 接続サーバ インスタンスに変更内容が伝わります。

前提条件

お使いのバージョンの Windows オペレーティング システムでの ADSI Edit ユーティリティの使用方法については、Microsoft TechNet Web サイトを参照してください。

手順

- 1 View 接続サーバ ホスト上で ADSI Edit ユーティリティを起動します。
- 2 [接続設定] ダイアログ ボックスで、[DC=vdi,DC=vmware,DC=int] を選択するか接続します。
- 3 [コンピュータ] ペインで、**localhost:389** を選択または入力するか、View 接続サーバ ホストの完全修飾ドメイン名 (FQDN) を入力し、続いてポート 389 を入力します。

例: **localhost:389** または **mycomputer.mydomain.com:389**

- 4 オブジェクト [CN=Common, OU=Global, OU=Properties] で、[clientCredentialCacheTimeout] 属性の値を編集します。

clientCredentialCacheTimeout が設定されていない場合、または 0 に設定されている場合、この機能は無効です。この機能を有効にするには、認証情報を保持する時間 (分) を設定するか、値 [-1] を設定します。これは、タイムアウトがないことを示します。

View 接続サーバで、新しい設定がただちに有効になります。View 接続サーバ サービスまたはクライアント コンピュータを再起動する必要はありません。

True SSO の設定

True SSO (シングル サインオン) 機能を使用すると、ユーザーは、スマート カード認証や RSA SecurID または RADIUS 認証を使用して VMware Identity Manager にログインした後、リモート デスクトップまたはアプリケーションを使用するために、さらに Active Directory の認証情報を入力する必要がなくなります。

ユーザーが Active Directory 認証情報を使用して認証する場合は、True SSO 機能は必要ありませんが、この場合にも True SSO が使用されるように構成して、ユーザーが入力する Active Directory 認証情報が無視され、True SSO が使用されるようになります。

仮想デスクトップまたはリモート アプリケーションに接続する場合、ユーザーはネイティブ Horizon Client または HTML Access の使用を選択できます。

この機能には次の制限があります。

- この機能は、View Agent Direct Connection プラグインを使用して提供される仮想デスクトップでは動作しません。
- この機能は IPv4 環境でのみサポートされます。

以下は、True SSO の環境を設定するために実行する必要があるタスクの一覧です。

- 1 [True SSO のアーキテクチャの特定](#)
- 2 [エンタープライズ認証局の設定](#)

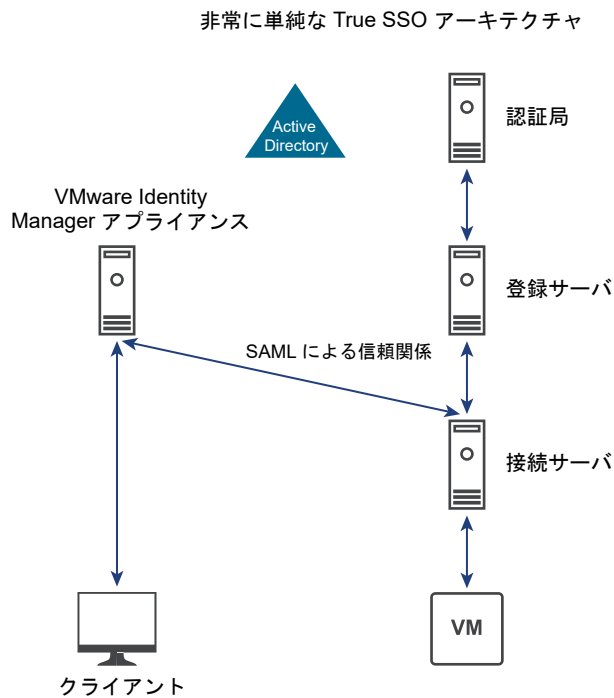
- 3 True SSO とともに使用する証明書テンプレートの作成
- 4 登録サーバのインストールおよび設定
- 5 登録サービス クライアント証明書のエクスポート
- 6 True SSO と連携するための SAML 認証の構成
- 7 True SSO のための View 接続サーバの構成

True SSO のアーキテクチャの特定

True SSO を使用するには、既存の認証局を使用するか認証局を追加して登録サーバを作成する必要があります。この 2 台のサーバの通信によって、パスワード不要の Windows ログオンを可能にする一時的な Horizon 仮想証明書が作成されます。True SSO は、1 つのドメイン、1 つのフォレストと複数ドメイン、および複数フォレストと複数ドメインのセットアップで使用できます。

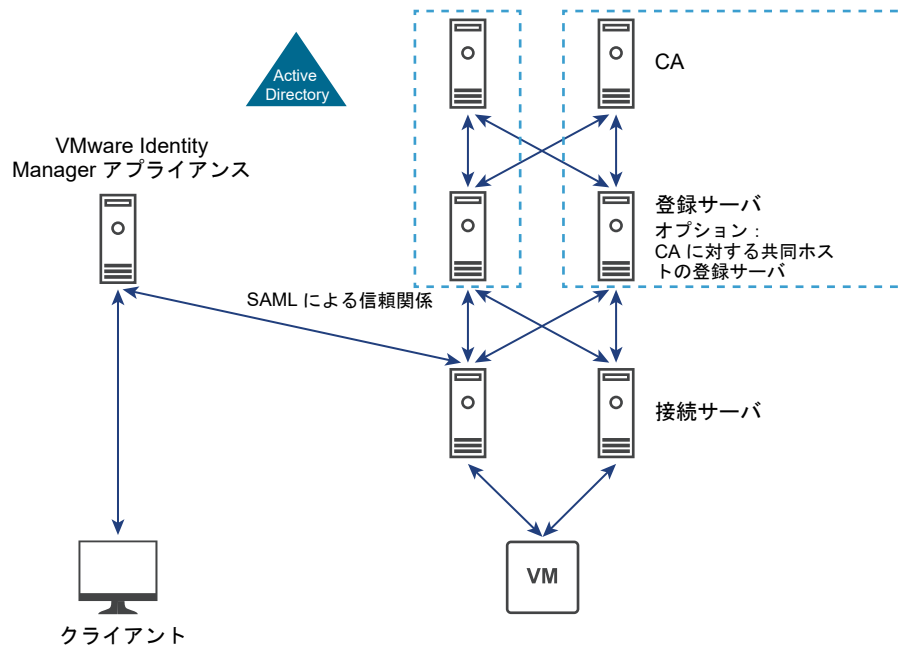
認証局 (CA) を 2 つ、登録サーバ (ES) を 2 台導入して、True SSO を使用することをお勧めします。次の例は、異なるアーキテクチャでの True SSO を示しています。

次の図は、単純な True SSO アーキテクチャを示しています。



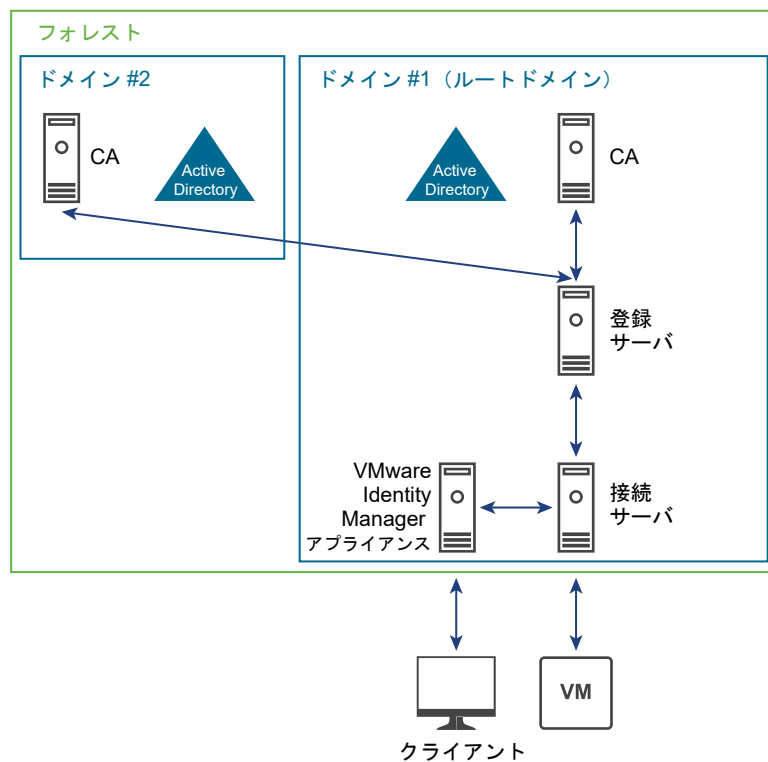
次の図は、単一ドメイン アーキテクチャでの True SSO を示しています。

HA、True SSO の典型的アーキテクチャ（単一ドメイン）

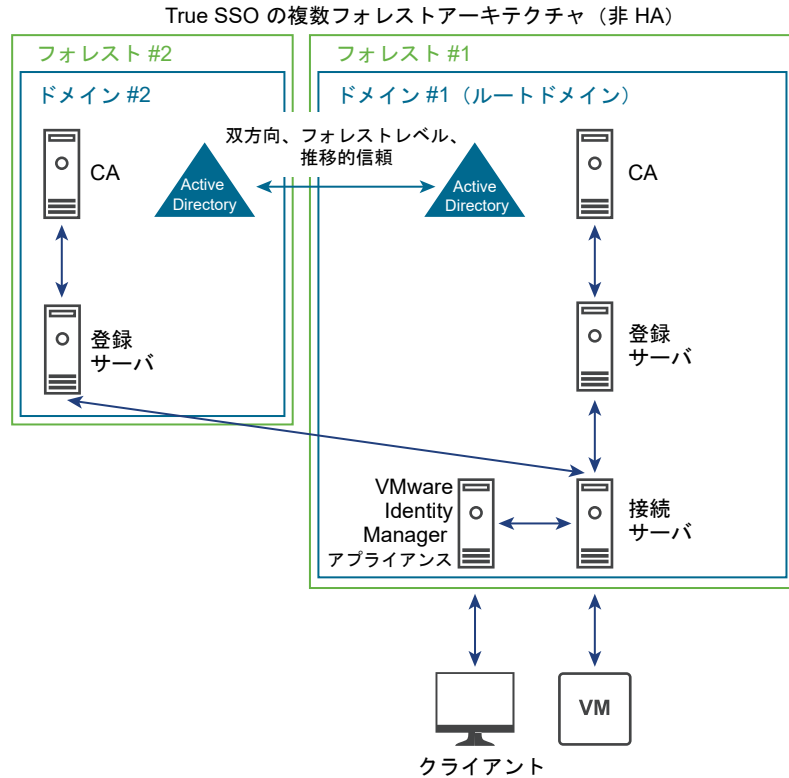


次の図は、複数ドメイン アーキテクチャを含む単一フォレストでの True SSO を示しています。

True SSO、単一フォレスト、複数ドメインのアーキテクチャ（非 HA）



次の図は、複数フォレストのアーキテクチャでの True SSO を示しています。



エンタープライズ認証局の設定

認証局をまだ設定していない場合、Active Directory Certificate Services (AD CS) ロールを Windows Server に追加し、Windows Server がエンタープライズ CA になるように構成する必要があります。

エンタープライズ CA をまだ設定していない場合、この手順に示される設定を使用していることを確認します。

エンタープライズ CA は少なくとも 1 つ必要です。VMware では、フェイルオーバーと負荷分散のために 2 つ用意することを推奨しています。True SSO 用に作成する登録サーバはエンタープライズ CA と通信します。複数のエンタープライズ CA を使用するように登録サーバを構成する場合、登録サーバは使用可能なエンタープライズ CA を交互に使用します。エンタープライズ CA をホストするマシンに登録サーバをインストールする場合、ローカル CA を優先して使用するように登録サーバを構成できます。最高のパフォーマンスを得るには、この構成をお勧めします。

この手順の一部には、読み取り専用証明書の処理の有効化が含まれます。デフォルトで、証明書の処理には、それぞれの証明書要求および発行される証明書のレコードの CA データベースへの格納が含まれています。大量の要求が継続すると、CA データベースの増加率が上昇し、ディスク容量を監視していない場合、使用可能なすべてのディスク容量が消費される可能性があります。読み取り専用証明書の処理を有効にすると、CA データベースの増加率およびデータベース管理タスクを行う頻度を削減することに役立ちます。

前提条件

- Windows Server 2008 R2 または Windows Server 2012 R2 の仮想マシンを作成します。
- 仮想マシンが Horizon 7 のデプロイのための Active Directory ドメインの一部であることを確認します。
- IPv4 環境を使用していることを確認します。この機能は、IPv6 環境では現在サポートされていません。

- システムに固定 IP アドレスがあることを確認します。

手順

- 1 仮想マシン オペレーティング システムに管理者としてログインし、Server Manager を開始します。
- 2 ロールを追加するための設定を選択します。

オペレーティング システム	選択
Windows Server 2012 R2	a [ロールと機能を追加] を選択します。 b [インストール タイプを選択] ページで、[ロールベースまたは機能ベースのインストール] を選択します。 c [ターゲット サーバを選択] ページで、サーバを選択します。
Windows Server 2008 R2	a ナビゲーション ツリーで [ロール] を選択します。 b [ロールを追加] をクリックして [ロールを追加] ウィザードを起動します。

- 3 [サーバーの役割の選択] ページで、[Active Directory 証明書サービス] を選択します。
- 4 [役割と機能の追加] ウィザードで、[機能の追加] をクリックし、[管理ツールを含める] チェック ボックスを選択されたままにします。
- 5 [機能を選択] ページで、デフォルトを受け入れます。
- 6 [役割サービスの選択] ページで、[証明機関] を選択します。
- 7 指示に従ってインストールを終了します。
- 8 インストールが完了したら、[インストールの進行状況] ページで [対象サーバーに Active Directory 証明書サービスを構成する] リンクをクリックし、[AD CS の構成] ウィザードを開きます。
- 9 [資格情報] ページで [次へ] をクリックし、次の表に示されているとおりに [AD CS の構成] ウィザードのページに入力します。

オプション	アクション
役割サービス	[証明機関] を選択し、[構成] ではなく [次へ] をクリックします。
セットアップの種類	[エンタープライズ CA] を選択します。
CA の種類	[ルート CA] または [下位 CA] を選択します。一部の企業では 2 階層 PKI 導入が好まれます。詳細については、 http://social.technet.microsoft.com/wiki/contents/articles/15037.ad-cs-step-by-step-guide-two-tier-pki-hierarchy-deployment.aspx を参照してください。
秘密キー	[新しい秘密キーを作成する] を選択します。
CA の暗号化	ハッシュ アルゴリズムには、[SHA1]、[SHA256]、[SHA384]、または [SHA512] を選択できます。キーの長さには、[1024]、[2048]、[3072]、または [4096] を選択できます。少なくとも、SHA256、キーの長さ 2048 を使用することをお勧めします。
CA 名	デフォルトを受け入れるか名前を変更します。
有効期間	デフォルトの 5 年間を受け入れます。
証明書データベース	デフォルトを受け入れます。

- 10 [確認] ページで [構成] をクリックし、ウィザードで構成の成功が報告されたら、ウィザードを閉じます。

- 11 コマンド プロンプトを開き、次のコマンドを入力して、読み取り専用証明書の処理で使用する CA を構成します。

```
certutil -setreg DBFlags +DBFLAGS_ENABLEVOLATILEREQUESTS
```

- 12 次のコマンドを入力して、CA のオフライン CRL（証明書失効リスト）のエラーを無視します。

```
certutil -setreg ca\CRLFlags +CRLF_REVCHECK_IGNORE_OFFLINE
```

True SSO が使用するルート証明書は通常オフラインであり、そのため失効チェックが失敗することが予想されるため、このフラグは必要です。

- 13 次のコマンドを入力してサービスを再起動します。

```
sc stop certsvc
sc start certsvc
```

次のステップ

証明書テンプレートを作成します。[True SSO とともに使用する証明書テンプレートの作成](#)を参照してください。

True SSO とともに使用する証明書テンプレートの作成

一時的な証明書の発行に使用する証明書テンプレートを作成し、このタイプの証明書を要求できるドメイン内のコンピュータを指定する必要があります。

複数の証明書テンプレートを作成できますが、常に使用されるように構成できるテンプレートは 1 つのみです。

前提条件

- この手順で説明するテンプレートの作成に使用するエンタープライズ CA があることを確認します。[エンタープライズ認証局の設定](#)を参照してください。
- スマート カード認証用に Active Directory を準備していることを確認します。詳細については、『View のインストール』を参照してください。
- 登録サーバのドメインおよびフォレストにセキュリティ グループを作成し、そのグループに登録サーバのコンピュータ アカウントを追加します。

手順

- 1 認証局に使用しているマシンで、オペレーティング システムに管理者としてログインし、[管理ツール] - [証明機関] に移動します。
- 2 左ペインのツリーを展開し、[証明書テンプレート] を右クリックし、[管理] を選択します。
- 3 [スマートカードによるログオン] テンプレートを右クリックし、[複製] を選択します。

4 以下のタブで次のように変更を加えます。

タブ	アクション
互換性タブ	<ul style="list-style-type: none"> ■ [認証局] には、[Windows Server 2008 R2] を選択します。 ■ [証明書の受信者] には、[Windows 7/Windows Server 2008 R2] を選択します。
全般タブ	<ul style="list-style-type: none"> ■ テンプレートの表示名を True SSO に変更します。 ■ 有効期間の長さを、一般的な営業日での時間、つまりユーザーのシステムへのログイン時間と想定される時間に変更します。 ユーザーがログオン中にネットワーク リソースへのアクセスを失わないように、有効期間をユーザー ドメインの Kerberos TGT 更新時間よりも長くする必要があります。 (チケットのデフォルトの最長有効期間は 10 時間です。デフォルトのドメイン ポリシーを検索するには、[コンピュータの構成] - [ポリシー] - [Windows の設定] - [セキュリティ設定] - [アカウント ポリシー] - [Kerberos ポリシー: チケットの最長有効期間] に移動します。) ■ 更新期間を 1 日に変更します。
要求処理タブ	<ul style="list-style-type: none"> ■ [目的] には、[署名とスマート カード ログオン] を選択します。 ■ [スマート カードの自動...] を選択します。
暗号化タブ	<ul style="list-style-type: none"> ■ [プロバイダーのカテゴリ] には、[キー格納プロバイダー] を選択します。 ■ [アルゴリズム名] には、[RSA] を選択します。
サーバタブ	<p>[CA データベース内に証明書および要求を保存しない] を選択します。</p> <p>重要: [発行される証明書に失効情報を含めない] を必ず選択解除してください (このボックスは 1 番目のボックスを選択すると選択されるため、選択解除 (クリア) する必要があります)。</p>
発行の要件タブ	<ul style="list-style-type: none"> ■ [次の数の認証署名] を選択し、このボックスに 1 と入力します。 ■ [ポリシーの種類] には、[アプリケーション ポリシー] を選択し、ポリシーを [証明書の要求エージェント] に設定します。 ■ [次の項目を再登録の要件とする] には、[既存の有効な証明書] を選択します。
セキュリティ タブ	<p>登録サーバのコンピュータ アカウント用に作成したセキュリティ グループには、前提条件で説明したように、読み取り、登録の権限を指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> a [追加] をクリックします。 b 証明書を登録できるコンピュータを指定します。 c これらのコンピュータについて、該当するチェック ボックスを選択し、各コンピュータに読み取り、登録の権限を指定します。

5 [新しいテンプレートのプロパティ] ダイアログ ボックスで、[OK] をクリックします。

6 [証明書テンプレート コンソール] ウィンドウを閉じます。

7 [証明書テンプレート] を右クリックし、[新規作成] - [発行する証明書テンプレート] を選択します。

注: この手順は、このテンプレートに基づいて証明書を発行するすべての認証局に必要です。

8 [証明書テンプレートの選択] ウィンドウで、作成したテンプレート ([True SSO テンプレート] など) を選択し、[OK] をクリックします。

9 [証明書テンプレートの選択] ウィンドウで、[登録エージェント (コンピュータ)] を選択し、[OK] をクリックします。

次のステップ

登録サービスを作成します。[登録サーバのインストールおよび設定](#)を参照してください。

登録サーバのインストールおよび設定

接続サーバ インストーラを実行し、[Horizon 7 登録サーバ] オプションを選択して、登録サーバをインストールします。登録サーバは、指定したユーザーの代わりに一時的な証明書を要求します。これらの一時的な証明書は、ユーザーに Active Directory 認証情報を求めないようにするために True SSO で認証に使用されるメカニズムです。

少なくとも 1 台の登録サーバをインストールして設定する必要があります。登録サーバは、View 接続サーバと同じホストにインストールできません。フェイルオーバーと負荷分散のために、2 台の登録サーバを用意することを推奨します。2 台の登録サーバがある場合、デフォルトで一方が優先され、もう一方がフェイルオーバーに使用されます。ただし、このデフォルトを変更して、証明書要求が接続サーバから両方の登録サーバに交互に送信されるようにすることができます。

エンタープライズ CA をホストするマシンに登録サーバをインストールする場合、ローカル CA を優先して使用するように登録サーバを構成できます。最高のパフォーマンスを得るために、ローカル CA を優先して使用する構成と、登録サーバの負荷分散を行う構成を組み合わせることを推奨します。このようにすると、証明書要求が到着したときに、接続サーバは代替登録サーバを使用し、各登録サーバはローカル CA を使用して要求に対応します。使用する構成設定については、[登録サーバの構成設定](#)および[接続サーバの構成設定](#)を参照してください。

前提条件

- メモリが 4GB 以上ある Windows Server 2008 R2 または Windows Server 2012 R2 仮想マシンを作成するか、エンタープライズ CA をホストする仮想マシンを使用します。ドメイン コントローラになっているマシンは使用しないでください。
- View 接続サーバ、View Composer、セキュリティ サーバ、Horizon Client、View Agent、Horizon Agent などのその他の View コンポーネントが仮想マシンにインストールされていないことを確認します。
- 仮想マシンが Horizon 7 のデプロイのための Active Directory ドメインの一部であることを確認します。
- IPv4 環境を使用していることを確認します。現在、この機能は IPv6 環境ではサポートされません。
- システムに固定 IP アドレスを設定することを強く推奨します。
- 管理者権限のあるドメイン ユーザーとしてオペレーティング システムにログインできることを確認できます。インストーラを実行するには、管理者としてログインする必要があります。

手順

- 1 登録サーバに使用するマシンで、証明書スナップインを MMC に追加します。
 - a MMC コンソールを開き、[ファイル] - [スナップインの追加と削除] を選択します。
 - b [利用できるスナップイン] で [証明書] を選択し、[追加] をクリックします。
 - c [証明書スナップイン] ウィンドウで、[コンピュータ アカウント] を選択し、[次へ] をクリックして [完了] をクリックします。
 - d [スナップインの追加と削除] ウィンドウで、[OK] をクリックします。

2 登録エージェント証明書を発行します。

- a 証明書コンソールで、コンソールのルート ツリーを展開し、[個人] フォルダを右クリックして [すべてのタスク] - [新しい証明書の要求] を選択します。
- b [証明書の登録] ウィザードで、[証明書の要求] ページが表示されるまでデフォルトを受け入れます。
- c [証明書の要求] ページで、[登録エージェント (コンピュータ)] チェック ボックスをオンにして、[登録] をクリックします。
- d 他のウィザード ページでデフォルトを受け入れ、最後のページで [完了] をクリックします。

MMC コンソールで、[個人] フォルダを展開し、左ペインで [証明書] を選択すると、新しい証明書が右ペインに表示されます。

3 登録サーバをインストールします。

- a VMware ダウンロード ページ (<https://my.vmware.com/web/vmware/downloads>) から、View 接続サーバ インストーラ ファイルをダウンロードします。

[Desktop & End-User Computing (デスクトップおよびエンドユーザー コンピューティング)] で VMware Horizon 7 のダウンロードを選択します。これには View 接続サーバ ファイルが含まれます。

インストーラのファイル名は、VMware-viewconnectionserver-x86_64-y.y.y-xxxxxx.exe です。xxxxxx は、ビルド番号であり、y.y.y はバージョン番号です。

- b インストーラ ファイルをダブルクリックしてウィザードを開始し、[インストール オプション] ページが表示されるまでプロンプトに従って進みます。
- c [インストール オプション] ページで [Horizon 7 登録サーバ] を選択し、[次へ] をクリックします。
- d プロンプトに従って、インストールを完了します。

登録サーバが機能するには、ポート 32111 (TCP) で外部からの接続を有効にする必要があります。インストール中に、インストーラはデフォルトでポートを開きます。

次のステップ

- エンタープライズ CA をホストするマシンに登録サーバをインストールした場合、ローカル CA を優先して使用するように登録サーバを構成します。[登録サーバの構成設定](#)を参照してください。
- 複数の登録サーバをインストールして設定する場合、登録サーバ間の負荷分散を有効化するように接続サーバを構成します。[接続サーバの構成設定](#)を参照してください。
- 接続サーバと登録サーバをペアにします。[登録サービス クライアント証明書のエクスポート](#)を参照してください。

登録サービス クライアント証明書のエクスポート

ペアリングを実行するため、MMC 証明書スナップインを使用して、クラスタ内の 1 台の接続サーバから自動生成された自己署名登録サービス クライアント証明書をエクスポートできます。接続サーバは登録サーバによって提供される登録サービスのクライアントであるため、この証明書はクライアント証明書と呼ばれます。

登録サービスは、Active Directory ユーザー向けの一時的な証明書の発行を登録サーバに求めるときに、VMware Horizon View 接続サーバを信頼する必要があります。このため、VMware Horizon View 接続サーバ クラスタまたはポッドは登録サーバとペアになっている必要があります。

登録サービス クライアント証明書は、Horizon 7 以降の接続サーバがインストールされて VMware Horizon View 接続サーバ サービスが開始されたときに、自動的に作成されます。証明書は View LDAP を介して、後でクラスタに追加される他の Horizon 7 接続サーバに配布されます。配布された証明書はコンピュータにある Windows 証明書ストアのカスタム コンテナ (VMware Horizon View Certificates\Certificates) に格納されます。

前提条件

Horizon 7 以降の接続サーバがあることを確認します。インストール手順については、View のインストールを参照してください。アップグレード手順については、View アップグレードを参照してください。

重要: 接続サーバで作成された自己生成証明書を使用する代わりに、独自の証明書を使用してペアリングを実行できます。そのためには、優先する証明書（および関連付けられたプライベート キー）を接続サーバ マシンにある Windows 証明書ストアのカスタム コンテナ (VMware Horizon View Certificates\Certificates) に配置します。次に、証明書のわかりやすい名前を **vdm.ec.new** に設定し、サーバを再起動する必要があります。クラスタ内の他のサーバは、LDAP からこの証明書を取得します。その後この手順を実行できます。

手順

- 1 クラスタ内のいずれかの接続サーバ マシンで、証明書スナップインを MMC に追加します。
 - a MMC コンソールを開き、[ファイル] - [スナップインの追加と削除] を選択します。
 - b [利用できるスナップイン] で [証明書] を選択し、[追加] をクリックします。
 - c [証明書スナップイン] ウィンドウで、[コンピュータ アカウント] を選択し、[次へ] をクリックして [完了] をクリックします。
 - d [スナップインの追加と削除] ウィンドウで、[OK] をクリックします。
- 2 MMC コンソールの左ペインで、[VMware Horizon View Certificates] フォルダを展開し、[Certificates] フォルダを選択します。
- 3 右ペインで、わかりやすい名前の [vdm.ec] 証明書ファイルを右クリックし、[すべてのタスク] - [エクスポート] を選択します。
- 4 証明書のエクスポート ウィザードでデフォルト設定（[いいえ、秘密キーをエクスポートしません] ラジオ ボタンは選択されたまま）を適用します。
- 5 ファイルに名前を付けるように求められたら、登録サービス クライアント証明書用の **EnrollClient** などのファイル名を入力し、プロンプトに従って証明書のエクスポートを完了します。

次のステップ

証明書を登録サーバにインポートします。[登録サーバでの登録サービス クライアント証明書のインポート](#)を参照してください。

登録サーバでの登録サービス クライアント証明書のインポート

ペアリング プロセスを完了するには、MMC の証明書スナップインを使用して、登録サービス クライアント証明書を登録サーバにインポートします。この手順は、各登録サーバで実行する必要があります。

前提条件

- Horizon 7 以降の登録サーバがあることを確認します。[登録サーバのインストールおよび設定](#)を参照してください。
- インポートする証明書が正しいことを確認します。独自の証明書を使用することも、クラスタ内の 1 台の接続サーバの自動生成される自己署名の登録サービス クライアント証明書を使用することもできます。詳細については、[登録サービス クライアント証明書のエクスポート](#)を参照してください。

重要: 独自の証明書を使用してペアリングを行うには、優先される証明書（および関連付けられたプライベートキー）を接続サーバマシンの Windows 証明書ストアのカスタム コンテナ (VMware Horizon View Certificates\Certificates) に配置します。次に、証明書のわかりやすい名前を **vdm.ec.new** に設定し、サーバを再起動する必要があります。クラスタ内の他のサーバは、LDAP からこの証明書を取得します。その後この手順を実行できます。

独自のクライアント証明書がある場合、登録サーバにコピーする証明書は、クライアント証明書を生成するために使用したルート証明書です。

手順

- 1 適切な証明書ファイルを登録サーバマシンにコピーします。

自動生成される証明書を使用するには、接続サーバの登録サービス クライアント証明書をコピーします。独自の証明書を使用するには、クライアント証明書を生成するために使用されたルート証明書をコピーします。

- 2 登録サーバで、証明書スナップインを MMC に追加します。

- a MMC コンソールを開き、[ファイル] - [スナップインの追加と削除] を選択します。
- b [利用できるスナップイン] で [証明書] を選択し、[追加] をクリックします。
- c [証明書スナップイン] ウィンドウで、[コンピュータ アカウント] を選択し、[次へ] をクリックして [完了] をクリックします。
- d [スナップインの追加と削除] ウィンドウで、[OK] をクリックします。

- 3 MMC コンソールの左ペインで、[VMware Horizon View 登録サーバの信頼されたルート] フォルダを右クリックし、[すべてのタスク] - [インポート] を選択します。

- 4 証明書のインポート ウィザードで、プロンプトに従って [EnrollClient] 証明書ファイルを参照して開きます。

- 5 プロンプトに従ってデフォルトを受け入れ、証明書のインポートを終了します。

- 6 インポートされた証明書を右クリックし、**vdm.ec**（登録クライアント証明書）などのわかりやすい名前を追加します。

View クラスタを識別するわかりやすい名前を使用することを推奨しますが、クライアント証明書を簡単に識別できる任意の名前を使用できます。

次のステップ

認証を VMware Identity Manager に委任するために使用される SAML 認証子を構成します。[True SSO と連携するための SAML 認証の構成](#)を参照してください。

True SSO と連携するための SAML 認証の構成

Horizon 7 で導入された True SSO 機能により、ユーザーはスマート カード、RADIUS、または RSA SecurID 認証を使用して VMware Identity Manager 2.6 以降のリリースにログインできます。また、ユーザーがリモート デスクトップまたはアプリケーションを初めて起動するときでも、Active Directory 認証情報を求められなくなりました。

以前のリリースでは、SSO（シングル サインオン）は、以前に Active Directory 認証情報で認証されていないユーザーが最初にリモート デスクトップを起動したとき、またはアプリケーションをホストしたときに Active Directory 認証情報をユーザーに求めることで機能していました。この認証情報がキャッシュされ、これによりユーザーは認証情報を再度入力せずに、以降の起動を行うことができました。True SSO では、一時的な証明書が作成され、Active Directory 認証情報の代わりに使用されます。

VMware Identity Manager の SAML 認証を構成するプロセスは変わっていませんが、True SSO では 1 つの手順が追加されています。パスワードのポップアップが表示されないように VMware Identity Manager を構成する必要があります。

注: 展開に複数の View 接続サーバ インスタンスが含まれる場合は、各インスタンスに SAML 認証子を関連付ける必要があります。

前提条件

- シングル サインオンがグローバル設定として有効になっていることを確認します。View Administrator で、[構成 > グローバル設定] を選択し、[Single Sign On (SSO)] が [有効] に設定されていることを確認します。
- VMware Identity Manager がインストールされ、構成されていることを確認します。https://www.vmware.com/support/pubs/vidm_pubs.html にある VMware Identity Manager のドキュメントを参照してください。
- 接続サーバ ホストに、SAML サーバ証明書用の CA が署名したルート証明書がインストールされていることを確認します。VMware では、自己署名の証明書を使用するように SAML 認証子を構成することは推奨されません。『View のインストール』ドキュメントにある「View Server 用の SSL 証明書の構成」の章のトピック「ルート証明書と中間証明書を Windows 証明書ストアにインポートする」を参照してください。
- VMware Identity Manager サーバ インスタンスの FQDN を書き留めます。

手順

- 1 View Administrator で、[構成 > サーバ] を選択します。
- 2 [接続サーバ] タブで、SAML 認証子を関連付けるサーバ インスタンスを選択して [編集] をクリックします。
- 3 [認証] タブで、[VMware Horizon (SAML 2.0 認証子) への認証の委任] ドロップダウン メニューから、[許可] または [必須] を選択します。

要件に応じて、展開内の各 View 接続サーバ インスタンスを異なる SAML 認証設定で構成できます。

- 4 [SAML 認証子の管理] をクリックし、[追加] をクリックします。

5 [SAML 2.0 認証子を追加] ダイアログ ボックスで SAML 認証子を構成します。

オプション	説明
ラベル	VMware Identity Manager サーバ インスタンスの FQDN を使用できます。
説明	(オプション) VMware Identity Manager サーバ インスタンスの FQDN を使用できます。
メタデータ URL	SAML ID プロバイダと View 接続サーバ インスタンス間で SAML 情報を交換するために必要な情報すべてを取得するための URL。URL <code>https://<YOUR HORIZON SERVER NAME>/SAAS/API/1.0/GET/metadata/idp.xml</code> で、[<YOUR HORIZON SERVER NAME>] をクリックして VMware Identity Manager サーバ インスタンスの FQDN に置換します。
管理 URL	SAML ID プロバイダ (VMware Identity Manager インスタンス) の管理コンソールにアクセスするための URL。この URL の形式は、 <code>https://<Identity-Manager-FQDN>:8443.</code> です。

6 [OK] をクリックして SAML 認証子の構成を保存します。

有効な情報を指定した場合、自己署名の証明書を受け入れるか(推奨されません)、View および VMware Identity Manager の信頼できる証明書を使用する必要があります。

[SAML 2.0 認証子] ドロップダウン メニューに、新規に作成された認証子が表示され、選択した認証子として設定されます。

7 View Administrator ダッシュボードの [システムの健全性] セクションで、[その他のコンポーネント] - [SAML 2.0 認証子] を選択し、追加した SAML 認証子を選択して詳細を確認します。

構成に成功した場合、認証子の健全性は緑色です。証明書が信頼されていない場合、VMware Identity Manager サービスを利用できない場合、またはメタデータ URL が使用不可の場合、認証子の健全性が赤色で表示されることがあります。証明書が信頼されていない場合は、[検証] をクリックして証明書を検証してから受け入れることができます。

8 VMware Identity Manager 管理コンソールにログインし、[View プール] ページに移動して、[パスワードのポップアップを非表示にする] チェック ボックスをオンにします。

次のステップ

- View 接続サーバのメタデータの有効期間を延長して、リモートセッションが 24 時間経過後に終了されないようにします。[View 接続サーバでのサービス プロバイダ メタデータの有効期間の変更](#)を参照してください。
- `vdmutil` コマンドライン インターフェイスを使用して、接続サーバの True SSO を構成します。[True SSO のための View 接続サーバの構成](#)を参照してください。

SAML 認証の仕組みの詳細については、[SAML 認証の使用](#)を参照してください。

True SSO のための View 接続サーバの構成

`vdmutil` コマンドライン インターフェイスを使用して、True SSO の構成や有効化/無効化を行うことができます。

この手順は、クラスタ内の 1 つの接続サーバでのみ実行する必要があります。

重要: この手順では、True SSO を有効にするために必要なコマンドのみを使用します。True SSO 構成の管理に使用できるすべての構成オプションとその説明のリストについては、[True SSO 構成のコマンドライン リファレンス](#)を参照してください。

前提条件

- 管理者ロールを持つユーザーとしてコマンドを実行できることを確認します。View Administrator を使用して管理者ロールをユーザーに割り当てることができます。[6 章 ロールベースの委任管理の構成](#)を参照してください。
- 次のサーバの完全修飾ドメイン名 (FQDN) があることを確認します。
 - 接続サーバ
 - 登録サーバ

詳細については、[登録サーバのインストールおよび設定](#)を参照してください。
 - エンタープライズ認証局

詳細については、[エンタープライズ認証局の設定](#)を参照してください。
- ドメインの Netbios 名または FQDN を把握していることを確認します。
- 証明書テンプレートが作成されていることを確認します。[True SSO とともに使用する証明書テンプレートの作成](#)を参照してください。
- 認証を VMware Identity Manager に委任するための SAML 認証子が作成されていることを確認します。[True SSO と連携するための SAML 認証の構成](#)を参照してください。

手順

- 1 クラスタ内の接続サーバで、コマンド プロンプトを開き、登録サーバを追加するためのコマンドを入力します。

```
vdmUtil --authAs admin-role-user --authDomain domain-name --authPassword admin-user-password --truessso --environment --add --enrollmentServer enroll-server-fqdn
```

登録サーバがグローバル リストに追加されます。

- 2 登録サーバの情報をリストするコマンドを入力します。

```
vdmUtil --authAs admin-role-user --authDomain domain-name --authPassword admin-user-password --truessso --environment --list --enrollmentServer enroll-server-fqdn --domain domain-fqdn
```

出力には、フォレスト名、登録サーバの証明書が有効かどうか、使用できる証明書テンプレートの名前と詳細、認証局の共通名が表示されます。登録サーバが接続できるドメインを構成するには、登録サーバの Windows レジストリ設定を使用します。デフォルトでは、すべての信頼する側のドメインに接続されます。

重要: 次の手順で認証局の共通名を指定する必要があります。

- 3 構成情報を保持する True SSO コネクタを作成して有効化するコマンドを入力します。

```
vdmUtil --authAs admin-role-user --authDomain domain-name --authPassword admin-user-password --
truesso --create --connector --domain domain-fqdn --template TrueSSO-template-name --
primaryEnrollmentServer enroll-server-fqdn --certificateServer ca-common-name --mode enabled
```

このコマンドの *TrueSSO-template-name* は、前の手順の出力に表示されていたテンプレートの名前で、*ca-common-name* は、その出力に表示されていたエンタープライズ認証局の共通名です。

True SSO コネクタは、指定されたドメインのプールまたはクラスタで有効になります。プールレベルで True SSO を無効にするには、`vdmUtil --certsso --edit --connector <domain> --mode disabled` を実行します。個別の仮想マシンで True SSO を無効にするには、GPO (`vdm_agent.adm`) を使用できます。

- 4 使用可能な SAML 認証子を検出するコマンドを入力します。

```
vdmUtil --authAs admin-role-user --authDomain domain-name --authPassword admin-user-password --
truesso --list --authenticator
```

View Administrator を使用して、VMware Identity Manager と接続サーバ間の SAML 認証を構成すると、認証子が作成されます。

出力には、認証子の名前や True SSO が有効になっているかどうかが表示されます。

重要: 次の手順で認証子の名前を指定する必要があります。

- 5 認証子で True SSO モードを使用できるようにするコマンドを入力します。

```
vdmUtil --authAs admin-role-user --authDomain domain-name --authPassword admin-user-password --
truesso --authenticator --edit --name authenticator-fqdn --truessoMode {ENABLED|ALWAYS}
```

ユーザーが VMware Identity Manager にログインしたときにパスワードを入力しなかった場合にのみ True SSO を使用するには、`--truessoMode` に `ENABLED` を使用します。この場合、パスワードが使用されていてキャッシュされていれば、そのパスワードが使用されます。ユーザーが VMware Identity Manager にログインしたときにパスワードを入力した場合でも True SSO を使用するには、`--truessoMode` を `ALWAYS` に設定します。

次のステップ

View Administrator で、True SSO 構成の健全性ステータスを確認します。詳細については、[システム健全性ダッシュボードを使用した True SSO に関する問題のトラブルシューティング](#)を参照してください。

詳細設定オプションを構成するには、適切なシステムの Windows の詳細設定を使用します。[True SSO の詳細構成設定](#)を参照してください。

True SSO 構成のコマンドライン リファレンス

True SSO 機能の構成と管理には `vdmutil` コマンドライン インターフェイスを使用できます。

ユーティリティの場所

デフォルトの場合、`vdmutil` コマンドの実行可能ファイルのパスは `C:\Program Files\VMware\VMware View\Server\tools\bin` です。コマンドラインにパスを入力するのを避けるには、`PATH` 環境変数にパスを追加します。

構文と認証

Windows コマンド プロンプトで、次の形式の `vdmutil` コマンドを使用します。

```
vdmutil authentication options --truesso additional options and arguments
```

使用できる追加のオプションは、コマンド オプションによって異なります。このトピックでは、True SSO (`--truesso`) を構成するためのオプションについて説明します。次の例は、True SSO に構成されている接続を一覧表示するコマンドを示しています。

```
vdmutil --authAs admin-role-user --authDomain domain-name --authPassword admin-user-password --truesso --list --connector
```

`vdmutil` コマンドには、認証に使用するユーザー名、ドメイン、およびパスワードを指定する認証オプションがあります。

表 5-1. `vdmutil` コマンド認証オプション

オプション	説明
<code>--authAs</code>	View 管理ユーザーの名前。 <code>domain\username</code> またはユーザー プリンシパル名 (UPN) 形式を使用しないでください。
<code>--authDomain</code>	<code>--authAs</code> オプションで指定された View 管理者ユーザーのドメインの完全修飾ドメイン名または NETBIOS 名。
<code>--authPassword</code>	View オプションで指定された <code>--authAs</code> 管理者ユーザーのパスワード。パスワードの代わりに "*" を入力すると、 <code>vdmutil</code> コマンドでパスワードが要求され、機密性の高いパスワードはコマンド ラインのコマンド履歴に残りません。

認証オプションは、`--help` および `--verbose` を除くすべての `vdmutil` コマンド オプションを指定して使用する必要があります。

コマンド出力

`vdmutil` コマンドは、操作が成功すると 0 を返し、失敗すると操作の失敗に固有の 0 以外のコードを返します。

`vdmutil` コマンドは標準エラー出力にエラー メッセージを書き込みます。操作で出力が生成されたり、`--verbose` オプションを使用して詳細なログ記録が有効になっていると、`vdmutil` コマンドは標準出力に米国英語で出力を書き込みます。

登録サーバの管理のためのコマンド

ドメインごとに登録サーバを 1 台追加する必要があります。また、2 番目の登録サーバを追加し、サーバがバックアップとして使用されるように後で指定することもできます。

読みやすさを考慮し、次の表に示すオプションはユーザーが入力する完全なコマンドになっていません。特定のタスクに固有のオプションのみを記載しています。たとえば、ある行は `--environment --list --enrollmentServers` オプションを示しますが、実際に入力する `vdmutil` コマンドには、次のように認証用のオプションや、True SSO を構成することを指定するためのオプションも含まれます。

```
vdmutil --authAs admin-role-user --authDomain netbios-name --authPassword admin-user-password --truesso --environment --list --enrollmentServers
```

認証オプションの詳細については、[True SSO 構成のコマンドライン リファレンス](#)を参照してください。

表 5-2. 登録サーバの管理のための vdmutil truesso コマンド オプション

コマンドとオプション	説明
<code>--environment --add --enrollmentServer enroll-server-fqdn</code>	指定された登録サーバを環境に追加します。 <i>enroll-server-fqdn</i> は登録サーバの FQDN です。登録サーバがすでに追加されている場合は、このコマンドを実行しても何も起こりません。
<code>--environment --remove --enrollmentServer enroll-server-fqdn</code>	指定した登録サーバを環境から削除します。 <i>enroll-server-fqdn</i> は登録サーバの FQDN です。登録サーバがすでに削除されている場合は、このコマンドを実行しても何も起こりません。
<code>--environment --list --enrollmentServers</code>	環境にあるすべての登録サーバの FQDN を一覧表示します。
<code>--environment --list --enrollmentServer enroll-server-fqdn</code>	登録サーバが属するドメインおよびフォレストによって信頼されているドメインおよびフォレストの FQDN と、登録証明書の状態 (VALID または INVALID) を一覧表示します。VALID は、登録サーバに Enrollment Agent 証明書がインストールされていることを意味します。この状態は以下のいくつかの理由で INVALID になる可能性があります。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 証明書がインストールされていない。 ■ 証明書がまだ有効ではないか、期限切れである。 ■ 信頼できるエンタープライズ CA によって証明書が発行されていない。 ■ プライベート キーが使用できない。 ■ 証明書が破損している。 登録サーバのログ ファイルには INVALID 状態の理由を表示できます。
<code>--environment --list --enrollmentServer enroll-server-fqdn --domain domain-fqdn</code>	指定されたドメインの登録サーバについて、使用できる認証局の CN (共通名) を一覧表示し、True SSO に使用できる各証明書テンプレートに関する次の情報を表示します：名前、最小キー長、およびハッシュ アルゴリズム。

コネクタの管理のためのコマンド

ドメインごとにコネクタを 1 つ作成します。コネクタは True SSO に使用されるパラメータを定義します。

読みやすさを考慮し、次の表に示すオプションはユーザーが入力する完全なコマンドになっていません。特定のタスクに固有のオプションのみを記載しています。たとえば、ある行は `--list --connector` オプションを示しますが、実際に入力する `vdmUtil` コマンドには、次のように認証用のオプションや、True SSO を構成することを指定するためのオプションも含まれます。

```
vdmUtil --authAs admin-role-user --authDomain netbios-name --authPassword admin-user-password --truesso --list --connector
```

認証オプションの詳細については、[True SSO 構成のコマンドライン リファレンス](#)を参照してください。

表 5-3. コネクタの管理のための vdmutil truesso コマンド オプション

オプション	説明
<pre>--create --connector --domain <i>domain-fqdn</i> --template <i>template-name</i> --primaryEnrollmentServer <i>enroll-server1-fqdn</i> [--secondaryEnrollmentServer <i>enroll-server2-fqdn</i>] --certificateServer <i>CA-common-name</i> --mode{enabled disabled}</pre>	<p>指定したドメインのコネクタを作成し、次の設定を使用するようにコネクタを構成します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ <i>template-name</i> は使用する証明書テンプレートの名前です。 ■ <i>enroll-server1-fqdn</i> は使用するプライマリ登録サーバの FQDN です。 ■ <i>enroll-server2-fqdn</i> は使用するセカンダリ登録サーバの FQDN です。この設定はオプションです。 ■ <i>CA-common-name</i> は使用する認証局の共通名です。これには、カンマで区切った CA のリストを指定できます。 <p>特定の登録サーバで使用できる証明書テンプレートと認証局を確認するには、<code>--truesso --environment --list --enrollmentServer <i>enroll-server-fqdn</i> --domain <i>domain-fqdn</i></code> オプションを指定して <code>vdmutil</code> コマンドを実行します。</p>
<code>--list --connector</code>	コネクタがすでに作成されているドメインの FQDN を一覧表示します。
<code>--list --connector --verbose</code>	<p>コネクタを持つすべてのドメインを一覧表示し、コネクタごとに次の情報を表示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ プライマリ登録サーバ ■ セカンダリ登録サーバ（1 台存在する場合） ■ 証明書テンプレートの名前 ■ コネクタが有効か無効か ■ 認証局サーバの共通名（複数ある場合）
<pre>--edit --connector <i>domain-fqdn</i> [--template <i>template-name</i>] [--mode{enabled disabled}] [--primaryEnrollmentServer <i>enroll-server1-fqdn</i>] [--secondaryEnrollmentServer <i>enroll-server2-fqdn</i>] [--certificateServer <i>CA-common-name</i>]</pre>	<p><i>domain-fqdn</i> で指定したドメインに作成されるコネクタの場合、次のいずれかの設定を変更できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ <i>template-name</i> は使用する証明書テンプレートの名前です。 ■ モードは <code>enabled</code> または <code>disabled</code> のいずれかになります。 ■ <i>enroll-server1-fqdn</i> は使用するプライマリ登録サーバの FQDN です。 ■ <i>enroll-server2-fqdn</i> は使用するセカンダリ登録サーバの FQDN です。この設定はオプションです。 ■ <i>CA-common-name</i> は使用する認証局の共通名です。これには、カンマで区切った CA のリストを指定できます。
<code>--delete --connector <i>domain-fqdn</i></code>	<i>domain-fqdn</i> で指定されたドメインに作成されたコネクタを削除します。

認証子の管理のためのコマンド

認証子は、VMware Identity Manager と接続サーバの間の SAML 認証を構成すると作成されます。管理タスクは、認証子の True SSO を有効または無効にすることに限られます。

読みやすさを考慮し、次の表に示すオプションはユーザーが入力する完全なコマンドになっていません。特定のタスクに固有のオプションのみを記載しています。たとえば、ある行は `--list --authenticator` オプションを示しますが、実際に入力する `vdmUtil` コマンドには、次のように認証用のオプションや、True SSO を構成することを指定するためのオプションも含まれます。

```
vdmUtil --authAs admin-role-user --authDomain netbios-name --authPassword admin-user-password --truesso --list --authenticator
```

認証オプションの詳細については、[True SSO 構成のコマンドライン リファレンス](#)を参照してください。

表 5-4. 認証子の管理のための vdmutil truesso コマンド オプション

コマンドとオプション	説明
<code>--list --authenticator [--verbose]</code>	ドメイン内にあるすべての SAML 認証子の完全修飾ドメイン名 (FQDN) を一覧表示します。True SSO を有効にするかどうかを個々に指定します。--verbose オプションを使用した場合は、関連付けられた接続サーバの FQDN も一覧に表示されます。
<code>--list --authenticator --name <i>label</i></code>	指定された認証子について、True SSO が有効かどうかと、関連付けられた接続サーバの FQDN も一覧表示します。 <i>label</i> には、--authenticator オプションを使用して --name オプションを使用しない場合に一覧表示されるいずれかの名前を使用してください。
<code>--edit --authenticator --name <i>label</i> --truessoMode <i>mode-value</i></code>	指定された認証子について、True SSO モードに、指定された値を設定します。 <i>mode-value</i> には次のいずれかの値を指定できます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ ENABLED。True SSO は、ユーザーの Active Directory 認証情報を使用できないときにのみ使用されます。 ■ ALWAYS。True SSO は、vDM がユーザーの Active Directory 認証情報を使用している場合でも常に使用されます。 ■ DISABLED。True SSO は無効になっています。 <i>label</i> には、--authenticator オプションを使用して --name オプションを使用しない場合に一覧表示されるいずれかの名前を使用してください。

True SSO の詳細構成設定

True SSO の詳細設定を管理するには、Horizon Agent マシンの GPO テンプレート、登録サーバのレジストリ設定、および接続サーバの LDAP エントリを使用します。これらの設定には、デフォルトのタイムアウト、負荷分散の構成、含めるドメインの指定などが含まれます。

Horizon Agent の構成設定

エージェント OS で GPO テンプレートを使用してプール レベルで True SSO をオフにしたり、キーのサイズや数などの証明書設定および再接続試行の設定のデフォルトを変更したりできます。

注: 次の表は、個々の仮想マシンでエージェントを構成するために使用する設定を示していますが、代わりに Horizon Agent の構成 ADM テンプレート ファイル (`vdm_agent.adm`) を使用して、デスクトップまたはアプリケーション プールのすべての仮想マシンにこれらのポリシー設定を適用することもできます。ポリシーが設定されている場合、レジストリ設定よりもポリシーが優先されます。

この ADM ファイルは、`VMware-Horizon-Extras-Bundle-x.x.x-yyyyyyy.zip` という .zip バンドル ファイル内にあり、<https://my.vmware.com/web/vmware/downloads> VMware ダウンロードサイトからダウンロードできます。[Desktop & End-User Computing (デスクトップおよびエンドユーザー コンピューティング)] で VMware Horizon 7 のダウンロードを選択します。これには .zip バンドル ファイルが含まれます。

表 5-5. Horizon Agent で True SSO を構成するためのキー

キー	最小～ 最大	説明
Disable True SSO	該当なし	エージェントで機能を無効にするには、このキーを true に設定します。グループポリシーでこの設定を使用すると、プールレベルで True SSO が無効になります。デフォルトは false です。
Certificate wait timeout	10 ～ 120	エージェントに到着する証明書のタイムアウト期間（秒）を指定します。デフォルトは 40 です。
Minimum key size	1024 ～ 8192	許可されるキーの最小サイズ。デフォルトは 1024 です。このデフォルト値は、キーサイズが 1024 未満の場合はキーを使用できないことを意味します。
All key sizes	該当なし	使用できるキー サイズのカンマ区切りのリスト。最大 5 個のサイズを指定できます (1024,2048,3072,4096 など)。デフォルトは 2048 です。
Number of keys to pre-create	1 ～ 100	リモート デスクトップとホスト型 Windows アプリケーションを提供する RDS サーバで事前作成するキーの数。デフォルトは 5 です。
Minimum validity period required for a certificate	該当なし	ユーザーの再接続に証明書が再利用されるときに必要な最小有効期間（分）。デフォルトは 5 です。

登録サーバの構成設定

登録サーバ OS で Windows レジストリ設定を使用して、接続するドメイン、さまざまなタイムアウト期間、ポーリング期間、再試行回数、および同じローカル サーバにインストールされている認証局を使用するかどうかを構成できます（推奨）。

詳細な構成設定を変更するには、登録サーバ マシンで Windows レジストリ エディタ (**regedit.exe**) を開き、次のレジストリ キーに移動します。

```
HKLM\SOFTWARE\VMware, Inc.\VMware VDM\Enrollment Service
```

表 5-6. 登録サーバで True SSO を構成するためのレジストリ キー

レジストリ キー	最小～ 最大	タイプ	説明
ConnectToDomains	該当なし	REG_MULTI_SZ	登録サーバが自動的に接続を試みるドメインのリストこの複数文字列のレジストリ タイプでは、各ドメインの DNS 完全修飾ドメイン名 (FQDN) が個別の行で表示されます。 デフォルトでは、すべてのドメインを信頼します。
ExcludeDomains	該当なし	REG_MULTI_SZ	登録サーバが自動的に接続しないドメインのリストドメインを含む構成設定が接続サーバによって提供されると、登録サーバはそのドメインへの接続を試みます。この複数文字列のレジストリ タイプでは、各ドメインの DNS FQDN が個別の行で表示されます。 デフォルトでは、除外されるドメインはありません。

レジストリ キー	最小～ 最大	タイプ	説明
ConnectToDomainsInForest	該当なし	REG_SZ	<p>登録サーバがメンバーになっているフォレスト内のすべてのドメインに接続して使用するかどうかを指定します。デフォルトは TRUE です。</p> <p>次のいずれかの値を使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 0 : false を意味します。使用されているフォレストのドメインに接続しません。 ■ ! =0 : true を意味します。
ConnectToTrustingDomains	該当なし	REG_SZ	<p>明示的に信頼/受信するドメインに接続するかどうかを指定します。デフォルトは TRUE です。</p> <p>次のいずれかの値を使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 0 : false を意味します。明示的に信頼/受信するドメインに接続しません。 ■ ! =0 : true を意味します。
PreferLocalCa	該当なし	REG_SZ	<p>パフォーマンス上の利点を得るため、ローカルにインストールされた CA が存在する場合に使用するかどうかを指定します。TRUE に設定されている場合、登録サーバはローカル CA に要求を送信します。ローカル CA への接続に失敗すると、登録サーバは別の CA への証明書要求の送信を試みます。デフォルトは FALSE です。</p> <p>次のいずれかの値を使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 0 : false を意味します。 ■ ! =0 : true を意味します。
MaxSubmitRetryTime	9,500 ～ 59,000	DWORD	<p>証明書署名要求の送信を再試行する前に待機する時間(ミリ秒)。デフォルトは 25000 です。</p>
SubmitLatencyWarningTime	500 ～ 5000	DWORD	<p>インターフェイスが「低下」とマークされている場合の送信遅延警告時間 (ミリ秒)。デフォルトは 1500 です。</p> <p>登録サーバはこの設定を使用して、CA が低下状態と見なされるべきかどうかを判断します。最後の 3 回の証明書要求の完了にかかった時間がこの設定で指定されたミリ秒より長い場合、CA は低下状態と見なされ、View Administrator の健全性ステータス ダッシュボードにこのステータスが表示されます。</p> <p>一般的に CA は 20 ミリ秒以内に証明書を発行しますが、CA が数時間アイドル状態だった場合は、最初の要求の完了にかかる時間が長くなることがあります。この設定によって、CA を低速とマークする必要なしに、管理者は CA が低速であることを確認できます。この設定は、CA を低速とマークするしきい値を構成するために使用します。</p>

接続サーバの構成設定

View 接続サーバで View LDAP を編集し、証明書生成のタイムアウトと、登録サーバ間の証明書要求の負荷分散を有効化する（推奨）かどうかを構成できます。

詳細構成設定を変更するには、View 接続サーバ ホストで ADSI Edit を使用する必要があります。接続するには、接続ポイントとして識別名 **DC=vdi**、**DC=vmware**、**DC=int** を入力し、コンピュータのサーバ名とポート (**localhost:389**) を入力します。[OU=Properties] を展開して [OU=Global] を選択し、右ペインで [CN=Common] をダブルクリックします。

[pae-NameValuePair] 属性を編集して、次の表に表示されている 1 つまたは複数の値を追加します。値の追加時に構文 *name=value* を使用する必要があります。

表 5-7. 接続サーバ用の True SSO の詳細設定

レジストリ キー	説明
<code>cs-view-certssso-enable-es-loadbalance=[true false]</code>	2 台の登録サーバ間の CSR 要求の負荷分散を有効化するかどうかを指定します。デフォルトは <code>false</code> です。 たとえば、証明書要求の受信時に接続サーバが代替登録サーバを使用するように負荷分散を有効化するには、 <code>cs-view-certssso-enable-es-loadbalance=true</code> を追加します。登録サーバと CA が同じホストにある場合、各登録サーバはローカル CA を使用して要求を提供できます。
<code>cs-view-certssso-certgen-timeout-sec=number</code>	CSR 受信後に証明書を生成するまでの待機時間（秒単位）。デフォルトは 35 です。

システム健全性ダッシュボードを使用した True SSO に関する問題のトラブルシューティング

View Administrator のシステム健全性ダッシュボードを使用すると、True SSO 機能の動作に影響を及ぼす可能性のある問題を素早く調べることができます。

システムがリモート デスクトップまたはアプリケーションへのエンド ユーザーのログインを試行したときに True SSO の動作が停止すると、エンド ユーザーに「ユーザー名またはパスワードが正しくありません」というメッセージが表示されます。ユーザーが [OK] をクリックすると、ログイン画面が表示されます。Windows ログイン画面で、[VMware SSO ユーザー] という追加タイトルが表示されます。資格のあるユーザー用の Active Directory 認証情報を持っているユーザーは、Active Directory 認証情報を使用してログインできます。

View Administrator の表示の左上にあるシステム健全性ダッシュボードには、True SSO に関連する項目がいくつかあります。

注: True SSO 機能は、毎分 1 回のみダッシュボードに情報を提供します。右上隅にある更新アイコンをクリックすると、情報が直ちに更新されます。

- [View コンポーネント] - [True SSO] をクリックして展開すると、True SSO を使用しているドメインのリストが表示されます。

ドメイン名をクリックすると、そのドメインに構成された登録サーバのリスト、エンタープライズ認証局のリスト、使用されている証明書テンプレートの名前、およびステータスが表示されます。問題がある場合は、[ステータス] フィールドにその内容が表示されます。

[True SSO ドメイン詳細] ダイアログ ボックスに表示される構成設定を変更するには、`vdmutil` コマンドライン インターフェイスを使用して True SSO コネクタを編集します。詳細については、[コネクタの管理のためのコマンド](#)を参照してください。

- [その他のコンポーネント] - [SAML 2.0 認証子] をクリックして展開すると、VMware Identity Manager インスタンスに認証を委任するために作成された SAML 認証子のリストが表示されます。認証子名をクリックしてその詳細とステータスを調べることができます。

注: True SSO を使用するには、SSO のグローバル設定が有効になっている必要があります。View Administrator で、[構成 > グローバル設定] を選択し、[Single Sign On (SSO)] が [有効] に設定されていることを確認します。

表 5-8. ブローカーと登録サーバの接続ステータス

ステータス テキスト	説明
True SSO の健全性情報の取得に失敗しました。	ダッシュボードがブローカーから健全性情報を取得できません。
<FQDN> 登録サーバは、True SSO 構成サービスと通信できません。	ポッド内で、ポッドによって使用されるすべての登録サーバに構成情報を送信する 1 つのブローカーが選択されます。このブローカーは登録サーバ構成を毎分 1 回更新します。このメッセージは、構成タスクで登録サーバを更新できなかった場合に 표시됩니다。詳細については、「登録サーバ接続」の表を参照してください。
<FQDN> 登録サーバは、この接続サーバと通信してサーバ上のセッションを管理できません。	現在のブローカーが登録サーバに接続できません。このステータスは、ブラウザが参照しているブローカーについてのみ表示されます。ポッドに複数のブローカーがある場合は、このステータスを確認するために他のブローカーを参照するようにブラウザを変更する必要があります。詳細については、「登録サーバ接続」の表を参照してください。

表 5-9. 登録サーバ接続

ステータス テキスト	説明
このドメイン <Domain Name> は、<FQDN> 登録サーバに存在しません。	True SSO コネクタはこのドメインのこの登録サーバを使用するように構成されていますが、登録サーバはまだこのドメインに接続するように構成されていません。この状態が 1 分以上続く場合は、現在登録構成の更新を行っているブローカーの状態を確認する必要があります。
ドメイン <Domain Name> への <FQDN> 登録サーバの接続は現在も確立中です。	登録サーバがこのドメインのドメイン コントローラに接続できていません。この状態が 1 分以上続く場合は、登録サーバからドメインへの名前解決が正しいことの確認、および登録サーバとドメイン間のネットワーク接続の確認が必要な可能性があります。
ドメイン <Domain Name> への <FQDN> 登録サーバの接続は、停止中か問題のある状態になっています。	登録サーバはドメインのドメイン コントローラに接続済みですが、ドメイン コントローラから PKI 情報を読み取ることができません。この状態が発生する場合は、実際のドメイン コントローラに問題がある可能性があります。DNS が正しく構成されていない場合にもこの問題が発生する可能性があります。登録サーバのログ ファイルで、登録サーバが使用しようとしているドメイン コントローラを特定し、そのドメイン コントローラが完全に動作していることを確認します。
<FQDN> 登録サーバは、ドメイン コントローラから登録プロパティを読み取っていません。	この状態は一時的であり、登録サーバの起動中、または環境に新しいドメインが追加されたときにのみ表示されます。通常、この状態は 1 分以内に変更されます。この状態が 1 分以上続く場合は、ネットワークが極端に低速であるか、ドメイン コントローラにアクセスできない問題があります。
<FQDN> 登録サーバは、少なくとも 1 回登録プロパティを読み取っていますが、しばらくの間ドメイン コントローラに接続できていません。	登録サーバがドメイン コントローラから PKI 構成を読み取っている間は、変更のポーリングが 2 分に 1 回行われます。この状態は、しばらくの間ドメイン コントローラ (DC) に接続できていない場合に設定されます。通常、この DC への接続不能は登録サーバが PKI 構成の変更を検出できないことを意味します。登録サーバがドメイン コントローラにアクセス可能である限り、継続して証明書を発行できます。
<FQDN> 登録サーバは、少なくとも 1 回登録プロパティを読み取っていますが、長時間ドメイン コントローラに接続できていないか、別の問題が発生しています。	登録サーバが長時間ドメインのドメイン コントローラに接続できない場合、この状態が表示されます。この場合、登録サーバはこのドメインの別のドメイン コントローラの検出を試みます。証明書サーバがドメイン コントローラにアクセスできる場合、証明書は引き続き発行可能ですが、この状態が 1 分以上続く場合は登録サーバがそのドメインのすべてのドメイン コントローラにアクセスできなくなっているため、おそらく証明書は発行できません。

表 5-10. 登録証明書のステータス

ステータス テキスト	説明
ドメインの <domain name> フォレストの有効な登録証明書が <FQDN> 登録サーバにインストールされていないか、または有効期限が切れています。	このドメインの登録証明書がインストールされていないか、証明書が無効または有効期限が切れています。登録証明書は、このドメインがメンバーになっているフォレストで信頼されるエンタープライズ CA によって発行される必要があります。『View 管理』ドキュメントに記載されている、登録サーバでの登録証明書のインストール方法についての手順を実行していることを確認します。MMC、証明書管理スナップインを開いて、ローカル コンピュータ ストアを開くこともできます。個人証明書コンテナを開き、証明書がインストールされていて有効であることを確認します。登録サーバ ログ ファイルを開くこともできます。登録サーバは、検出した証明書の状態に関する追加情報をログに記録します。

表 5-11. 証明書テンプレートのステータス

ステータス テキスト	説明
テンプレート <name> が、<FQDN> 登録サーバ ドメインに存在しません。	正しいテンプレート名が指定されていることを確認します。
このテンプレートで生成された証明書は、Windows へのログオンには使用できません。	このテンプレートではスマート カードの使用が無効になっており、データの署名が有効になっていません。正しいテンプレート名が指定されていることを確認します。 True SSO とともに使用する証明書テンプレートの作成 に記載されている手順を実行していることを確認します。
テンプレート <name> ではスマートカードによるログオンが有効になっていますが、使用できません。	このテンプレートはスマート カード ログオンに対して有効になっていますが、True SSO では使用できません。正しいテンプレート名が指定されていることを確認し、 True SSO とともに使用する証明書テンプレートの作成 に記載されている手順を実行していることを確認します。テンプレートのどの設定によって True SSO が使用できなくなっているかがログに記録されるため、登録サーバのログ ファイルを確認することもできます。

表 5-12. 証明書サーバ構成のステータス

ステータス テキスト	説明
証明書サーバ <CN of CA> がドメインに存在しません。	CA の正しい名前が指定されていることを確認します。共通名 (CN) を指定する必要があります。
証明書は、NTAuth (エンタープライズ) ストアにありません。	この CA はエンタープライズ CA でないか、CA 証明書が NTAUTH ストアに追加されていません。この CA がフォレストのメンバーでない場合は、このフォレストの NTAUTH ストアに CA 証明書を手動で追加する必要があります。

表 5-13. 証明書サーバ接続のステータス

ステータス テキスト	説明
<FQDN> 登録サーバは、証明書サーバ <CN of CA> に接続していません。	登録サーバが証明書サーバに接続されていません。登録サーバの起動直後の場合、または CA が最近 True SSO コネクタに追加された場合、この状態は一時的な可能性があります。この状態が 1 分以上続く場合は、登録サーバが CA に接続できません。名前解決が正常に機能していること、CA へのネットワーク接続があること、および登録サーバのシステム アカウントに CA へのアクセス権があることを確認します。
<FQDN> 登録サーバが証明書サーバ <CN of CA> に接続しましたが、この証明書サーバはデグレードされている状態です。	この状態は、CA の証明書の発行が低速の場合に表示されます。CA がこの状態のままの場合は、CA または CA によって使用されるドメイン コントローラの負荷を確認します。 注: CA が低速とマークされている場合は、少なくとも 1 つの証明書要求が正常に完了し、その証明書が通常の期間内に発行されるまで、この状態が続きます。
<FQDN> 登録サーバは、証明書サーバ <CN of CA> に接続できますが、サービスが利用できません。	この状態は、登録サーバが CA に接続されているにもかかわらず証明書を発行できない場合に発生します。通常、この状態は一時的です。CA がすぐに使用可能にならない場合、この状態は「切断」に変わります。

ロールベースの委任管理の構成

View 環境の重要な管理タスクの 1 つが、View Administrator を使用できるユーザーとそれらのユーザーが実行を許可されるタスクを決定することです。ロールベースの委任管理を使用すると、特定の Active Directory ユーザーおよびグループに管理者ロールを割り当てることによって、選択的に管理者権限を割り当てることができます。

この章には、次のトピックが含まれています。

- [ロールと権限の概要](#)
- [アクセス グループを使用したプールおよびファーム管理の委任](#)
- [権限の概要](#)
- [管理者の管理](#)
- [権限の管理と確認](#)
- [アクセス グループの管理と確認](#)
- [カスタム ロールの管理](#)
- [定義済みのロールと権限](#)
- [一般的なタスクに必要な権限](#)
- [管理者ユーザーおよびグループに関するベスト プラクティス](#)

ロールと権限の概要

View Administrator でタスクを実行できるかどうかは、管理者ロールおよび権限から構成されるアクセス制御システムで管理します。このシステムは vCenter Server アクセス制御システムに似ています。

管理者ロールは権限の集まりです。権限は、ユーザーにデスクトップ プールに対する資格を付与するなど、特定のアクションを実行できるようにするものです。さらに、権限は、管理者が View Administrator で表示できるものも制御します。たとえば、管理者がグローバル ポリシーの表示または変更権限を持たない場合は、その管理者が View Administrator にログインしてもナビゲーション パネルに [グローバル ポリシー] 設定は表示されません。

管理者権限はグローバルか、またはオブジェクト固有です。グローバル権限は、グローバル設定の表示や変更などシステム全体の操作を制御します。オブジェクト固有の権限は、特定のタイプのオブジェクトの操作を制御します。

管理者ロールは、一般に、上位レベルの管理タスクを実行するために必要な個別の権限をすべて組み合わせたものです。View Administrator には、一般的な管理タスクの実行に必要な権限を含む定義済みのロールが用意されています。これらの定義済みのロールを管理者ユーザーおよびグループに割り当てることも、選択した権限を組み合わせることで独自のロールを作成することもできます。定義済みのロールを変更することはできません。

管理者を作成するには、Active Directory ユーザーおよびグループからユーザーとグループを選択し、管理者ロールを割り当てます。管理者は、ロールの割り当てによって権限を取得します。権限を管理者に直接割り当てることはできません。複数のロールが割り当てられた管理者は、それらのロールに含まれるすべての権限を合わせたものを取得します。

アクセス グループを使用したプールおよびファーム管理の委任

デフォルトでは、自動デスクトップ プール、手動デスクトップ プールおよびファームは、View Administrator に / または Root (/) で表示されるルート アクセス グループ内に作成されます。RDS デスクトップ プールおよびアプリケーション プールでは、そのファームのアクセス グループが継承されます。ルート アクセス グループの下にアクセス グループを作成し、別の管理者に特定のプールやファームの管理を委任することができます。

注: RDS デスクトップ プールまたはアプリケーション プールのアクセス グループを直接変更することはできません。RDS デスクトップ プールまたはアプリケーション プールが属するファームのアクセス グループを変更する必要があります。

仮想または物理マシンでは、そのデスクトップ プールからアクセス グループが継承されます。接続された通常ディスクでは、そのマシンからアクセス グループが継承されます。ルート アクセス グループを含む最大 100 のアクセス グループを保持できます。

アクセス グループの管理者にロールを割り当てることにより、そのアクセス グループのリソースへの管理者アクセスを構成することができます。管理者は、ロールを割り当てられているアクセス グループのみに存在するリソースにアクセスできます。管理者が持つアクセス グループに対するロールによって、そのアクセス グループのリソースに対するアクセス レベルが決定されます。

ロールは、ルート アクセス グループから継承されるため、ルート アクセス グループに対するロールを持つ管理者は、すべてのアクセス グループに対してそのロールを持つことになります。ルート アクセス グループに対する管理者ロールを持つ管理者は、システムのすべてのオブジェクトに対するフル アクセス権を持つため、スーパー管理者になります。

ロールには、アクセス グループに適用する少なくとも 1 つのオブジェクト固有権限が含まれている必要があります。グローバル権限のみを含むロールはアクセス グループに適用できません。

View Administrator を使用してアクセス グループを作成し、既存のデスクトップ プールをアクセス グループに移動することができます。自動デスクトップ プール、手動プールまたはファームを作成する場合、デフォルトのルート アクセス グループを受け入れるか、または別のアクセス グループを選択できます。

注: VMware Identity Manager からデスクトップとアプリケーションへのアクセスを提供しようとしている場合、View Administrator のルート アクセス グループで Administrators ロールを持つユーザーとしてデスクトップ プールとアプリケーション プールを作成していることを確認します。ルート アクセス グループ以外で Administrators ロールをユーザーに付与すると、VMware Identity Manager は、View で構成する SAML 認証システムを認識せず、VMware Identity Manager でプールを構成できません。

■ 異なるアクセス グループの異なる管理者

構成内の各アクセス グループを管理する異なる管理者を作成できます。

■ 同じアクセス グループの異なる管理者

同じアクセス グループを管理する複数の異なる管理者を作成できます。

異なるアクセス グループの異なる管理者

構成内の各アクセス グループを管理する異なる管理者を作成できます。

たとえば、会社のデスクトップ プールが 1 つのアクセス グループ内にあり、ソフトウェア開発者用のデスクトップ プールが別のアクセス グループ内にある場合、複数の管理者を作成してアクセス グループごとにリソースを管理することができます。

表 6-1. 異なるアクセス グループの異なる管理者 に、このタイプの構成の例を示します。

表 6-1. 異なるアクセス グループの異なる管理者

管理者	ロール	アクセス グループ
view-domain.com\Admin1	インベントリ管理者	/CorporateDesktops
view-domain.com\Admin2	インベントリ管理者	/DeveloperDesktops

この例では、Admin1 という管理者が CorporateDesktops というアクセス グループのインベントリ管理者ロールを持ち、Admin2 という管理者が DeveloperDesktops というアクセス グループのインベントリ管理者ロールを持ちます。

同じアクセス グループの異なる管理者

同じアクセス グループを管理する複数の異なる管理者を作成できます。

たとえば、会社のデスクトップ プールが 1 つのアクセス グループ内にある場合、それらのプールを表示および変更できる管理者と、それらの表示のみが可能な別の管理者を作成することができます。

表 6-2. 同じアクセス グループの異なる管理者 に、このタイプの構成の例を示します。

表 6-2. 同じアクセス グループの異なる管理者

管理者	ロール	アクセス グループ
view-domain.com\Admin1	インベントリ管理者	/CorporateDesktops
view-domain.com\Admin2	インベントリ管理者（読み取り専用）	/CorporateDesktops

この例では、Admin1 という管理者が CorporateDesktops というアクセス グループのインベントリ管理者ロールを持ち、Admin2 という管理者が同じアクセス グループのインベントリ管理者（読み取り専用）ロールを持ちます。

権限の概要

View Administrator は、ロールの組み合わせ、管理者ユーザーまたはグループ、およびアクセス グループを権限として提供しています。ロールは実行できるアクションを定義し、ユーザーまたはグループはアクションを実行できる者を示し、アクセス グループはアクションの対象となるオブジェクトを格納します。

管理者ユーザーまたはグループ、アクセス グループ、ロールのどれを選択したかによって、View Administrator の権限の表示が異なります。

表 6-3. Admin 1 の Administrators and Groups (管理者とグループ) タブでの権限 に、管理者ユーザーまたはグループを選択した場合に View Administrator で権限がどのように表示されるかを示します。管理者ユーザーは Admin 1 という名前で、2 つの権限を持ちます。

表 6-3. Admin 1 の Administrators and Groups (管理者とグループ) タブでの権限

ロール	アクセス グループ
インベントリ管理者	MarketingDesktops
管理者 (読み取り専用)	/

最初の権限は Admin 1 が MarketingDesktops というアクセス グループに対してインベントリ管理者ロールを持つことを示しています。2 番目の権限は、Admin 1 がルート アクセス グループに対して管理者 (読み取り専用) ロールを持つことを示しています。

表 6-4. MarketingDesktops の Folders (フォルダ) タブの権限 に、MarketingDesktops アクセス グループを選択した場合に View Administrator で同じ権限がどのように表示されるかを示します。

表 6-4. MarketingDesktops の Folders (フォルダ) タブの権限

Admin	ロール	継承
view-domain.com\Admin1	インベントリ管理者	
view-domain.com\Admin1	管理者 (読み取り専用)	はい

最初の権限は、表 6-3. Admin 1 の Administrators and Groups (管理者とグループ) タブでの権限 に示す最初の権限と同じです。2 番目の権限は、表 6-3. Admin 1 の Administrators and Groups (管理者とグループ) タブでの権限 に示す 2 番目の権限から継承されています。アクセス グループはルート アクセス グループから権限を継承するため、Admin1 は MarketingDesktops アクセス グループに対する管理者 (読み取り専用) ロールを持ちます。権限が継承された場合、継承された列に Yes (はい) が表示されます。

表 6-5. インベントリ管理者の [ロール] タブの権限 に、インベントリ管理者ロールを選択した場合に View Administrator で表 6-3. Admin 1 の Administrators and Groups (管理者とグループ) タブでの権限 の最初の権限がどのように表示されるかを示します。

表 6-5. インベントリ管理者の [ロール] タブの権限

管理者	アクセス グループ
view-domain.com\Admin1	/MarketingDesktops

管理者の管理

Administrators (管理者) ロールを持つユーザーは、View Administrator を使用して、管理者ユーザーおよびグループを追加および削除できます。

Administrators（管理者）ロールは、View Administrator で最も強力なロールです。最初に、View Administrator アカウントのメンバーに、Administrators（管理者）ロールが付与されます。View 接続サーバをインストールするときに、View Administrator アカウントを指定します。View Administrator アカウントとしては、View 接続サーバ コンピュータ上のローカル Administrators グループ（BUILTIN\Administrators）、またはドメイン ユーザー/グループのアカウントを指定できます。

注: デフォルトでは、Domain Admins グループはローカル Administrators グループのメンバーです。ローカル Administrators グループとして View Administrator アカウントを指定した場合に、インベントリ オブジェクトおよび View 構成設定に対するフル アクセス権限をドメイン管理者に与えたくないときは、ローカル Administrators グループから Domain Admins グループを削除する必要があります。

■ 管理者の作成

管理者を作成するには、View Administrator で Active Directory ユーザーおよびグループからユーザーまたはグループを選択し、管理者ロールを割り当てます。

■ 管理者の削除

管理者ユーザーまたはグループを削除できます。システム内の最後のスーパー管理者は削除できません。スーパー管理者は、ルート アクセス グループに対する管理者ロールを持つ管理者です。

管理者の作成

管理者を作成するには、View Administrator で Active Directory ユーザーおよびグループからユーザーまたはグループを選択し、管理者ロールを割り当てます。

前提条件

- 定義済みの管理者ロールについて理解しておきます。[定義済みのロールと権限](#)を参照してください。
- 管理者ユーザーおよびグループを作成するためのベスト プラクティスについて理解しておきます。[管理者ユーザーおよびグループに関するベスト プラクティス](#)を参照してください。
- 管理者にカスタム ロールを割り当てるには、カスタム ロールを作成します。[カスタム ロールの追加](#)を参照してください。
- 特定のデスクトップ プールを管理できる管理者を作成するには、アクセス グループを作成し、デスクトップ プールをそのアクセス グループに移動します。[アクセス グループの管理と確認](#)を参照してください。

手順

- 1 View Administrator で、[View 構成] - [管理者] を選択します。
- 2 [管理者とグループ] タブで [ユーザーまたはグループの追加] をクリックします。
- 3 [追加] をクリックして、1 つ以上の検索条件を選択し、[検索] をクリックして検索条件に基づいて Active Directory ユーザーまたはグループをフィルタ処理します。
- 4 管理者ユーザーまたはグループにする Active Directory ユーザーまたはグループを選択して、[OK] をクリックし、[次へ] をクリックします。

<Ctrl> + <Shift> キーを押すと、複数のユーザーやグループを選択できます。

- 5 管理者ユーザーまたはグループに割り当てるロールを選択します。

[アクセス グループに適用] 列は、ロールをアクセス グループに適用するかどうかを示します。アクセス グループに適用されるのは、オブジェクト固有の権限を含むロールのみです。グローバル権限のみを含むロールはアクセス グループに適用されません。

オプション	操作
選択したロールがアクセス グループに適用される	1 つ以上のアクセス グループを選択して [次へ] をクリックします。
すべてのアクセス グループにロールを適用する	ルート アクセス グループを選択して [次へ] をクリックします。

- 6 [終了] をクリックして、管理者ユーザーまたはグループを作成します。

[管理者とグループ] タブの左ペインに新しい管理者ユーザーまたはグループが表示され、右ペインに選択したロールとアクセス グループが表示されます。

管理者の削除

管理者ユーザーまたはグループを削除できます。システム内の最後のスーパー管理者は削除できません。スーパー管理者は、ルート アクセス グループに対する管理者ロールを持つ管理者です。

手順

- 1 View Administrator で、[View 構成] - [管理者] を選択します。
- 2 [管理者とグループ] タブで、管理者ユーザーまたはグループを選択し、[ユーザーまたはグループの削除] をクリックして、[OK] をクリックします。

[管理者とグループ] タブに管理者ユーザーまたはグループが表示されなくなります。

権限の管理と確認

View Administrator を使用して、特定の管理者ユーザーおよびグループ、特定のロール、特定のアクセス グループの権限を追加、削除、確認できます。

■ 権限の追加

特定の管理者ユーザーまたはグループ、特定のロール、または特定のアクセス グループを含む権限を追加できます。

■ 権限の削除

特定の管理者ユーザーまたはグループ、特定のロール、または特定のアクセス グループを含む権限を削除できます。

■ 権限の確認

特定の管理者またはグループ、特定のロール、または特定のアクセス グループを含む権限を確認できます。

権限の追加

特定の管理者ユーザーまたはグループ、特定のロール、または特定のアクセス グループを含む権限を追加できます。

手順

- 1 View Administrator で、[View 構成] - [管理者] を選択します。
- 2 権限を作成します。

オプション	操作
特定の管理者ユーザーまたはグループを含む権限を作成する	<ol style="list-style-type: none"> a [管理者とグループ] タブで、管理者またはグループを選択し、[権限を追加] をクリックします。 b ロールを選択します。 c ロールをアクセス グループに適用しない場合、[終了] をクリックします。 d ロールをアクセス グループに適用する場合は、[次へ] をクリックし、1 つ以上のアクセス グループを選択して [終了] をクリックします。ロールには、アクセス グループに適用する少なくとも 1 つのオブジェクト固有権限が含まれている必要があります。
特定のロールを含む権限を作成する	<ol style="list-style-type: none"> a [ロール] タブでロールを選択し、[権限] をクリックし、[権限を追加] をクリックします。 b [追加] をクリックして、1 つ以上の検索条件を選択し、[検索] をクリックして検索条件に一致する管理者ユーザーまたはグループを検索します。 c 権限に含める管理者ユーザーまたはグループを選択して [OK] をクリックします。<Ctrl> + <Shift> キーを押すと、複数のユーザーやグループを選択できます。 d ロールをアクセス グループに適用しない場合、[終了] をクリックします。 e ロールをアクセス グループに適用する場合は、[次へ] をクリックし、1 つ以上のアクセス グループを選択して [終了] をクリックします。ロールには、アクセス グループに適用する少なくとも 1 つのオブジェクト固有権限が含まれている必要があります。
特定のアクセス グループを含む権限を作成する	<ol style="list-style-type: none"> a [アクセス グループ] タブで、アクセス グループを選択し、[権限を追加] をクリックします。 b [追加] をクリックして、1 つ以上の検索条件を選択し、[検索] をクリックして検索条件に一致する管理者ユーザーまたはグループを検索します。 c 権限に含める管理者ユーザーまたはグループを選択して [OK] をクリックします。<Ctrl> + <Shift> キーを押すと、複数のユーザーやグループを選択できます。 d [次へ] をクリックし、ロールを選択して [終了] をクリックします。ロールには、アクセス グループに適用する少なくとも 1 つのオブジェクト固有権限が含まれている必要があります。

権限の削除

特定の管理者ユーザーまたはグループ、特定のロール、または特定のアクセス グループを含む権限を削除できます。

管理者ユーザーまたはグループの最後の権限を削除すると、その管理者ユーザーまたはグループも削除されます。少なくとも 1 人の管理者がルート アクセス グループの Administrators（管理者）ロールを持つ必要があるため、その管理者が削除されるような権限の削除を行うことはできません。継承された権限は削除できません。

手順

- 1 View Administrator で、[View 構成] - [管理者] を選択します。

2 削除する権限を選択します。

オプション	操作
特定の管理者またはグループに適用される権限を削除する	[管理者とグループ] タブで管理者またはグループを選択します。
特定のロールに適用される権限を削除する	[ロール] タブでロールを選択します。
特定のアクセス グループに適用される権限を削除する	[アクセス グループ] タブでフォルダを選択します。

3 権限を選択し、[権限の削除] をクリックします。

権限の確認

特定の管理者またはグループ、特定のロール、または特定のアクセス グループを含む権限を確認できます。

手順

- 1 [View 構成] - [管理者] を選択します。
- 2 権限を確認します。

オプション	操作
特定の管理者またはグループを含む権限を確認する	[管理者とグループ] タブで管理者またはグループを選択します。
特定のロールを含む権限を確認する	[ロール] タブでロールを選択して、[アクセス権限] をクリックします。
特定のアクセス グループを含む権限を確認する	[アクセス グループ] タブでフォルダを選択します。

アクセス グループの管理と確認

View Administrator を使用して、アクセス グループを追加または削除したり、特定のアクセス グループ内のデスクトップ プールとマシンを確認したりできます。

■ アクセス グループの追加

アクセス グループを作成することにより、特定のマシン、デスクトップ プールまたはファームの管理を委任できます。デフォルトでは、デスクトップ プール、アプリケーション プールおよびファームは、ルート アクセス プールにあります。

■ 別のアクセス グループへのデスクトップ プールまたはファームの移動

アクセス グループの作成後、自動デスクトップ プール、手動プールまたはファームを新しいアクセス グループに移動できます。

■ アクセス グループの削除

オブジェクトが含まれていないアクセス グループは削除できます。ルート アクセス グループは削除できません。

■ アクセス グループ内のデスクトップ プール、アプリケーション プール、またはファームの確認

特定のアクセス グループ内のデスクトップ プール、アプリケーション プール、またはファームは View Administrator で確認できます。

■ アクセス グループ内の vCenter 仮想マシンの確認

View Administrator で特定のアクセス グループ内の vCenter 仮想マシンを表示できます。vCenter 仮想マシンは、そのプールからアクセス グループを継承します。

アクセス グループの追加

アクセス グループを作成することにより、特定のマシン、デスクトップ プールまたはファームの管理を委任できます。デフォルトでは、デスクトップ プール、アプリケーション プールおよびファームは、ルート アクセス プールにあります。

ルート アクセス グループを含む最大 100 のアクセス グループを保持できます。

手順

- 1 View Administrator で、[アクセス グループを追加] ダイアログ ボックスへ移動します。

オプション	操作
カタログから	<ul style="list-style-type: none"> ■ [カタログ] - [デスクトップ プール] を選択します。 ■ トップウィンドウ ペインの [アクセス グループ] ドロップダウン メニューから、[新しいアクセス グループ] を選択します。
リソースから	<ul style="list-style-type: none"> ■ [リソース] - [ファーム] を選択します。 ■ トップウィンドウ ペインの [アクセス グループ] ドロップダウン メニューから、[新しいアクセス グループ] を選択します。
View 構成から	<ul style="list-style-type: none"> ■ [View 構成] - [管理者] を選択します。 ■ [アクセス グループ] タブから、[アクセス グループを追加] を選択します。

- 2 アクセス グループの名前と説明を入力し、[OK] をクリックします。

説明はオプションです。

次のステップ

- 1 つ以上のオブジェクトをアクセス グループに移動します。

別のアクセス グループへのデスクトップ プールまたはファームの移動

アクセス グループの作成後、自動デスクトップ プール、手動プールまたはファームを新しいアクセス グループに移動できます。

手順

- 1 View Administrator で、[カタログ] - [デスクトップ プール] または [リソース] - [ファーム] を選択します。
- 2 プールまたはファームを選択します。
- 3 上部ウィンドウ ペインにある [アクセス グループ] のドロップダウン メニューから [アクセス グループを変更] を選択します。

4 アクセス グループを選択し、[OK] をクリックします。

View Administrator はプールを選択したアクセス グループに移動します。

アクセス グループの削除

オブジェクトが含まれていないアクセス グループは削除できます。ルート アクセス グループは削除できません。

前提条件

アクセス グループにオブジェクトが含まれている場合は、オブジェクトを別のアクセス グループまたはルート アクセス グループに移動します。[別のアクセス グループへのデスクトップ プールまたはファームの移動](#)を参照してください。

手順

- 1 View Administrator で、[View 構成] - [管理者] を選択します。
- 2 [アクセス グループ] タブでアクセス グループを選択して、[アクセス グループを削除] をクリックします。
- 3 [OK] をクリックしてアクセス グループを削除します。

アクセス グループ内のデスクトップ プール、アプリケーション プール、またはファームの確認

特定のアクセス グループ内のデスクトップ プール、アプリケーション プール、またはファームは View Administrator で確認できます。

手順

- 1 View Administrator で、オブジェクトのメイン ページに移動します。

オブジェクト	操作
デスクトップ プール	[カタログ] - [デスクトップ プール] を選択します。
アプリケーション プール	[カタログ] - [アプリケーション プール] を選択します。
ファーム	[リソース] - [ファーム] を選択します。

デフォルトでは、すべてのアクセス グループ内のオブジェクトが表示されます。

- 2 メイン ウィンドウ ペインの [アクセス グループ] ドロップダウン メニューから、アクセス グループを選択します。

選択したアクセス グループ内のオブジェクトが表示されます。

アクセス グループ内の vCenter 仮想マシンの確認

View Administrator で特定のアクセス グループ内の vCenter 仮想マシンを表示できます。vCenter 仮想マシンは、そのプールからアクセス グループを継承します。

手順

- 1 View Administrator で、[リソース] - [マシン] を選択します。

- 2 [vCenter 仮想マシン] タブを選択します。

デフォルトでは、すべてのアクセス グループ内の vCenter 仮想マシンが表示されます。

- 3 [アクセス グループ] ドロップダウン メニューからアクセス グループを選択します。

選択したアクセス グループ内の vCenter 仮想マシンが表示されます。

カスタム ロールの管理

View Administrator を使用して、カスタム ロールを追加、変更、および削除できます。

■ カスタム ロールの追加

定義済みの管理者ロールがニーズを満たしていない場合、View Administrator で特定の権限を組み合わせて独自のロールを作成できます。

■ カスタム ロールの権限の変更

カスタム ロール内の権限を変更できます。定義済みの管理者ロールを変更することはできません。

■ カスタム ロールの削除

権限に含まれていない場合は、カスタム ロールを削除できます。定義済みの管理者ロールを削除することはできません。

カスタム ロールの追加

定義済みの管理者ロールがニーズを満たしていない場合、View Administrator で特定の権限を組み合わせて独自のロールを作成できます。

前提条件

カスタム ロールの作成に使用できる管理者権限について理解しておきます。[定義済みのロールと権限](#)を参照してください。

手順

- 1 View Administrator で、[View 構成] - [管理者] を選択します。
- 2 [ロール] タブで [ロールを追加] をクリックします。
- 3 新しいロールの名前と説明を入力し、1 つ以上の権限を選択して、[OK] をクリックします。
左ペインに新しいロールが表示されます。

カスタム ロールの権限の変更

カスタム ロール内の権限を変更できます。定義済みの管理者ロールを変更することはできません。

前提条件

カスタム ロールの作成に使用できる管理者権限について理解しておきます。[定義済みのロールと権限](#)を参照してください。

手順

- 1 View Administrator で、[View 構成] - [管理者] を選択します。
- 2 [ルール] タブでルールを選択します。
- 3 [権限] をクリックしてルール内の権限を表示し、[編集] をクリックします。
- 4 権限を選択または選択解除します。
- 5 [OK] をクリックして変更を保存します。

カスタム ロールの削除

権限に含まれていない場合は、カスタム ロールを削除できます。定義済みの管理者ロールを削除することはできません。

前提条件

ルールが権限に含まれる場合は、権限を削除します。 [権限の削除](#) を参照してください。

手順

- 1 View Administrator で、[View 構成] - [管理者] を選択します。
- 2 [ルール] タブで、ルールを選択し、[ルールを削除] をクリックします。
[ルールを削除] ボタンは、定義済みルールや、権限に含まれるカスタム ロールに対しては使用できません。
- 3 [OK] をクリックしてルールを削除します。

定義済みのルールと権限

View Administrator には、管理者ユーザーおよびグループに割り当てることができる定義済みのルールがあります。選択した権限を組み合わせることで独自の管理者ロールを作成することもできます。

■ 定義済みの管理者ロール

定義済みの管理者ロールは、一般的な管理タスクの実行に必要な個別の権限をすべて組み合わせたものです。定義済みのルールを変更することはできません。

■ グローバル権限

グローバル権限は、グローバル設定の表示や変更などシステム全体の操作を制御します。グローバル権限のみを含むルールはアクセス グループに適用できません。

■ オブジェクト固有の権限

オブジェクト固有権限は、特定のタイプのインベントリ オブジェクトの操作を制御します。オブジェクト固有の権限を含むルールは、アクセス グループに適用することができます。

■ 内部権限

一部の定義済みの管理者ロールには、内部権限が含まれています。カスタム ロールを作成するときに内部権限を選択することはできません。

定義済みの管理者ロール

定義済みの管理者ロールは、一般的な管理タスクの実行に必要な個別の権限をすべて組み合わせたものです。定義済みのロールを変更することはできません。

表 6-6. View Administrator の定義済みロール で定義済みロールについて説明し、ロールをアクセス グループに適用できるかどうかを示します。

表 6-6. View Administrator の定義済みロール

ロール	ユーザーが可能な操作	アクセス グループに適用
管理者	<p>すべての管理者の操作を実行する（追加の管理者ユーザーおよびグループの作成を含む）。Cloud Pod アーキテクチャ環境では、このロールを持つ管理者は、ポッド フェデレーションの構成と管理およびリモート ポッド セッションの管理を行うことができます。</p> <p>ルート アクセス グループに対する管理者ロールを持つ管理者は、システムのすべてのインベントリ オブジェクトに対するフル アクセス権を持つことから、スーパー ユーザーと呼ばれます。Administrators（管理者）ロールにはすべての権限が含まれるため、限られたユーザーに割り当てるようにしてください。最初に、View 接続サーバ ホスト上のローカル管理者グループのメンバーに、ルート アクセス グループに対するこのロールが付与されます。</p> <p>重要: 次のタスクを実行するためには、管理者がルート アクセス グループに対する管理者ロールを備えている必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ アクセス グループを追加および削除する。 ■ View Administrator で ThinApp アプリケーションおよび構成設定を管理する。 ■ vdmadmin、vdmimport および lmvutil コマンドを使用する。 	はい
管理者（読み取り専用）	<ul style="list-style-type: none"> ■ グローバル設定とインベントリ オブジェクトを表示する（変更はできない）。 ■ ThinApp アプリケーションおよび設定を表示する（変更はできない）。 ■ すべての PowerShell コマンドやコマンドライン ユーティリティ（vdmexport など。vdmadmin、vdmimport および lmvutil は除く）を実行する。 <p>Cloud Pod アーキテクチャ環境では、このロールを持つ管理者は、グローバル データ レイヤでインベントリ オブジェクトと設定を表示できます。</p> <p>管理者がアクセス グループに対してこのロールを持つ場合、そのアクセス グループ内のインベントリ オブジェクトのみを表示できます。</p>	はい
Agent 登録管理者	物理システム、スタンドアロン仮想マシン、RDS ホストなどの非管理対象マシンを登録する。	いいえ
グローバル構成およびポリシー管理者	グローバル ポリシーと構成設定（管理者ロールと権限を除く）および ThinApp アプリケーションと設定を表示し、変更する。	いいえ
グローバル構成およびポリシー管理者（読み取り専用）	グローバル ポリシーと構成設定（管理者ロールと権限を除く）および ThinApp アプリケーションと設定を表示する（変更はできない）。	いいえ
インベントリ管理者	<ul style="list-style-type: none"> ■ すべてのマシン、セッション、およびプール関連の操作を実行する。 ■ 通常ディスクを管理します。 ■ リンク クローン プールを再同期、更新、再分散し、デフォルトのプール イメージを変更する。 <p>管理者がアクセス グループに対してこのロールを持つ場合、そのアクセス グループ内のインベントリ オブジェクトに対してのみこれらの操作を実行できます。</p>	はい

ロール	ユーザーが可能な操作	アクセス グループに適用
インベントリ管理者(読み取り専用)	インベントリ オブジェクトを表示する (変更はできない)。 管理者がアクセス グループに対してこのロールを持つ場合、そのアクセス グループ内のインベントリ オブジェクトのみを表示できます。	はい
ローカル管理者	すべてのローカル管理者操作を実行する (追加の管理者ユーザーおよびグループの作成を除く)。Cloud Pod アーキテクチャ環境では、このロールを持つ管理者は、グローバル データ レイヤで操作を実行したり、リモート ポッドでセッションを管理することはできません。	はい
ローカル管理者 (読み取り専用)	管理者 (読み取り専用) ロールと同じ (グローバル データ レイヤでのインベントリ オブジェクトおよび設定の表示を除く)。このロールを持つ管理者は、ローカル ポッドでのみ読み取り専用の権限を持ちます。	はい

グローバル権限

グローバル権限は、グローバル設定の表示や変更などシステム全体の操作を制御します。グローバル権限のみを含むロールはアクセス グループに適用できません。

[表 6-7. グローバル権限](#) でグローバル権限について説明し、各権限を含む定義済みのロールを示します。

表 6-7. グローバル権限

権限	ユーザーが可能な操作	定義済みロール
コンソール操作	View Administrator にログインし、使用する。	管理者 管理者 (読み取り専用) インベントリ管理者 インベントリ管理者 (読み取り専用) グローバル構成およびポリシー管理者 グローバル構成およびポリシー管理者 (読み取り専用)
直接操作	すべての PowerShell コマンドやコマンドライン ユーティリティ (vdmadmin および vdmimport 以外) を実行する。 vdmadmin、vdmimport、および lmvutil コマンドを使用する管理者には、ルート アクセス グループに対する管理者ロールが必要です。	管理者 管理者 (読み取り専用)
グローバル構成とポリシーを管理	グローバル ポリシーおよび構成設定 (管理者ロールおよび権限を除く) を表示し、変更する。	管理者 グローバル構成およびポリシー管理者
グローバル セッションを管理	グローバル セッションはクラウド ポッド アーキテクチャ環境で管理します。	管理者
ロールと権限を管理	管理者ロールおよび権限を作成、変更、削除する。	管理者
エージェントを登録	物理システム、スタンドアロン仮想マシン、RDS ホストなどの非管理対象マシンに Horizon Agent をインストールする。 Horizon Agent のインストール時に、管理者ログイン認証情報を指定し、View 接続サーバインスタンスに非管理対象マシンを登録する必要があります。	管理者 エージェント登録管理者

オブジェクト固有の権限

オブジェクト固有権限は、特定のタイプのインベントリ オブジェクトの操作を制御します。オブジェクト固有の権限を含むロールは、アクセス グループに適用することができます。

表 6-8. オブジェクト固有の権限 では、オブジェクト固有権限について説明します。定義済みのロール Administrators（管理者）および Inventory Administrators（インベントリ管理者）にはこれらのすべての権限が含まれます。

表 6-8. オブジェクト固有の権限

権限	ユーザーが可能な操作	オブジェクト
ファームおよびデスクトップ プールを有効にする	デスクトップ プールを有効または無効にする。	デスクトップ プール、ファーム
デスクトップおよびアプリケーション プールに資格を割り当てる	ユーザーの資格を追加または削除する。	デスクトップ プール、アプリケーション プール
Composer デスクトップ プール イメージを管理	リンク クローン プールを再同期、更新、再分散し、デフォルトのプール イメージを変更する。	デスクトップ プール
マシンを管理	すべてのマシンおよびセッション関連の操作を実行します。	マシン
通常ディスクを管理	View Composer の通常ディスクの操作を実行する（通常ディスクの接続、切断、インポートなど）。	通常ディスク
ファーム、デスクトップおよびアプリケーション プールを管理	ファームを追加、変更、削除します。デスクトップおよびアプリケーション プールの追加、変更、削除、資格割り当てを行います。マシンを追加および削除します。	デスクトップ プール、アプリケーション プール、ファーム
セッションを管理	セッションを切断してログオフし、ユーザーにメッセージを送信します。	セッション
再起動操作を管理	マシンをリセットします。	マシン

内部権限

一部の定義済みの管理者ロールには、内部権限が含まれています。カスタム ロールを作成するときに内部権限を選択することはできません。

表 6-9. 内部権限 に内部権限と、各権限を含む定義済みのロールを示します。

表 6-9. 内部権限

権限	説明	定義済みロール
Full (Read only) (フル (読み取り専用))	すべての設定への読み取り専用アクセス権を付与します。	Administrators (Read only) (管理者 (読み取り専用))
Manage Inventory (Read only) (インベントリの管理 (読み取り専用))	インベントリ オブジェクトへの読み取り専用アクセス権を付与します。	Inventory Administrators (Read only) (インベントリ管理者 (読み取り専用))
Manage Global Configuration and Policies (Read only) (グローバル構成とポリシーの管理 (読み取り専用))	構成設定およびグローバル ポリシー (管理者とロールを除く) への読み取り専用アクセス権を付与します。	Global Configuration and Policy Administrators (Read only) (グローバル構成およびポリシー管理者 (読み取り専用))

一般的なタスクに必要な権限

多くの一般的な管理者タスクには、調整された一連の権限が必要です。一部の操作では、操作対象のオブジェクトへのアクセスに加えて、ルート アクセス グループでの権限が必要です。

プール管理のための権限

管理者が View Administrator でプールを管理するためには、特定の権限が必要です。

[表 6-10. プール管理タスクと権限](#)に、一般的なプール管理タスクを一覧表示し、各タスクを実行するために必要となる権限を示しています。

表 6-10. プール管理タスクと権限

タスク	必要な権限
デスクトップ プールを有効または無効にする	ファームおよびデスクトップ プールを有効にする
プールに対する資格をユーザーに付与する、または資格を取り消す	デスクトップおよびアプリケーション プールに資格を割り当てる
プールを追加する	ファーム、デスクトップおよびアプリケーション プールを管理
プールを変更または削除する	ファーム、デスクトップおよびアプリケーション プールを管理
プールにデスクトップを追加またはプールからデスクトップを削除する	ファーム、デスクトップおよびアプリケーション プールを管理
デフォルトの View Composer イメージを更新、再構成、再分散、または変更する	Composer デスクトップ プールイメージを管理
アクセス グループを変更	ソースおよびターゲット アクセス グループでの [ファーム、デスクトップおよびアプリケーション プールを管理]。

マシン管理のための権限

管理者が View Administrator でマシンを管理するためには、特定の権限が必要です。

[表 6-11. マシン管理タスクと権限](#)に、一般的なマシン管理タスクを一覧表示し、各タスクを実行するために必要な権限を示しています。

表 6-11. マシン管理タスクと権限

タスク	必要な権限
仮想マシンを削除する	マシンを管理
仮想マシンをリセットする	再起動操作を管理
ユーザー所有権を割り当てる、または削除する	マシンを管理
メンテナンス モードに切り替える、またはメンテナンス モードを終了する	マシンを管理
セッションから切断またはログオフする	セッションを管理

通常ディスク管理のための権限

管理者が View Administrator で通常ディスクを管理するためには、特定の権限が必要です。

表 6-12. [通常ディスク管理タスクと権限](#) に一般的な通常ディスクの管理タスクを一覧表示して、各タスクを実行するために必要な権限を示します。これらのタスクは View Administrator の Persistent Disks（通常ディスク） ページで実行します。

表 6-12. 通常ディスク管理タスクと権限

タスク	必要な権限
ディスクを切断する	ディスクに対する通常ディスクを管理、およびプールに対するファーム、デスクトップおよびアプリケーション プールを管理。
ディスクの接続	マシンに対する通常ディスクを管理、およびマシンに対するファーム、デスクトップおよびアプリケーション プールを管理。
ディスクの編集	ディスクに対する通常ディスクを管理、および選択したプールに対するファーム、デスクトップおよびアプリケーション プールを管理。
アクセス グループを変更	ソースおよびターゲットのアクセス グループに対する通常ディスクを管理。
デスクトップを再作成する	ディスクに対する通常ディスクを管理、最後のプールに対するファーム、デスクトップおよびアプリケーション プールを管理。
vCenter からインポートする	フォルダに対する通常ディスクを管理、およびプールに対するプールの管理。
ディスクを削除する	ディスクに対する通常ディスクを管理。

ユーザーと管理者の管理のための権限

管理者が View Administrator でユーザーと管理者を管理するためには、特定の権限が必要です。

表 6-13. [ユーザーと管理者の管理タスクと権限](#) に、一般的なユーザーと管理者の管理タスクの一覧と、各タスクの実行に必要な権限を示します。ユーザーの管理は View Administrator の Users and Groups（ユーザーとグループ） ページで行います。管理者の管理は View Administrator の Global Administrators View（グローバル管理者ビュー） ページで行います。

表 6-13. ユーザーと管理者の管理タスクと権限

タスク	必要な権限
一般的なユーザー情報を更新する	グローバル構成とポリシーを管理
ユーザーにメッセージを送信する	マシン上のリモート セッションの管理。
管理者ユーザーまたはグループを追加する	ロールと権限を管理
管理者の権限を追加、変更、または削除する	ロールと権限を管理
管理者ロールを追加、修正、または削除する	ロールと権限を管理

一般的な管理タスクと管理コマンドのための権限

管理者が一般的な管理タスクを実行したりコマンド ライン ユーティリティを実行したりするには、特定の権限が必要です。

表 6-14. [一般的な管理タスクと管理コマンドのための権限](#) に、一般的な管理タスクやコマンド ライン ユーティリティを実行するために必要な権限を示します。

表 6-14. 一般的な管理タスクと管理コマンドのための権限

タスク	必要な権限
アクセス グループを追加または削除する	ルート アクセス グループに対する管理者ロールが必要。
View Administrator で ThinApp アプリケーションおよび設定を管理する	ルート アクセス グループに対する管理者ロールが必要。
物理システム、スタンドアロン仮想マシン、RDS ホストなどの非管理対象マシンに Horizon Agent をインストールする	エージェントを登録
View Administrator で構成設定（管理者向けを除く）を表示または修正する	グローバル構成とポリシーを管理
すべての PowerShell コマンドやコマンド ライン ユーティリティ（vdmadmin および vdmimport 以外）を実行する。	直接操作
vdmadmin および vdmimport コマンドを使用する	ルート アクセス グループに対する管理者ロールが必要。
vdmexport コマンドを使用する	ルート アクセス グループに対する管理者ロールまたは管理者（読み取り専用）ロールが必要。

管理者ユーザーおよびグループに関するベスト プラクティス

View 環境のセキュリティと管理性を高めるために、管理者ユーザーおよびグループを管理するときのベスト プラクティスに従うようにしてください。

- Active Directory に新しいユーザー グループを作成して、作成したグループに View 管理者ロールを割り当てます。View 権限を持つ必要のない、または持つべきではないユーザーが含まれる可能性があるため、Windows のビルトイン グループやその他の既存グループは使用しないようにします。
- View 管理権限を持つユーザーの数は最小限にします。
- 管理者ロールにはすべての権限が含まれるため、日常的な管理に管理者ロールを使用しないでください。

- 目につきやすく推測が容易なため、管理者ユーザーおよびグループを作成するときは Administrator という名前の使用を避けます。
- アクセス グループを作成して、機密情報を扱うデスクトップとファームを分離します。それらのアクセス グループの管理を限られたユーザーに委任します。
- グローバル ポリシーと View 構成設定を変更できる管理者を別途作成します。

View Administrator および Active Directory のポリシーの構成

7

View Administrator を使用してクライアント セッションのポリシーを設定できます。View 接続サーバ、PCoIP 表示プロトコル、および View のログの動作、およびパフォーマンス アラームを制御する Active Directory グループ ポリシー設定を構成できます。

Horizon Agent、Windows 版 Horizon Client、View Persona Management、および特定の機能の動作を制御する Active Directory グループ ポリシー設定を構成することもできます。これらのポリシー設定の詳細については、『View でのデスクトップ プールとアプリケーション プールの設定』を参照してください。

この章には、次のトピックが含まれています。

- [View Administrator でのポリシーの設定](#)
- [View グループ ポリシー管理用テンプレート ファイルの使用](#)

View Administrator でのポリシーの設定

View Administrator を使用して、クライアント セッションのポリシーを構成できます。

これらのポリシーを設定して、特定のユーザー、特定のデスクトップ プール、またはすべてのクライアント セッション ユーザーに適用できます。特定のユーザーとデスクトップ プールに適用するポリシーは、ユーザー レベルのポリシーおよびデスクトップ プール レベルのポリシーと呼ばれます。すべてのセッションとユーザーに適用するポリシーはグローバル ポリシーと呼ばれます。

ユーザー レベルのポリシーでは、対応するデスクトップ プール レベルのポリシー設定から設定が継承されます。同様に、デスクトップ プール レベルのポリシーでは、対応するグローバル ポリシー設定から設定が継承されます。デスクトップ プール レベルのポリシー設定は、対応するグローバル ポリシー設定より優先されます。ユーザー レベルのポリシー設定は、対応するグローバル ポリシー設定およびデスクトップ プール レベルのポリシー設定より優先されます。

低いレベルのポリシー設定は、対応する高いレベルの設定より、制限を厳しくすることも緩くすることもできます。たとえば、グローバル ポリシーを [拒否] に設定し、対応するデスクトップ プール レベルのポリシーを [許可] に設定することも、この逆に設定することもできます。

注: RDS デスクトップおよびアプリケーション プールでは、グローバル ポリシーのみを使用できます。RDS デスクトップおよびアプリケーション プールに対して、ユーザー レベル ポリシーまたはプール レベル ポリシーを設定することはできません。

■ グローバル ポリシー設定の構成

すべてのクライアント セッション ユーザーの動作を制御するグローバル ポリシーを構成できます。

■ デスクトップ プールのポリシーの構成

特定のデスクトップ プールに影響を与えるデスクトップ レベルのポリシーを構成できます。デスクトップ レベルのポリシー設定は、対応するグローバル ポリシー設定より優先されます。

■ ユーザーのポリシーの構成

特定のユーザーに影響を与えるユーザー レベルのポリシーを構成できます。ユーザー レベルのポリシー設定は、常に、対応するグローバルおよびデスクトップ プール レベルのポリシー設定より優先されます。

■ View ポリシー

すべてのクライアント セッションに影響を与えるように View ポリシーを構成することも、特定のデスクトップ プールまたはユーザーに影響を与えるように View ポリシーを適用することもできます。

グローバル ポリシー設定の構成

すべてのクライアント セッション ユーザーの動作を制御するグローバル ポリシーを構成できます。

前提条件

ポリシーの説明を理解しておきます。[View ポリシー](#)を参照してください。

手順

- 1 View Administrator で、[ポリシー] - [グローバル ポリシー] を選択します。
- 2 [View ポリシー] ペインで [ポリシーを編集] をクリックします。
- 3 [OK] をクリックして変更を保存します。

デスクトップ プールのポリシーの構成

特定のデスクトップ プールに影響を与えるデスクトップ レベルのポリシーを構成できます。デスクトップ レベルのポリシー設定は、対応するグローバル ポリシー設定より優先されます。

前提条件

ポリシーの説明を理解しておきます。[View ポリシー](#)を参照してください。

手順

- 1 View Administrator で、[カタログ] - [デスクトップ プール] を選択します。

- 2 デスクトップ プールの ID をダブルクリックし、[ポリシー] タブをクリックします。

[ポリシー] タブには、現在のポリシー設定が表示されます。設定が対応するグローバル ポリシーから継承されている場合は、[デスクトップ プール ポリシー] 列に [継承] と表示されます。

- 3 [View ポリシー] ペインで [ポリシーを編集] をクリックします。
- 4 [OK] をクリックして変更を保存します。

ユーザーのポリシーの構成

特定のユーザーに影響を与えるユーザー レベルのポリシーを構成できます。ユーザー レベルのポリシー設定は、常に、対応するグローバルおよびデスクトップ プール レベルのポリシー設定より優先されます。

前提条件

ポリシーの説明を理解しておきます。[View ポリシー](#)を参照してください。

手順

- 1 View Administrator で、[カタログ] - [デスクトップ プール] を選択します。
- 2 デスクトップ プールの ID をダブルクリックし、[ポリシー] タブをクリックします。

[ポリシー] タブには、現在のポリシー設定が表示されます。設定が対応するグローバル ポリシーから継承されている場合は、[デスクトップ プール ポリシー] 列に [継承] と表示されます。
- 3 [ユーザーによる上書き] をクリックし、[ユーザーの追加] をクリックします。
- 4 ユーザーを見つけるには、[追加] をクリックし、ユーザーの名前または説明を入力して、[検索] をクリックします。
- 5 リストから 1 名以上のユーザーを選択し、[OK] をクリックし、[次へ] をクリックします。

Add Individual Policy (個別のポリシーの追加) ダイアログ ボックスが表示されます。
- 6 View ポリシーを構成し、[終了] をクリックして変更を保存します。

View ポリシー

すべてのクライアント セッションに影響を与えるように View ポリシーを構成することも、特定のデスクトップ プールまたはユーザーに影響を与えるように View ポリシーを適用することもできます。

[表 7-1. View ポリシー](#) 各 View ポリシー設定について説明します。

表 7-1. View ポリシー

ポリシー	説明
マルチメディア リダイレクト (MMR)	<p>クライアント システムで MMR を有効にするかどうかを指定します。</p> <p>MMR は Windows Media Foundation のフィルタであり、マルチメディア データをリモート デスクトップ上の特定のコーデックから TCP ソケット経由で直接クライアント システムに転送します。その後、データはクライアント システム上で直接デコードされ、そこで再生されます。</p> <p>デフォルト値は [拒否] です。</p> <p>クライアント システムにローカル マルチメディアのデコードを処理する十分なリソースがない場合、設定を [拒否] のままにします。</p> <p>マルチメディア リダイレクト (MMR) データは、アプリケーション ベースの暗号化なしでネットワークを介して送信され、リダイレクトされる内容によっては機密データが含まれる場合があります。このデータがネットワークで盗まれないことを保証するには、セキュア ネットワークで MMR だけを使用してください。</p>
USB Access (USB アクセス)	<p>リモート デスクトップがクライアント システムに接続されている USB デバイスを使用できるかどうかを指定します。</p> <p>デフォルト値は [許可] です。セキュリティ上の理由のため、外部デバイスを使用できないようにするには、設定を [拒否] に変更します。</p>
PCoIP ハードウェアのアクセラレーション	<p>PCoIP 表示プロトコルのハードウェアのアクセラレーションを有効にするかどうか、および PCoIP ユーザー セッションに割り当てられるアクセラレーションの優先度を指定します。</p> <p>この設定は、リモート デスクトップをホストする物理コンピュータ上に PCoIP ハードウェアのアクセラレーション デバイスが存在する場合にのみ有効です。</p> <p>デフォルト値は [許可] で、優先度が [中] です。</p>

View グループ ポリシー管理用テンプレート ファイルの使用

View には、コンポーネント固有のグループ ポリシー管理用 (ADM および ADMX) テンプレート ファイルがいくつか含まれています。これらの ADM および ADMX テンプレート ファイル内のポリシー設定を Active Directory 内の新しい GPO または既存の GPO に追加することによって、リモート デスクトップとアプリケーションを最適化し、セキュリティ保護することができます。

View のグループ ポリシー設定を提供する ADM および ADMX ファイルはすべて、VMware-Horizon-Extras-Bundle-x.x.x-yyyyyyy.zip という .zip バンドル ファイル内にあります。x.x.x はバージョン、yyyyyyy はビルド番号です。このファイルは、<https://my.vmware.com/web/vmware/downloads> の VMware ダウンロード サイトからダウンロードできます。[Desktop & End-User Computing (デスクトップおよびエンドユーザー コンピューティング)] で VMware Horizon 7 のダウンロードを選択します。これには .zip バンドル ファイルが含まれます。

View の ADM および ADMX テンプレート ファイルには、コンピュータの構成とユーザーの構成の両方のグループ ポリシーが含まれています。

- コンピュータの構成ポリシーは、だれがデスクトップに接続するかにはかかわらず、すべてのリモート デスクトップに適用されるポリシーを設定します。
- ユーザーの構成ポリシーは、ユーザーが接続するリモート デスクトップやアプリケーションにはかかわらず、すべてのユーザーに適用されるポリシーを設定します。ユーザーの構成ポリシーは、対応するコンピュータの構成ポリシーより優先されます。

Microsoft Windows は、デスクトップの起動時とユーザーのログイン時にポリシーを適用します。

View ADM および ADMX テンプレート ファイル

View ADM および ADMX テンプレート ファイルでは、View コンポーネントを制御および最適化できるグループ ポリシー設定が提供されます。

表 7-2. View ADM および ADMX テンプレート ファイル

テンプレート名	テンプレートファイル	説明
Horizon Agent 構成	vdm_agent.adm	Horizon Agent の認証および環境コンポーネントに関するポリシー設定が含まれています。 『View でのデスクトップ プールとアプリケーション プールの設定』を参照してください。
Horizon Client 構成	vdm_client.adm	Windows 版 Horizon Client に関するポリシー設定が含まれています。 View 接続サーバ ホスト ドメインの外部から接続するクライアントは、Horizon Client に適用されるポリシーの影響を受けません。 『Windows 版 VMware Horizon Client の使用』を参照してください。
VMware Horizon URL リダイレクト	urlRedirection-enUS.adm	URL コンテンツ リダイレクト機能に関するポリシー設定が含まれています。このテンプレートをリモート デスクトップ プールまたはアプリケーション プールの GPO に追加すると、リモート デスクトップまたはアプリケーション内でクリックされた特定の URL リンクを Windows ベースのクライアントにリダイレクトし、クライアント側のブラウザで開くことができます。 このテンプレートをクライアント側の GPO に追加すると、ユーザーが Windows ベースのクライアント システムで特定の URL リンクをクリックしたときに、リモート デスクトップまたはアプリケーションで URL を開くことができます。 『View でのデスクトップ プールとアプリケーション プールの設定』および『Windows 版 VMware Horizon Client の使用』を参照してください。
View Server の構成	vdm_server.adm	View 接続サーバに関するポリシー設定が含まれています。 View Server 構成 ADM テンプレート設定 を参照してください。
View Common の構成	vdm_common.adm	すべての View コンポーネントに共通のポリシー設定が含まれています。 View Common の構成 ADM テンプレート設定 を参照してください。
View PCoIP のセッション変数	pcoip.adm	PCoIP 表示プロトコルに関するポリシー設定が含まれています。 『View でのデスクトップ プールとアプリケーション プールの設定』を参照してください。

テンプレート名	テンプレート ファイル	説明
View PCoIP クライアントのセッション変数	pcoip.client.adm	Windows 版 Horizon Client に影響を与える PCoIP 表示プロトコルに関するポリシー設定が含まれています。 『Windows 版 VMware Horizon Client の使用』を参照してください。
View Persona Management 構成	ViewPM.adm ViewPM.admx	View Persona Management に関するポリシー設定が含まれています。 『View でのデスクトップ プールとアプリケーション プールの設定』を参照してください。
View リモート デスクトップ サービス	vmware_rdsh.admx vmware_rdsh_server.admx	リモート デスクトップ サービスに関するポリシー設定が含まれています。 『View でのデスクトップ プールとアプリケーション プールの設定』を参照してください。
リアルタイム オーディオビデオ構成	vdm_agent_rtav.adm	リアルタイム オーディオ ビデオ機能で使用する Web カメラに関するポリシー設定が含まれています。 『View でのデスクトップ プールとアプリケーション プールの設定』を参照してください。
スキャナ リダイレクト	vdm_agent_scanner.adm	リモート デスクトップおよびアプリケーションで使用するためにリダイレクトされるスキャン デバイスに関するポリシー設定が含まれています。 『View でのデスクトップ プールとアプリケーション プールの設定』を参照してください。
シリアル ポート リダイレクト	vdm_agent_serialport.adm	リモート VDI デスクトップで使用するためにリダイレクトされるシリアル (COM) ポートに関するポリシー設定が含まれています。 『View でのデスクトップ プールとアプリケーション プールの設定』を参照してください。

View Server 構成 ADM テンプレート設定

View Server の構成 ADM テンプレート ファイル (vdm_server.adm) には、すべての View 接続サーバに関連するポリシー設定が含まれています。

[表 7-3. View Server の構成テンプレート設定](#)は、View Server Configuration ADM テンプレート ファイルの View Server 構成の各ポリシー設定について記載します。このテンプレートには、コンピュータの構成設定のみが含まれません。

表 7-3. View Server の構成テンプレート設定

設定	プロパティ
Recursive Enumeration of Trusted Domains	<p>サーバが存在するドメインによって信頼されるドメインをすべて列挙するかどうかを指定します。完全な信頼チェーンを確立するために、信頼される側の各ドメインによって信頼されるドメインも列挙され、信頼されるすべてのドメインが検索されるまでプロセスが再帰的に続行します。クライアントがログイン時に信頼されるすべてのドメインを使用できるように、この情報は View 接続サーバに渡されます。</p> <p>デフォルトでは、この設定は有効になっています。無効にすると、直接信頼されるドメインのみが列挙され、リモート ドメイン コントローラには接続されません。</p> <p>ドメイン関係が複雑な環境（フォレスト内のドメイン間で信頼を持つ複数のフォレスト構造を使用する環境など）では、このプロセスが完了するまでに数分かかる場合があります。</p>

View Common の構成 ADM テンプレート設定

View Common の構成 ADM テンプレート ファイル (vdm_common.adm) には、すべての View コンポーネントに共通のポリシー設定が含まれています。このテンプレートには、コンピュータの構成設定のみが含まれます。

ログ構成設定

[表 7-4. View Common の構成テンプレート：ログ構成設定](#) で、View Common の構成 ADM テンプレート ファイル内のログ構成のポリシー設定について説明します。

表 7-4. View Common の構成テンプレート：ログ構成設定

設定	プロパティ
Number of days to keep production logs	ログ ファイルをシステムに保持する日数を指定します。値が設定されていない場合、デフォルト値が適用され、ログ ファイルは 7 日間保持されます。
Maximum number of debug logs	システムで保持するデバッグ ログ ファイルの最大数を指定します。ログ ファイルが最大サイズに達すると、新しいエントリは追加されず、新しいログ ファイルが作成されます。以前のログ ファイル数がこの値に達すると、最も古いログ ファイルが削除されます。
Maximum debug log size in Megabytes	デバッグ ログの最大サイズをメガバイト単位で指定します。このサイズに達すると、デバッグ ログ ファイルが閉じられ、新しいログ ファイルが作成されます。

設定	プロパティ
Log Directory	ログ ファイルのディレクトリの完全パスを指定します。この場所が書き込み可能でない場合、デフォルトの場所が使用されます。クライアント ログ ファイルの場合は、クライアント名で追加のディレクトリが作成されます。
Send logs to a Syslog server	<p>View server のログを、VMware vCenter Log Insight などの Syslog サーバに送信できます。ログは、この GPO が構成されている OU またはドメイン内のすべての View server から送信されます。</p> <p>デスクトップを含む OU にリンクされている GPO でこの設定を有効にすることで、Horizon Agent のログを Syslog サーバに送信できます。</p> <p>Syslog サーバにログ データを送信するには、この設定を有効にして、ログ レベルおよびサーバの完全修飾ドメイン名 (FQDN) または ID アドレスを指定します。デフォルトのポート 514 を使用しない場合は代替ポートを指定できます。縦棒 () で仕様内の各要素を区切ります。次の構文を使用します:</p> <p>Log Level Server FQDN or IP [Port number(514 default)]</p> <p>例: Debug 192.0.2.2</p> <p>重要: Syslog データは、ソフトウェアベースの暗号化なしにネットワーク経由で送信されます。View server のログには機密データが含まれていることがあるため、Syslog データを安全でないネットワーク上で送信しないようにします。可能であれば、IPsec などのリンク レイヤ セキュリティを使用して、こうしたデータがネットワーク上で監視されることを防ぎます。</p>

パフォーマンス アラーム設定

表 7-5. View Common の構成テンプレート : パフォーマンス アラーム設定 で、View Common の構成 ADM テンプレート ファイル内のパフォーマンス アラーム設定について説明します。

表 7-5. View Common の構成テンプレート : パフォーマンス アラーム設定

設定	プロパティ
CPU and Memory Sampling Interval in Seconds	CPU およびメモリのポーリング間隔を指定します。サンプリング間隔を小さくすると、ログへの出力レベルが高くなる可能性があります。
Overall CPU usage percentage to issue log info	システムの CPU 合計使用率をログに記録するしきい値を指定します。複数のプロセッサを使用できる場合、このパーセンテージは組み合わされた使用率を表します。
Overall memory usage percentage to issue log info	コミットされたシステム メモリの合計使用率をログに記録するしきい値を指定します。コミットされたシステム メモリは、プロセッサによって割り当てられ、オペレーティングシステムが物理メモリまたはページファイルのページ スロットをコミットしたメモリです。
Process CPU usage percentage to issue log info	各プロセスの CPU 使用率がログに記録されるしきい値を指定します。

設定	プロパティ
Process memory usage percentage to issue log info	各プロセスのメモリ使用率がログに記録されるしきい値を指定します。
Process to check, comma separated name list allowing wild cards and exclusion	<p>調査する 1 つ以上のプロセス名に対応する、クエリーのカンマ区切りのリストを指定します。各クエリー内でワイルドカードを使用して、リストをフィルタ処理できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ アスタリスク (*) は 0 文字以上に一致します。 ■ 疑問符 (?) は 1 文字に一致します。 ■ クエリーの先頭の感嘆符 (!) は、そのクエリーによって生成されるすべての結果を除外します。 <p>たとえば、次のクエリーは ws で始まるすべてのプロセスを選択し、sys で終わるすべてのプロセスを除外します。</p> <p>'! *sys,ws*'</p>

注: パフォーマンス アラーム設定は、View 接続サーバと Horizon Agent システムにのみ適用されます。Horizon Client システムには適用されません。

全般設定

表 7-6. View Common の構成テンプレート：全般設定 で、View Common の構成 ADM テンプレート ファイル内の全般設定について説明します。

表 7-6. View Common の構成テンプレート：全般設定

設定	プロパティ
Disk threshold for log and events in Megabytes	ログおよびイベント用のディスク空き領域の最小しきい値を指定します。値を指定しない場合、デフォルトは 200 です。指定した値に達すると、イベント ログの作成が停止します。
Enable extended logging	トレースおよびデバッグのイベントをログ ファイルに記録するかどうかを指定します。

View コンポーネントの保守

View コンポーネントが常に使用でき、実行し続けるように、さまざまな保守タスクを実行できます。

この章には、次のトピックが含まれています。

- View 構成データのバックアップと復元
- View コンポーネントの監視
- マシンのステータスの監視
- View サービスの概要
- 製品のライセンス キーの変更
- 製品ライセンスの使用状況の監視
- Active Directory からの一般的なユーザー情報の更新
- 別のマシンへの View Composer の移行
- View 接続サーバインスタンス、セキュリティ サーバ、または View Composer で証明書を更新する
- カスタマー エクスペリエンス改善プログラムによって収集される情報

View 構成データのバックアップと復元

View Administrator で自動バックアップをスケジュール設定するか実行して、View と View Composer の構成データをバックアップできます。View 構成を復元するには、バックアップした View LDAP ファイルと View Composer データベース ファイルを手動でインポートします。

バックアップ機能と復元機能を使用して、View 構成データを保持および移行できます。

View 接続サーバと View Composer のデータのバックアップ

View 接続サーバの初期構成が完了したら、View と View Composer の構成データの定期的なバックアップをスケジュール設定する必要があります。View Administrator を使用して、View と View Composer のデータを保持できます。

View は、View 接続サーバの構成データを View LDAP リポジトリに保存します。View Composer はリンク クローン デスクトップの構成データを View Composer データベースに保存します。

View Administrator を使用してバックアップを実行すると、View が View LDAP 構成データと View Composer データベースをバックアップします。両方のバックアップ ファイル セットは同じ場所に保存されます。View LDAP データは暗号化された LDAP データ交換形式 (LDIF) でエクスポートされます。View LDAP については、[View LDAP ディレクトリ](#)を参照してください。

バックアップは複数の方法で実行できます。

- View 構成バックアップ機能を使用して自動バックアップをスケジュール設定します。
- View Administrator の [今すぐバックアップ] 機能を使用してすぐにバックアップを開始します。
- `vdmexport` ユーティリティを使用して、手動で View LDAP データをエクスポートします。このユーティリティは、View 接続サーバの各インスタンスで提供されます。

`vdmexport` ユーティリティは、View LDAP データを暗号化された LDIF データ、プレーン テキスト、パスワードなどの機密データが削除されたプレーン テキストとしてエクスポートできます。

注: `vdmexport` ツールは View LDAP データのみをバックアップします。このツールは View Composer データベース情報はバックアップしません。

`vdmexport` の詳細については、[View 接続サーバにらの構成データのエクスポート](#)を参照してください。

次のガイドラインは、View 構成データのバックアップに適用されます。

- View は任意の View 接続サーバ インスタンスから構成データをエクスポートできます。
- 複製されたグループに複数の View 接続サーバ インスタンスがある場合は、1 つのインスタンスのデータをエクスポートするだけで済みます。複製されたすべてのインスタンスに同じ構成データが含まれています。
- View 接続サーバの複製されたインスタンスを使用しているからといって、バックアップ メカニズムが機能していると考えないでください。View が View 接続サーバの複製されたインスタンスのデータの同期を実行するとき、1 つのインスタンスで何らかのデータが失われていると、グループのすべてのメンバーでそのデータが失われる可能性があります。
- View 接続サーバが複数の View Composer サービスで複数の vCenter Server インスタンスを使用する場合、View は vCenter Server インスタンスに関連付けられているすべての View Composer データベースをバックアップします。

View 構成バックアップのスケジュール

View 構成データを定期的にバックアップするようにスケジュールを設定できます。View は View 接続サーバ インスタンスが構成データを格納する View LDAP リポジトリの内容をバックアップします。

構成をすぐにバックアップするには、View 接続サーバ インスタンスを選択し、[今すぐバックアップ] をクリックします。

前提条件

バックアップ設定について理解しておきます。[View 構成バックアップ設定](#)を参照してください。

手順

- 1 View Administrator で、[View 構成] - [サーバ] を選択します。

- 2 [接続サーバ] タブで、バックアップ対象の View 接続サーバ インスタンスを選択して [編集] をクリックします。
- 3 [バックアップ] タブで、View 構成バックアップ設定を指定して、バックアップの頻度、バックアップの最大数、バックアップ ファイルのフォルダの場所を設定します。
- 4 (オプション) データ リカバリのパスワードを変更します。
 - a [データ リカバリのパスワードを変更] をクリックします。
 - b 新しいパスワードを 2 回入力します。
 - c (オプション) パスワードを忘れた場合のヒントを入力します。
 - d [OK] をクリックします。
- 5 [OK] をクリックします。

View 構成バックアップ設定

View では、View 接続サーバと View Composer の構成データを定期的にバックアップできます。View Administrator で、バックアップ処理の頻度とその他の側面を設定できます。

表 8-1. View 構成バックアップ設定

設定	説明
Automatic backup frequency (自動バックアップの頻度)	Every Hour (1 時間ごと) : 1 時間ごとにバックアップを行います。 Every 6 Hours (12 時間ごと) : 午前 0 時、午前 6 時、午後 0 時、午後 6 時にバックアップを行います。 Every 12 Hours (12 時間ごと) : 午前 0 時と午後 0 時にバックアップを行います。 Every Day (毎日) : 毎日午前 0 時にバックアップを行います。 Every 2 Days (2 日ごと) : 土曜日、月曜日、水曜日、金曜日の午前 0 時にバックアップを行います。 Every Week (毎週) : 毎週、土曜日の午前 0 時にバックアップを行います。 Every 2 Weeks (2 週ごと) : 2 週ごとの土曜日の午前 0 時にバックアップを行います。 Never (バックアップしない) : 自動バックアップを行いません。
Max number of backups (バックアップの最大数)	View 接続サーバ インスタンスに格納できるバックアップ ファイル数です。この数には、0 より大きい整数を指定する必要があります。 最大数に達すると、View は最も古いバックアップ ファイルを削除します。 この設定は、[今すぐバックアップ] を使用した場合に作成されるバックアップ ファイルにも適用されます。
フォルダの場所	View 接続サーバが実行されているコンピュータ上のバックアップ ファイルのデフォルトの場所 : C:\Programdata\VMWare\VDM\backups [今すぐバックアップ] を使用した場合も、View ではこの場所にバックアップ ファイルを保存します。

View 接続サーバにらの構成データのエクスポート

View LDAP リポジトリの内容をエクスポートして、View 接続サーバ インスタンスの構成データをバックアップできます。

vdmexport コマンドを使用して、View LDAP 構成データを暗号化された LDIF ファイルにエクスポートします。
 vdmexport -v (逐語的) オプションを使用してデータをプレーン テキスト LDIF ファイルにエクスポートすることも、
 vdmexport -c (洗浄済み) オプションを使用してデータをパスワードなどの機密データが削除されたプレーン
 テキストとしてエクスポートすることもできます。

任意の View 接続サーバ インスタンスで `vdmexport` コマンドを実行できます。複製されたグループに複数の View 接続サーバ インスタンスがある場合は、1 つのインスタンスのデータをエクスポートするだけで済みます。複製されたすべてのインスタンスに同じ構成データが含まれています。

注: `vdmexport.exe` コマンドは View LDAP データのみをバックアップします。このコマンドでは、View Composer データベース情報はバックアップされません。

前提条件

- View 接続サーバとともにインストールされている `vdmexport.exe` コマンドの実行可能ファイルを次のデフォルトパスで見つけます。

`C:\Program Files\VMware\VMware View\Server\tools\bin`

- Administrators（管理者）または Administrators (Read Only)（管理者（読み取り専用））ロールのユーザーとして View 接続サーバ インスタンスにログインします。

手順

- 1 [スタート]-[コマンド プロンプト] を選択します。
- 2 コマンド プロンプトで `vdmexport` コマンドを入力し、出力をファイルにリダイレクトします。例：

```
vdmexport > Myexport.LDF
```

デフォルトでは、エクスポートされるデータは暗号化されています。

出力ファイル名を `-f` オプションの引数として指定できます。例：

```
vdmexport -f Myexport.LDF
```

`-v` オプションを使用することで、データをプレーン テキスト形式（逐語的）でエクスポートできます。例：

```
vdmexport -f Myexport.LDF -v
```

`-c` オプションを使用することで、データをパスワードなどの機密データが削除されたプレーン テキスト形式（洗浄済み）でエクスポートできます。例：

```
vdmexport -f Myexport.LDF -c
```

注: View LDAP 構成を復元するために洗浄済みバックアップ データの使用は検討しないでください。洗浄済み構成データでは、パスワードなどの重要な情報が欠落しています。

詳細については `vdmexport`、『VMware View の統合』ドキュメントを参照してください。

次のステップ

`vdmimport` コマンドを使用して、View 接続サーバの構成情報を復元または転送できます。

LDIF ファイルのインポートの詳細については、[View 接続サーバと View Composer の構成データの復元](#)を参照してください。

View 接続サーバと View Composer の構成データの復元

View によってバックアップされた View 接続サーバ LDAP 構成ファイルおよび View Composer データベース ファイルを手動で復元できます。

個別のユーティリティを手動で実行して、View 接続サーバと View Composer の構成データを復元します。

構成データを復元する前に、View Administrator で構成データをバックアップしたことを確認します。[View 接続サーバと View Composer のデータのバックアップ](#)を参照してください。

`vdmimport` ユーティリティを使用して、View 接続サーバ データを LDIF バックアップ ファイルから View 接続サーバ インスタンス内の View LDAP リポジトリにインポートします。

`SviConfig` ユーティリティを使用すると、View Composer データを `.svi` バックアップ ファイルから View Composer SQL データベースにインポートできます。

注: 場合によっては、View 接続サーバ インスタンスの現在のバージョンをインストールし、View 接続サーバの LDAP 構成ファイルをインポートして既存の View 構成を復元しなければならないことがあります。既存の View 構成で 2 番目のデータセンターをセットアップするときなどは、ビジネス継続性とディザスタ リカバリ (BC/DR) 計画の一環としてこの手順が必要になる場合があります。詳細については、『View インストール』の「View 接続サーバをバックアップ構成で再インストールする」を参照してください。

View 接続サーバへの構成データのインポート

LDIF ファイルに格納されているデータのバックアップ コピーをインポートして、View 接続サーバ インスタンスの構成データを復元できます。

`vdmimport` コマンドを使用して、LDIF ファイルのデータを View 接続サーバ インスタンス内の View LDAP リポジトリにインポートします。

View Administrator またはデフォルトの `vdmexport` コマンドを使用して View LDAP 構成をバックアップした場合、エクスポートされた LDIF ファイルは暗号化されています。LDIF ファイルの暗号化を解除してからでないと、インポートできません。

エクスポートされた LDIF ファイルがプレーン テキスト形式の場合、ファイルの暗号化を解除する必要はありません。

注: 洗浄済み形式の LDIF ファイルをインポートしないでください。この形式では、パスワードなどの機密データが削除されたプレーン テキストになっています。インポートすると、復元された View LDAP リポジトリから重要な構成情報が失われます。

View LDAP リポジトリのバックアップの詳細については、[View 接続サーバと View Composer のデータのバックアップ](#)を参照してください。

前提条件

- View 接続サーバとともにインストールされている `vdmimport` コマンドの実行可能ファイルを次のデフォルトパスで見つけます。

`C:\Program Files\VMware\VMware View\Server\tools\bin`

- 管理者ロールのユーザーとして View 接続サーバ インスタンスにログインします。

- データ リカバリ パスワードを知っていることを確認します。パスワード リマインダが構成されていた場合、パスワード オプションを付けずに `vdmimport` コマンドを実行することでリマインダを表示できます。

手順

- 1 View Composer が動作しているサーバで Windows サービスの VMware Horizon View Composer を停止して、View Composer のすべてのインスタンスを停止します。
- 2 すべてのセキュリティ サーバで Windows サービスの VMware Horizon セキュリティ サーバを停止して、すべてのセキュリティ サーバインスタンスを停止します。
- 3 View 接続サーバのすべてのインスタンスをアンインストールします。

VMware Horizon View 接続サーバと AD LDS Instance VMwareVDMDS の両方をアンインストールします。

- 4 1 つの View 接続サーバ インスタンスをインストールします。
- 5 Windows サービスの VMware Horizon 接続サーバを停止して、View 接続サーバ インスタンスを停止します。
- 6 [スタート]-[コマンド プロンプト] をクリックします。
- 7 LDIF ファイルの暗号化を解除します。

コマンド プロンプトで、`vdmimport` コマンドを入力します。`-d` オプション、`-p` オプションとデータ リカバリ パスワード、`-f` オプションと既存の暗号化された LDIF ファイルを指定し、次に暗号化を解除された LDIF ファイルの名前を指定します。例：

```
vdmimport -d -p mypassword
-f MyEncryptedexport.LDF > MyDecryptedexport.LDF
```

データ リカバリ パスワードを覚えていない場合は、`-p` オプションを使用せずにコマンドを入力します。ユーティリティでパスワード リマインダが表示され、パスワードを入力するように要求されます。

- 8 暗号化が解除された LDIF ファイルをインポートし、View LDAP 構成を復元します。

`-f` オプションと暗号化を解除された LDIF ファイルを指定します。例：

```
vdmimport -f MyDecryptedexport.LDF
```

- 9 View 接続サーバをアンインストールします。
VMware Horizon View 接続サーバ パッケージのみをアンインストールします。
- 10 View 接続サーバを再インストールします。
- 11 View Administrator にログインして、構成が正しいかどうかを検証します。
- 12 View Composer インスタンスを開始します。
- 13 レプリカ サーバインスタンスを再インストールします。
- 14 セキュリティ サーバ インスタンスを開始します。

セキュリティ サーバの構成に不整合があるというリスクが存在する場合は、セキュリティ サーバを停止するのではなくアンインストールしてからプロセスの最後に再インストールする必要があります。

vdmimport コマンドは、View 接続サーバ内の View LDAP リポジトリを LDIF ファイルの構成データで更新します。vdmimport コマンドの詳細については、『View の統合』ドキュメントを参照してください。

注: 復元される構成が、vCenter Server および View Composer（使用されている場合）に認識される仮想マシンと一致することを確認します。必要に応じて、View Composer の構成をバックアップから復元します。[View Composer データベースの復元](#)を参照してください。View Composer 構成のバックアップによって vCenter Server 内の仮想マシンが変更された場合は、View Composer 構成を復元した後に不整合を手動で解決する必要があります。

View Composer データベースの復元

View Composer 構成のバックアップ ファイルを、リンククローン情報が格納された View Composer データベースにインポートできます。

SviConfig restoredata コマンドを使用して、システムの障害の発生後に View Composer データベース データを復元したり、View Composer 構成を以前の状態に戻したりすることができます。

重要: SviConfig ユーティリティは、熟練した View Composer 管理者のみが使用する必要があります。このユーティリティは、View Composer サービスに関連する問題を解決するためのものです。

前提条件

View Composer データベース バックアップ ファイルの場所を確認します。デフォルトでは、View はバックアップ ファイルを View 接続サーバ コンピュータの C: ドライブ (C:\Programdata\VMWare\VDM\backups) に格納します。

View Composer バックアップ ファイルは日付スタンプと .svi サフィックスが付く命名規則を使用します。

`Backup-YearMonthDayCount-vCenter Server Name_Domain Name.svi`

例: `Backup-20090304000010-foobar_test_org.svi`

SviConfig restoredata パラメータについて理解しておく必要があります。

- **DsnName** - データベースに接続するために使用される DSN。DsnName パラメータは必須で、空の文字列にすることはできません。
- **Username** - データベースに接続するために使用されるユーザー名。このパラメータを指定しない場合、Windows 認証が使用されます。
- **Password** - データベースに接続するために使用されるパスワード。このパラメータが指定されておらず、Windows 認証が使用されない場合、後でパスワードの入力を求められます。
- **BackupFilePath** - View Composer バックアップ ファイルへのパス。

DsnName および BackupFilePath パラメータは必須で、空の文字列にすることはできません。Username および Password パラメータはオプションです。

手順

- 1 View Composer バックアップ ファイルを、View 接続サーバ コンピュータから、VMware Horizon View Composer サービスがインストールされているコンピュータからアクセス可能な場所にコピーします。

- 2 View Composer がインストールされているコンピュータで、VMware Horizon View Composer サービスを停止します。
- 3 Windows のコマンド プロンプトを開き、SviConfig 実行可能ファイルに移動します。

このファイルは、View Composer アプリケーションと同じ場所にあります。デフォルト パスは C:\Program Files (x86)\VMware\VMware View Composer\sviconfig.exe です。

- 4 SviConfig restoredata コマンドを実行します。

```
sviconfig -operation=restoredata
          -DsnName=target_database_source_name_(DSN)
          -Username=database_administrator_username
          -Password=database_administrator_password
          -BackupFilePath=path_to_View_Composer_backup_file
```

例 :

```
sviconfig -operation=restoredata -dsname=LinkedClone
          -username=Admin -password=Pass
          -backupfilepath="C:\Program Files (x86)\VMware\VMware View
Composer\Backup-20090304000010-foobar_test_org.SVI"
```

- 5 VMware Horizon View Composer サービスを開始します。

次のステップ

SviConfig restoredata コマンドの出力結果コードについては、[View Composer データベースの復元の結果コード](#)を参照してください。

View Composer データベースの復元の結果コード

View Composer データベースを復元すると、SviConfig restoredata コマンドで結果コードが表示されます。

表 8-2. restoredata の結果コード

コード	説明
0	操作は正常に終了しました。
1	指定された DSN が見つかりませんでした。
2	無効なデータベース管理者認証情報が指定されました。
3	データベースのドライバがサポートされていません。
4	予期しない問題が発生し、コマンドは完了できませんでした。
14	別のアプリケーションが VMware Horizon View Composer サービスを使用しています。コマンドを実行する前に、サービスを終了してください。
15	復元処理中に問題が発生しました。詳細は画面ログ出力として提供されます。

View Composer データベースのデータをエクスポート

View Composer データベースからデータをファイルにエクスポートできます。

重要: 熟練した View Composer 管理者である場合に限り、SviConfig ユーティリティを使用してください。

前提条件

デフォルトでは、View はバックアップ ファイルを View 接続サーバ コンピュータの C: ドライブ (C:\Programdata\VMWare\VDM\backups) に格納します。

SviConfig exportdata パラメータについて理解しておきます。

- DsnName - データベースに接続するために使用される DSN。指定しなければ、DSN 名、ユーザー名、およびパスワードは、サーバの構成ファイルから取得されません。
- Username - データベースに接続するために使用されるユーザー名。このパラメータを指定しなければ、Windows 認証が使用されます。
- Password - データベースに接続するために使用されるパスワード。このパラメータを指定せず、Windows 認証を使用しなければ、後でパスワードを入力するように求められます。
- OutputFilePath - 出力ファイルへのパス。

手順

- 1 View Composer がインストールされているコンピュータで、VMware Horizon View Composer サービスを停止します。
- 2 Windows のコマンド プロンプトを開き、SviConfig 実行可能ファイルに移動します。

このファイルは、View Composer アプリケーションと同じ場所にあります。

View-Composer-installation-directory\sviconfig.exe

- 3 SviConfig exportdata コマンドを実行します。

```
sviconfig -operation=exportdata
          -DsnName=target_database_source_name_(DSN)
          -Username=database_administrator_username
          -Password=database_administrator_password
          -OutputFilePath=path_to_View_Composer_output_file
```

例 :

```
sviconfig -operation=exportdata -dsname=LinkedClone
          -username=Admin -password=Pass
          -outputfilepath="C:\Program Files\VMware\VMware View
          Composer\Export-20090304000010-foobar_test_org.SVI"
```

次のステップ

SviConfig exportdata コマンドのエクスポート結果コードについては、[View Composer データベースのエクスポートの結果コード](#)を参照してください。

View Composer データベースのエクスポートの結果コード

View Composer データベースをエクスポートすると、SviConfig exportdata コマンドで終了コードが表示されます。

表 8-3. Exportdata ExitStatus コード

コード	説明
0	データのエクスポートが問題なく終了しました。
1	指定された DSN 名が見つかりません。
2	指定した証明書は無効です。
3	サポートされないドライバがデータベースに提供されました。
4	予期しない問題が発生しました。
18	データベース サーバに接続できません。
24	出力ファイルを開くことができません。

View コンポーネントの監視

View Administrator のダッシュボードを使用して、View 展開内の View および vSphere コンポーネントのステータスを素早く調査できます。

View Administrator には、View 接続サーバ インスタンス、イベント データベース、セキュリティ サーバ、View Composer サービス、データストア、vCenter Server インスタンス、およびドメインに関する監視情報が表示されます。

注: View は、Kerberos ドメインに関するステータス情報を特定できません。ドメインが構成され、機能している場合でも、View Administrator には Kerberos ドメインのステータスが不明として表示されます。

手順

- View Administrator で、[ダッシュボード] をクリックします。
- システムの健全性ペインで、[View コンポーネント]、[vSphere コンポーネント]、または [その他のコンポーネント] を展開します。
 - 緑色の上向き矢印は、コンポーネントに問題がないことを示します。
 - 赤色の下向き矢印は、コンポーネントが使用できないか、または機能していないことを示します。
 - 黄色の二重矢印は、コンポーネントが警告状態にあることを示します。
 - 疑問符は、コンポーネントのステータスが不明であることを示します。
- コンポーネント名をクリックします。

ダイアログに名前、バージョン、ステータス、その他のコンポーネント情報が表示されます。

次のステップ

vCenter Server を使用して、Virtual SAN データストアに参加する Virtual SAN クラスタとディスクを監視します。vSphere 5.5 Update 1 での Virtual SAN の監視の詳細については、『vSphere ストレージ マニュアル』と『vSphere 監視とパフォーマンス マニュアル』を参照してください。vSphere 6 以降の Virtual SAN の監視の詳細については、『VMware Virtual SAN 管理者ガイド』を参照してください。

マシンのステータスの監視

View Administrator のダッシュボードを使用して、View 展開内のマシンのステータスを素早く調査できます。たとえば、切断されたすべてのマシンやメンテナンス モードのマシンを表示できます。

前提条件

仮想マシンのステータス値について理解しておきます。[vCenter Server 仮想マシンのステータス](#)を参照してください。

手順

- 1 View Administrator で、[ダッシュボード] をクリックします。
- 2 [マシンのステータス] ペインで、ステータス フォルダを展開します。

オプション	説明
準備中	マシンがプロビジョニング中、削除中、またはメンテナンス モードにある場合の状態を表示します。
問題のあるマシン	エラー状態を表示します。
準備完了	マシンが使用できるようになったときの状態を表示します。

- 3 マシンのステータスを見つけて、その横のハイパーリンクされた番号をクリックします。

[マシン] ページに選択したステータスのすべてのマシンが表示されます。

次のステップ

マシン名をクリックしてマシンの詳細を表示できます。また、View Administrator の戻る矢印をクリックしてダッシュボード ページに戻ることができます。

View サービスの概要

View 接続サーバ インスタンスおよびセキュリティ サーバの動作は、システムで実行しているいくつかのサービスに依存しています。これらのシステムは、自動で起動および停止されますが、これらのサービスの動作を手動で調整する必要がある場合があります。

Microsoft Windows サービス ツールを使用して、View サービスを停止または開始します。View 接続サーバ ホストまたはセキュリティ サーバ上の View サービスを停止した場合は、そのサービスを再起動するまで、エンド ユーザーはリモート デスクトップまたはアプリケーションに接続できません。さらに、サービスの実行が停止した場合またはそのサービスが制御する View 機能が応答していないように見える場合も、サービスを再起動する必要がある可能性があります。

View サービスの停止と開始

View 接続サーバ インスタンスおよびセキュリティ サーバの動作は、システムで実行しているいくつかのサービスに依存しています。View の動作に関する問題をトラブルシューティングするときに、これらのサービスを手動で停止したり開始したりすることが必要になる場合があります。

View サービスを停止すると、エンド ユーザーはリモート デスクトップおよびアプリケーションに接続できなくなります。このような操作はシステム メンテナンスのためにすでにスケジュール設定されている時間に実行するか、またはデスクトップおよびアプリケーションが一時的に使用できなくなることをエンド ユーザーに警告する必要があります。

注: View 接続サーバ ホストの VMware Horizon View 接続サーバ サービスまたはセキュリティ サーバの VMware Horizon View セキュリティ サーバ サービスのみを停止します。他のコンポーネント サービスは停止しないでください。

前提条件

View 接続サーバ ホストおよびセキュリティ サーバで実行するサービスについて、[View 接続サーバ ホスト上のサービス](#)および [セキュリティ サーバ上のサービス](#)を参照してください。

手順

- 1 コマンド プロンプトに **services.msc** を入力して、Windows サービス ツールを起動します。
- 2 View 接続サーバ ホストの VMware Horizon View 接続サーバ サービスまたはセキュリティ サーバの VMware Horizon View セキュリティ サーバ サービスを選択して、必要に応じて [停止]、[再起動] または [開始] をクリックします。
- 3 一覧表示されたサービスのステータスが期待どおりに変更されたことを確認します。

View 接続サーバ ホスト上のサービス

View の動作は、View 接続サーバ ホストで実行しているいくつかのサービスに依存しています。

表 8-4. View 接続サーバ ホスト サービス

サービス名	スタートアップの種類	説明
VMware Horizon View Blast Secure Gateway	自動	安全な HTML Access サービスと Blast Extreme サービスを提供します。クライアントが Blast Secure Gateway を介して View 接続サーバに接続する場合には、このサービスを実行する必要があります。
VMware Horizon View 接続サーバ	自動	コネクション ブローカー サービスを提供します。このサービスは常に実行する必要があります。このサービスを開始または停止すると、Framework、Message Bus、Security Gateway、および Web サービスも開始または停止されます。このサービスでは、VMwareVDMDS サービスまたは VMware Horizon View スクリプト ホスト サービスは開始または停止されません。
VMware Horizon View Framework コンポーネント	手動	イベント ログ、セキュリティ、および COM+ Framework サービスを提供します。このサービスは常に実行する必要があります。

サービス名	スタートアップの種類	説明
VMware Horizon View Message Bus コンポーネント	手動	View コンポーネント間のメッセージング サービスを提供します。このサービスは常に実行する必要があります。
VMware Horizon View PCoIP Secure Gateway	手動	PCoIP Secure Gateway サービスを提供します。クライアントが PCoIP Secure Gateway を介して View 接続サーバに接続する場合には、このサービスを実行する必要があります。
VMware Horizon View スクリプト ホスト	無効	仮想マシンを削除する場合に実行するサードパーティ スクリプトをサポートします。デフォルトでは、このサービスは無効になっています。スクリプトを実行する場合、このサービスを有効にする必要があります。
VMware Horizon View Security Gateway コンポーネント	手動	一般的なゲートウェイ サービスを提供します。このサービスは常に実行する必要があります。
VMware Horizon View Web コンポーネント	手動	Web サービスを提供します。このサービスは常に実行する必要があります。
VMwareVDMDS	自動	LDAP ディレクトリ サービスを提供します。このサービスは常に実行する必要があります。View のアップグレード中、このサービスにより既存のデータが正しく移行されます。

セキュリティ サーバ上のサービス

View の動作は、セキュリティ サーバで実行するいくつかのサービスに依存しています。

表 8-5. セキュリティ サーバ サービス

サービス名	スタートアップの種類	説明
VMware Horizon View Blast Secure Gateway	自動	安全な HTML Access サービスと Blast Extreme サービスを提供します。クライアントが Blast Secure Gateway を介してこのセキュリティ サーバに接続する場合には、このサービスを実行する必要があります。
VMware Horizon View セキュリティ サーバ	自動	セキュリティ サーバ サービスを提供します。このサービスは常に実行する必要があります。このサービスを開始または停止すると、Framework および Security Gateway サービスも開始または停止されます。
VMware Horizon View Framework コンポーネント	手動	イベント ログ、セキュリティ、および COM+ Framework サービスを提供します。このサービスは常に実行する必要があります。
VMware Horizon View PCoIP Secure Gateway	手動	PCoIP Secure Gateway サービスを提供します。クライアントが PCoIP Secure Gateway を介してこのセキュリティ サーバに接続する場合には、このサービスを実行する必要があります。
VMware Horizon View Security Gateway コンポーネント	手動	一般的なゲートウェイ サービスを提供します。このサービスは常に実行する必要があります。

製品のライセンス キーの変更

システムに対する現在のライセンスの有効期限が切れるか、または現在ライセンスされていない View 機能にアクセスする必要がある場合は、View Administrator を使用して製品のライセンス キーを変更できます。

View の実行中に View にライセンスを追加できます。システムを再起動する必要はなく、デスクトップおよびアプリケーションへのアクセスは中断されません。

前提条件

View と、View Composer やリモート アプリケーションなどのアドオン機能の正しい動作のために、有効な製品のライセンス キーを入手してください。

手順

- 1 View Administrator で、[View 構成] - [製品のライセンスと使用状況] を選択します。

現在のライセンス キーの最初と最後の 5 文字は、[ライセンス] パネルに表示されます。

- 2 [ライセンスを編集] をクリックします。

- 3 ライセンス シリアル番号を入力し、[OK] をクリックします。

[製品ライセンス] ウィンドウに更新されたライセンス情報が表示されます。

- 4 ライセンスの有効期限の日付を確認します。

- 5 お持ちの製品のライセンスによって使用資格が付与されている VMware Horizon 7 のエディションに基づいて、デスクトップ、アプリケーションのリモート処理、および View Composer ライセンスが有効または無効になっていることを確認します。

エディションによっては、VMware Horizon 7 の一部の機能を使用できません。各エディションの機能セットの比較については、<http://www.vmware.com/files/pdf/products/horizon-view/VMware-Horizon-View-Pricing-Licensing-FAQ.pdf> を参照してください。

- 6 ライセンスの使用状況モデルが製品ライセンスで使用しているモデルと一致することを確認します。

使用状況は、製品ライセンスのエディションおよび使用状況の取り決めによって、指定ユーザーまたは同時ユーザーの数でカウントされます。

製品ライセンスの使用状況の監視

View Administrator では、View に同時接続しているアクティブ ユーザーを監視できます。[製品のライセンスと使用状況] ページには、履歴使用数の現在値および最大値が表示されます。これらの数値を使用して、製品ライセンスの使用状況を追跡できます。履歴使用状況データをリセットして、現在のデータで始めからやり直すこともできます。

View では、指定ユーザーのライセンス使用モデルと、同時ユーザーのライセンス使用モデルの 2 つを使用できます。View は、製品ライセンスのエディションや使用モデルの契約にかかわらず、環境内の指定ユーザーと同時ユーザーをカウントします。

指定ユーザーの場合、View は、View 環境にアクセスした固有ユーザーの数をカウントします。指定ユーザーが複数の単一ユーザー デスクトップ、RDS デスクトップ、およびリモート アプリケーションを実行している場合、そのユーザーは 1 回だけカウントされます。

指定ユーザーの場合、[製品のライセンスと使用状況] ページの [現在] 列には、View のデプロイを最初に構成した以降のユーザー数、または [指定ユーザー数] を最後にリセットした以降のユーザー数が表示されます。[最高] 列は、指定ユーザーには該当しません。

同時ユーザーの場合、View は、セッションあたりの単一ユーザー デスクトップ接続数をカウントします。同時ユーザーが複数の単一ユーザー デスクトップを実行している場合、接続された各デスクトップ セッションは個別にカウントされます。

同時ユーザーの場合、RDS デスクトップおよびアプリケーションの接続数は、ユーザーごとにカウントされます。同時ユーザーが複数の RDS デスクトップセッションおよびアプリケーションを実行している場合、そのユーザーは 1 回だけカウントされます。これは、RDS ホストごとに異なる RDS デスクトップまたはアプリケーションがホストされている場合も当てはまります。同時ユーザーが単一ユーザー デスクトップと、追加の RDS デスクトップおよびアプリケーションを実行している場合、そのユーザーは 1 回だけカウントされます。

同時ユーザーの場合、[製品のライセンスと使用状況] ページの [最大] 列には、View のデプロイを最初に構成した以降、または [最大数] を最後にリセットした以降の同時デスクトップ セッションならびに RDS デスクトップおよびアプリケーション ユーザーの最大数が表示されます。

製品ライセンスの使用状況データのリセット

View Administrator で、履歴製品使用状況データをリセットして、現在のデータで始めからやり直すこともできます。

グローバル構成とポリシーを管理 権限を備えた管理者は、[最大数をリセット] 設定と [指定ユーザー数をリセット] 設定を選択できます。これらの設定へのアクセスを制限するには、指定した管理者にのみこの権限を付与してください。

前提条件

製品ライセンスの使用状況について理解しておきます。製品ライセンスの使用状況の監視を参照してください。

手順

1 View Administrator で、[View 構成] - [製品のライセンスと使用状況] を選択します。

2 (オプション) [用途] ペインで [最大数をリセット] を選択します。

履歴同時接続数の最高値が、現在の数値にリセットされます。

3 (オプション) [用途] ペインで [指定ユーザー数をリセット] を選択します。

指定ユーザーの最大履歴数が 0 にリセットされます。

注: [ユーザーとグループ] ページで [全般的なユーザー情報を更新する] を選択した場合も、指定ユーザーの最大履歴数が 0 にリセットされます。

Active Directory からの一般的なユーザー情報の更新

View を Active Directory に格納されている現在のユーザー情報で更新できます。この機能によって、View ユーザーの名前、電話、電子メール、ユーザー名、デフォルトの Windows ドメインを更新します。信頼された外部ドメインも更新されます。

この機能は、Active Directory の信頼される外部ドメインのリストを変更する場合、特にドメイン間の信頼関係の変更が View のユーザー権限に影響する場合に使用します。

この機能は Active Directory で最新のユーザー情報をスキャンし、View の構成を更新します。

全般的なユーザー情報を更新した場合も、指定ユーザーの数が 0 にリセットされます。この数は、View Administrator の [製品のライセンスと使用状況] ページに表示されます。[製品ライセンスの使用状況データのリセット](#)を参照してください。

また、vdmadmin コマンドを使用して、ユーザーやドメインの情報を更新することもできます。[-f オプションを使用した外部セキュリティ プリンシパルの更新](#)を参照してください。

前提条件

グローバル構成とポリシーを管理権限を持つ管理者として View Administrator にログインできることを確認します。

手順

- 1 View Administrator で [ユーザーとグループ] をクリックします。
- 2 すべてのユーザーの情報を更新するか、個別のユーザーの情報を更新するかを選択します。

オプション	アクション
すべてのユーザーの場合	<p>[全般的なユーザー情報を更新する] をクリックします。</p> <p>すべてのユーザーとグループの更新には長い時間がかかることがあります。</p>
個別のユーザーの場合	<p>a 更新するユーザー名をクリックします。</p> <p>b [全般的なユーザー情報を更新する] をクリックします。</p>

別のマシンへの View Composer の移行

場合によっては、VMware Horizon View Composer サービスを新しい Windows Server の仮想マシンまたは物理マシンに移行しなければならないことがあります。たとえば、View 展開環境を拡張するために、View Composer と vCenter Server を新しい ESXi ホストまたはクラスタに移行する必要があるかもしれません。さらに、View Composer および vCenter Server を、同じ Windows Server のマシンにインストールする必要はありません。

View Composer を vCenter Server マシンからスタンドアロンマシンに、またはスタンドアロンマシンから vCenter Server マシンに移行できます。

■ View Composer 移行に関するガイドライン

VMware Horizon View Composer サービスの移行で行う手順は、既存のリンク クローン仮想マシンを保持するかどうかによって異なります。

■ 既存のデータベースを含む View Composer を移行する

View Composer を別の物理マシンまたは仮想マシンに移行する際に、現在のリンク クローン仮想マシンを保持する場合、新しい VMware Horizon View Composer サービスは引き続き既存の View Composer データベースを使用する必要があります。

■ リンク クローン仮想マシンがない View Composer の移行

現在の VMware Horizon View Composer サービスがリンク クローン仮想マシンを管理していない場合は、RSA 鍵を新しいマシンに移行しなくても、View Composer を新しい物理マシンまたは仮想マシンに移行できます。移行した VMware Horizon View Composer サービスは、元の View Composer データベースに接続できます。または View Composer 用の新しいデータベースを作成できます。

■ RSA 鍵の移行のための Microsoft .NET Framework の準備

既存の View Composer データベースを使用するには、マシン間で RSA 鍵コンテナを移行する必要があります。RSA 鍵コンテナを移行するには、Microsoft .NET Framework と一緒に提供される ASP .NET IIS 登録ツールを使用します。

■ 新しい View Composer サービスへの RSA 鍵コンテナの移行

既存の View Composer データベースを使用するには、既存の VMware Horizon View Composer サービスが存在する移行元の物理マシンまたは仮想マシンから、新しい VMware Horizon View Composer サービスをインストールするマシンに、RSA 鍵コンテナを移行する必要があります。

View Composer 移行に関するガイドライン

VMware Horizon View Composer サービスの移行で行う手順は、既存のリンク クローン仮想マシンを保持するかどうかによって異なります。

現在の展開でリンク クローン仮想マシンを保持するには、新しい仮想マシンまたは物理マシンにインストールする VMware Horizon View Composer サービスが、既存の View Composer データベースを継続して使用する必要があります。View Composer データベースは、リンク クローンの作成、プロビジョニング、メンテナンス、および削除に必要なデータを含んでいます。

VMware Horizon View Composer サービスを移行するときに、View Composer データベースも新しいマシンに移行できます。

View Composer データベースを移行するかどうかにかかわらず、データベースは VMware Horizon View Composer サービスをインストールする新しいマシンと同じドメインまたは信頼されたドメインの使用可能なマシンに構成する必要があります。

View Composer は RSA 鍵ペアを使用して、View Composer データベースに格納されている認証情報を暗号化および暗号化解除します。このデータ ソースと新しい VMware Horizon View Composer サービスの互換性を確保するには、元の VMware Horizon View Composer サービスで作成した RSA 鍵コンテナを移行する必要があります。RSA 鍵コンテナは、新しいサービスをインストールするマシンにインポートする必要があります。

現在の VMware Horizon View Composer サービスが任意のリンク クローン仮想マシンを管理していない場合、既存の View Composer データベースを使用せずにサービスを移行できます。RSA 鍵は、既存のデータベースを使用するかどうかにかかわらず、移行する必要はありません。

注: VMware Horizon View Composer サービスのインスタンスごとに、専用の View Composer データベースが必要です。複数の VMware Horizon View Composer サービスで 1 つの View Composer データベースを共有することはできません。

既存のデータベースを含む View Composer を移行する

View Composer を別の物理マシンまたは仮想マシンに移行する際に、現在のリンク クローン仮想マシンを保持する場合、新しい VMware Horizon View Composer サービスは引き続き既存の View Composer データベースを使用する必要があります。

次のいずれかの方向で View Composer を移行する場合は、この手順に従います。

- vCenter Server マシンからスタンドアロン マシンへ
- スタンドアロン マシンから vCenter Server マシンへ
- スタンドアロン マシンから別のスタンドアロン マシンへ
- vCenter Server マシンから別の vCenter Server マシンへ

VMware Horizon View Composer サービスを移行するときに、View Composer データベースも新しい場所に移行できます。たとえば、現在のデータベースが、移行しようとしている vCenter Server マシン上に配置されている場合、View Composer データベースの移行が必要になることがあります。

VMware Horizon View Composer サービスを新しいマシンにインストールするときは、View Composer データベースに接続するようにサービスを構成する必要があります。

前提条件

- View Composer の移行要件について理解しておきます。[View Composer 移行に関するガイドライン](#)を参照してください。
- RSA 鍵コンテナを新しい VMware Horizon View Composer サービスに移行する手順について理解しておきます。[RSA 鍵の移行のための Microsoft .NET Framework の準備および 新しい View Composer サービスへの RSA 鍵コンテナの移行](#)を参照してください。
- VMware Horizon View Composer サービスのインストールについて理解しておきます。『View インストールガイド』の「View Composer のインストール」を参照してください。
- View Composer 用の SSL 証明書の構成について理解しておきます。『View インストール ガイド』の「View Server 用の SSL 証明書の構成」を参照してください。
- View Administrator での View Composer の構成について理解しておきます。[View Composer 設定を構成する](#)および[View Composer ドメインを構成する](#)を参照してください。

手順

- 1 VMware Horizon View Composer サービスに関連付けられている vCenter Server インスタンスで、仮想マシンのプロビジョニングを無効にします。
 - a View Administrator で、[View 構成] - [サーバ] を選択します。
 - b [vCenter Servers] タブで、vCenter Server インスタンスを選択し、[プロビジョニングを無効にする] をクリックします。
- 2 (オプション) View Composer データベースを新しい場所に移行します。
この手順を実行する必要がある場合は、移行の手順についてデータベース管理者に問い合わせてください。
- 3 現在のマシンから VMware Horizon View Composer サービスをアンインストールします。

4 (オプション) RSA 鍵コンテナを新しいマシンに移行します。

5 VMware Horizon View Composer サービスを新しいマシンにインストールします。

インストール中、元の VMware Horizon View Composer サービスで使用されていたデータベースの DSN を指定します。また、そのデータベースに対して、ODBC データ ソース用に提供されたドメイン管理者のユーザー名とパスワードを指定します。

データベースを移行した場合、DSN とデータ ソース情報はデータベースの新しい場所をポイントしている必要があります。データベースを移行したかどうかに関わらず、新しい VMware Horizon View Composer サービスは、リンク クローンに関する元のデータベース情報にアクセスする必要があります。

6 新しいマシンで View Composer 用の SSL サーバ証明書を構成します。

元のマシンにインストールした View Composer 用の証明書をコピーするか、新しい証明書をインストールすることができます。

7 View Administrator で、新しい View Composer 設定を構成します。

a View Administrator で、[View 構成] - [サーバ]を選択します。

b [vCenter Servers] タブで、View Composer サービスに関連付けられている vCenter Server インスタンスを選択し、[編集] をクリックします。

c [View Composer Server 設定] ペインで [編集] をクリックして、新しい View Composer 設定を指定します。

新しいマシンに View Composer を vCenter Server と一緒にインストールする場合は、[View Composer を vCenter Server と一緒にインストール] を選択します。

スタンドアロン マシンに View Composer をインストールする場合は、[スタンドアロン View Composer Server] を選択し、View Composer マシンの FQDN と View Composer ユーザーのユーザー名およびパスワードを指定します。

d 必要に応じて、[ドメイン] ペインで [サーバ情報を検証] をクリックし、View Composer ドメインを追加または編集します。

e [OK] をクリックします。

リンク クローン仮想マシンがない View Composer の移行

現在の VMware Horizon View Composer サービスがリンク クローン仮想マシンを管理していない場合は、RSA 鍵を新しいマシンに移行しなくても、View Composer を新しい物理マシンまたは仮想マシンに移行できます。移行した VMware Horizon View Composer サービスは、元の View Composer データベースに接続できます。または View Composer 用の新しいデータベースを作成できます。

前提条件

- VMware Horizon View Composer サービスのインストールについて理解しておきます。『View インストールガイド』の「View Composer のインストール」を参照してください。
- View Composer 用の SSL 証明書の構成について理解しておきます。『View インストール ガイド』の「View Server 用の SSL 証明書の構成」を参照してください。

- View Administrator から View Composer を削除する手順について理解しておきます。[View からの View Composer の削除](#)を参照してください。

View Composer を削除する前に、View Composer が今後リンク クローン デスクトップを管理しないことを確認します。リンク クローンが残っている場合は、削除する必要があります。

- View Administrator での View Composer の構成について理解しておきます。[View Composer 設定を構成するおよび View Composer ドメインを構成する](#)を参照してください。

手順

- 1 View Administrator で、View Composer を View Administrator から削除します。
 - a [View 構成] - [サーバ] を選択します。
 - b [vCenter Servers] タブで、View Composer サービスに関連付けられている vCenter Server インスタンスを選択し、[編集] をクリックします。
 - c [View Composer Server 設定] ペインで、[編集] をクリックします。
 - d [View Composer を使用しない] を選択して、[OK] をクリックします。
- 2 現在のマシンから VMware Horizon View Composer サービスをアンインストールします。
- 3 VMware Horizon View Composer サービスを新しいマシンにインストールします。
インストール時、元の View Composer データベースまたは新しい View Composer データベースの DSN に接続するように View Composer を構成します。
- 4 新しいマシンで View Composer 用の SSL サーバ証明書を構成します。
元のマシンにインストールした View Composer 用の証明書をコピーするか、新しい証明書をインストールすることができます。
- 5 View Administrator で、新しい View Composer 設定を構成します。
 - a View Administrator で、[View 構成] - [サーバ]を選択します。
 - b [vCenter Servers] タブで、View Composer サービスに関連付けられている vCenter Server インスタンスを選択し、[編集] をクリックします。
 - c [View Composer Server 設定] ペインで、[編集] をクリックします。
 - d 新しい View Composer 設定を指定します。

新しいマシンに View Composer を vCenter Server と一緒にインストールする場合は、[View Composer を vCenter Server と一緒にインストール] を選択します。

スタンドアロン マシンに View Composer をインストールする場合は、[スタンドアロン View Composer Server] を選択し、View Composer マシンの FQDN と View Composer ユーザーのユーザー名およびパスワードを指定します。
 - e 必要に応じて、[ドメイン] ペインで [サーバ情報を検証] をクリックし、View Composer ドメインを追加または編集します。
 - f [OK] をクリックします。

RSA 鍵の移行のための Microsoft .NET Framework の準備

既存の View Composer データベースを使用するには、マシン間で RSA 鍵コンテナを移行する必要があります。RSA 鍵コンテナを移行するには、Microsoft .NET Framework と一緒に提供される ASP .NET IIS 登録ツールを使用します。

前提条件

.NET Framework をダウンロードし、ASP.NET IIS 登録ツールについての情報を読みます。<http://www.microsoft.com/net> をご覧ください。

手順

- 1 既存のデータベースに関連付けられた VMware Horizon View Composer サービスがインストールされている物理マシンまたは仮想マシンに .NET Framework をインストールします。
- 2 新しい VMware Horizon View Composer サービスのインストール先マシンに .NET Framework をインストールします。

次のステップ

RSA 鍵コンテナをインストール先マシンに移行します。[新しい View Composer サービスへの RSA 鍵コンテナの移行](#)を参照してください。

新しい View Composer サービスへの RSA 鍵コンテナの移行

既存の View Composer データベースを使用するには、既存の VMware Horizon View Composer サービスが存在する移行元の物理マシンまたは仮想マシンから、新しい VMware Horizon View Composer サービスをインストールするマシンに、RSA 鍵コンテナを移行する必要があります。

新しい VMware Horizon View Composer サービスをインストールする前に、この手順を実行する必要があります。

前提条件

Microsoft .NET Framework および ASP.NET IIS 登録ツールが移行元と移行先のマシンにインストールされていることを確認します。[RSA 鍵の移行のための Microsoft .NET Framework の準備](#)を参照してください。

手順

- 1 既存の VMware Horizon View Composer サービスが存在する移行元マシンで、コマンド プロンプトを開き、%windir%\Microsoft.NET\Framework\v2.0xxxxx ディレクトリに移動します。
- 2 `aspnet_regiis` コマンドを入力して、RSA キー ペアをローカル ファイルに保存します。
`aspnet_regiis -px "SviKeyContainer" "keys.xml" -pri`
 ASP.NET IIS 登録ツールは RSA 公開/プライベート キーペアを SviKeyContainer コンテナから keys.xml ファイルにエクスポートし、ファイルをローカルに保存します。
- 3 `keys.xml` ファイルを新しい VMware Horizon View Composer サービスのインストール先マシンにコピーします。

- 4 移行先マシンで、コマンド プロンプトを開き、%windir%\Microsoft.NET\Framework\v2.0.xxxx ディレクトリに移動します。
- 5 aspnet_regiis コマンドを入力して、RSA 鍵ペア データを移行します。

aspnet_regiis -pi "SviKeyContainer" "*path*\keys.xml" -exp

path はエクスポートしたファイルへのパスです。

-exp オプションは、エクスポート可能な鍵ペアを作成します。将来的に移行が必要な場合、鍵をこのマシンからエクスポートして別のマシンにインポートできます。以前に -exp オプションを使用せずに鍵をこのマシンに移行した場合、将来鍵をエクスポートできるように、-exp オプションを使用して再び鍵をインポートできます。

登録ツールは、鍵ペア データをローカルの鍵コンテナにインポートします。

次のステップ

新しい VMware Horizon View Composer サービスを移行先マシンにインストールします。DSN および ODBC データ ソース情報を入力します。これにより、View Composer は元の VMware Horizon View Composer サービスによって使用されていたのと同じデータベース情報に接続できます。インストール手順については、『View のインストール』の「View Composer のインストール」を参照してください。

View Composer を新しいマシンに移行して同じデータベースを使用するための手順を完了します。[既存のデータベースを含む View Composer を移行する](#)を参照してください。

View 接続サーバ インスタンス、セキュリティ サーバ、または View Composer で証明書を更新する

更新済みのサーバ SSL 証明書または中間証明書を受信した場合は、それらの証明書を、各 View 接続サーバ、セキュリティ サーバ、または View Composer ホストの Windows ローカル コンピュータ証明書ストアにインポートします。

通常、サーバ証明書の有効期限は 12 カ月です。ルート証明書および中間証明書の有効期限は 5 年または 10 年です。

サーバ証明書と中間証明書のインポートに関する詳細については、『View のインストール』の「新しい SSL 証明書を使用するように View 接続サーバ、セキュリティ サーバ、View Composer を構成する」を参照してください。

前提条件

- 現在有効な証明書の有効期限が切れる前に、更新済みのサーバ証明書および中間証明書を CA から入手します。
- View 接続サーバ インスタンス、セキュリティ サーバ、または VMware Horizon View Composer サービスがインストールされた Windows Server の MMC に、証明書スナップインが追加されていることを確認します。

手順

- 1 Windows Server ホストの Windows ローカル コンピュータ証明書ストアに、署名された SSL サーバ証明書をインポートします。
 - a 証明書スナップインで、サーバ証明書を [証明書 (ローカル コンピュータ)] - [個人] - [証明書] フォルダにインポートします。
 - b [この鍵をエクスポート可能にマークする] を選択します。
 - c [次へ] をクリックして [終了] をクリックします。
- 2 View 接続サーバまたはセキュリティ サーバの場合は、View server に発行された古い証明書から証明書のフレンドリ名 [vdm] を削除します。
 - a 古い証明書を右クリックし、[プロパティ] をクリックします。
 - b [一般] タブで、フレンドリ名テキスト [vdm] を削除します。
- 3 View 接続サーバまたはセキュリティ サーバの場合は、証明書のフレンドリ名 [vdm] を、古い証明書と置き換える新しい証明書に追加します。
 - a 新しい証明書を右クリックし、[プロパティ] をクリックします。
 - b [一般] タブのフレンドリ名フィールドに、[vdm] を入力します。
 - c [適用]、[OK] の順にクリックします。
- 4 View Composer に発行されたサーバ証明書の場合は、SviConfig ReplaceCertificate ユーティリティを実行し、View Composer が使用するポートに新しい証明書をバインドします。
このユーティリティにより、古い証明書のバインドが新しい証明書のバインドに置き換えられます。
 - a VMware Horizon View Composer サービスを停止します。
 - b Windows のコマンド プロンプトを開き、SviConfig 実行可能ファイルに移動します。
このファイルは、View Composer アプリケーションと同じ場所にあります。デフォルト パスは C:\Program Files (x86)\VMware\VMware View Composer\sviconfig.exe です。
 - c SviConfig ReplaceCertificate コマンドを入力します。例 :


```
sviconfig -operation=ReplaceCertificate
          -delete=false
```

このユーティリティでは、Windows ローカル コンピュータ証明書ストアで使用可能な SSL 証明書の番号付きリストが表示されます。
 - d 証明書を選択するには、証明書の番号を入力し、Enter キーを押します。
- 5 View 接続サーバ、セキュリティ サーバ、または View Composer ホストに中間証明書が発行された場合は、Windows 証明書ストアの [証明書 (ローカル コンピュータ)] - [中間証明機関] - [証明書] フォルダに、更新された最新の中間証明書をインポートします。
- 6 変更を反映するため、VMware Horizon View 接続サーバ サービス、VMware Horizon View セキュリティ サーバ サービス、VMware Horizon View Composer サービスを再起動します。

カスタマー エクスペリエンス改善プログラムによって収集される情報

カスタマー エクスペリエンス改善プログラム (CEIP) に参加することができます。プログラムに参加すると、VMware は、お客様のご要望に対する VMware の対応を改善する目的で、現在ご使用の配置に関する匿名データを収集します。VMware ではこの情報を使用して、製品の品質、信頼性、パフォーマンスを改善します。企業が特定できるような情報は収集されません。

このプログラムへの参加はオプションです。View 接続サーバを新しい構成でインストールするときにこのオプションの選択を解除すると、不参加を選択できます。インストール後に参加に関する考えが変わったら、いつでも、View Administrator の [製品のライセンスと使用状況] ページを編集して、プログラムに参加したり参加を取り消したりすることができます。

データを収集する前に、VMware は組織に固有の情報を含むすべてのフィールドを匿名にします。サニタイズされたフィールドにより、コンピュータ、データ ストレージ、ネットワーク機能、アプリケーションおよびユーザーが識別されます。たとえば、IP アドレスおよび仮想マシンのカスタマイズ仕様は匿名になります。

VMware は実際の値のハッシュを生成することによりフィールドをサニタイズします。ハッシュ値が収集されると、VMware は実際の値を識別することはできませんが、環境の変更時に、値の変化を検出することはできます。

このプログラムに参加するかどうか決めるために、VMware がデータを収集するフィールドを確認することができます。すべてのサニタイズされたフィールドを調査することもできます。フィールドは View コンポーネントにより編成されます。[VMware が収集する View のグローバル データ](#) およびその後の関連トピックを参照してください。

VMware によるプライバシーの保護

VMware ではプライバシーの保護に尽力し、カスタマー エクスペリエンス向上プログラム (CEIP) が収集するデータには個別のお客様またはユーザーを一意に識別できる機密情報は含まれないことを保証するための必要な手順を講じています。このプログラムでは、ユーザーを識別したり、ユーザーに連絡するのに使用できる情報を収集しません。組織またはユーザーを識別する情報は収集されません。

CEIP 機能が有効な場合、View 接続サーバはご使用の展開から情報を収集し、そのデータに対し次のアクションを実行します。

- 1 ユーザー、サーバ名、IP アドレス、ネットワーク サーバ パスなどの展開を一意に識別できるデータは、データで一方ハッシュ関数を実行することで匿名扱いとなります。この方法により、VMware は特定のサーバ名、ユーザー名、またはアドレスを収集することなく、展開に含まれる一意のサーバ数、マシン数、ユーザー数に関する有益な情報を収集できます。
- 2 データ セット全体は公開鍵を使用して暗号化されます。データ セットの復号化に必要な秘密鍵を使用できるのは VMware のみです。
- 3 暗号化され、匿名化された情報は HTTPS を使用して VMware に送信されます。

匿名扱いのフィールドを含め、データが収集されるフィールドのリスト全体を確認できます。

[VMware が収集する View のグローバル データ](#) およびその後の関連トピックを参照してください。

カスタマー エクスペリエンス向上プログラムによって収集されたデータのプレビュー

データが暗号化され転送される前に、VMware が受信するデータをプレビューできます。このオプションを有効にした場合、View 接続サーバはデータを暗号化して VMware に送信する代わりに、データ セットをディスクに書き込みます。

CEIP データを VMware に送信する代わりにディスクに書き込むオプションを、View LDAP ディレクトリのグローバル オプションとして構成します。ADSI Edit ユーティリティを使用して View LDAP に変更を加えます。ADSI Edit ユーティリティは View 接続サーバとともにインストールされます。View 接続サーバ インスタンス上で View LDAP を変更すると、複製されたすべての View 接続サーバ インスタンスに変更内容が伝わります。

手順

- 1 View 接続サーバ ホスト上で ADSI Edit ユーティリティを起動します。
- 2 [接続設定] ダイアログ ボックスで、[DC=vdi, DC=vmware, DC=int] を選択するか接続します。
- 3 [コンピュータ] ペインで、**localhost:389** を選択または入力するか、View 接続サーバ ホストの完全修飾ドメイン名 (FQDN) を入力し、続いてポート 389 を入力します。

例: `localhost:389` or `mycomputer.mydomain.com:389`

- 4 オブジェクト [CN=Common, OU=Global, OU=Properties] で、[pae-ceipDumpOnly] 属性の値を 1 に設定します。
- 5 View 接続サーバを再起動します。

CEIP データ ファイルが、View 接続サーバ インスタンスの `%PROGRAMFILES%\VMware\VMware View\Server\broker\temp\spool` ディレクトリにプレーン テキストの JSON フォーマットで書き込まれます。

次のステップ

設定を元に戻して VMware へのデータ送信を開始するには、[pae-ceipDumpOnly] 属性の値を 0 に変更して、View 接続サーバを再起動します。

カスタマー エクスペリエンス向上プログラムに関するその他の情報

カスタマー エクスペリエンス向上プログラム (CEIP) への参加を選択すると、View 展開で起動される最初の View 接続サーバ インスタンスでデータが収集されます。構成データは週に 1 度ずつ収集されます。パフォーマンス データと使用量データは、1 時間に 1 度ずつ収集されます。View 接続サーバ インスタンスがインターネットへアクセスできない場合は、次にインターネット接続が可能になるまでディスクに情報が保存されます。

参加を選択した場合、後で取り消すことができます。参加または参加の取り消しは、View Administrator の [製品のライセンスと使用状況] ページにある [VMware に匿名のデータを送信] 設定を編集していつでも行うことができます。変更を適用するには、環境内の各 View 接続サーバ インスタンスを再起動します。

CEIP によるデータ収集が View 展開上のパフォーマンスやディスク消費に悪影響を与えることはありません。収集されて VMware に送信される情報は、CEIP 機能が有効であるかどうかにかかわらず、View 接続サーバ インスタンスに送信されます。デフォルトでは、この機能を有効にすると、VMware への送信前にデータを保存するために、View 接続サーバ インスタンスで最大 100MB のディスク領域が消費される可能性があります。デフォルトでは、8 日を過ぎた未送信データは破棄されます。

インターネットにアクセスしないように View 接続サーバ インスタンスがファイアウォールによってブロックされる場合でも、CEIP は使用できます。CEIP を有効にすると、View 接続サーバ インスタンスは定期的に HTTPS を使用して、<https://ceip.vmware.com> にあるデータ収集 URL への接続を試みます。接続がブロックされるか、プロキシ サーバまたはファイアウォールの制限のためにアクセスできない場合には、設定されている最大の保存期間（デフォルトは 8 日）をレコードが経過するか、または設定されている最大のスプール サイズ（最大 100MB）を収集済みデータの合計が超えるまで、View 接続サーバは CEIP データをキャッシュします。

CEIP データ スプールの場所、最大サイズ、および最大の保存期間は変更できます。スプールの場所とサイズは、View LDAP データベース内の次の設定で制御されます。

pae-ceipSpoolDirectory	Directory where CEIP data is cached before being sent to VMware. Default: Program Files\VMware\VMware View\Server\broker\temp\spool
pae-ceipMaxSpoolSize	Maximum size, in bytes, of temporary spool data. Default:100 MB
pae-ceipMaxSpoolAge	Maximum age of records in the temporary local spool. Default: 8 days

CEIP に参加しても、連絡が来たり、スパム メールを受けたりすることはありません。CEIP によって、名前、住所、電子メール アドレス、電話番号などの連絡情報が収集されることはありません。CEIP によってアンケートへの参加やジャンクメールのチェックが要求されることはなく、連絡が来ることも一切ありません。

VMware が収集する View のグローバル データ

カスタマー エクスペリエンス向上プログラムに参加している場合、VMware は View 環境に関するグローバル データを収集します。機密情報が含まれるフィールドは、匿名扱いとなります。

表 8-6. グローバル構成設定に関する情報

説明	このフィールドは匿名になりますか？	値の例
View 接続サーバ セッションの最大存続期間（秒）	いいえ	180,000
クライアントからデータが送信されない場合に View 接続サーバがユーザーを強制的に切断するまでの時間（秒）。	いいえ	36,000
View 接続サーバによってユーザーのシングル サインオン (SSO) 認証情報がロックされるまで、ユーザーがアイドル状態でいられる時間（秒）。	いいえ	900
デスクトップの起動で SSO 認証情報がクリアされるまでの時間（分）	いいえ	-1（クリアされない）
アプリケーションの起動で SSO 認証情報がクリアされるまでの時間（分）	いいえ	-1（クリアされない）
View Administrator コンソール セッションのタイムアウト（秒）	いいえ	3,000
ユーザーがこのポッドで View 接続サーバ インスタンスに接続する際にログイン前メッセージを表示	いいえ	0 または 1
リモート デスクトップでサーバ オペレーティング システムを実行可能	いいえ	true または false
Mirage サーバが有効	いいえ	true または false

説明	このフィールドは匿名になりますか？	値の例
Mirage サーバの URL（ポート番号を含む）	Yes	なし
True SSO が有効ですか。	はい	なし
True SSO が構成されているプライマリ登録サーバはありますか。	はい	なし
True SSO が構成されているセカンダリ登録サーバはありますか。	はい	なし

表 8-7. グローバル ステータス情報

説明	このフィールドは匿名になりますか？	値の例
View Server はドメイン コントローラに接続できます。	いいえ	true または false
Active Directory ドメインの DNS	Yes	なし
ドメインは NT4 形式のドメインです。	いいえ	true または false
ドメインの名前	Yes	なし
ドメインのステータス	いいえ	OK
ドメインとの信頼関係のタイプ	いいえ	プライマリ ドメイン、双方向、双方向のフォレストなど

VMware によって収集される View 接続サーバ データ

カスタマー エクスペリエンス向上プログラムに参加している場合、VMware は一定の View 接続サーバ フィールドからデータを収集します。機密情報が含まれるフィールドは、匿名扱いとなります。

表 8-8. View 接続サーバから収集される構成情報

説明	このフィールドは匿名になりますか？	値の例
View LDAP における View 接続サーバ エントリの共通名 (CN)	Yes	なし
View 接続サーバが無効になっている	いいえ	true または false
SecureID 認証が構成され、アクティブである	いいえ	true または false
RADIUS 認証が構成され、アクティブである	いいえ	true または false
SAML サーバ認証が許可、無効、または必須である	いいえ	0 = 無効 1 = 許可 2 = 必須
View 接続サーバのインストールの種類	いいえ	0 = View 接続サーバ 1 = セキュリティ サーバ
SecureID 認証名は Active Directory 名と一致する必要があるか？	いいえ	True = SecureID 認証名がマッピングされている False = SecureID 認証名がマッピングされていない
クライアントは安全なトンネルのバイパスを許可されるか？	いいえ	true または false

説明	このフィールドは匿名になりますか？	値の例
クライアントは PCoIP Secure Gateway のバイパスを許可されるか？	いいえ	true または false
スマート カード認証の構成	いいえ	オフ、オプション、または必須
ユーザーのスマート カードが削除されるときにそのユーザーを自動的にログオフさせる必要があるか？	いいえ	true または false
View LDAP バックアップが保存されるフォルダ	Yes	なし
View LDAP バックアップ頻度を設定する時間の単位	いいえ	時間、日、または週
View LDAP バックアップの頻度	いいえ	整数
View LDAP バックアップの時間	いいえ	整数
保存する View LDAP バックアップの最大数	いいえ	整数
前回の View LDAP バックアップの時間	いいえ	2014 年 2 月 21 日、午前 12 時 0 分 10 秒
前回の View LDAP バックアップのステータス	いいえ	OK
即座の View LDAP バックアップの保留	いいえ	true または false
View 接続サーバ インスタンスに関連付けられているタグ	Yes	なし
View 接続サーバ インスタンスがセキュリティ サーバとペアになっているかどうか	いいえ	0 = ペアになっていない 1 = ペアになっている
LDAP における View 接続サーバ インスタンスの識別名 (DN)	Yes	なし
セキュリティ サーバのペアリング パスワードが有効である期間	いいえ	
View 接続サーバ インスタンスのホスト/ノード名	Yes	なし
View 接続サーバ インスタンスのバージョン番号のみ	いいえ	6.0.0
View 接続サーバ インスタンスのビルドとバージョンのフル表示	いいえ	6.0.0-123455
セキュア ゲートウェイへの自動再接続	いいえ	true または false
クライアント プロトコルのトンネリング	いいえ	
View 接続サーバ インスタンスまたはセキュリティ サーバがリスンするプロトコル	いいえ	

表 8-9. View 接続サーバから収集されるステータス情報

説明	このフィールドは匿名になりますか？	値の例
View 接続サーバ インスタンスのビルド番号	いいえ	123456
複製された View 接続サーバ グループの名前（通常、最初の View 接続サーバ インスタンスのノード名）	Yes	なし
View 接続サーバ インスタンスの DNS 名	Yes	なし
View 接続サーバ インスタンスの IP アドレス	Yes	なし
View 接続サーバ インスタンスの NetBIOS ホスト名	Yes	なし
この View 接続サーバ インスタンスの現在のセッション数	いいえ	整数
この View 接続サーバ インスタンスの最大セッション数	いいえ	整数

説明	このフィールドは匿名になりますか？	値の例
この View 接続サーバ インスタンスの現在の View Composer セッション数	いいえ	整数
この View 接続サーバ インスタンスの最大 View Composer セッション数	いいえ	整数
View 接続サーバ インスタンスのバージョン	いいえ	6.0.0

表 8-10. View 接続サーバから収集される動的な使用率データ

説明	このフィールドは匿名になりますか？	値の例
個々の PowerShell cmdlet が呼び出された回数	いいえ	整数のリスト
直前の 1 分間に個々の View API メソッドが呼び出された回数	いいえ	整数のリスト
一定期間におけるパスワードを使用したログインの割合	いいえ	浮動小数
一定期間における SSL サーバ証明書を使用したログインの割合	いいえ	浮動小数
一定期間における委任認証（SAML など）を使用したログインの割合	いいえ	浮動小数
CPU の平均使用率 (%)	いいえ	整数
メモリの平均使用率 (%)	いいえ	整数
SSO で利用できるパスワードを使用したログインの平均数とパスワードを使用しないログインの平均数	いいえ	浮動小数
各表示プロトコル タイプ（PCoIP、RDP、および VMware Blast）でデスクトップ接続が起動された回数	いいえ	整数のリスト
各表示プロトコル タイプ（PCoIP、RDP、および VMware Blast）でリモート アプリケーションに対して新しいクライアント接続が行われた回数	いいえ	整数のリスト
リモート アプリケーションを起動したために発生した、新しい接続、再使用接続、新しいセッション接続、および再使用セッション接続の回数	いいえ	整数のリスト
n 個のデスクトップに対する資格が与えられているユーザーのためにデスクトップ接続が起動された回数	いいえ	整数のリストで、たとえば、1 つのデスクトップに対して資格が与えられているユーザーの数、2 つのデスクトップのユーザーの数、3 つのデスクトップのユーザーの数のように示されます。
n 個のアプリケーションに対する資格が与えられているユーザーのためにアプリケーション接続が起動された回数	いいえ	整数のリスト
ユーザーが他のアプリケーションを起動する際に、 n 個のプロトコル（PCoIP など）セッションがその時点までに存在した回数。たとえば、ユーザーが 5 つ目のアプリケーションを起動しても、それらのアプリケーションはすべて同じサーバ ファーム内に存在するため、セッションは 1 つしか存在しないという場合が考えられます。	いいえ	整数のリストで、たとえば 1 つのセッションを持つユーザーの数、2 つのセッションを持つユーザーの数のように示されます。

VMware によって収集されるセキュリティ サーバ データ

カスタマー エクスペリエンス向上プログラムに参加している場合、VMware はセキュリティ サーバ フィールドのデータを収集します。機密情報が含まれるフィールドは、匿名扱いとなります。

表 8-11. セキュリティ サーバ情報

説明	このフィールドは匿名になりますか？	値の例
セキュリティ サーバの安全なゲートウェイで実行されている PCoIP セッションの数	いいえ	整数
セキュリティ サーバの安全なゲートウェイで実行されているすべての種類のセッションの数	いいえ	整数
セキュリティ サーバのビルド番号	いいえ	123456
セキュリティ サーバのホスト名	Yes	なし
IPsec がアクティブである	いいえ	true または false
安全なゲートウェイがダウンしている	いいえ	true または false
現在のセッション数	いいえ	整数
安全なゲートウェイの URL	Yes	なし
セキュリティ サーバのバージョン番号	いいえ	6.0.0

VMware によって収集されるデスクトップ プール データ

カスタマー エクスペリエンス向上プログラムに参加している場合、VMware は特定のデスクトップ プール フィールドのデータを収集します。機密情報が含まれるフィールドは、匿名扱いとなります。

表 8-12. デスクトップ プールから収集される構成情報

説明	このフィールドは匿名になりますか？	値の例
View LDAP のデスクトップ プール エントリの共通名 (CN)	Yes	なし
デスクトップ プールを説明する表示名	Yes	なし
デスクトップ プールが無効になっている	いいえ	true または false
デスクトップ プールのタイプ	いいえ	次の中のいずれか。 IndividualVC、 IndividualUnmanaged、Persistent、 NonPersistent、SviPersistent、 SviNonPersistent、 ManualVCPersistent、Manual、 ManualUnmanagedPersistent、 ManualUnmanagedNonPersistent、 TerminalService、 OnRequestVcPersistent、 OnRequestVcNonPersistent、 OnRequestSviPersistent、 OnRequestSviNonPersistent
このデスクトップ プールがグループ化されている View Administrator フォルダ	Yes	なし

説明	このフィールドは匿名になりますか？	値の例
デスクトップ プールに属する仮想マシン識別名 (DN) のリスト	いいえ	次は、リスト項目例です。 ["CN=8f11d7cf-b0ef-43ad-92ce-691aa929d3c4,OU=Servers,DC=vdi,DC=vmware,DC=int"]
デスクトップ プールで複数セッションが許可されている	いいえ	true または false
このデスクトップ プールのユーザーが仮想マシンのリセットを許可されている	いいえ	オフ、オプション、または必須
強制ログオフ メッセージ表示後の時間	いいえ	true または false
プール内の仮想マシンを管理する vCenter Server インスタンスの識別名 (DN)	いいえ	"CN=e7a718de-d0f7-444a-9452-156dce289028,OU=VirtualCenter,OU=Properties,DC=vdi,DC=vmware,DC=int"
デスクトップ プール内の仮想マシンの最小数	いいえ	整数
デスクトップ プール内の仮想マシンの最大数	いいえ	整数
デスクトップ プール内のプロビジョニングされたスベアの仮想マシン数	いいえ	整数
デスクトップ プールの削除ポリシー	いいえ	Default、DeleteOnUse または RefreshOnUse
プロビジョニングで使用される DNS サフィックス	Yes	なし
自動展開の仮想マシン名に使用する名前付けパターン（プリフィックス）	Yes	なし
仮想マシンのクローンを作成するためのテンプレート	Yes	なし
展開された仮想マシンが保存されている vCenter Server のフォルダ	Yes	なし
仮想マシンに使用されるリソース プール	Yes	なし
データストアのリスト	Yes	なし
仮想マシンの展開に使用されるカスタマイズ仕様	Yes	なし
デスクトップ プールの自動プロビジョニングの有効化	いいえ	true または false
プロビジョニング中に発生するエラー	いいえ	
エラー発生時のプロビジョニングの停止	いいえ	true または false
プロビジョニングの開始	いいえ	true または false
プール値が計算済み	いいえ	true または false
リンク クローンのプロビジョニングに使用する親仮想マシン	Yes	なし
リンク クローンのプロビジョニングに使用するスナップショット名	Yes	なし
リンク クローンのプロビジョニングに使用するスナップショット ID	いいえ	"snapshot-38685"
VMware Horizon View Composer サービスで使用される展開グループ ID	いいえ	"7119316f-00a8-463d-bbba-c3000f105aeb"
View Composer 通常ディスク データストアのパス	Yes	なし
View Composer のディスクのタイプ	いいえ	"SystemDisposable"、UserProfile など
スパス ディスクとして通常ディスクを作成	いいえ	true または false

説明	このフィールドは匿名になりますか？	値の例
通常ディスクまたは破棄可能データ ディスクのドライブ マウント文字	いいえ	"*", "C" など
通常ディスクのターゲット サイズ	いいえ	整数
更新ポリシーのタイプ	いいえ	常時、なしまたは条件付き
更新操作の使用率のしきい値	いいえ	整数
更新操作の時間のしきい値	いいえ	整数
リンク クローンを保存するデータストアのオーバーコミット レベル	いいえ	None(なし)、Conservative(低)、Moderate(中)、Aggressive(高)
リンク クローンを保存するデータストアのデータストア パス	Yes	なし
このデータストアが使用される ID のリスト	いいえ	次のような GUID のリスト。 ["7119316f-00a8-463d-bbba-c3000f105aeb"]
仮想マシンの状態	いいえ	Ready(動作可能)、Pre-provisioned(プロビジョニング前)、Cloning(クローン)、Cloning Error(クローン エラー)、Customizing(カスタマイズ)、Deleting(削除)、Maintenance(メンテナンス)、Error(エラー) または Logout(ログアウト)
ユーザーの最初のログイン時に仮想マシンの割り当て	いいえ	true または false
デスクトップ プールのフラグ	いいえ	
マルチモニタの設定	いいえ	svga.maxWidth:int、svga.vramSize:int、svga.maxHeight:int、svga.enable3d:bool、svga.numDisplays:int
1 台の個別の仮想マシンが手動プールに変換済み	いいえ	true または false
リンク クローン プールで VAAI によるネイティブ スナップショット クローンの使用	いいえ	true または false
View Storage Accelerator (CBRC) が有効	いいえ	true または false
CBRC キャッシュの更新頻度	いいえ	整数
CBRC キャッシュ更新の停止期間	いいえ	リスト
CBRC にキャッシュされるディスク タイプ (OS ディスク、通常ディスク)	いいえ	リスト
仮想マシンのディスク容量の再利用 (SE スパース フォーマット) が有効	いいえ	true または false
ディスク容量の再利用しきい値 (バイト)	いいえ	
修理作業中に動作可能な仮想マシンの最小数	いいえ	
デスクトップ プールによる Virtual SAN データストアの使用	いいえ	true または false
このサーバ プールのリモート デスクトップに対する資格の数	いいえ	0 または 1
このプールのリモート アプリケーションに対する資格の数	いいえ	0 または 1
デフォルト表示プロトコル	いいえ	PCoIP、RDP、または Blast
使用する表示プロトコルをユーザーが選択可能	いいえ	true または false

説明	このフィールドは匿名になりますか？	値の例
HTML Access が有効	いいえ	true または false
Flash 品質のレベル	いいえ	None used (使用しない)、low (低)、medium (中)、high (高)
Flash スロットルのレベル	いいえ	None used (使用しない)、conservative (低)、moderate (中)、aggressive (高)
プールが無効	いいえ	true または false
プールに削除とマーク	いいえ	true または false
View 接続サーバ インスタンスに関連付けられているタグ	Yes	なし
グローバル設定で指定されたものとは異なる Mirage サーバを使用	いいえ	true または false
Mirage サーバが有効	いいえ	true または false
Mirage サーバの URL (ポート番号を含む)	Yes	なし
プールあたりのクローン数	いいえ	整数

VMware によって収集されるマシン データ

カスタマー エクスペリエンス向上プログラムに参加すると、VMware は仮想マシンについて説明している View フィールドと vCenter Server フィールドからデータを収集します。機密情報が含まれるフィールドは、匿名扱いとなります。

表 8-13. View から収集されるマシン データ

説明	このフィールドは匿名になりますか？	値の例
マシンが不正とマークされました。仮想マシンは useonce=true のときに使用されたため、新しいセッションを受け入れるべきではありません	いいえ	true または false
ID を変更するデバイスのマッピング	いいえ	次のような一連の ID: 2000=01874583;01874583&2016=3910f513;3910f513
データを相関させるために使用されるマシンの識別子	いいえ	vm-10
Sysprep カスタマイズがゲスト OS に使用されます	いいえ	true または false
タイムアウト値。マシンが切断されるまでの期間。	いいえ	時間
このマシンの View Agent または Horizon Agent のランダムな ID	いいえ	GUID
その他の構成値	いいえ	整数およびブール値 (true または false)
以前の View Composer の通常ディスクの View LDAP 識別子	いいえ	LDAP エントリ
マシンに対する資格が付与されている ThinApp	Yes	なし
アンインストールを保留している ThinApp	Yes	なし
マシンにインストールされている ThinApp	Yes	なし

説明	このフィールドは匿名になりますか？	値の例
マシンの状態	いいえ	未定義、プロビジョニング前、クローン、クローン エラー、カスタマイズ、作動可能、削除、メンテナンス、エラー、またはログアウト
カスタマイズが開始されたタイムスタンプ	いいえ	整数
マシンがカスタマイズのためにパワーオンされます	いいえ	整数。値は 0 または 1 です。
マシンがパワーオンされています	いいえ	true または false
マシンがサスペンドされています	いいえ	true または false
マシンの状態が遷移中です	いいえ	true または false
マシンが構成されます	いいえ	true または false
vCenter Server の仮想マシンへのパス	Yes	なし
マシンをカスタマイズするために使用されるカスタマイズ テンプレート	Yes	なし
マシンの View Composer リンク クローン ID	いいえ	リンク クローンの GUID
vCenter Server で欠落している仮想マシン	いいえ	true または false
View がマシンのパワーオフを試行した回数	いいえ	整数
CBRC (View Storage Accelerator) ステータス	いいえ	オフ、最新、古い、エラー
最後の CBRC 更新の時間	いいえ	日付
最後の CBRC エラーの時間	いいえ	整数
最後の不完全な CBRC 構成試行の時間	いいえ	整数
マシンにインストールされている View Agent または Horizon Agent のバージョン	いいえ	6.0.0-551711
View Persona Management がマシンで有効です	いいえ	true または false
前回再利用されたマシン ディスク領域の量 (バイト数) (SE スパース形式を使用している場合)	いいえ	
領域が再利用された前回の日時	いいえ	タイムスタンプ

表 8-14. vCenter Server から収集される仮想マシン データ

説明	このフィールドは匿名になりますか？	値の例
仮想マシンのハードウェア バージョン	いいえ	v8
仮想マシンに割り当てられている RAM の量	いいえ	1024
仮想マシンで構成されている仮想 CPU の数	いいえ	整数
仮想マシンにインストールされているオペレーティング システム	いいえ	Microsoft Windows 7 (32 ビット)、Microsoft Windows 8 (32 ビット)、Microsoft Windows Server 2008 R2 (64 ビット)、Microsoft Windows Server 2012 R2 (64 ビット) など

VMware によって収集される vCenter Server データ

カスタマー エクスペリエンス向上プログラムに参加している場合、VMware は vCenter Server の特定フィールドのデータを収集します。機密情報が含まれるフィールドは、匿名扱いとなります。

表 8-15. vCenter Server から収集されるホスト システム情報

説明	このフィールドは匿名になりますか？	値の例
View がこの vCenter Server ホストと最後に通信した時間	いいえ	整数
vCenter Server インスタンスの URL	Yes	なし
vCenter Server インスタンスの API バージョン	いいえ	5.0
vCenter Server インスタンスのビルド番号	いいえ	456789
vCenter Server インスタンスのバージョン番号	いいえ	5.0.0

表 8-16. vCenter Server から収集されるホスト ステータス情報

説明	このフィールドは匿名になりますか？	値の例
vCenter Server と View 接続サーバ間の接続ステータスの内部ステータス コード	いいえ	Status_Up
接続ステータス コードの説明	いいえ	接続済み
vCenter Server SSL 証明書が有効であるか	いいえ	true または false
SSL 証明書が有効でない理由	いいえ	名前の不一致、信頼されていない、失効を確認できないなど

表 8-17. vCenter Server から収集されるデータストア データ

説明	このフィールドは匿名になりますか？	値の例
このデータストアのディスク容量	いいえ	整数
このデータストアの空きディスク領域	いいえ	整数
ストレージの種類	いいえ	NFS、VMFS
このデータストアに複数のホストが同時にアクセスできるか	いいえ	true または false

表 8-18. ESX ノード情報

説明	このフィールドは匿名になりますか？	値の例
特定の ESXi ホストを管理する vCenter Server の識別子（その ESXi ホストの識別子を含む）	いいえ	1234-ADEE-BECF-41AA-4950BCDA-host-14

表 8-19. ESXi ホストの直接接続ストレージについての情報

説明	このフィールドは匿名になりますか？	値の例
物理ディスクのハードウェア ベンダー	いいえ	SEAGATE
物理ディスクのモデル	いいえ	ST9300653SS
SSD	いいえ	true または false
容量 (バイト数)	いいえ	
ESXi ホストの識別子	いいえ	host-123
特定の ESXi ホストを管理する vCenter Server の識別子	いいえ	1234-ADEE-BECF-41AA-4950BCDA

VMware によって収集される ThinApp データ

カスタマー エクスペリエンス向上プログラムに参加すると、VMware は ThinApp の特定フィールドのデータを収集します。機密情報が含まれるフィールドは、匿名扱いとなります。

表 8-20. ThinApp 情報

説明	このフィールドは匿名になりますか？	値の種類
ThinApp パッケージの名前の表示	いいえ	
ThinApp と関連する MSI パッケージの数	いいえ	整数
フル インストールの割り当てカウント	いいえ	整数
フル インストールを使用するプール セットのリスト	Yes	CN のハッシュを含むリスト (共通名)
フル インストールを使用するリモート デスクトップ セット	いいえ	デスクトップの CN (GUID) を含むリスト
ThinApp のストリーミングの割り当てカウント	いいえ	整数
ThinApp をストリーミングするプール セットのリスト	Yes	CN のハッシュを含むリスト (共通名)
ThinApp をストリーミングするリモート デスクトップ セット	いいえ	デスクトップの CN (GUID) を含むリスト
フル インストールを使用するプール セットのグループ内の ThinApps	いいえ	ThinApps の ID を含むリスト

VMware によって収集される Cloud Pod アーキテクチャ情報

カスタマー エクスペリエンス向上プログラムに参加している場合、VMware は Cloud Pod アーキテクチャ 特定フィールドのデータを収集します。機密情報が含まれるフィールドは、匿名扱いとなります。

表 8-21. Cloud Pod アーキテクチャ について収集される情報

説明	このフィールドは匿名になりますか？	例または種類
Cloud Pod アーキテクチャ 機能が有効になっている	いいえ	true または false
ローカル ポッド ID	いいえ	
複数のポッドにわたる健全性チェックをシステムが行う頻度 (秒数)	いいえ	整数
ポッド間に許容される最大の時間差 (秒数)	いいえ	整数

説明	このフィールドは匿名 になりますか？	例または種類
ポッドが属しているサイトの共通名	いいえ	
グローバル資格 ID のリスト（たとえば、ポッドにはグローバル資格をサポートするデスクトップ プールが含まれています）	いいえ	文字列のリスト
ポッド エンドポイント（View 接続サーバインスタンス）の共通名	Yes	
このエンドポイントが含まれるポッドの共通名	いいえ	
ポッド エンドポイントが無効になっている	いいえ	true または false
リモート セッションのエンドポイント（View 接続サーバインスタンス）をランダムに選択する場合に適用する重みづけ	いいえ	整数
グローバル資格が無効になっている	いいえ	true または false
デスクトップ検索がユーザーのホーム サイトから始まる (false に設定すると検索はローカル ポッドから始まります)	いいえ	true または false
グローバル資格が専用デスクトップ用である	いいえ	0 = いいえ 1 = はい
既存のセッション検索が行われる範囲	いいえ	ANY, SITE, or LOCAL
新しいセッション配置が行われる範囲	いいえ	ANY, SITE, or LOCAL
このグローバル資格にはユーザーのホーム サイトが必要である	いいえ	true または false
自動的なセッション クリーンアップが有効になっている	いいえ	true または false

VMware によって収集される Horizon Client データ

所属する企業がカスタマー エクスペリエンス向上プログラムに参加している場合、VMware は Horizon Client の特定フィールドのデータを収集します。機密情報が含まれるフィールドは、匿名扱いとなります。

情報は接続サーバへ送信される途中で暗号化されますが、クライアント システムの情報は暗号化されずに、ユーザー固有のディレクトリ内に記録されます。この記録には、個人情報を含めません。

表 8-22. カスタマー エクスペリエンス向上プログラムに関して Horizon Client で収集されるデータ

説明	このフィールドは 匿名になります か？	値の例
Horizon Client アプリケーションを開発する企業	いいえ	VMware
製品名	いいえ	VMware Horizon Client
クライアント製品のバージョン	いいえ	(形式は <i>x.x.x-yyyyyy</i> で、 <i>x.x.x</i> はクライアントのバージョン番号、 <i>yyyyyy</i> はビルド番号です。)
クライアントのバイナリ アーキテクチャ	いいえ	以下に例を挙げます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ i386 ■ x86_64 ■ arm

説明	このフィールドは匿名になりますか？	値の例
クライアントのビルド名	いいえ	以下に例を挙げます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ VMware-Horizon-Client-Win32-Windows ■ VMware-Horizon-Client-Linux ■ VMware-Horizon-Client-iOS ■ VMware-Horizon-Client-Mac ■ VMware-Horizon-Client-Android ■ VMware-Horizon-Client-WinStore
ホスト OS	いいえ	以下に例を挙げます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Windows 8.1 ■ Windows 7、64 ビット Service Pack 1 (Build 7601) ■ iPhone OS 5.1.1 (9B206) ■ Ubuntu 12.04.4 LTS ■ Mac OS X 10.8.5 (12F45)
ホスト OS のカーネル	いいえ	以下に例を挙げます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Windows 6.1.7601 SP1 ■ Darwin Kernel バージョン 11.0.0:Sun Apr 8 21:52:26 PDT 2012;root:xnu-1878.11.10~1/RELEASE_ARM_S5L8945X ■ Darwin 11.4.2 ■ Linux 2.6.32-44-generic #98-Ubuntu SMP Mon Sep 24 17:27:10 UTC 2012 ■ 不明 (Windows ストア版)
ホスト OS のアーキテクチャ	いいえ	以下に例を挙げます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ x86_64 ■ i386 ■ armv71 ■ ARM
ホスト システムのモデル	いいえ	以下に例を挙げます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Dell Inc. OptiPlex 960 ■ iPad3,3 ■ MacBookPro8,2 ■ Dell Inc. Precision WorkStation T3400 (A04 03/21/2008)
ホスト システムの CPU	いいえ	以下に例を挙げます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Intel(R) Core(TM)2 Duo CPU E8400 @ 3.00GH ■ Intel(R) Core(TM)2 Quad CPU Q6600 @ 2.40GH ■ 不明 (iPad)
ホスト システムのプロセッサのコア数	いいえ	例： 4
ホスト システムのメモリ容量 (MB)	いいえ	以下に例を挙げます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 4096 ■ 不明 (Windows ストア版)
接続された USB デバイスの数	いいえ	2 (USB デバイスのリダイレクトは Linux、Windows および Mac クライアントでのみサポートされています。)

説明	このフィールドは匿名になりますか？	値の例
同時並行する USB デバイスの最大接続数	いいえ	2
USB デバイス ベンダー ID	いいえ	以下に例を挙げます。 ■ Kingston ■ NEC ■ Nokia ■ Wacom
USB デバイス製品 ID	いいえ	以下に例を挙げます。 ■ DataTraveler ■ ゲームパッド ■ ストレージ ドライブ ■ 無線マウス
USB デバイス ファミリ	いいえ	以下に例を挙げます。 ■ セキュリティ ■ ヒューマン インターフェイス デバイス ■ イメージング
USB デバイス使用数	いいえ	(デバイスが共有された回数)

VMware によって収集されるデータ

所属する企業がカスタマー エクスペリエンス向上プログラムに参加している場合、VMware はクライアントの特定フィールドのデータを収集します。機密情報が含まれるフィールドは、匿名扱いとなります。

表 8-23. カスタマー エクスペリエンス向上プログラムのために収集されたクライアント データ

説明	フィールド名	このフィールドは匿名になりますか？	値の例
アプリケーションを開発する企業	<クライアント-ベンダー>	いいえ	VMware
製品名	<クライアント-製品>	いいえ	
クライアント製品のバージョン	<クライアント-バージョン>	いいえ	4.2.0-build_number
クライアントのバイナリ アーキテクチャ	<クライアント-アーキテクチャ>	いいえ	以下のような値があります。 ■ ブラウザ ■ arm
ブラウザのネイティブ アーキテクチャ	<ブラウザ-アーキテクチャ>	いいえ	以下のような値があります。 ■ Win32 ■ Win64 ■ MacIntel ■ iPad

説明	フィールド名	このフィールドは匿名になりますか？	値の例
ブラウザ ユーザー エージェント文字列	<ブラウザ-ユーザー-エージェント>	いいえ	以下のような値があります。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Mozilla/5.0 (Windows NT 6.1; WOW64) ■ AppleWebKit/703.00 (KHTML, Gecko など) ■ Chrome/3.0.1750 ■ Safari/703.00 ■ Edge/13.10586
ブラウザの内部バージョン文字列	<ブラウザ-バージョン>	いいえ	以下のような値があります。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 7.0.3 (Safari 用) ■ 44.0 (Firefox 用) ■ 13.10586 (Edge 用)
ブラウザのコア実装	<ブラウザ-コア>	いいえ	以下のような値があります。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Chrome ■ Safari ■ Firefox ■ Internet Explorer ■ Edge
ブラウザがハンドヘルド デバイスで実行しているかどうか	<ブラウザ-は-ハンドヘルド>	いいえ	true

View Composer のリンククローン デスクトップ仮想マシンの管理

9

View Composer のリンククローン デスクトップ マシンの更新、オペレーティング システム データのサイズの削減、データストア間でのマシンの再調整を行うことができます。さらに、リンク クローンに関連付けられている通常ディスクを管理できます。

この章には、次のトピックが含まれています。

- [マシンの更新によるリンク クローン サイズの削減](#)
- [リンク クローン デスクトップの更新](#)
- [リンククローン仮想マシンの再分散](#)
- [View Composer 通常ディスクの管理](#)

マシンの更新によるリンク クローン サイズの削減

マシンの更新操作により、各リンク クローンのオペレーティング システム ディスクを元の状態とサイズに復元し、ストレージ コストを削減します。

可能であれば、オフピーク時に更新操作をスケジュール設定します。

ガイドラインについては、[マシンの更新操作](#)を参照してください。

前提条件

- 更新操作のスケジュールを決定します。デフォルトでは、View Composer はすぐに操作を開始します。
特定のリンク クローンに対し、一度にスケジュール設定できる更新操作は 1 回だけです。更新操作がさまざまなリンク クローンに影響する場合は、複数の更新操作をスケジュール設定できます。
- 操作が開始されたらただちにすべてのユーザーを強制的にログオフさせるか、各ユーザーがログオフするのを待機してからそのユーザーのリンク クローン デスクトップを更新するかを決定します。
ユーザーを強制的にログオフさせる場合、View は切断する前にユーザーに通知するため、ユーザーはアプリケーションを閉じてログオフすることができます。
ユーザーを強制的にログオフさせる場合、ログオフが必要なリモート デスクトップ上の同時更新操作の最大数は [最大同時 View Composer メンテナンス操作数] 設定の値の半分にになります。たとえば、この設定を 24 にし、ユーザーを強制的にログオフさせる場合、ログオフが必要なリモート デスクトップ上の同時更新操作の最大数は 12 になります。

- 複製された View 接続サーバ インスタンスが展開内に含まれる場合は、すべてのインスタンスが同一バージョンであることを確認します。

手順

- 1 View Administrator で、[カタログ] - [デスクトップ プール] を選択します。
- 2 左の列のプール ID をダブルクリックして、更新するデスクトップ プールを選択します。
- 3 複数の仮想マシンを更新するか、単一の仮想マシンを更新するかを選びます。

オプション	操作
デスクトップ プール内のすべての仮想マシンを更新するには	<ol style="list-style-type: none"> a View Administrator で、[カタログ] - [デスクトップ プール] を選択します。 b 左の列のプール ID をダブルクリックして、更新するデスクトップ プールを選択します。 c [インベントリ] タブで [マシン] をクリックします。 d Ctrl キーまたは Shift キーを使用して、左の列のマシン ID をすべて選択します。 e [View Composer] ドロップダウン メニューから [更新] を選択します。
単一の仮想マシンを更新するには	<ol style="list-style-type: none"> a View Administrator で、[リソース] - [マシン] を選択します。 b 左の列のマシン ID をダブルクリックして、更新するマシンを選択します。 c [サマリ] タブで、[View Composer] ドロップダウン メニューから [更新] を選択します。

- 4 ウィザードの手順に従います。

OS ディスクが元のサイズに縮小されます。

vCenter Server で、リンク クローン仮想マシンの更新操作の進捗を監視できます。

View Administrator では、[カタログ] - [デスクトップ プール] を選択し、プール ID をダブルクリックし、[タスク] タブをクリックすることにより、操作を監視できます。[タスクをキャンセル]、[タスクを一時停止]、または [タスクをレジューム] をクリックし、タスクを終了したり、タスクを保留にしたり、保留にしたタスクを再開したりすることができます。

マシンの更新操作

ユーザーがリンク クローンを操作するたびに、クローンの OS ディスクが大きくなります。マシンの更新操作によって、OS ディスクが元の状態とサイズに復元され、ストレージ コストが削減されます。

更新操作は View Composer 通常ディスクには影響しません。

リンク クローンは、完全な OS データを格納する親の仮想マシンに比べ使用するストレージ領域が少なくなります。ただし、クローンの OS ディスクはゲスト OS 内からデータが書き込まれるたびに拡大していきます。

View Composer はリンク クローンの作成時に、クローンの OS ディスクのスナップショットを作成します。このスナップショットでは、リンク クローン仮想マシンが一意に識別されます。更新操作によって、OS ディスクがそのスナップショットに戻されます。

View Composer は、クローンを削除して再作成する場合にかかる時間のわずかに半分の時間で、リンク クローンを更新できます。

更新操作では以下のガイドラインに従います。

- デスクトップ プールの更新は、必要に応じて、スケジュール設定されたイベントとして、または OS データが指定サイズに達したときに実行できます。

特定のリンク クローンに対し、一度にスケジュール設定できる更新操作は 1 回だけです。更新操作をただちに開始した場合、以前にスケジュール設定されたすべてのタスクが上書きされます。

更新操作がさまざまなリンク クローンに影響する場合は、複数の更新操作をスケジュール設定できます。

新しい更新操作をスケジュール設定する前に、以前にスケジュール設定したすべてのタスクをキャンセルする必要があります。

- 専用割り当てプールと流動割り当てプールを更新できます。
- 更新は、ユーザーがリンク クローン デスクトップから切断される場合にのみ実行できます。
- 更新では、QuickPrep または Sysprep によって設定された一意のコンピュータ情報が保持されます。更新後に、システム ドライブにインストールされているサードパーティ ソフトウェアの SID または GUID を復元するために Sysprep を再実行する必要はありません。
- リンク クローンを再構成すると、View によって、リンク クローンの OS ディスクの新しいスナップショットが作成されます。その後の更新操作では、リンク クローンが最初に作成されたときに作成された元のスナップショットではなく、その新しいスナップショットによって OS データが復元されます。

ネイティブ NFS スナップショット (VAAI) テクノロジーを使用してリンク クローンを生成する場合は、特定ベンダーの NAS デバイスによって、リンク クローンの OS ディスクの更新時にレプリカ ディスクのスナップショットが作成されます。これら NAS デバイスは、各クローンの OS ディスクのスナップショットを直接作成することはサポートしていません。

- ユーザーが更新操作中に接続できる状態を保つ作動可能なプロビジョニングされたデスクトップの最小数を設定できます。『View でのデスクトップ プールとアプリケーション プールの設定』の「View Composer 操作中にリンク クローン デスクトップをプロビジョニングされて作動可能な状態に保つ」を参照してください。

注: ページング ファイルとシステム一時ファイルを一時ディスクにリダイレクトすることによって、リンク クローンの拡大を抑えることができます。リンク クローンがパワーオフされると、View は一時ディスクを、View Composer がリンク クローン プールで作成した元の一時ディスクのコピーに置き換えます。この操作によって、一時ディスクが元のサイズに縮小されます。

このオプションは、リンク クローン デスクトップ プールの作成時に構成できます。

リンク クローン デスクトップの更新

親仮想マシンで新しい基本イメージを作成し、再構成機能を使用して、リンク クローン仮想マシンを更新し、更新済みのイメージをリンク クローンに配布できます。

- [リンク クローンの再構成のための親仮想マシンの準備](#)

リンク クローン デスクトップ プールを再構成する前に、リンク クローンの基本イメージとして使用した親仮想マシンを更新する必要があります。

■ リンククローン仮想マシンの再構成

マシンの再構成は、親仮想マシンに関連付けられているすべてのリンククローン仮想マシンを同時に更新します。

■ 再構成によるリンク クローンの更新

再構成では、デスクトップ プール内のすべてのリンク クローンで、オペレーティング システムのパッチを提供したり、アプリケーションをインストールまたは更新したり、仮想マシン ハードウェア設定を変更したりすることができます。

■ 失敗した再構成の修正

失敗した再構成を修正できます。さらに、使用するつもりであった基本イメージと異なる基本イメージを使用して、誤ってリンク クローンを再構成した場合も対処できます。

リンク クローンの再構成のための親仮想マシンの準備

リンク クローン デスクトップ プールを再構成する前に、リンク クローンの基本イメージとして使用した親仮想マシンを更新する必要があります。

View Composer では、あるオペレーティング システムを使用するリンク クローンを、別のオペレーティング システムを使用する親仮想マシンに再構成することはできません。たとえば、Windows 8 親仮想マシンのスナップショットを使用して、Windows 7 のリンク クローンを再構成することはできません。

手順

- 1 vCenter Server で、再構成のために親仮想マシンを更新します。
 - 親仮想マシンで、OS パッチまたはサービス パック、新しいアプリケーション、アプリケーションの更新をインストールするか、またはその他の変更を行います。
 - または、再構成時に新しい親として選択する別の仮想マシンを準備します。
- 2 vCenter Server で、更新済みまたは新しい親仮想マシンをパワーオフします。
- 3 vCenter Server で、親仮想マシンのスナップショットを作成します。

次のステップ

リンク クローン デスクトップ プールを再構成します。

リンククローン仮想マシンの再構成

マシンの再構成は、親仮想マシンに関連付けられているすべてのリンククローン仮想マシンを同時に更新します。

可能であれば、オフピーク時に再構成をスケジュール設定します。

前提条件

- 親仮想マシンのスナップショットがあることを確認します。 [リンク クローンの再構成のための親仮想マシンの準備](#)を参照してください。
- 再構成のガイドラインについて理解しておきます。 [再構成によるリンク クローンの更新](#)を参照してください。
- 再構成のスケジュールを決定します。デフォルトでは、View Composer はすぐに再構成を開始します。

特定のリンク クローンに対し、一度にスケジュール設定できる再構成は 1 回だけです。再構成がさまざまなリンク クローンに影響する場合は、複数の再構成をスケジュール設定できます。

- 再構成が開始されたらただちにすべてのユーザーを強制的にログオフさせるか、各ユーザーがログオフするのを待機してからそのユーザーのリンククローン デスクトップを再構成するかを決定します。

ユーザーを強制的にログオフさせる場合、View は切断する前にユーザーに通知するため、ユーザーはアプリケーションを閉じてログオフすることができます。

- 最初のエラーでプロビジョニングを停止するかどうかを決定します。このオプションを選択し、View Composer がリンク クローンをプロビジョニング中にエラーが発生すると、デスクトップ プール内のすべてのクローンに対するプロビジョニングが停止します。このオプションを選択することにより、ストレージなどのリソースが不必要に消費されるのを防ぐことができます。

[最初のエラーで停止] オプションを選択しても、カスタマイズには影響を与えません。リンク クローン上でカスタマイズ エラーが発生しても、他のクローンのプロビジョニングとカスタマイズは続行されます。

- デスクトップ プールのプロビジョニングが有効になっていることを確認します。デスクトップ プールのプロビジョニングが無効にされている場合、View によってデスクトップは再構成後にカスタマイズされないようになります。
- レプリケートされた View 接続サーバー インスタンスがデプロイ内に含まれる場合は、すべてのインスタンスが同一バージョンであることを確認します。

手順

- 1 デスクトップ プール全体を再構成するか、単一マシンを再構成するかを選択します。

オプション	アクション
デスクトップ プール内のすべての仮想マシンを再構成するには	<ol style="list-style-type: none"> a View Administrator で、[カタログ] - [デスクトップ プール] を選択します。 b 左の列のプール ID をダブルクリックして、再構成するデスクトップ プールを選択します。 c [インベントリ] タブで [マシン] をクリックします。 d Ctrl キーまたは Shift キーを使用して左の列のすべてのマシン ID を選択します。 e [View Composer] ドロップダウン メニューから [再構成] を選択します。
選択した仮想マシンを再構成するには	<ol style="list-style-type: none"> a View Administrator で、[リソース] - [マシン] を選択します。 b 左の列のマシン ID をダブルクリックして、再構成するマシンを選択します。 c [サマリ] タブで、[View Composer] ドロップダウン メニューから [再構成] を選択します。

- 2 ウィザードの手順に従います。

このデスクトップ プールの親仮想マシンとして使用する新しい仮想マシンを選択できます。

完了の準備完了ページで [詳細の表示] をクリックして、再構成されるリンククローン デスクトップを表示できます。

リンククローン仮想マシンが更新されます。OS ディスクが元のサイズに縮小されます。

専用割り当てプールでは、未割り当てのリンク クローンが削除され、再作成されます。指定した数のスペアの仮想マシンが保持されます。

流動割り当てプールでは、選択したすべてのリンク クローンが再構成されます。

vCenter Server で、リンククローン仮想マシンの再構成の進捗を監視できます。

View Administrator では、[カタログ] - [デスクトップ プール] をクリックし、プール ID をダブルクリックして、[タスク] タブをクリックすることで、操作を監視できます。[タスクをキャンセル]、[タスクを一時停止]、または [タスクをレジューム] をクリックし、タスクを終了したり、タスクを保留にしたり、保留にしたタスクを再開したりすることができます。

注: デスクトップ プールの作成時に、Sysprep カスタマイズ仕様を使用してリンク クローンをカスタマイズした場合、再構成された仮想マシンに対して新しい SID が作成されることがあります。詳細については、『View でのデスクトップ プールとアプリケーション プールの設定』の「Sysprep でカスタマイズしたリンク クローンの再構成」を参照してください。

再構成によるリンク クローンの更新

再構成では、デスクトップ プール内のすべてのリンク クローンで、オペレーティング システムのパッチを提供したり、アプリケーションをインストールまたは更新したり、仮想マシン ハードウェア設定を変更したりすることができます。

リンク クローン仮想マシンを再構成するには、vCenter Server で親仮想マシンを更新するか、新しい親になる別の仮想マシンを選択します。次に、新しい親仮想マシンの構成のスナップショットを作成します。

リンク クローンは、親に直接リンクされているのではなく、レプリカにリンクされているため、リンク クローンに影響を与えることなく親仮想マシンを変更できます。

次に、デスクトップ プールの新しい基本イメージとして使用するスナップショットを選択して、再構成を開始します。View Composer は新しいレプリカを作成し、再構成した OS ディスクをリンク クローンにコピーし、リンク クローンを新しいレプリカに関連付けます。

再構成によって、リンク クローンも更新され、OS ディスクのサイズが削減されます。

デスクトップの再構成は、View Composer 通常ディスクには影響しません。

再構成では以下のガイドラインに従います。

- 専用割り当てデスクトップ プールと流動割り当てデスクトップ プールを再構成できます。
- デスクトップ プールの再構成は、必要に応じて、またはスケジュール設定されたイベントとして実行できます。
特定のリンク クローンに対し、一度にスケジュール設定できる再構成は 1 回だけです。新しい再構成をスケジュール設定する前に、以前にスケジュール設定したすべてのタスクをキャンセルしたり、以前の操作が完了するまで待機したりする必要があります。新しい再構成をすぐに開始する前に、以前にスケジュール設定したすべてのタスクをキャンセルする必要があります。
- 再構成がさまざまなリンク クローンに影響する場合は、複数の再構成をスケジュール設定できます。
- デスクトップ プール内の選択したリンク クローンまたはすべてのリンク クローンを再構成できます。
- デスクトップ プール内のさまざまなリンク クローンが、基本イメージのさまざまなスナップショットやさまざまな基本イメージに基づいている場合、デスクトップ プールには複数のレプリカが含まれます。
- 再構成は、ユーザーがリンク クローン デスクトップからログオフしている場合にのみ実行できます。

- あるオペレーティング システムを使用するリンク クローンを、別のオペレーティング システムを使用する新しい、または更新された親仮想マシンに再構成することはできません。
- 現在のバージョンよりも低いハードウェア バージョンにリンク クローンを再構成することはできません。たとえば、ハードウェア バージョン 7 の親仮想マシンにハードウェア バージョン 8 のクローンを再構成することはできません。
- 再構成操作時に、ユーザーが引き続き接続できるプロビジョニングされた作動可能なデスクトップの最小数を設定できます。『View でのデスクトップ プールとアプリケーション プールの設定』の「View Composer 操作中にリンク クローン デスクトップをプロビジョニングされて作動可能な状態に保つ」を参照してください。

注: デスクトップ プールの作成時に、Sysprep カスタマイズ仕様を使用してリンク クローンをカスタマイズした場合、再構成された仮想マシンに対して新しい SID が作成されることがあります。詳細については、『View でのデスクトップ プールとアプリケーション プールの設定』の「Sysprep でカスタマイズしたリンク クローンの再構成」を参照してください。

失敗した再構成の修正

失敗した再構成を修正できます。さらに、使用するつもりであった基本イメージと異なる基本イメージを使用して、誤ってリンク クローンを再構成した場合も対処できます。

問題

再構成に失敗した結果、仮想マシンはエラーのある状態または古い状態になります。

原因

再構成中に、vCenter Server ホスト、vCenter Server、またはデータストアでシステム障害や問題が発生していた可能性があります。

あるいは、再構成で、元の親仮想マシンのオペレーティング システムとは別のオペレーティング システムの仮想マシンのスナップショットが使用された可能性があります。たとえば、Windows 7 のリンク クローンを再構成するために Windows 8 のスナップショットを使用した可能性があります。

解決方法

- 1 成功した最後の再構成で使用したスナップショットを選択します。

新しいスナップショットを選択し、リンク クローンを新しい状態に更新することもできます。

このスナップショットでは、元の親仮想マシンのスナップショットと同じオペレーティング システムを使用している必要があります。

- 2 デスクトップ プールを再構成します。

View Composer はスナップショットから基本イメージを作成し、リンク クローン OS ディスクを再作成します。

再構成中に、ユーザー データおよび設定が保存された View Composer 通常ディスクは保持されます。

誤った再構成の状況によっては、リンク クローンの再構成に加えて、それらを更新または再分散できます。

注: View Composer 通常ディスクを構成しない場合は、再構成によって、リンク クローン仮想マシンでユーザーが生成した変更は削除されます。

リンククローン仮想マシンの再分散

再分散操作は、リンククローン仮想マシンを使用可能なデータストア間で均等に再分散します。

また、再分散操作を使用して、リンククローン仮想マシンを他のデータストアに移すこともできます。リンククローン仮想マシンの移行または管理に vSphere Client または vCenter Server を使用することは避けてください。[リンク クローン仮想マシンを別のデータストアへ移行する](#)を参照してください。

可能であれば、再分散操作をオフピーク時にスケジュール設定します。

ガイドラインについては、[論理ドライブ間のリンク クローンの再分散](#)を参照してください。

前提条件

- 再分散操作について理解しておきます。[論理ドライブ間のリンク クローンの再分散](#)を参照してください。

- 再分散操作のスケジュールを決定します。デフォルトでは、View Composer はすぐに操作を開始します。

特定のリンク クローンに対し、一度にスケジュール設定できる再分散操作は 1 回だけです。再分散操作がさまざまなリンク クローンに影響する場合は、複数の再分散操作をスケジュール設定できます。

- 操作が開始されたらただちにすべてのユーザーを強制的にログオフさせるか、各ユーザーがログオフするのを待機してからそのユーザーのリンククローン デスクトップを再分散するかを決定します。

ユーザーを強制的にログオフさせる場合、View は切断する前にユーザーに通知するため、ユーザーはアプリケーションを閉じてログオフすることができます。

ユーザーを強制的にログオフさせると、ログオフが必要なリモート デスクトップ上の同時再分散操作の最大数は、[最大同時 View Composer メンテナンス操作数] 設定値の半分になります。たとえば、この設定を 24 に構成し、ユーザーを強制的にログオフさせた場合、ログオフが必要なリモート デスクトップ上の同時再分散操作の最大数は 12 です。

- デスクトップ プールのプロビジョニングが有効になっていることを確認します。プールのプロビジョニングが無効にされている場合、View によって仮想マシンは再分散後にカスタマイズされなくなります。
- レプリケートされた View 接続サーバ インスタンスがデプロイ内に含まれる場合は、すべてのインスタンスが同一バージョンであることを確認します。

手順

- 1 プール全体を再分散するか、または単一の仮想マシンを再分散するかを選択します。

オプション	アクション
プール内のすべての仮想マシンを再分散する	<ol style="list-style-type: none"> a View Administrator で、[カタログ] - [デスクトップ プール] を選択します。 b 左の列のプール ID をダブルクリックして、再分散するプールを選択します。 c [インベントリ] タブで [マシン] をクリックします。 d Ctrl キーまたは Shift キーを使用し、左の列の複数またはすべてのマシン ID を選択します。 e [View Composer] ドロップダウン メニューから、[再分散] を選択します。
単一の仮想マシンを再分散する	<ol style="list-style-type: none"> a View Administrator で、[リソース] - [マシン] を選択します。 b 左の列の [マシン ID] をダブルクリックして、再分散するマシンを選択します。 c [サマリ] タブの View Composer ドロップダウン メニューから [再調整] を選択します。

- 2 ウィザードの手順に従います。

リンククローン仮想マシンが更新され、再分散されます。OS ディスクが元のサイズに縮小されます。

View Administrator では、[カタログ] - [デスクトップ プール] を選択し、プール ID をダブルクリックして、[タスク] タブをクリックすることで、操作を監視できます。[タスクをキャンセル]、[タスクを一時停止]、または [タスクをレジューム] をクリックし、タスクを終了したり、タスクを保留にしたり、保留にしたタスクを再開したりすることができます。

論理ドライブ間のリンク クローンの再分散

再分散操作は、リンク クローン仮想マシンを使用可能な論理ドライブ間で均等に再分配します。これによって、過負荷のドライブ上のストレージ領域が節約され、十分に使用されないドライブがなくなります。

大きなリンク クローン デスクトップ プールを作成し、複数の LUN (Logical Unit Number) を使用する場合、最初のサイズ設定が正確でないと、領域が効率的に使用されないことがあります。ストレージのオーバーコミット レベルを高く設定すると、リンク クローンが急速に拡大し、データストアのすべての空き領域が消費される可能性があります。

仮想マシンによって、データストアの 95% の領域が使用されると、View は警告ログ エントリを生成します。

再分散によって、リンク クローンも更新され、OS ディスクのサイズが削減されます。これは、View Composer 通常ディスクには影響しません。

再分散では以下のガイドラインに従います。

- 専用割り当てデスクトップ プールと流動割り当てデスクトップ プールを再分散できます。
- 選択したリンク クローンまたはプール内のすべてのクローンを再分散できます。
- デスクトップ プールの再分散は、必要に応じて、またはスケジュール設定されたイベントとして実行できます。

特定のリンク クローンに対し、一度にスケジュール設定できる再分散操作は 1 回だけです。再分散操作をただちに開始した場合、以前にスケジュール設定されたすべてのタスクが上書きされます。

再分散操作がさまざまなリンク クローンに影響する場合は、複数の再分散操作をスケジュール設定できます。

新しい再分散操作をスケジュール設定する前に、以前にスケジュール設定したすべてのタスクをキャンセルする必要があります。

- 再分散できるのは、スケジュールや保留中のキャンセルがない、Available（使用可能）、Error（エラー）、または Customizing（カスタマイズ）状態の仮想マシンだけです。
- ベスト プラクティスとしては、同じデータストアに、リンク クローン仮想マシンと他のタイプの仮想マシンを混在させるのは避けてください。この場合、View Composer はデータストアのすべての仮想マシンを再分散することができます。
- プールを編集し、ホストまたはクラスタ、およびリンク クローンが格納されているデータストアを変更した場合、新しく選択されたホストまたはクラスタが元のデータストアと新しいデータストアの両方へのフル アクセス権を持つ場合にのみ、リンク クローンを再分散できます。新しいクラスタのすべてのホストが元のデータストアと新しいデータストアへのアクセス権を持つ必要があります。

たとえば、スタンドアロン ホストにリンク クローン デスクトップ プールを作成し、クローンを保存するローカル データストアを選択したとします。デスクトップ プールを編集し、クラスタと共有データストアを選択した場合、クラスタ内のホストが元のローカル データストアにアクセスできないため、再分散操作は失敗します。

- 再分散操作時も接続したままにできる最小限の仮想マシンを設定できます。この仮想マシンは、すぐに使えるようにプロビジョニングされています。『View でのデスクトップ プールとアプリケーション プールの設定』の「View Composer 操作中にリンク クローン デスクトップをプロビジョニングされて作動可能な状態に保つ」を参照してください。

重要: Virtual SAN データストアを使用する場合、再分散操作は、デスクトップ プールのすべての仮想マシンを Virtual SAN データストアから他のタイプのデータストアへ移行、またはその逆を行う場合にのみ使用できます。デスクトップ プールで Virtual SAN データストアを使用する場合、Virtual SAN では、負荷分散機能が提供され、ESXi クラスタ内のリソース使用が最適化されます。

リンク クローン仮想マシンを別のデータストアへ移行する

あるデータストア セットから別のデータストア セットにリンク クローン仮想マシンを移行するには、再分散操作を使用します。

再分散を使用する際、View Composer はデータストア間のリンク クローンの移動を管理します。View Composer により、リンク クローンのレプリカへのアクセスが、再分散操作中および操作後に維持されます。必要に応じて、View Composer はターゲット データストアにレプリカのインスタンスを作成します。

注: リンク クローン仮想マシンの移行または管理に vSphere Client または vCenter Server を使用することは避けてください。他のデータストアへのリンク クローン仮想マシンの移行に、Storage vMotion を使用しないでください。

前提条件

再分散操作について理解しておきます。[リンククローン仮想マシンの再分散](#)および[論理ドライブ間のリンク クローンの再分散](#)を参照してください。

手順

- 1 View Administrator で、[カタログ]-[デスクトップ プール] を選択し、移行するデスクトップ プールを選択して、[編集] をクリックします。
- 2 [vCenter 設定] タブで、[データストア] にスクロール ダウンして [参照] をクリックします。
- 3 [リンク クローンのデータストアを選択] ページで、現在リンク クローンを保存しているデータストアを選択解除し、ターゲット データストアを選択して [OK] をクリックします。
- 4 [編集] ウィンドウで [OK] をクリックします。
- 5 [デスクトップ プール] ページの左の列でプール ID をダブルクリックして、プールを選択します。
- 6 [View Composer] ドロップダウン メニューから [再分散] を選択し、ウィザードの手順に従ってリンク クローン 仮想マシンを再分散します。

リンク クローン仮想マシンが更新され、ターゲット データストアに移行されます。

再分散操作の後のリンク クローン ディスクのファイル名

リンク クローン仮想マシンを再分散すると、vCenter Server は、新しいデータストアに移動されたリンク クローン 内の View Composer 通常ディスクと破棄可能データ ディスクのファイル名を変更します。

元のファイル名によってディスクの種類が識別されます。名前が変更されたディスクには識別ラベルが含まれていません。

元の通常ディスクのファイル名には、`user-disk` ラベルが含まれています。`desktop_name-vdm-user-disk-D-ID.vmdk`

元の破棄可能データ ディスクのファイル名には、`disposable` ラベルが含まれています。`desktop_name-vdm-disposable-ID.vmdk`

再分散操作によってリンク クローンが新しいデータストアに移動された後、vCenter Server は、両方のディスクの種類に共通のファイル名構文 `desktop_name_n.vmdk` を使用します。

View Composer 通常ディスクの管理

View Composer 通常ディスクをリンク クローン仮想マシンから切断し、別のリンク クローンに接続することができます。この機能により、ユーザー情報をリンク クローン仮想マシンから切り離して管理できます。

View Composer 通常ディスク

View Composer を使用して、OS データとユーザー情報をリンククローン仮想マシンの別々のディスクに構成できます。View Composer は OS データの更新または再分散時に、通常ディスク上のユーザー情報を保持します。

View Composer 通常ディスクには、ユーザー設定とユーザーが生成したその他のデータが格納されます。リンククローン デスクトップ プールを作成する場合は、通常ディスクを作成します。詳細については、『View でのデスクトップ プールとアプリケーション プールの設定』の「リンククローン デスクトップ プールの作成用ワークシート」を参照してください。

リンククローン仮想マシンから通常ディスクを切断し、その元のデータストアまたは別のデータストアにディスクを保存できます。ディスクを切断すると、リンククローン仮想マシンが削除されます。切断された通常ディスクはどの仮想マシンにも関連付けられていません。

複数の方法を使用して、切断された通常ディスクを別のリンククローン仮想マシンに接続できます。この柔軟性を利用して次のことが可能です。

- リンク クローンの削除時に、ユーザー データを保持できます。
- 従業員が退職する際に、別の従業員が離職する従業員のユーザー データにアクセスできます。
- 複数のリモート デスクトップを使用しているユーザーは、1 つのリモート デスクトップにユーザー データを統合できます。
- vCenter Server で仮想マシンにアクセスできなくなったが、通常ディスクが損傷していない場合、通常ディスクをインポートして、そのディスクを使用して新しいリンク クローンを作成できます。

注: 通常ディスクは、作成されたときに使用されていたオペレーティング システムに再接続する必要があります。たとえば、Windows 7 のリンク クローンから通常ディスクを切断し、その通常ディスクを Windows 8 のリンク クローンに再作成または接続することはできません。

View では View 4.5 以降で作成されたリンククローン プールの通常ディスクを管理できます。以前のバージョンの View で作成された通常ディスクは管理できず、View Administrator の [通常ディスク] ページに表示されません。

View Composer 通常ディスクの切断

View Composer 通常ディスクをリンク クローン仮想マシンから切断したときに、ディスクが保存され、リンク クローンが削除されます。通常ディスクを切断することによって、別の仮想マシンでユーザー固有の情報を保存し再利用できます。

手順

- 1 View Administrator で、[リソース] - [通常ディスク] を選択します。
- 2 切断する通常ディスクを選択し、[切り離す] をクリックします。
- 3 通常ディスクを保存する場所を選択します。

オプション	説明
現在のデータストアを使用	通常ディスクを現在それが存在するデータストアに格納します。
次のデータストアを使用	<p>通常ディスクを格納する新しいデータストアを選択します。[参照] をクリックし、下向き矢印をクリックして、[データストアの選択] メニューから新しいデータストアを選択します。</p> <p>切断された通常ディスクを保存するためにローカル データストアを選択することはできません。共有データストアまたは Virtual SAN データストアを使用する必要があります。</p> <p>通常ディスクがもともと Virtual SAN データストアに保存されていた場合、切断された通常ディスクを保存するのに、Virtual SAN または non-Virtual SAN データストアを選択することができます。同様に、通常ディスクが non-Virtual SAN に保存されていた場合、non-Virtual SAN または Virtual SAN データストアのディスクを切断することができます。</p>

View Composer 通常ディスクがデータストアに保存されます。リンク クローン仮想マシンは削除され、View Administrator に表示されません。

別のリンク クローンへの View Composer 通常ディスクの接続

切断された通常ディスクを別のリンク クローン仮想マシンに接続できます。通常ディスクを接続すると、他の仮想マシンのユーザーがディスク内のユーザー設定および情報を使用できるようになります。

切断された通常ディスクを、選択したリンク クローン仮想マシン上のセカンダリ ディスクとして接続します。リンク クローンの新しいユーザーは、セカンダリ ディスクと既存のユーザー情報および設定にアクセスできます。

non-Virtual SAN データストアに格納されている通常ディスクは、Virtual SAN データストアに格納されている仮想マシンに接続できません。同様に、Virtual SAN に格納されているディスクは non-Virtual SAN に格納されている仮想マシンに接続できません。View Administrator では、Virtual SAN データストアおよび non-Virtual SAN データストアにまたがる仮想マシンを選択できません。

切断された通常ディスクを non-Virtual SAN から Virtual SAN に移動する場合は、non-Virtual SAN データストアに格納された仮想マシンでディスクを再作成して、仮想マシンのデスクトップ プールを Virtual SAN データストアに再分散できます。[切断された通常ディスクによるリンク クローンの再作成](#)を参照してください。

前提条件

- 選択した仮想マシンが、通常ディスクが作成されたリンク クローンと同じオペレーティング システムを使用していることを確認します。

手順

- 1 View Administrator で、[リソース] - [通常ディスク] を選択します。
- 2 [切り離し済み] タブで通常ディスクを選択して、[接続] をクリックします。
- 3 通常ディスクを接続するリンク クローン仮想マシンを選択します。
- 4 [セカンダリ ディスクとして接続] を選択します。
- 5 [終了] をクリックします。

次のステップ

リンク クローンのユーザーが、接続されたセカンダリ ディスクを使用するための十分な権限を持っていることを確認します。たとえば、元のユーザーが通常ディスクに対する特定のアクセス権を持っており、その通常ディスクが新しいリンク クローン上のドライブ D として接続された場合、リンク クローンの新しいユーザーはドライブ D に対して元のユーザーのアクセス権を持っている必要があります。

リンク クローンのゲスト OS に管理者としてログインし、新しいユーザーに適切な権限を割り当てます。

View Composer 通常ディスクのプールまたはユーザーの編集

View から元のデスクトップ プールまたはユーザーが削除された場合は、切断された View Composer 通常ディスクを新しいデスクトップ プールまたはユーザーに割り当てることができます。

切断された通常ディスクは、元のデスクトップ プールとユーザーに関連付けられたままです。そのデスクトップ プールまたはユーザーが View から削除された場合は、その通常ディスクを使用してリンク クローン仮想マシンを再作成することはできません。

そのデスクトップ プールとユーザーを編集することにより、切断された通常ディスクを使用して、新しいデスクトップ プール内に仮想マシンを再作成できます。その仮想マシンは、新しいユーザーに割り当てられます。

新しいデスクトップ プール、新しいユーザー、またはその両方を選択できます。

前提条件

- 通常ディスクのデスクトップ プールまたはユーザーが View から削除されたことを確認します。
- 新しいデスクトップ プールが、通常ディスクが作成されたデスクトップ プールと同じオペレーティング システムを使用していることを確認します。

手順

- 1 View Administrator で、[リソース] - [通常ディスク] を選択します。
- 2 ユーザーまたはデスクトップ プールが削除された通常ディスクを選択し、[編集] をクリックします。
- 3 (オプション) リストからリンク クローン デスクトップ プールを選択します。
- 4 (オプション) 通常ディスクのユーザーを選択します。

Active Directory のドメインとユーザー名を参照できます。

次のステップ

切断された通常ディスクを使用してリンク クローン仮想マシンを再作成します。

切断された通常ディスクによるリンク クローンの再作成

View Composer 通常ディスクを切断すると、リンク クローンが削除されます。切断されたディスクからリンク クローン仮想マシンを再作成して、元のユーザーが、切断されたユーザー設定および情報にアクセスできるようにすることができます。

注:すでに最大サイズに達しているデスクトップ プール内にリンク クローン仮想マシンを再作成した場合も、再作成された仮想マシンがそのデスクトップ プールにそのまま追加されます。そのデスクトップ プールは、指定された最大サイズより大きくなります。

通常ディスクの元のデスクトップ プールまたはユーザーが View から削除された場合は、その通常ディスクに新しいデスクトップ プールまたはユーザーを割り当てることができます。[View Composer 通常ディスクのプールまたはユーザーの編集](#)を参照してください。

新しい仮想マシンが Virtual SAN データストアに格納されている場合、View では、non-Virtual SAN データストアに格納されている通常ディスクによる仮想マシンの再作成はサポートしていません。同様に、通常ディスクが Virtual SAN に格納されている場合、View では non-Virtual SAN での仮想マシンの再作成はサポートしていません。

切断された通常ディスクを non-Virtual SAN から Virtual SAN に移動する場合は、non-Virtual SAN データストアに格納された仮想マシンでディスクを再作成して、仮想マシンのデスクトップ プールを Virtual SAN データストアに再分散できます。

手順

- 1 View Administrator で、[リソース] - [通常ディスク] を選択します。

- 2 [切り離し済み] タブで通常ディスクを選択して、[マシンを再作成] をクリックします。

複数の通常ディスクを選択して、各ディスクのリンク クローン仮想マシンを再作成できます。

- 3 [OK] をクリックします。

View によって、選択した通常ディスクごとにリンク クローン仮想マシンが作成され、元のデスクトップ プールにその仮想マシンが追加されます。

通常ディスクはそれらが格納されていたデータストアに残ります。

vSphere からの通常ディスクのインポートによるリンク クローンの復元

View でリンク クローン仮想マシンにアクセスできなくなった場合、View Composer 通常ディスクで仮想マシンが構成されていれば、仮想マシンを復元できます。vSphere データストアから View へ通常ディスクをインポートできます。

View で、通常ディスク ファイルを、切断された通常ディスクとしてインポートします。View で、切断されたディスクを既存の仮想マシンに接続するか、または元のリンク クローンを再作成することができます。

手順

- 1 View Administrator で、[リソース] - [通常ディスク] を選択します。
- 2 [切り離し済み] タブで、[vCenter からインポートする] をクリックします。
- 3 vCenter Server インスタンスを選択します。
- 4 ディスク ファイルが存在するデータセンターを選択します。
- 5 通常ディスクで新しいリンク クローン仮想マシンを作成するリンク クローン デスクトップ プールを選択します。
- 6 [通常ディスク ファイル] テキスト ボックスで、[参照] をクリックし、下向き矢印をクリックして、[データストアの選択] メニューからデータストアを選択します。

ローカル データストアから通常ディスクをインポートすることはできません。利用できるのは、共有データストアのみです。
- 7 ディスク ストレージ ファイルと仮想マシン ファイルを表示するデータストア名をクリックします。
- 8 インポートする通常ディスク ファイルを選択します。
- 9 [ユーザー] テキスト ボックスで、[参照] をクリックし、仮想マシンに割り当てるユーザーを選択して、[OK] をクリックします。

ディスク ファイルが、切断された通常ディスクとして View にインポートされます。

次のステップ

リンク クローン仮想マシンを復元するために、元の仮想マシンを再作成するか、または切断された通常ディスクを別の仮想マシンに接続することができます。

詳細については、[切断された通常ディスクによるリンク クローンの再作成](#)および [別のリンク クローンへの View Composer 通常ディスクの接続](#)を参照してください。

切断された View Composer 通常ディスクの削除

切断された通常ディスクを削除する場合は、View からはディスクを削除するがデータストアには残すことも、View とデータストアからディスクを削除することもできます。

手順

- 1 View Administrator で、[リソース] - [通常ディスク] を選択します。
- 2 [切り離し済み] タブで通常ディスクを選択して、[削除] をクリックします。
- 3 View からディスクを削除した後に、それをデータストアから削除するか、データストア上に残すかを選択します。

オプション	説明
ディスクから削除	削除後、通常ディスクが存在しなくなります。
View からのみ削除	削除後、通常ディスクは View でアクセスできなくなりますが、データストアには残ります。

- 4 [OK] をクリックします。

デスクトップ プール、マシン、セッションの管理

10

View Administrator では、デスクトップ プール、仮想マシンベースのデスクトップ、物理マシンベースのデスクトップ、デスクトップ セッション、アプリケーション セッションを管理できます。

この章には、次のトピックが含まれています。

- [インスタントクローン デスクトップ プールの管理](#)
- [デスクトップ プールの管理](#)
- [仮想マシンベースのデスクトップの管理](#)
- [非管理対象マシンの管理](#)
- [リモート デスクトップ セッションとアプリケーション セッションの管理](#)
- [外部ファイルへの View 情報のエクスポート](#)

インスタントクローン デスクトップ プールの管理

View Administrator では、プッシュイメージ操作をスケジュールするなど、インスタントクローン デスクトップ プールで管理タスクを実行できます。

インスタントクローン デスクトップ プールのイメージの変更

インスタントクローン デスクトップ プールのイメージを変更して、変更を適用したり、以前のイメージに戻したりできます。新しいイメージには任意の仮想マシンから任意のスナップショットを選択できます。

手順

- 1 View Administrator で、[カタログ] - [デスクトップ プール]を選択します。
- 2 プール ID をダブルクリックします。
- 3 [イメージをプッシュ] - [スケジュール] を選択します。
[[イメージ プッシュをスケジュール]] ウィンドウが開きます。
- 4 プロンプトに従ってください。

タスクを今すぐ開始するようにスケジュールすることも、後で開始するようにスケジュールすることもできます。ユーザー セッションのあるクローンの場合、ユーザーを強制的にログアウトするか、待機するかを指定できます。ユーザーがログアウトすると、View はクローンを再作成します。

5 [終了準備の完了] ページで、[詳細の表示] をクリックして、プールのデスクトップのリストを表示します。

この操作を開始すると、新しいイメージがすぐに公開されます。公開の詳細については、『View でのデスクトップ プールとアプリケーション プールの設定』ドキュメントの「インスタントクローン デスクトップ プール」を参照してください。クローンの再作成は、[[イメージ プッシュをスケジュール]] ウィザードで指定した時から開始されます。

プッシュイメージ操作のモニター

View Administrator のインスタントクローン デスクトップ プールでプッシュイメージ操作の進行をモニターできます。

手順

- 1 View Administrator で、[カタログ] - [デスクトップ プール] を選択します。
- 2 プール ID をダブルクリックします。
[サマリ] タブには、現在のイメージおよび保留中イメージの情報が表示されます。
- 3 [タスク] タブをクリックします。
プッシュイメージ操作に関連するタスクのリストが表示されます。

プッシュイメージ操作の再スケジュールまたはキャンセル

View Administrator のインスタントクローン デスクトップ プールでプッシュイメージ操作の再スケジュールまたはキャンセルができます。

手順

- 1 View Administrator で、[カタログ] - [デスクトップ プール] を選択します。
- 2 プール ID をダブルクリックします。
[サマリ] タブには、現在のイメージおよび保留中イメージの情報が表示されます。
- 3 [プッシュ イメージ] - [再スケジュール] または [プッシュ イメージ] - [キャンセル] を選択します。
- 4 プロンプトに従ってください。

クローンの作成の進行中にプッシュイメージ操作をキャンセルした場合、新しいイメージのあるクローンがプールに残ります。新しいイメージのあるクローンと古いイメージのあるクローンがプールに混在することになります。すべてのクローンが同じイメージを持っていることを確認するために、クローンをすべて削除できます。View は、同じイメージのクローンを再作成します。

デスクトップ プールの管理

View Administrator では、デスクトップ プールに対する管理タスク（プールのプロパティの編集やプールの有効化、無効化、削除など）を実行できます。

デスクトップ プールの編集

既存のデスクトップ プールを編集して、スベア マシン数、データストア、カスタマイズ仕様などの設定を構成できます。

前提条件

デスクトップ プールの作成後に変更可能または変更不可能なデスクトップ プール設定について理解しておきます。
[既存のデスクトップ プールの設定の変更](#)および[既存のデスクトップ プールの固定の設定](#)を参照してください。

手順

- 1 View Administrator で、[カタログ] - [デスクトップ プール]を選択します。
- 2 デスクトップ プールを選択し、[編集] をクリックします。
- 3 [編集] ダイアログ ボックス内のタブをクリックし、デスクトップ プール オプションを再構成します。
- 4 [OK] をクリックします。

インスタントクローン デスクトップ プールのイメージを変更すると、画像の公開操作が即座に開始されます。View Administrator では、デスクトップ プールの概要ページには保留イメージの状態が **公開 - インフラストラクチャ変更** と表示されます。

インスタントクローン デスクトップ プールのクラスタを変更すると、新しいレプリカおよび親仮想マシンが新しいクラスタに作成されます。同じイメージを使用してイメージ プッシュを開始し、新しいクラスタに新しいクローンを作成できます。ただし、クローン作成プロセスで使用するテンプレート仮想マシンは古いクラスタに残ります。テンプレート仮想マシンがある ESXi ホストをメンテナンス モードにすることはできますが、テンプレート仮想マシンを移行することはできません。新しいイメージを使用してイメージ プッシュを開始すると、テンプレート仮想マシンを含むすべてのインフラストラクチャ仮想マシンを古いクラスタから完全に削除できます。

既存のデスクトップ プールの設定の変更

デスクトップ プールの作成後、特定の構成設定を変更できます。

表 10-1. 既存のデスクトップ プールの編集可能な設定

[構成] タブ	説明
[全般]	<p>デスクトップ プール命名オプションとストレージ ポリシー管理設定を編集します。ストレージ ポリシー管理設定では、Virtual SAN データストアを使用するかどうかを指定します。Virtual SAN を使用しない場合、レプリカおよび OS ディスク用に別のデータストアを選択できます。</p> <p>注: View Composer のリンク クローンについては、Virtual SAN を使用する場合に、再調整操作を使用して、デスクトップ プールのすべての仮想マシンを Virtual SAN データストアに移行する必要があります。</p>
[デスクトップ プールの設定]	電源ポリシー、表示プロトコル、Adobe Flash 設定などのマシンの設定を編集します。Horizon 7.0 では、インスタント クローンの電源ポリシーはサポートされません。
[プロビジョニングの設定]	<p>デスクトップ プールのプロビジョニング オプションを編集し、マシンをデスクトップ プールに追加します。</p> <p>このタブは自動デスクトップ プールのみで使用できます。</p>

[構成] タブ	説明
[vCenter 設定]	<p>仮想マシン テンプレートまたはデフォルトの基本イメージを編集します。vCenter Server インスタンス、ESXi ホストまたはクラスタ、データストア、およびその他の vCenter 機能を追加または変更します。</p> <p>新しい値は、設定の変更後に作成される仮想マシンにのみ影響します。新しい設定は既存の仮想マシンには影響しません。</p> <p>このタブは自動デスクトップ プールのみに使用できます。</p>
[ゲストのカスタマイズ]	<p>Sysprep を選択した場合、カスタマイズ仕様を変更できます。Horizon 7.0 では、インスタント クローンで SysPrep を使用することはできません。</p> <p>QuickPrep を選択した場合、Active Directory のドメインおよびコンテナの変更や、パワーオフ スクリプトおよび同期後スクリプトの指定を行うことができます。</p> <p>ClonePrep を選択した場合、Active Directory のコンテナの変更や、パワーオフ スクリプトおよび同期後スクリプトの指定を行うことができます。ドメインは変更できません。</p> <p>注: インスタント クローンについては、パワーオフ スクリプトまたは同期後スクリプト名または親パラメータを変更し、新しいスクリプトが現在のイメージに存在する場合、新しいクローンが作成されるときには新しいスクリプトが実行され、新しいパラメータが使用されます。新しいスクリプトが現在のイメージに存在しない場合は、新しいスクリプトを含むイメージを選択または作成して、イメージ プッシュを実行する必要があります。</p> <p>View Composer のリンク クローンについては、パワーオフまたは同期後スクリプト名を変更する場合、変更は次の再構成操作で適用されます。ただし、パワーオフ スクリプト パラメータまたは同期後スクリプト パラメータへの変更は、現在のスナップショットを使用して作成されたクローンに適用されます。</p> <p>このタブは自動デスクトップ プールのみに使用できます。</p>
[詳細なストレージ] - [View Storage Accelerator を使用]	<p>[View Storage Accelerator を使用] を選択または選択解除するか、View Storage Accelerator ダイジェスト ファイルが再生成されるスケジュールを変更すると、設定が既存の仮想マシンに影響します。既存のデスクトップ プールの View Storage Accelerator の設定を変更すると、デスクトップ プールの仮想マシンがパワーオフするまで、変更は有効になりません。『View でのデスクトップ プールとアプリケーション プールの設定』の「View Composer がリンクされたクローン用に View Storage Accelerator を構成する」を参照してください。</p> <p>注: 既存のリンク クローン デスクトップ プールで [View Storage Accelerator を使用] を選択したときに、View Storage Accelerator に対してレプリカがそれまで有効ではなかった場合、この機能はすぐに有効にならないことがあります。View Storage Accelerator は、レプリカの使用中には有効になりません。View Storage Accelerator は、デスクトップ プールを新しい親仮想マシンに再構成することで、強制的に有効にすることができます。</p> <p>このオプションはインスタント クローンで自動的に有効化されます。</p>
[詳細なストレージ] - [VM ディスク スペースを再利用]	<p>[仮想マシンのディスク領域再利用] を選択または選択解除するか、または仮想マシンのディスク領域再利用の発生時点のスケジュールを変更する場合、既存の仮想マシンを効率的なディスク フォーマットで作成していると、新しい設定がそれらの仮想マシンに影響します。詳細については、『View でのデスクトップ プールとアプリケーション プールの設定』の「リンク クローン仮想マシンのディスク領域を再利用する」を参照してください。</p> <p>このオプションはインスタント クローンには適用されません。</p>

[構成] タブ	説明
[詳細なストレージ] - [ネイティブ NFS スナップショット (VAAI) を使用]	<p>[ネイティブ NFS スナップショット (VAAI) を使用] を選択または選択解除すると、新しい設定は、設定の変更後に作成される仮想マシンにのみ影響します。既存の仮想マシンは、デスクトップ プールを再構成し、必要な場合は再分散することで、ネイティブ NFS スナップショット クローンになるよう変更できます。『View でのデスクトップ プールとアプリケーション プールの設定』の「ネイティブ NFS スナップショット テクノロジーを含む View Composer アレイ統合の使用」を参照してください。</p> <p>このオプションはインスタント クローンではサポートされていません。</p>
[詳細なストレージ] - [透過的なページ共有の範囲]	<p>[透過的なページ共有の範囲]設定を変更すると、新しい設定は仮想マシンの電源が次にオンになったときに有効になります。</p> <p>透過的なページ共有 (TPS) を実行できるレベルを選択します。[仮想マシン] (デフォルト)、[プール]、[ポッド]、または [グローバル] から選択します。プール、ポッド、またはグローバルですべてのマシンに対して TPS をオンにすると、ESXi ホストは、マシンが同じゲスト オペレーティング システムまたはアプリケーションを使用した結果生じるメモリ ページの余分なコピーを取り除きます。</p> <p>ページ共有は ESXi ホストで発生します。たとえば、プール レベルで TPS を有効にするが、プールが複数の ESXi ホストにまたがっている場合、同じホスト上、または同じプール内の仮想マシンのみがページを共有します。グローバル レベルでは、同じ ESXi ホスト上で View によって管理されているすべてのマシンは、マシンが置かれているプールに関係なく、メモリ ページを共有できます。</p> <p>注: TPS はセキュリティ上のリスクを招く可能性があるため、デフォルト設定ではマシン間でのメモリ ページの共有が行われません。調査では、非常に限定された構成シナリオにおいて、TPS を悪用してデータへの不許可のアクセスを取得できる可能性があることが示されています。</p> <p>このオプションはインスタント クローンで自動的に有効化されます。</p>

インスタントクローン デスクトップ プールを編集してデータストアを追加または削除すると、新しいクローンの作成が必要になったときに仮想マシンの再分散が自動的に実行されます。たとえば、ユーザーがログアウトしたとき、またはプールのサイズを増やしたときに、この動作が実行されます。より高速に再分散を実行するには、次の操作を実行します。

- データストアを削除する場合は、そのデータストア上のデスクトップを手動で削除します。これにより、新しいデスクトップが残りのデータストアで作成されるようになります。
- データストアを追加する場合は、元のデータストアから一部のデスクトップを手動で削除します。これにより、新しいデスクトップが新しいデータストアで作成されるようになります。また、すべてのデスクトップを削除することもできます。これにより、これらのデスクトップが再作成されるときに、データストア全体で均等に分散されます。

既存のデスクトップ プールの固定の設定

デスクトップ プールの作成後は、特定の構成設定を変更できません。

表 10-2. 既存のデスクトップ プールの固定の設定

設定	説明
プール タイプ	自動プール、手動プール、または RDS デスクトップ プールを作成した場合、プール タイプを変更できません。
ユーザー割り当て	専用割り当てと流動割り当てを切り替えることはできません。
仮想マシンのタイプ	フル仮想マシンとリンク クローン仮想マシンを切り替えることはできません。
プール ID	プール ID は変更できません。

設定	説明
マシン命名方法およびプロビジョニング方法	<p>デスクトップ プールに仮想マシンを追加するには、プールの作成に使用したプロビジョニング方法を使用する必要があります。手動でマシン名の指定と命名パターンの使用を切り替えることはできません。</p> <p>名前を手動で指定する場合、マシン名のリストに名前を追加できます。</p> <p>命名パターンを使用する場合、マシンの最大数を増加できます。</p>
vCenter 設定	<p>既存の仮想マシンの vCenter 設定は変更できません。</p> <p>[編集] ダイアログ ボックスで vCenter 設定を変更できますが、値は設定の変更後に作成された新しい仮想マシンにのみ影響します。</p>
View Composer 通常ディスク	通常ディスクなしでリンク クローン デスクトップ プールを作成すると、通常ディスクを構成できません。
View Composer カスタマイズ方法	QuickPrep または Sysprep でリンク クローン デスクトップ プールをカスタマイズした後、そのプール内の仮想マシンを作成または再構成するときに別のカスタマイズ方法に切り替えることはできません。

名前付けパターンによってプロビジョニングされる自動プールのサイズの変更

名前付けパターンを使用して自動デスクトップ プールをプロビジョニングする場合は、マシンの最大数を変更してプールのサイズを増やしたり減らしたりすることができます。

前提条件

- 名前付けパターンを使用してデスクトップ プールをプロビジョニングしたことを確認します。マシン名を手動で指定する場合は、[名前のリストによってプロビジョニングされる自動プールへのマシンの追加](#)を参照してください。
- デスクトップ プールが自動であることを確認します。

手順

- 1 View Administrator で、[カタログ] - [デスクトップ プール] を選択します。
- 2 デスクトップ プールを選択し、[編集] をクリックします。
- 3 [プロビジョニングの設定] タブで、[マシンの最大数] テキスト ボックスにデスクトップ プール内の新しいマシン数を入力します。

デスクトップ プール サイズを増やした場合は、新しいマシンを最大数までプールに追加できます。

流動割り当てプールのサイズを減らした場合は、未使用のマシンが削除されます。新しい最大数よりも多くのユーザーがプールにログインしている場合は、ユーザーがログオフした後にプール サイズが減少します。

専用割り当てプールのサイズを減らした場合は、未割り当てのマシンが削除されます。新しい最大数よりも多くのユーザーがマシンに割り当てられている場合は、ユーザーの割り当てを解除した後にプール サイズが減少します。

注: デスクトップ プールのサイズを減らした場合、[マシンの最大数] で指定した値よりも多くのユーザーがマシンにログインしているか、またはマシンに割り当てられている場合は、マシンの実際の数が [マシンの最大数] より多くなることがあります。

名前のリストによってプロビジョニングされる自動プールへのマシンの追加

手動でマシン名を指定してプロビジョニングされる自動デスクトップ プールにマシンを追加するには、新しいマシン名の別のリストを指定します。この機能により、デスクトップ プールを拡大しても、会社の命名規則を引き続き使用できます。

Horizon 7.0 では、インスタント クローンのこの機能はサポートされていません。

マシン名を手動で追加するには、次のガイドラインに従います。

- 各マシン名は個別の行に入力します。
- マシン名には、最大 15 文字の英数字を使用できます。
- 各マシン エントリにユーザー名を追加できます。カンマを使用して、ユーザー名とマシン名を区切ります。

この例では、2 つのマシンが追加されています。2 番目のマシンはユーザーに関連付けられています。

```
Desktop-001
Desktop-002,abccorp.com/jdoe
```

注: 流動割り当てプールでは、ユーザー名をマシン名に関連付けることはできません。マシンは、関連付けられたユーザー専用ではありません。流動割り当てプールでは、ログインするユーザーは、現在使用されていないすべてのマシンにアクセスできます。

前提条件

マシン名を手動で指定してデスクトップ プールを作成したことを確認します。名前付けパターンを指定してプールを作成した場合は、新しいマシン名を指定することによってマシンを追加することはできません。

手順

- 1 追加のマシン名のリストを含むテキスト ファイルを作成します。

少数のマシンのみを追加する場合は、[デスクトップ プールを追加] ウィザードでマシン名を直接入力できます。別のテキスト ファイルを作成する必要はありません。
- 2 View Administrator で、[カタログ]-[デスクトップ プール]を選択します。
- 3 展開するデスクトップ プールを選択します。
- 4 [編集] をクリックします。
- 5 [プロビジョニングの設定] タブをクリックします。
- 6 [マシンを追加] をクリックします。
- 7 [マシン名を入力] ページにマシン名のリストをコピーし、[次へ] をクリックします。

[マシン名を入力] ウィザードによってマシンのリストが表示され、検証エラーが赤い [X] で示されます。

8 無効なマシン名を修正します。

- a カーソルを無効な名前の上に置くと、ページの下部に関連するエラー メッセージが表示されます。
- b [戻る] をクリックします。
- c 正しくない名前を編集し、[次へ] をクリックします。

9 [終了] をクリックします。

10 [OK] をクリックします。

vCenter Server で、新しい仮想マシンの作成を監視できます。

View Administrator で、[カタログ] - [デスクトップ プール] を選択すると、デスクトップ プールに追加されているとおりにマシンを表示できます。

デスクトップ プールの無効化または有効化

デスクトップ プールを無効にすると、プールがユーザーに表示されなくなり、プールのプロビジョニングが停止します。ユーザーはプールにアクセスできません。プールを無効にした後、再度有効にすることができます。

デスクトップ プールを無効にすると、デスクトップの使用を準備する間に、ユーザーがリモート デスクトップにアクセスできないようにすることができます。デスクトップ プールが必要でなくなった場合は、無効化機能を使用してアクティブな使用を取り消すことができます。View からデスクトップ プールの定義を削除する必要はありません。

手順

- 1 View Administrator で、[カタログ] - [デスクトップ プール] を選択します。
- 2 デスクトップ プールを選択し、そのプールのステータスを変更します。

オプション	操作
プールを無効にする	[ステータス] ドロップダウン メニューから [デスクトップ プールを無効にする] を選択します。
プールを有効にする	[ステータス] ドロップダウン メニューから [デスクトップ プールを有効にする] を選択します。

3 [OK] をクリックします。

自動デスクトップ プールのプロビジョニングの無効化または有効化

自動デスクトップ プールのプロビジョニングを無効にすると、View がプールの新しい仮想マシンのプロビジョニングを停止します。プロビジョニングを無効にした後、再度有効にすることができます。

プールの構成を変更する前にプロビジョニングを無効にして、以前の構成で新しいマシンが作成されないことを確認します。さらにプロビジョニングを無効にして、プールの使用可能な領域が不足している状態のときに View が追加のストレージを使用しないようにすることもできます。

リンク クローン プールでプロビジョニングを無効にすると、View は新しいマシンのプロビジョニングを停止し、マシンの再構成または再分散後にマシンがカスタマイズされないようにします。

手順

- 1 View Administrator で、[カタログ] - [デスクトップ プール] を選択します。
- 2 デスクトップ プールを選択し、そのプールのステータスを変更します。

オプション	操作
プロビジョニングを無効にする	[ステータス] ドロップダウン メニューから [プロビジョニングを無効にする] を選択します。
プロビジョニングを有効にする	[ステータス] ドロップダウン メニューから [プロビジョニングを有効にする] を選択します。

- 3 [OK] をクリックします。

Adobe Flash の品質とスロットルの設定

リモート デスクトップの Adobe Flash コンテンツによって使用される帯域幅の量を削減するには、Adobe Flash の品質およびスロットル モードを設定します。この削減により全体的な閲覧環境が改善されて、リモート デスクトップで実行する他のアプリケーションの応答性を高めることができます。

前提条件

Adobe Flash の品質とスロットル設定について理解しておきます。[Adobe Flash の品質とスロットル](#) を参照してください。

手順

- 1 View Administrator で、[カタログ] - [デスクトップ プール] を選択します。
- 2 デスクトップ プールを選択し、[編集] をクリックします。
- 3 [デスクトップ プールの設定] タブで、[Adobe Flash の品質] メニューから品質モードを選択し、[Adobe Flash のスロットル] メニューからスロットル モードを選択します。
- 4 [OK] をクリックします。

注: Adobe Flash の帯域幅削減の設定は、Horizon Client がリモート デスクトップと再接続するまで有効になりません。

Adobe Flash の品質とスロットル

Adobe Flash コンテンツの品質の許容される最大レベルを指定して、Web ページでの設定を上書きできます。Web ページの Adobe Flash 品質が許容される最大レベルより高い場合、品質は指定されている最大レベルまで下げられます。品質は低いほど帯域幅が節約されます。

Adobe Flash 帯域幅削減の設定を使用するには、Adobe Flash を全画面表示モードで実行してはいけません。

[表 10-3. Adobe Flash の品質設定](#) に使用可能な Adobe Flash のレンダリング品質設定を示します。

表 10-3. Adobe Flash の品質設定

品質設定	説明
[制御しない]	品質は Web ページの設定で決まります。
[低]	この設定では、帯域幅が最も節約されます。
[中]	この設定では、帯域幅の節約は中程度です。
[高]	この設定では、帯域幅の節約は最も少なくなります。

品質の最高レベルを指定しないと、デフォルトで [低] に設定されます。

Adobe Flash はタイマー サービスを使用して、特定の時点で画面に表示されるものを更新します。一般的な Adobe Flash タイマー間隔の値は、4 ～ 50 ミリ秒の範囲です。間隔をスロットルつまり延長すると、フレーム レートを減らすことができ、それによって帯域幅を少なくできます。

表 10-4. Adobe Flash のスロットル設定 に使用可能な Adobe Flash のスロットル設定を示します。

表 10-4. Adobe Flash のスロットル設定

スロットル設定	説明
[無効]	スロットルは行われません。タイマー間隔は変更されません。
[低]	タイマー間隔は 100 ミリ秒です。この設定では、抜けるフレームの数が最も少なくなります。
[中]	タイマー間隔は 500 ミリ秒です。
[高]	タイマー間隔は 2500 ミリ秒です。この設定では、抜けるフレームの数が最も多くなります。

オーディオの速度はスロットル設定の選択に関係なく一定です。

デスクトップ プールの削除

デスクトップ プールを削除すると、ユーザーはプール内の新規リモート デスクトップを起動できなくなります。

デスクトップ プールのタイプに応じて、View で通常ディスク、vCenter Server フル仮想マシン、ユーザーのアクティブ セッションを処理するためのさまざまなオプションが用意されています。

デフォルトでは、デスクトップ マシンがプールに存在している場合でも、デスクトップ プールを削除できます。View から警告は出されません。デスクトップ マシンを含むプールの削除を許可しないように、View を構成できます。詳細については、以下を参照してください。[デスクトップ マシンを含むデスクトップ プールの削除を許可しない View の構成](#)。この設定を構成している場合、プールを削除するには、デスクトップ プールに含まれるすべてのマシンを削除する必要があります。

インスタント クローンまたは View Composer のリンク クローンの自動デスクトップ プールを使用すると、View は常にディスクから仮想マシンを削除します。

重要: View Administrator でデスクトップ プールを削除する前に vCenter Server の仮想マシンを削除しないでください。このアクションによって、View コンポーネントが不整合な状態になる可能性があります。

手順

- 1 View Administrator で、[カタログ] - [デスクトップ プール] を選択します。

- 2 デスクトップ プールを選択し、[削除] をクリックします。
- 3 デスクトップ プールの削除方法を選択します。

プール	オプション
通常ディスクを含まないインスタント クローンまたはリンク クローンの自動デスクトップ プール。	使用できるオプションはありません。View はディスクからすべての仮想マシンを削除します。リモート デスクトップへのユーザー セッションは終了します。
通常ディスクを含むリンク クローンの自動デスクトップ プール。	<p>リンク クローン仮想マシンの削除時に、通常ディスクを切り離すか削除するかを選択します。どちらの場合も、View はすべての仮想マシンをディスクから削除し、リモート デスクトップへのユーザー セッションは終了します。</p> <p>通常ディスクを切り離すと、その通常ディスクを含んでいたリンク クローン仮想マシンを再作成するか、その通常ディスクを別の仮想マシンに接続できるようになります。切断した通常ディスクは、同じデータストアまたは別のデータストアに保存できます。異なるデータストアを選択すると、切断された通常ディスクをローカル データストアに保存できません。共有データストアを使用する必要があります。</p> <p>View 4.5 以降のリリースで作成された通常ディスクのみ切り離すことができます。</p>
フル仮想マシンの自動デスクトップ プール。 vCenter Server 仮想マシンの手動デスクトップ プール。	vCenter Server の仮想マシンを維持するか削除するかを選択します。
RDS デスクトップ プール。 フル仮想マシンの自動デスクトップ プール。 手動デスクトップ プール。	リモート デスクトップに接続しているユーザーがいる場合は、ユーザーのセッションをアクティブなままにするか終了するかを選択します。View 接続サーバは、アクティブなセッションを追跡しません。

デスクトップ プールを削除すると、リンク クローン仮想マシンのコンピュータ アカウントが Active Directory から削除されます。フル仮想マシンのコンピュータ アカウントは Active Directory 内に残ります。これらのアカウントを削除するには、Active Directory から手動で削除する必要があります。

インスタントクローン デスクトップ プールを削除する場合は、View が vCenter Server から内部仮想マシンを削除するのにしばらく時間がかかることがあります。内部仮想マシンがすべて削除されたことを確認するまでは、View Administrator から vCenter Server を削除しないでください。

デスクトップ マシンを含むデスクトップ プールの削除を許可しない View の構成

デスクトップ マシンを含むデスクトップ プールの削除を許可しないように、View を構成できます。デフォルトでは、View はこのようなプールの削除を許可します。

この設定を構成している場合、プールを削除するには、デスクトップ プールに含まれるすべてのマシンを削除する必要があります。

前提条件

お使いのバージョンの Windows サーバでの ADSI Edit ユーティリティの使用方法については、Microsoft TechNet Web サイトを参照してください。

手順

- 1 View 接続サーバ ホスト上で ADSI Edit ユーティリティを起動します。

- 2 [接続設定] ダイアログ ボックスで、[DC=vdi,DC=vmware,DC=int] を選択するか接続します。
- 3 [コンピュータ] ペインで、**localhost:389** を選択または入力するか、View 接続サーバ ホストの完全修飾ドメイン名 (FQDN) を入力し、続いてポート 389 を入力します。

例: **localhost:389** または **mycomputer.mydomain.com:389**

- 4 オブジェクトの [CN=Common, OU=Global, OU=Properties] で、[pae-NameValuePair] 属性を編集して値 [cs-disableNonEmptyPoolDelete=1] を追加します。

新しい設定はただちに有効になります。View 接続サーバ サービスの再起動は不要です。

仮想マシンベースのデスクトップの管理

仮想マシンベースのデスクトップは、vCenter Server 仮想マシンが含まれる自動または手動のデスクトップ プールのデスクトップです。

ユーザーへのマシンの割り当て

専用割り当てプールでは、リモート デスクトップをホストする仮想マシンの所有者になるユーザーを割り当てることができます。割り当てられたユーザーのみがそのリモート デスクトップにログインして接続できます。

View は、次の状況でマシンをユーザーに割り当てます。

- デスクトップ プールの作成時に、[自動割り当てを有効にする] 設定を選択した場合

注: [自動割り当てを有効にする] 設定を選択した場合でも、手動でマシンをユーザーに割り当てることができます。

- 自動プールの作成時に [名前を手動で指定] 設定を選択して、ユーザー名とマシン名を指定した場合

専用割り当てプールのいずれかの設定を選択しなければ、ユーザーはリモート デスクトップにアクセスできません。手動でマシンを各ユーザーに割り当てする必要があります。

また、vdmadmin コマンドを使用してマシンをユーザーに割り当てすることもできます。[-L オプションを使用した専用マシンの割り当て](#)を参照してください。

前提条件

- リモート デスクトップ仮想マシンが専用割り当てプールに属していることを確認します。View Administrator では、デスクトップ プール割り当ては、[マシン] ページの [デスクトップ プール] 列に表示されます。

手順

- 1 View Administrator で、[リソース] - [マシン] を選択するか、[カタログ] - [デスクトップ プール] を選択して、プール ID をダブルクリックし、[インベントリ] タブをクリックします。
- 2 マシンを選択します。
- 3 [その他のコマンド] ドロップダウン メニューから [ユーザーを割り当てる] を選択します。
- 4 ユーザーを見つけるかグループを見つけるか選択し、ドメインを選択して、[名前] または [説明] テキスト ボックスに検索文字列を入力します。

- 5 ユーザーまたはグループ名を選択し、[OK] をクリックします。

専用マシンからのユーザーの割り当て解除

専用割り当てプールでは、ユーザーへのマシン割り当てを削除できます。

また、vdmadmin コマンドを使用して、ユーザーへのマシン割り当てを削除することもできます。[-L オプションを使用した専用マシンの割り当て](#)を参照してください。

手順

- 1 View Administrator で、[リソース] - [マシン] または [カタログ] - [デスクトップ プール] を選択し、プール ID をダブルクリックして [インベントリ] タブをクリックします。
- 2 マシンを選択します。
- 3 [その他のコマンド] ドロップダウン メニューから [ユーザーの割り当てを解除] を選択します。
- 4 [OK] をクリックします。

マシンを別のユーザーが使用できるようになり、別のユーザーに割り当てることができます。

メンテナンス モードでの既存のマシンのカスタマイズ

デスクトップ プールの作成後、個々のマシンをメンテナンス モードにしてカスタマイズ、変更、またはテストすることができます。マシンがメンテナンス モードの場合、ユーザーは仮想マシン デスクトップにアクセスできません。

既存のマシンを 1 度に 1 つずつメンテナンス モードにします。1 回の操作で、複数のマシンのメンテナンス モードを終了できます。

デスクトップ プールの作成時に、マシン名を手動で指定すると、プール内のすべてのマシンをメンテナンス モードで起動できます。詳細については、『View でのデスクトップ プールとアプリケーション プールの設定』の「メンテナンス モードでのデスクトップのカスタマイズ」を参照してください。

Horizon 7.0 では、インスタント クローンのこの機能はサポートされていません。

手順

- 1 View Administrator で、[リソース] - [マシン] を選択するか、[カタログ] - [デスクトップ プール] を選択して、プール ID をダブルクリックし、[インベントリ] タブを選択します。
- 2 マシンを選択します。
- 3 [その他のコマンド] ドロップダウン メニューから [メンテナンス モードを開始] を選択します。
- 4 仮想マシン デスクトップをカスタマイズ、変更、またはテストします。
- 5 カスタマイズするすべての仮想マシンで、[手順 2](#) から [手順 4](#) を繰り返します。
- 6 カスタマイズされたマシンを選択し、[その他のコマンド] ドロップダウン メニューから [メンテナンス モードを終了] を選択します。

変更した仮想マシン デスクトップをユーザーが使用できるようになります。

仮想マシン デスクトップ ステータスの監視

View Administrator のダッシュボードを使用して、View 展開内の仮想マシン デスクトップのステータスを素早く調査できます。たとえば、切断された仮想マシンやメンテナンス モードの仮想マシンをすべて表示できます。

前提条件

仮想マシンの状態について理解しておきます。[vCenter Server 仮想マシンのステータス](#)を参照してください。

手順

- 1 View Administrator で、[ダッシュボード] をクリックします。
- 2 [マシンのステータス] ペインで、ステータス フォルダを展開します。

オプション	説明
準備中	仮想マシンがプロビジョニング中、削除中、またはメンテナンス モードにある場合のマシン状態を表示します。
問題のあるマシン	マシンのエラー状態を表示します。
準備完了	仮想マシンが使用できるようになったときのマシン状態を表示します。

- 3 マシンのステータスを見つけて、その横のハイパーリンクされた番号をクリックします。

[マシン] ページに、選択したステータスのすべての仮想マシンが表示されます。

次のステップ

マシン名をクリックして仮想マシンの詳細を表示できます。また、View Administrator の戻る矢印をクリックして [ダッシュボード] ページに戻ることができます。

vCenter Server 仮想マシンのステータス

vCenter Server によって管理される仮想マシンは、動作と可用性がさまざまな状態になる可能性があります。View Administrator では、マシン ページの右側の列でマシンのステータスを追跡できます。

[表 10-5. vCenter Server によって管理される仮想マシンのステータス](#) に、View Administrator で表示される仮想マシン デスクトップの動作状態を示します。デスクトップの状態は一度に 1 つだけです。

表 10-5. vCenter Server によって管理される仮想マシンのステータス

ステータス	説明
プロビジョニング	仮想マシンがプロビジョニングされています。
カスタマイズ	自動プールの仮想マシンがカスタマイズされています。
削除中	仮想マシンが削除としてマークされています。View はすぐに仮想マシンを削除します。
エージェントの待機	View 接続サーバは、手動プール内の仮想マシン上の View Agent または Horizon Agent との通信の確立を待機しています。
メンテナンス モード	仮想マシンはメンテナンス モードです。ユーザーは仮想マシンにログインすることも使用することもできません。

ステータス	説明
スタートアップ	View Agent または Horizon Agent は仮想マシン上で起動されましたが、表示プロトコルなどの他の必要なサービスがまだ起動中です。たとえば、RDP の起動が終了するまで、View Agent はクライアント コンピュータとの RDP 接続を確立できません。エージェントの起動期間に、プロトコル サービスなどの他のプロセスも起動できます。
エージェントが無効です	この状態は 2 つのケースで発生します。最初に、[ログオフ時にマシンを削除または更新] または [ログオフ後にマシンを削除] 設定を有効にしたデスクトップ プールで、デスクトップ セッションがログアウトされますが、仮想マシンはまだ更新または削除されていません。次に、View 接続サーバは仮想マシンの電源をオフにする要求を送信する直前に View Agent または Horizon Agent を無効にします。 この状態では、新しいデスクトップ セッションが仮想マシンで起動できません。
エージェントに到達できません	View 接続サーバは仮想マシン上の View Agent または Horizon Agent と通信を確立できません。
無効な IP	サブネット マスク レジストリ設定は仮想マシンで構成され、構成された範囲内に IP アドレスを持つアクティブ ネットワーク アダプタはありません。
エージェントを再起動する必要があります	View コンポーネントがアップグレードされました。仮想マシンを再起動して、アップグレードされたコンポーネントで操作することを View Agent または Horizon Agent に許可する必要があります。
プロトコル障害	表示プロトコルは、View Agent または Horizon Agent の起動期間満了前に起動しませんでした。 注: View Administrator は、1 つのプロトコルに障害が発生しても他のプロトコルが問題なく起動した時に [プロトコル障害] 状態でマシンを表示できます。たとえば、[プロトコル障害] 状態は、HTML Access に障害が発生したが PCoIP および RDP が動作している時に表示される場合があります。この場合、マシンは使用でき、Horizon Client デバイスは PCoIP または RDP を介してデスクトップにアクセスできます。
ドメイン障害	仮想マシンがドメインへの到達問題に遭遇しました。ドメイン サーバがアクセス可能でないか、ドメイン認証が失敗しました。
すでに使用されています	[ログオフ時にマシンを削除または更新] または [ログオフ後マシンを削除] 設定を有効にしたデスクトップ プールで、仮想マシンにセッションはありませんが、セッションがログオフされませんでした。 この状態は、仮想マシンが予期せずシャットダウンしたり、ユーザーがセッション中にマシンをリセットすると発生します。デフォルトでは、仮想マシンがこの状態になると、View は他の Horizon Client デバイスがデスクトップにアクセスすることを防止します。
構成エラー	RDP または PCoIP などの表示プロトコルが有効になっていません。
プロビジョニング エラー	プロビジョニング中にエラーが発生しました。
エラー	仮想マシンで不明なエラーが発生しました。
未割り当てのユーザーが接続されました	割り当て済みユーザー以外のユーザーが専用プール内の仮想マシンにログインしています。 たとえば、この状態は、管理者が vSphere Client を起動し、仮想マシン上のコンソールを開き、ログインした場合に発生することがあります。
未割り当てのユーザーが切断されました	割り当て済みユーザー以外のユーザーがログインしており、専用割り当てプール内の仮想マシンから切断されています。
不明	仮想マシンは不明な状態にあります。
プロビジョニング済み	仮想マシンがパワーオフまたはサスペンドになっています。
使用可能	仮想マシンがパワーオンされており、接続の準備ができています。専用プールで、仮想マシンがユーザーに割り当てられ、ユーザーのログイン時に起動します。
接続済み	仮想マシンがセッション内にあり、Horizon Client デバイスに対してリモート接続されています。
切断されました	仮想マシンはセッション内にありますが、Horizon Client デバイスからは切断されています。
進行中	仮想マシンはメンテナンス操作中は切り替え状態です。

ある特定の状態にあるマシンで、さらに別の状況が発生している場合もあります。View Administrator では、これらの状況がマシンの状態の後に表示されます。たとえば、View Administrator に Customizing(カスタマイズ)(missing(不明))状態が表示されることがあります。

表 10-6. マシンのステータス状況 に、これらの追加の状況を示します。

表 10-6. マシンのステータス状況

状況	説明
Missing (不明)	仮想マシンは vCenter Server 内にありません。 通常は、仮想マシンが vCenter Server で削除されたのに、View LDAP 構成にまだマシンのレコードが含まれています。
Task halted (タスクの停止)	インスタント クローンのイメージ プッシュなどのタスク、または View Composer の更新、再構成、再分散などの操作は停止されます。 再構成操作のトラブルシューティングの詳細については、 失敗した再構成の修正 を参照してください。 View Composer のエラー状態の詳細については、『View でのデスクトップ プールとアプリケーション プールの設定』の「View Composer のプロビジョニング エラー」を参照してください。 Task halted(タスクの停止)状況は、操作のために選択されたが、操作がまだ開始されていないすべての仮想マシンに適用されます。プール内にある、操作のために選択されていない仮想マシンは Task halted(タスクの停止)状況には置かれません。

View Composer タスクが停止され、仮想マシンが vCenter Server 内にない場合、マシンの状態は両方の状況(不明、タスクの停止)になる可能性があります。

仮想マシン デスクトップの削除

仮想マシン デスクトップを削除すると、ユーザーはそのデスクトップにアクセスできなくなります。仮想マシン デスクトップは、vCenter Server 仮想マシンまたは非管理対象の仮想マシンのどちらかです。

vCenter Server の仮想マシンを維持した場合、現在アクティブなセッションのユーザーは、フル仮想マシン デスクトップを使用し続けることができます。ユーザーのログオフ後、ユーザーは削除された仮想マシン デスクトップにアクセスできなくなります。

インスタント クローンおよびリンク クローン仮想マシンを使用すると、vCenter Server は常にディスクから仮想マシンを削除します。

注: View Administrator で仮想マシン デスクトップを削除する前に vCenter Server で仮想マシンを削除しないでください。このアクションによって、View コンポーネントが不整合な状態になる可能性があります。

手順

- 1 View Administrator で、[リソース] - [マシン] を選択します。
- 2 [vCenter 仮想マシン] タブまたは [その他] タブを選択します。
- 3 1 つ以上のマシンを選択し、[削除] をクリックします。

4 仮想マシン デスクトップの削除方法を選択します。

オプション	説明
フル仮想マシン デスクトップを含むプール	<p>vCenter Server の仮想マシンを維持するか削除するかを選択します。</p> <p>ディスクから仮想マシンを削除する場合、アクティブなセッションのユーザーはデスクトップから切断されます。</p> <p>vCenter Server の仮想マシンを維持する場合は、アクティブなセッションのユーザーがデスクトップに接続し続けるか、切断されるかを選択します。</p>
通常ディスクを含む View Composer リンク クローン プール	<p>仮想マシン デスクトップの削除時に、通常ディスクを切り離すか削除するかを選択します。</p> <p>どちらの場合も、vCenter Server はリンク クローン仮想マシンをディスクから削除します。</p> <p>現在アクティブなセッションのユーザーはリモート デスクトップから切断されます。</p> <p>通常ディスクを切り離すと、その通常ディスクを含んでいたリンク クローン仮想マシンを再作成するか、その通常ディスクを別の仮想マシンに接続できるようになります。切断した通常ディスクは、同じデータストアまたは別のデータストアに保存できます。異なるデータストアを選択すると、切断された通常ディスクをローカル データストアに保存できません。共有データストアを使用する必要があります。</p> <p>View 4.5 以降のリリースで作成された通常ディスクのみ切り離すことができます。</p>
通常ディスクを含まないインスタント クローン プールと View Composer リンク クローン プール	<p>vCenter Server はリンク クローン仮想マシンをディスクから削除します。現在アクティブなセッションのユーザーはリモート デスクトップから切断されます。</p>

仮想マシン デスクトップを削除すると、リンク クローン仮想マシンのコンピュータ アカウントが Active Directory から削除されます。フル仮想マシン アカウントは Active Directory 内に残ります。これらのアカウントを削除するには、Active Directory から手動で削除する必要があります。

インスタントクローン デスクトップのリカバリ

インスタントクローン デスクトップがエラー状態の場合、それをリカバリするオプションがあります。デスクトップは現在の基本イメージから再度作成されます。

手順

- 1 View Administrator で [カタログ] - [デスクトップ プール] を選択し、プールの ID をダブルクリックして [インベントリ] タブをクリックします。
- 2 1 つ以上のマシンを選択し、[リカバリ] をクリックします。

非管理対象マシンの管理

View Administrator で、手動デスクトップ プールの非管理対象マシンを追加および削除することや、View から登録済みマシンを削除することができます。非管理対象マシンには、vCenter Server により管理されていない物理コンピュータおよび仮想マシンが含まれます。

非管理対象マシンを含むデスクトップ プールの削除についての詳細は、[デスクトップ プールの削除](#)を参照してください。

非管理対象マシンに影響を与える設定を再構成する場合は、新しい設定が有効になるまでに 10 分程度かかることがあります。たとえば、[グローバル設定] でメッセージ セキュリティ モードを変更したり、プールに対する [切断後に自動的にログオフ] の設定を変更したりすると、影響を受ける非管理対象マシンを View で再構成するのに 10 分程度かかることがあります。

注: RDS ホストは親仮想マシンまたはテンプレートから生成されず、vCenter Server によって管理されないため、RDS ホストも非管理対象マシンです。RDS ホストはセッション ベースのデスクトップおよびアプリケーションをサポートし、別のカテゴリとして扱われます。[RDS ホストの管理](#)を参照してください。

手動プールへの非管理対象マシンの追加

非管理対象マシンをプールに追加することによって、手動デスクトップ プールのサイズを増やすことができます。

前提条件

非管理対象マシンに Horizon Agent がインストールされていることを確認します。非管理対象マシンの準備についての詳細は、『View でのデスクトップ プールとアプリケーション プールの設定』の「非管理対象マシンへの Horizon Agent のインストール」を参照してください。

手順

- 1 View Administrator で、[カタログ] - [デスクトップ プール] を選択します。
- 2 手動プールのプール ID をダブルクリックします。
- 3 [インベントリ] タブで [追加] をクリックします。
- 4 [デスクトップの追加] ウィンドウから非管理対象マシンを選択し、[OK] をクリックします。

非管理対象マシンがプールに追加されます。

手動デスクトップ プールからの非管理対象マシンを削除する

非管理対象マシンをプールから削除することによって、手動デスクトップ プールのサイズを減らすことができます。

手順

- 1 View Administrator で、[カタログ] - [デスクトップ プール] を選択します。
- 2 手動プールのプール ID をダブルクリックします。
- 3 [インベントリ] タブを選択します。
- 4 削除する非管理対象マシンを選択します。
- 5 [削除] をクリックします。

- 6 ユーザーが非管理対象マシンベースのデスクトップにログインしている場合は、セッションを終了するか、それともセッションをアクティブなままにするかを選択します。

オプション	説明
アクティブなままにする	アクティブなセッションをユーザーがログオフするまで続行します。View 接続サーバはこれらのセッションを追跡しません。
終了する	アクティブなセッションをすぐに終了します。

- 7 [OK] をクリックします。

非管理対象マシンがプールから削除されます。

登録済みのマシンを View から削除する

登録済みマシンを再度使用する予定がない場合は、View から削除できます。

View には [RDS ホスト] と [その他] の 2 つのタイプの登録済みのマシンがあります。非管理対象マシンはその他のカテゴリに含まれます。非管理対象マシンには、vCenter Server により管理されていない物理コンピュータおよび仮想マシンが含まれます。これらを使用して、vCenter Server 仮想マシンを含まない手動デスクトップ プールが形成されます。

削除した登録済みのマシンは、View で使用できなくなります。マシンを再度使用できるようにするには、Horizon Agent を再インストールする必要があります。

前提条件

削除する登録済みマシンが、どのデスクトップ プールでも使用されていないことを確認します。

手順

- 1 View Administrator で、[View 構成] - [登録済みのマシン] を選択します。
- 2 [その他] タブをクリックします。
- 3 1 つ以上のマシンを選択し、[削除] をクリックします。

選択できるマシンは、デスクトップ プールで使用されていないものだけです。

- 4 [OK] をクリックして確定します。

非管理対象マシンのステータス

非管理対象マシン（vCenter Server によって管理されない物理コンピュータまたは仮想マシン）は、動作と可用性がさまざまな状態になる可能性があります。非管理対象マシンのステータスは、View Administrator の [マシン] ページの右側の列にある [その他] タブで追跡できます。

表 10-7. 非管理対象マシンのステータス に、View Administrator で表示される非管理対象マシンの動作状態を示します。マシンの状態は一度に 1 つだけです。

表 10-7. 非管理対象マシンのステータス

ステータス	説明
スタートアップ	View Agent または Horizon Agent はマシン上で起動されましたが、表示プロトコルなどの他の必要なサービスがまだ起動中です。エージェントの起動期間に、プロトコル サービスなどの他のプロセスも起動できます。
検証しています	この状態は、View 接続サーバが初めてマシンを認識した後（一般に View 接続サーバが起動または再起動した後）と、マシン上の View Agent または Horizon Agent との初めての正常な通信の前に発生します。通常、この状態は一時的なものです。この状態は、通信の問題を示すエージェントに到達できない状態と同じではありません。
エージェントが無効です	この状態は、View 接続サーバが View Agent または Horizon Agent を無効にすると発生する可能性があります。この状態では、新しいデスクトップセッションがマシンで起動できません。
エージェントに到達できません	View 接続サーバはマシン上の View Agent または Horizon Agent と通信を確立できません。マシンはパワーオフされている可能性があります。
無効な IP	サブネット マスク レジストリ設定はマシンで構成され、構成された範囲内に IP アドレスを持つアクティブ ネットワーク アダプタは存在しません。
エージェントを再起動する必要があります	View コンポーネントがアップグレードされました。マシンを再起動して、アップグレードされたコンポーネントで操作することを View Agent または Horizon Agent に許可する必要があります。
プロトコル障害	表示プロトコルは、View Agent または Horizon Agent の起動期間満了前に起動しませんでした。 注: View Administrator は、1 つのプロトコルに障害が発生しても他のプロトコルが問題なく起動した時に [プロトコル障害] 状態でマシンを表示できます。たとえば、[プロトコル障害] 状態は、HTML Access に障害が発生したが PCoIP および RDP が動作している時に表示される場合があります。この場合、マシンは使用でき、Horizon Client デバイスは PCoIP または RDP を介してデスクトップにアクセスできます。
ドメイン障害	マシンにドメインへの到達問題が発生しました。ドメイン サーバがアクセス可能でないか、ドメイン認証が失敗しました。
構成エラー	RDP などの表示プロトコルまたは他のプロトコルが有効になっていません。
未割り当てのユーザーが接続されました	割り当てられているユーザー以外のユーザーが専用割り当てプール内のマシンにログインしています。たとえば、この状態は、管理者が Horizon Client を使用せずに非管理対象マシンにログインした場合に発生することがあります。
未割り当てのユーザーが切断されました	割り当てられているユーザー以外のユーザーがログインしており、専用割り当てプール内のマシンから切断されています。
不明	マシンは不明な状態にあります。
使用可能	デスクトップ ソース コンピュータがパワーオンされていて、デスクトップは接続の準備ができています。専用プールでは、デスクトップはユーザーに割り当てられます。ユーザーがログインすると、デスクトップが起動します。
接続済み	デスクトップはセッション中で、Horizon Client デバイスに対してリモート接続されています。
切断されました	デスクトップはセッション中ですが、Horizon Client デバイスからは切断されています。

リモート デスクトップ セッションとアプリケーション セッションの管理

ユーザーがリモート デスクトップまたはアプリケーションを起動すると、セッションが作成されます。管理者は、セッションの切断とログオフ、クライアントへのメッセージの送信、仮想マシンのリセットなどを行うことができます。

Horizon 7.0 では、インスタント クローンでこれらの操作を行うことはできません。

手順

- 1 View Administrator で、セッション情報が表示されている場所に移動します。

セッションのタイプ	ナビゲーション
リモート デスクトップ セッション	[カタログ] - [デスクトップ プール] を選択し、プールの ID をダブルクリックして [セッション] タブをクリックします。
リモート デスクトップ セッションとアプリケーション セッション	[監視] - [セッション] を選択します。
ユーザーまたはユーザー グループに関連付けられたセッション	<ul style="list-style-type: none"> ■ [ユーザーとグループ] を選択します。 ■ ユーザーの名前またはユーザー グループの名前をダブルクリックします。 ■ [セッション] タブをクリックします。

- 2 セッションを選択します。

ユーザーにメッセージを送信する場合、複数のセッションを選択できます。その他の操作は、一度に 1 つのセッションでのみ実行できます。

- 3 切断、ログオフ、メッセージの送信、仮想マシンのリセットのうち、いずれかの操作を選択します。

オプション	説明
セッションを切断	ユーザーをセッションから切断します。
Logoff Session (セッションのログオフ)	ユーザーをセッションからログオフさせます。保存されていないデータは失われます。
仮想マシンをリセット	正常にシャットダウンせずに仮想マシンを再起動します。この操作は、vCenter Server 仮想マシンが含まれる自動プールまたは手動プール内のデスクトップ セッションにのみ適用されます。
メッセージを送信	Horizon Client にメッセージを送信します。メッセージに、[情報]、[警告]、または [エラー] のラベルを付けることができます。

- 4 [OK] をクリックします。

外部ファイルへの View 情報のエクスポート

View Administrator で、View 表情報を外部ファイルにエクスポートできます。ユーザーとグループ、プール、マシン、View Composer 通常ディスク、ThinApp アプリケーション、イベント、および VDI セッションが表示された表をエクスポートできます。スプレッドシートや別のツールで情報を表示し、管理できます。

たとえば、1 つ以上の View 接続サーバ インスタンスまたは複製された View 接続サーバ インスタンスのグループによって管理されるマシンに関する情報を収集できます。各 View Administrator インターフェイスからマシン表をエクスポートし、それをスプレッドシートで表示できます。

View Administrator 表をエクスポートすると、カンマ区切り値 (CSV) ファイルに保存されます。この機能では、個々のページではなく表全体がエクスポートされます。

手順

- 1 View Administrator で、エクスポートする表を表示します。
たとえば、[リソース]-[マシン] をクリックしてマシン表を表示します。
- 2 表の右上の [エクスポート] アイコンをクリックします。
アイコンにマウスをポイントすると、テーブルの内容をエクスポート ヒントが表示されます。
- 3 [ダウンロード場所の選択] ダイアログ ボックスで、CSV ファイルのファイル名を入力します。
デフォルトのファイル名は `global_table_data_export.csv` です。
- 4 ファイルを保存する場所を参照します。
- 5 [保存] をクリックします。

次のステップ

スプレッドシートまたは他のツールを開き、CSV ファイルを表示します。

アプリケーション プール、ファームおよび RDS ホストの管理

11

View Administrator では、デスクトップ プール、ファームまたは RDS ホストの構成や削除などの管理操作を実行できます。

この章には、次のトピックが含まれています。

- [アプリケーション プールの管理](#)
- [ファームの管理](#)
- [RDS ホストの管理](#)
- [RDS ホストの負荷分散の構成](#)
- [アプリケーション プールのアンチアフィニティ ルールの構成](#)

アプリケーション プールの管理

View Administrator でアプリケーション プールの追加、編集、削除、またはアプリケーション プールへの資格付与を行うことができます。

アプリケーション プールを追加するには、『View でのデスクトップ プールとアプリケーション プールの設定』ドキュメントの「アプリケーション プールの作成」を参照してください。アプリケーション プールに資格を付与するには、『View でのデスクトップ プールおよびアプリケーション プールの設定』ドキュメントの「資格のあるユーザーとグループ」を参照してください。

アプリケーション プールの編集

既存のアプリケーション プールを編集して、表示名、バージョン、パブリッシャ、パス、開始フォルダ、パラメータ、説明などの設定を構成できます。アプリケーション プールの ID やアクセス グループは変更できません。

アプリケーションを実行するためのリソースが十分にある RDS ホストでのみ View 接続サーバがアプリケーションを起動するようにする場合は、[アプリケーション プールのアンチアフィニティ ルールの構成](#)を参照してください。

前提条件

アプリケーション プールの設定について理解しておきます。『View でのデスクトップ プールとアプリケーション プールの設定』の「アプリケーション プールの作成」を参照してください。

手順

- 1 View Administrator で、[カタログ] - [アプリケーション プール] を選択します。

- 2 プールを選択し、[編集] をクリックします。
- 3 プールの設定を変更します。
- 4 [OK] をクリックします。

アプリケーション プールの削除

アプリケーション プールを削除すると、ユーザーはプール内のアプリケーションを起動できなくなります。

ユーザーが現在アプリケーションにアクセスしていても、アプリケーション プールを削除できます。ユーザーがアプリケーションを終了した後は、アプリケーションにアクセスできなくなります。

手順

- 1 View Administrator で、[カタログ] - [アプリケーション プール] を選択します。
- 2 1 つ以上のアプリケーション プールを選択して [削除] をクリックします。
- 3 [OK] をクリックして確定します。

ファームの管理

View Administrator で、ファームを追加、編集、削除、有効化、無効化できます。

ファームを追加するには、『View でのデスクトップ プールとアプリケーション プールの設定』ドキュメントの「ファームの作成」を参照してください。アクセス グループの詳細は、[6 章 ロールベースの委任管理の構成](#)を参照してください。

ファームの作成後、RDS ホストを追加または削除して、サポートするユーザーを増やしたり減らしたりできます。

ファームの編集

既存のファームの構成設定を変更できます。

前提条件

ファームの設定を理解します。『View でのデスクトップ プールとアプリケーション プールの設定』の「ファームの作成」を参照してください。

手順

- 1 View Administrator で、[リソース] - [ファーム] を選択します。
- 2 ファームを選択し、[編集] をクリックします。
- 3 ファームの設定を変更します。
- 4 [OK] をクリックします。

ファームの削除

ファームが必要なくなった場合、または別の RDS ホストで新しいファームを作成する場合、ファームを削除できます。削除できるのは、RDS デスクトップ プールまたはアプリケーション プールに関連付けられていないファームのみです。

前提条件

ファームが RDS デスクトップ プールまたはアプリケーション プールに関連付けられていないことを確認します。

手順

- 1 View Administrator で、[リソース] - [ファーム] を選択します。
- 2 1 つ以上のファームを選択し、[削除] をクリックします。
- 3 [OK] をクリックして確定します。

ファームの無効化または有効化

ファームを無効化すると、ファームに関連付けられている RDS デスクトップ プールやアプリケーション プールから RDS デスクトップまたはアプリケーションを起動できなくなります。ユーザーは現在開いているアプリケーションと RDS デスクトップを引き続き使用できます。

ファーム内の RDS ホストまたはファームに関連付けられている RDS デスクトップ プールやアプリケーション プールでメンテナンスを行う計画がある場合は、ファームを無効化できます。ファームを無効化した後、一部のユーザーが、ファームを無効化する前に開いた RDS デスクトップ プールまたはアプリケーションをまだ使用していることがあります。

手順

- 1 View Administrator で、[リソース] - [ファーム] を選択します。
- 2 1 つ以上のファームを選択して [その他のコマンド] をクリックします。
- 3 [有効化] または [無効化] をクリックします。
- 4 [OK] をクリックして確定します。

ファームに関連付けられている RDS デスクトップ プールとアプリケーション プールのステータスが使用できなくなります。プールのステータスを表示するには、[カタログ] - [デスクトップ プール] または [カタログ] - [アプリケーション プール] の順に選択します。

自動ファームの再構成

View Composer の再構成操作により、自動ファーム内のすべての RDS ホストのマシン イメージを更新できます。ハードウェア設定または親仮想マシンのソフトウェアを更新し、再構成操作を実行すると、ファーム内のすべての RDS ホストにその変更内容を伝えることができます。

RDS ホストのリンク クローンは親のレプリカにリンクされているため、リンク クローンに影響を与えずに親仮想マシンを変更できます。再構成操作では、古いレプリカが削除され、クローンのリンク先の新しいレプリカが作成されます。再構成により新しいリンク クローンが作成されますが、通常、使用ストレージの量は減少します。これは、リンク クローンはディスク ファイルのサイズが時間とともに増加するのが普通であるためです。

自動ファームを再構成することはできますが、ファーム内の RDS ホストを個々に再構成することはできません。現在のハードウェア バージョンよりも古いハードウェア バージョンへリンク クローンを再構成することはできません。

再構成操作は時間がかかることがあるため、可能であればオフピーク時に実行するようにスケジュール設定します。

前提条件

- 親仮想マシンのスナップショットがあることを確認します。再構成を行うときは、スナップショットを指定する必要があります。スナップショットは、現在の親仮想マシンに存在することもあれば、別のマシンに存在することもあります。
- 再構成操作のスケジュールを決定します。デフォルトでは、View Composer はすぐに操作を開始します。
ファームで一度にスケジュール設定できる再構成操作は 1 回だけです。複数のファームを同時に再構成することができます。
- 再構成操作が開始されたらただちにすべてのユーザーを強制的にログオフさせるか、それとも各ユーザーがログオフしてからそのユーザーのマシンを再構成するかを決定します。
ユーザーを強制的にログオフさせる場合、View は切断する前にユーザーに通知するため、ユーザーはアプリケーションを閉じてログオフすることができます。
- 最初のエラーでプロビジョニングを停止するかどうかを決定します。このオプションを選択した場合、View Composer がリンク クローンをプロビジョニング中にエラーが発生すると、プロビジョニングが停止します。このオプションを選択することにより、ストレージなどのリソースが不必要に消費されるのを防ぐことができます。
[最初のエラーで停止] オプションを選択しても、カスタマイズには影響を与えません。リンク クローン上でカスタマイズ エラーが発生しても、他のクローンのプロビジョニングとカスタマイズは続行されます。
- そのプロビジョニングが有効になっていることを確認します。プロビジョニングが無効の場合、View は、マシンが再構成後にカスタマイズされないようにします。
- レプリケートされた View 接続サーバー インスタンスがデプロイ内に含まれる場合は、すべてのインスタンスが同一バージョンであることを確認します。

手順

- 1 View Administrator で、[リソース] - [ファーム] を選択します。
- 2 再構成するファームのプール ID をダブルクリックします。
- 3 [再構成] をクリックします。
- 4 (オプション) [変更] をクリックし、親仮想マシンを変更します。

新しい仮想マシンは、現在の親仮想マシンと同じバージョンのオペレーティング システムを実行する必要があります。

- 5 スナップショットを選択します。
- 6 (オプション) [スナップショットの詳細] をクリックすると、スナップショットに関する詳細が表示されます。
- 7 [次へ] をクリックします。

- 8 (オプション) 開始時刻をスケジュール設定します。

デフォルトで現在の時刻が入力されています。

- 9 (オプション) ユーザーを強制的にログオフさせるのか、ユーザーがログオフするのを待つのかを指定します。

デフォルトでは、ユーザーを強制的にログオフさせるオプションが選択されています。

- 10 (オプション) 最初にエラーが発生したときにプロビジョニングを停止するかどうかを指定します。

このオプションはデフォルトで選択されています。

- 11 [次へ] をクリックします。

[完了の準備完了] ページが表示されます。

- 12 (オプション) [詳細の表示] をクリックすると、再構成操作の詳細が表示されます。

- 13 [終了] をクリックします。

vCenter Server で、リンククローン仮想マシンの再構成操作の進捗を監視できます。

注: 再構成操作中、View Composer は、リンク クローンで Sysprep を再実行します。仮想マシンを再構成すると、新しい SID とサードパーティ GUID が生成される場合があります。詳細については、『View でのデスクトップ プールとアプリケーション プールの設定』の「Sysprep でカスタマイズしたリンク クローンの再構成」を参照してください。

RDS ホストの管理

手動で設定した RDS ホストと、自動ファームの追加時に自動的に作成された RDS ホストを管理できます。

RDS ホストを手動で設定すると、設定した RDS ホストは自動的に View 接続サーバに登録されます。RDS ホストを View 接続サーバに手動で登録することはできません。『View でのデスクトップ プールとアプリケーション プールの設定』ドキュメントの「リモート デスクトップ セッション ホストの設定」を参照してください。手動で設定した RDS ホストに対しては、以下の管理タスクを実行できます。

- RDS ホストを編集する。
- 手動ファームに RDS ホストを追加する。
- ファームから RDS ホストを削除する。
- RDS ホストを有効にする。
- RDS ホストを無効にする。

自動ファームの追加時に自動的に作成された RDS ホストに対しては、以下の管理タスクを実行できます。

- ファームから RDS ホストを削除する。
- RDS ホストを有効にする。
- RDS ホストを無効にする。

RDS ホストの編集

RDS ホストでサポートできる接続数を変更できます。この設定は、変更可能な唯一の設定です。デフォルト値は 150 で、任意の正の数値または無制限に設定できます。

編集できる RDS ホストは、手動で設定したものに限られます。自動ファーム内の RDS ホストは編集できません。

手順

- 1 View Administrator で、[View 構成] - [登録済みのマシン] を選択します。
- 2 RDS ホストを選択し、[編集] をクリックします。
- 3 [接続数] 設定の値を指定します。
- 4 [OK] をクリックします。

手動ファームに RDS ホストを追加する

ファームの規模を拡大するなどの理由で、手動で設定した RDS ホストを手動ファームに追加することができます。RDS ホストは手動ファームにしか追加できません。

手順

- 1 View Administrator で、[リソース] - [ファーム] を選択します。
- 2 ファームのプール ID をダブルクリックします。
- 3 [RDS ホスト] タブを選択します。
- 4 1 つ以上の RDS ホストを選択します。
- 5 [OK] をクリックします。

ファームから RDS ホストを削除する

手動ファームの規模の縮小、RDS ホストのメンテナンスの実行などの理由で、手動ファームから RDS ホストを削除できます。ベスト プラクティスとして、ホストをファームから削除する前に、RDS ホストを無効にしてユーザーがアクティブなセッションからログオフしていることを確認します。

削除するホスト上にユーザーのアプリケーション セッションやデスクトップ セッションがある場合、セッションはアクティブなままですが、View はセッションをトラッキングしなくなります。セッションから切断されたユーザーは再度接続することができず、未保存のデータが失われることがあります。

自動ファームから RDS ホストを削除することもできます。考えられる理由の 1 つは、RDS ホストが回復不能なエラー状態にあることです。View Composer は、新しい RDS ホストを自動的に作成し、ユーザーが削除する RDS ホストと置き換えます。

手順

- 1 View Administrator で、[リソース] - [ファーム] を選択します。
- 2 プール ID をダブルクリックします。
- 3 [RDS ホスト] タブを選択します。

- 4 1つ以上の RDS ホストを選択します。
- 5 [ファームから削除] をクリックします。
- 6 [OK] をクリックします。

View からの RDS ホストの削除

手動で設定し、使用する予定がなくなった RDS ホストは、View から削除できます。現在、手動ファームには、このような RDS ホストは存在してはなりません。

前提条件

RDS ホストがファームに属していないことを確認します。

手順

- 1 View Administrator で、[View 構成] - [登録済みのマシン] を選択します。
- 2 RDS ホストを選択し、[削除] をクリックします。
- 3 [OK] をクリックします。

RDS ホストを削除した後、その RDS ホストを再び使用するには、Horizon Agent を再インストールする必要があります。『View でのデスクトップ プールとアプリケーション プールの設定』ドキュメントの「リモート デスクトップ セッション ホストの設定」を参照してください。

RDS ホストの無効化または有効化

RDS ホストを無効化すると、View により新しい RDS デスクトップまたはアプリケーションをホストするのに使用されなくなります。ユーザーは現在開いているアプリケーションと RDS デスクトップを引き続き使用できます。

手順

- 1 View Administrator で、[リソース] - [ファーム] を選択します。
- 2 ファームのプール ID をダブルクリックします。
- 3 [RDS ホスト] タブを選択します。
- 4 RDS ホストを選択し、[その他のコマンド] をクリックします。
- 5 [有効化] または [無効化] をクリックします。
- 6 [OK] をクリックします。

RDS ホストを有効化すると、[有効] 列にチェックマークが表示され、[ステータス] 列に [使用可能] が表示されます。RDS ホストを無効化すると、[有効] 列は空白で、[ステータス] 列に [無効] が表示されます。

RDS ホストの監視

View Administrator で RDS ホストのステータスを監視しプロパティを表示できます。

手順

- ◆ View Administrator で、必要なプロパティが表示されるページへ移動します。

プロパティ	アクション
RDS ホスト、ファーム、デスクトップ プール、エージェント バージョン、セッション、ステータス	<ul style="list-style-type: none"> ■ View Administrator で、[リソース] - [マシン] を選択します。 ■ [RDS ホスト] タブをクリックします。リンククローン RDS ホストと手動で設定した RDS ホストの両方が表示されます。
DNS 名、タイプ、RDS ファーム、接続の最大数、エージェント バージョン、有効、ステータス	<ul style="list-style-type: none"> ■ View Administrator で、[View 構成] - [登録済みのマシン] を選択します。 ■ [RDS ホスト] タブをクリックします。手動で設定した RDS ホストのみが表示されます。

表示されるプロパティには、次の意味があります。

プロパティ	説明
RDS ホスト	RDS ホスト名。
ファーム	RDS ホストが属しているファーム。
デスクトップ プール	ファームに関連付けられている RDS デスクトップ プール。
エージェント バージョン	RDS ホストで実行される View Agent または Horizon Agent のバージョン。
セッション	クライアント セッション数。
DNS 名	RDS ホストの DNS 名。
タイプ	RDS ホストで実行される Windows Server のバージョン。
RDS ファーム	RDS ホストが属しているファーム。
接続の最大数	RDS ホストでサポートされる接続の最大数。
有効	RDS ホストが有効になっているか。
ステータス	RDS ホストの状態。取りうる状態の説明は、 RDS ホストのステータス を参照してください。

RDS ホストのステータス

RDS ホストは、初期化された時点からその状態がさまざまに変化します。ベスト プラクティスとして、RDS ホストに対してタスクの実行や操作を行う前と後に、それらのホストが予期される状態にあるかをチェックします。

表 11-1. RDS ホストのステータス

ステータス	説明
スタートアップ	View Agent または Horizon Agent は RDS ホスト上で起動されましたが、表示プロトコルなどの他の必要なサービスがまだ起動中です。エージェントの起動期間に、プロトコル サービスなどの他のプロセスも起動できます。
無効化が進行中	ホストでセッションがまだ実行されているときに RDS ホストの無効化が進行しています。セッションが終了する時点でステータスは無効に変わります。
無効	RDS ホストの無効化プロセスが完了しています。

ステータス	説明
検証しています	View 接続サーバが初めて RDS ホストを認識した後（一般に View 接続サーバが起動または再起動した後）と、RDS ホスト上の View Agent または Horizon Agent との初めての正常な通信の前に発生します。通常、この状態は一時的なものです。この状態は、通信の問題を示すエージェントに到達できない状態と同じではありません。
エージェントが無効です	View 接続サーバが View Agent または Horizon Agent を無効にすると発生します。この状態では、新しいデスクトップまたはアプリケーション セッションが RDS ホストで起動できません。
エージェントに到達できません	View 接続サーバは、RDS ホスト上の View Agent または Horizon Agent と通信を確立できません。
無効な IP	サブネット マスク レジストリ設定は RDS ホストで構成され、構成された範囲内に IP アドレスを持つアクティブ ネットワーク アダプタは存在しません。
エージェントを再起動する必要があります	View コンポーネントがアップグレードされました。RDS ホストを再起動して、アップグレードされたコンポーネントで操作することを View Agent または Horizon Agent に許可する必要があります。
プロトコル障害	RDP 表示プロトコルが正常に動作していません。RDP が動作しておらず、PCoIP が動作している場合、クライアントは RDP または PCoIP を使用して接続できません。ただし、RDP が動作し、PCoIP が動作していない場合、クライアントは RDP を使用して接続できます。
ドメイン障害	RDS ホストでドメインへの到達の問題が発生しました。ドメイン サーバがアクセス可能でないか、ドメイン認証が失敗しました。
構成エラー	サーバで RDS ロールが有効になっていません。
不明	RDS ホストは不明な状態にあります。
使用可能	RDS ホストは使用可能な状態です。ホストがファーム内に存在し、そのファームが RDS またはアプリケーション プールと関連付けられている場合、ホストは RDS デスクトップまたは RDS アプリケーションをユーザーに配布するために使用されます。
プロビジョニング	（リンククローン RDS ホストのみ）仮想マシンのプロビジョニングが進行中です。
カスタマイズ	（リンククローン RDS ホストのみ）仮想マシンのカスタマイズが進行中です。
削除中	（リンククローン RDS ホストのみ）仮想マシンの削除が進行中です。
エージェントの待機	（リンククローン RDS ホストのみ）View 接続サーバが View Agent または Horizon Agent に対する通信の確立を待機しています。
メンテナンス モード	（リンククローン RDS ホストのみ）仮想マシンは、メンテナンス モードのため、ユーザーは使用できません。
プロビジョニング済み	（リンククローン RDS ホストのみ）仮想マシンのプロビジョニングが完了しました。
プロビジョニング エラー	（リンククローン RDS ホストのみ）プロビジョニング中にエラーが発生しました。
エラー	（リンククローン RDS ホストのみ）仮想マシンで不明なエラーが発生しました。

RDS デスクトップでの Internet Explorer による Adobe Flash のスロットルの構成

RDS デスクトップで Adobe Flash のスロットルが Internet Explorer で確実に動作するようにするには、ユーザーがサード パーティ製のブラウザ拡張を有効にする必要があります。

手順

- 1 Horizon Client を起動し、ユーザーのリモート デスクトップにログインします。
- 2 Internet Explorer で、[ツール] - [インターネット オプション] をクリックします。

- 3 [詳細設定] タブをクリックし、[サードパーティ製のブラウザ拡張を有効にする] を選択して、[OK] をクリックします。
- 4 Internet Explorer を再起動します。

RDS ホストの負荷分散の構成

デフォルトでは、View 接続サーバは、現在のセッション数および制限を使用して、新しいアプリケーションセッションを複数の RDS ホストに分散して配置します。負荷分散スクリプトを作成して構成することにより、このデフォルトの動作を無効化して、新しいアプリケーションセッションの配置を制御することもできます。

負荷分散スクリプトは、負荷値を返します。負荷値は、CPU 使用率やメモリ使用率などの任意のホストメトリックに基づいて設定できます。Horizon Agent は、負荷値を負荷設定にマップし、その負荷設定を View 接続サーバにレポートします。View 接続サーバは、レポートされた負荷設定を使用して、新しいアプリケーションセッションの配置場所を決定します。

負荷分散スクリプトは自分で作成することも、Horizon Agent にサンプルとして付属している負荷分散スクリプトのいずれかを使用することもできます。

負荷分散スクリプトを構成するには、VMware Horizon View スクリプト ホスト サービスを有効にし、ファーム内の各 RDS ホストでレジストリ キーを設定する必要があります。

負荷値およびマップされた負荷設定

Horizon Agent は、負荷分散スクリプトが返した負荷値を負荷設定にマップします。View 接続サーバは、レポートされた負荷設定を使用して、新しいアプリケーションセッションの配置場所を決定します。

以下の表は、負荷分散スクリプトが返すことのできる有効な負荷値とそれに関連付けられた負荷設定を示しています。

表 11-2. 有効な負荷値およびマップされた負荷設定

有効な負荷値	Horizon Agent によりレポートされる負荷設定	説明
0	ブロック	この RDS ホストは選択しないでください。
1	低	低の設定/高い負荷。
2	中	中の設定/通常の負荷。
3	高	高の設定/軽い負荷。

負荷分散機能の制約

RDS ホストの負荷分散機能には、特定の制約があります。

- 非無限ルールにより、アプリケーションは、レポートされる負荷設定にかかわらず RDS ホストに配置しないようにできます。詳細については、[アプリケーション プールのアンチアフィニティ ルールの構成](#)を参照してください。
- 負荷分散の影響を受けるのは、新しいアプリケーションセッションのみです。ユーザーが以前にアプリケーションを実行したセッションが含まれる RDS ホストは、必ず同じアプリケーションで再利用されます。この動作は、レポートされるロード設定およびアンチアフィニティ ルールに優先します。

- RDS ホストがブロック負荷設定をレポートする場合でも、アプリケーションは、すでに既存のセッションが確立されている RDS ホストで起動されます。
- RDS セッションの制限により、アプリケーション セッションは、レポートされる負荷設定にかかわらず作成されません。

RDS ホストの負荷分散スクリプトの作成

負荷分散スクリプトを作成すると、負荷分散に使用する任意の RDS ホスト メトリックに基づいて負荷値を生成できます。固定の負荷値を返す単純な負荷分散スクリプトを作成することもできます。

負荷分散スクリプトは、0 ～ 3 の数を 1 つだけ返す必要があります。有効な負荷値の説明は、[負荷値およびマップされた負荷設定](#)を参照してください。

ファーム内の少なくとも 1 つの RDS ホストが有効な負荷値を返した場合、View 接続サーバは、ファーム内の他の RDS ホストの負荷分散スクリプトが有効な値を返すまで、それらの RDS ホストの負荷値として 2 を想定します (2 は、マップされた負荷設定の「中」に該当します)。ファーム内のどの RDS ホストも有効な負荷値を返さない場合、ファームの負荷分散機能は無効になります。

負荷分散スクリプトが無効な負荷値を返す場合、または 10 秒以内に実行を完了しない場合、Horizon Agent は、負荷設定を「ブロック」に設定し、RDS ホストの状態を構成エラーに設定します。これらの値により、新しいセッションで使用可能な RDS ホストのリストから、そのような RDS ホストが効率的に削除されます。

ファーム内の各 RDS ホスト上で、負荷分散スクリプトを Horizon Agent の `scripts` ディレクトリ (`C:\Program Files\VMware\VMware View\Agent\scripts`) にコピーします。ファーム内のすべての RDS ホストに同じスクリプトをコピーする必要があります。

負荷分散スクリプトの作成方法の例については、Horizon Agent の `scripts` ディレクトリにあるサンプル スクリプトを参照してください。詳細については、[RDS ホストの負荷分散スクリプトの例](#)を参照してください。

RDS ホストの負荷分散スクリプトの例

Horizon Agent を RDS ホストにインストールする場合、インストーラは、サンプルの負荷分散スクリプトを Horizon Agent の `scripts` ディレクトリ (`C:\Program Files\VMware\VMware View\Agent\scripts`) に配置します。

表 11-3. サンプルの負荷分散スクリプト

名前	説明
cpuutilisation.vbs	CPU 使用率をレジストリから読み取り、以下の負荷値を返します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 0 (CPU 使用率が 90% より大きい場合) ■ 1 (CPU 使用率が 75% より大きい場合) ■ 2 (CPU 使用率が 25% より大きい場合) ■ 3 (CPU 使用率が 25% 以下の場合)
memoryutilisation.vbs	メモリ使用率を計算し、以下の負荷値を返します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 0 (メモリ使用率が 90% より大きい場合) ■ 1 (メモリ使用率が 75% より大きい場合) ■ 2 (メモリ使用率が 25% より大きい場合) ■ 3 (メモリ使用率が 25% 以下の場合)

注: cpuutilisation.vbs スクリプトでは、5 分ごとにサンプリングされるローリング平均データが使用されています。そのため、レポートされる負荷設定には、短期間の高使用率イベントが反映されない場合があります。サンプリング期間は、最低 2 分に短縮できますが、RDS ホストのパフォーマンスに影響が及ぶ場合があります。サンプリング間隔は、レジストリ項目 HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\VMware, Inc.\VMware VDM\Performance Stats\SamplingIntervalSeconds で制御されます。デフォルトは 300 秒です。

RDS ホストでの VMware Horizon View スクリプト ホスト サービスの有効化

負荷分散スクリプトを構成する前に、RDS ホストで VMware Horizon View スクリプト ホスト サービスを有効にする必要があります。デフォルトでは、VMware Horizon View スクリプト ホスト サービスは無効になっています。

手順

- 1 RDS ホストに管理者としてログインします。
- 2 Server Manager を開始します。
- 3 [ツール] - [サービス] を選択し、VMware Horizon View スクリプト ホスト サービスに移動します。
- 4 [VMware Horizon View スクリプト ホスト] を右クリックし、[プロパティ] を選択します。
- 5 [プロパティ] ダイアログ ボックスの [起動タイプ] ドロップダウン メニューから [自動] を選択し、[OK] をクリックして変更を保存します。
- 6 [VMware Horizon View スクリプト ホスト] を右クリックし、[開始] を選択して VMware Horizon View スクリプト ホスト サービスを起動します。

VMware Horizon View スクリプト ホスト サービスは、RDS ホストを起動するたびに自動的に再起動します。

次のステップ

ファーム内の各 RDS ホストで負荷分散スクリプトを構成します。[RDS ホストでの負荷分散スクリプトの構成](#)を参照してください。

RDS ホストでの負荷分散スクリプトの構成

ファーム内のすべての RDS ホストで同じ負荷分散スクリプトを構成する必要があります。負荷分散スクリプトの構成には、RDS ホストでのレジストリ キーの設定が含まれます。

自動ファームを使用している場合、自動ファームの親仮想マシンでこの手順を実行します。

重要: ファーム内のすべての RDS ホストで負荷分散スクリプトを構成するか、ファーム内の RDS ホストで一切構成しないようにする必要があります。ファーム内の一部の RDS ホストでしか負荷分散スクリプトを構成しないと、View Administrator で健全性が黄色に設定されます。

前提条件

- 負荷分散スクリプトを記述し、同じスクリプトをファーム内の各 RDS ホストの Horizon Agent の `scripts` ディレクトリにコピーします。[RDS ホストの負荷分散スクリプトの作成](#)を参照してください。
- RDS ホストで VMware Horizon View スクリプト ホスト サービスを有効にします。[RDS ホストでの VMware Horizon View スクリプト ホスト サービスの有効化](#)を参照してください。

手順

- 1 RDS ホストに管理者としてログインします。
 - 2 Server Manager を開始します。
 - 3 [ツール] - [システム構成] を選択し、[ツール] タブをクリックしてレジストリ エディタを起動します。
 - 4 レジストリで `HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\VMware, Inc.\VMware VDM\ScriptEvents` に移動します。
 - 5 ナビゲーション領域で [RdshLoad] キーを選択します。
[RdshLoad] キーの値（ある場合）は、トピック領域（右ペイン）に表示されます。
 - 6 [RdshLoad] キーが表示されているトピック領域で右クリックし、[新規] - [文字列値] を選択して、新しい文字列値を作成します。
ベスト プラクティスとして、実行する負荷分散スクリプトを表す名前を使用します。たとえば、`cpuutilisation.vbs` スクリプトには **cpuutilisationScript** という名前を付けます。
 - 7 作成した新しい文字列値のエントリを右クリックして、[変更] を選択します。
 - 8 [値のデータ] テキスト ボックスに負荷分散スクリプトを呼び出すコマンドラインを入力し、[OK] をクリックします。
負荷分散スクリプトへの完全パスを入力します。
例：`cscript.exe "C:\Program Files\VMware\VMware View Agent\scripts\cpuutilisation.vbs"`
 - 9 変更を反映するため、RDS ホストで Horizon Agent サービスを再起動します。
- 負荷分散スクリプトが RDS ホストで実行を開始します。

次のステップ

ファーム内の各 RDS ホストでこの手順を繰り返します。自動ファームの親仮想マシンでこの手順を実行した場合、自動ファームをプロビジョニングします。

負荷分散スクリプトが正しく機能することを確認する方法については、[負荷分散スクリプトの検証](#)を参照してください。

負荷分散スクリプトの検証

負荷分散スクリプトが正常に機能していることを確認するには、View Administrator で RDS ファームと RDS ホストの情報を表示します。

手順

- 1 View Administrator で [ダッシュボード] をクリックして、[システムの健全性] ペインの [RDS ファーム] を展開します。
- 2 RDS ホストが含まれるファームの健全性を表示します。

ファームの健全性は緑になっているべきです。ファーム内の一部の RDS ホストでしか負荷分散スクリプトを構成しないと、View Administrator でファームの健全性が黄色に設定されます。ファーム内のすべての RDS ホストで負荷分散スクリプトを構成するか、ファーム内の RDS ホストで一切構成しないようにする必要があります。

- 3 ファームを展開し、各 RDS ホストの名前をクリックして負荷設定を表示します。

詳細ダイアログ ボックスの [サーバ ロード] フィールドに、Horizon Agent からレポートされる負荷設定（たとえば、「軽負荷のため、新しいセッションは許可されます」）が表示されます。Horizon Agent が負荷設定をレポートしなかった場合、[サーバ ロード] フィールドには「負荷がレポートされていません」と表示されます。

次のステップ

負荷分散が想定どおりに機能していない場合は、負荷分散スクリプトの内容を検証します。スクリプトが正しく作成されている場合は、VMware Horizon View スクリプト ホスト サービスが稼動していること、およびファーム内の各 RDS ホストで負荷分散スクリプトが構成されていることを確認します。

負荷分散セッションの配置の例

この例では、負荷分散セッションの配置のシナリオを 2 つ説明します。

例 1：既存のユーザー セッションがない場合

この例では、現在、ユーザー セッションがどの RDS ホストにも存在しないときに、6 つの RDS ホストを含むファームでセッションの配置がどのように実行されるのかを説明します。

- 1 Horizon Agent は、ファーム内の RDS ホストごとに以下の負荷設定をレポートします。

RDS ホスト	負荷設定
1	高
2	低
3	高

RDS ホスト	負荷設定
4	中
5	ブロック
6	低

- 2 View は、負荷設定に従って、RDS ホストを 3 つのバケットに分類します。Horizon Agent が負荷設定としてブロックをレポートしたため、View は RDS ホスト 5 を破棄します。

バケット	負荷設定	RDS ホスト
1	高	1
	高	3
2	中	4
3	低	2
	低	6

- 3 バケット 2 に含まれる RDS ホストは 1 つのみであるため、View はバケット 2 とバケット 3 を組み合わせます。

バケット	負荷設定	RDS ホスト
1	高	1
	高	3
	中	4
2	低	2
	低	6

- 4 View は、バケットを無作為の順序に配列します。

バケット	負荷設定	RDS ホスト
1	中	4
	高	3
	中	1
2	低	6
	低	2

- 5 View 接続サーバは、最初に RDS ホスト 4、次に RDS ホスト 3（以下同様に続く）という順序で RDS ホストに新しいアプリケーション セッションを配置することを試みます。

RDS ホスト セッションの配置の順序
4
3
1

RDS ホスト セッションの配置の順序

6

2

注: 非無限ルールにより、アプリケーションは、レポートされる負荷設定にかかわらず RDS ホストに配置しないようにできます。詳細については、[アプリケーション プールのアンチアフィニティ ルールの構成](#)を参照してください。

例 2：既存のユーザー セッションがある場合

この例では、現在、ユーザー セッションが RDS ホストのいずれかに存在するときに、6 つの RDS ホストを含むファームでセッションの配置がどのように実行されるのかを説明します。RDS ホストに含まれるセッションで以前にアプリケーションが実行された場合、その RDS ホストは、同じアプリケーションで常に再利用されます。

- 1 ユーザー セッションが RDS ホスト 3 にすでに存在します。RDS ホスト 3 の負荷設定は中です。ファーム内のホストの残りの RDS（スペア リスト）の負荷設定を以下に示します。

RDS ホスト	負荷設定
1	中
2	低
4	高
5	低
6	ブロック

- 2 View は、負荷設定に従って、スペア リスト内の RDS ホストを 2 つのバケットに分類します。Horizon Agent が負荷設定としてブロックをレポートしたため、View は RDS ホスト 6 を破棄します。

バケット	負荷設定	RDS ホスト
1	高	4
	中	1
2	低	2
	低	5

- 3 View は、バケットを無作為の順序に配列します。

バケット	負荷設定	RDS ホスト
1	高	4
	中	1
2	低	5
	低	2

- 4 View は、既存のセッションを含む RDS ホストを新しいバケット順序のリストの先頭に追加します。

RDS ホスト セッションの配置の順序
3
4
1
5
2

アプリケーション プールのアンチアフィニティ ルールの構成

アプリケーション プールのアンチアフィニティ ルールを構成すると、View 接続サーバはアプリケーションを実行するのに十分なリソースを持つ RDS ホストのみでアプリケーションを起動するように試みます。この機能は、大量の CPU またはメモリ リソースを消費するアプリケーションを制御するのに役立ちます。

アンチアフィニティ ルールは、アプリケーション一致パターンと最大数で構成されます。たとえば、アプリケーション一致パターンは `autocad.exe` で最大数は 2 の可能性があります。

View 接続サーバは、RDS ホスト上の Horizon Agent にアンチアフィニティ ルールを送信します。プロセス名がアプリケーション一致パターンと同じであるアプリケーションが RDS ホストで実行されている場合、Horizon Agent はこれらのアプリケーションのインスタンスの現在数を数え、その数を最大数と比較します。最大数を超えた場合、View 接続サーバはアプリケーションの新規セッションを実行するために RDS ホストを選択すると、その RDS ホストをスキップします。

前提条件

- アプリケーション プールを作成します。『View でのデスクトップ プールとアプリケーション プールの設定』ドキュメントの「アプリケーション プールの作成」セクションを参照してください。
- アンチアフィニティ機能の制約についてよく理解します。[アンチアフィニティ機能の制約](#)を参照してください。

手順

- 1 View Administrator で、[カタログ] - [アプリケーション プール] を選択します。
- 2 変更するプールを選択し、[編集] をクリックします。
- 3 [アンチアフィニティ パターン] テキスト ボックスに、RDS ホストで実行されている他のアプリケーションのプロセス名に一致するパターンのカンマ区切りリストを入力します。

パターン文字列には、アスタリスク (*) と疑問符 (?) をワイルドカード文字として含むことができます。アスタリスクは 0 文字以上に一致し、疑問符は任意の 1 文字に一致します。

たとえば、***pad.exe,*notepad.???** は `wordpad.exe`、`notepad.exe`、および `notepad.bat` に一致しますが、`wordpad.bat` または `notepad.script` には一致しません。

注: View は、1 つのセッションのアプリケーションについて一致する複数のパターンを 1 つの一致としてカウントします。

- 4 [アンチアフィニティの数] テキスト ボックスに、RDS ホストが新しいアプリケーション セッションについて拒否されるまでに RDS ホストで実行できる他のアプリケーションの最大数を入力します。

最大数は 1 から 20 までの整数です。

- 5 [OK] をクリックして変更を保存します。

アンチアフィニティ機能の制約

アンチアフィニティ機能には一定の制約があります。

- アンチアフィニティ ルールは、新規のアプリケーション セッションにのみ影響を及ぼします。ユーザーが以前にアプリケーションを実行したセッションが含まれる RDS ホストは、必ず同じアプリケーションで再利用されます。この動作は、レポートされるロード設定およびアンチアフィニティ ルールに優先します。
- アンチアフィニティ ルールは、RDS デスクトップ セッション内からのアプリケーションの起動には影響を及ぼしません。
- RDS セッションの制限により、アンチアフィニティ ルールに関係なく、アプリケーション セッションを作成できなくなります。
- 特定の状況では、RDS ホストにおけるアプリケーションのインスタンスが指定した最大数に制約されない場合があります。たとえば、他の保留中のセッションの他のアプリケーションが起動中の場合、View は正確なインスタンス数を判断できません。
- アプリケーション間のアンチアフィニティ ルールはサポートされません。たとえば、Autocad や Visual Studio インスタンスなどの大規模なアプリケーション クラスは 1 つのルールではカウントできません。
- エンドユーザーがモバイル クライアントで Horizon Client を使用する環境では、アンチアフィニティ ルールを使用しないでください。アンチアフィニティ ルールにより、エンド ユーザーの同一ファーム内で複数のセッションが開始されることがあります。モバイル クライアントで複数のセッションに再接続すると、動作が不安定になる場合があります。

View Administrator での ThinApp アプリケーションの管理

12

View Administrator を使用して、VMware ThinApp にパッケージ化されたアプリケーションを配布したり、管理したりすることができます。View Administrator での ThinApp アプリケーションの管理には、アプリケーションパッケージのキャプチャと格納、View Administrator への ThinApp アプリケーションの追加、マシンやデスクトッププールへの ThinApp アプリケーションの割り当てなどが含まれます。

View Administrator で ThinApp 管理機能を使用するためのライセンスを持っている必要があります。

重要: マシンおよびデスクトップ プールに指定して ThinApps を配布する代わりに、ThinApps を Active Directory ユーザーおよびグループに指定する場合、VMware Identity Manager を使用できます。

この章には、次のトピックが含まれています。

- [ThinApp アプリケーションに対する View の要件](#)
- [アプリケーション パッケージのキャプチャと格納](#)
- [マシンまたはデスクトップ プールへの ThinApp アプリケーションの割り当て](#)
- [View Administrator での ThinApp アプリケーションの保守](#)
- [View Administrator での ThinApp アプリケーションの監視とトラブルシューティング](#)
- [ThinApp 構成例](#)

ThinApp アプリケーションに対する View の要件

View Administrator で、リモート デスクトップに配布される ThinApp アプリケーションをキャプチャして格納する場合は、いくつかの要件を満たす必要があります。

- アプリケーションは Microsoft Installation (MSI) パッケージとしてパッケージ化する必要があります。
- ThinApp バージョン 4.6 以降を使用して、MSI パッケージを作成または再パッケージ化する必要があります。
- View 接続サーバホストとリモート デスクトップにアクセス可能な Active Directory ドメイン内に存在する Windows ネットワーク共有上に MSI パッケージを格納する必要があります。ファイル サーバは、コンピュータアカウントに基づく認証およびファイル アクセス権をサポートする必要があります。
- MSI パッケージをホストするネットワーク共有に対するファイルおよび共有権限を構成して、ビルトイン Active Directory グループ ドメイン コンピュータに読み取りアクセス権を与える必要があります。ThinApp アプリケーションをドメイン コントローラに配布する予定がある場合は、ビルトイン Active Directory グループ ドメイン コントローラにも読み取りアクセス権を与える必要があります。

- ストリーミングされた ThinApp アプリケーション パッケージへのアクセスをユーザーに許可するには、その ThinApp パッケージをホストするネットワーク共有のユーザー用の NTFS 権限を Read&Execute に設定する必要があります。
- 不整合な名前空間によって、ドメイン メンバーのコンピュータが MSI パッケージをホストするネットワーク共有へのアクセスを妨げられないことを確認します。不整合な名前空間は、Active Directory ドメイン名がそのドメイン内のマシンで使われる DNS 名前空間の名前と異なる場合に発生します。詳細については、VMware ナレッジベース (KB) の記事 1023309 を参照してください。
- リモート デスクトップ上でストリーミングされた ThinApp アプリケーションを実行するには、MSI パッケージをホストするネットワーク共有にユーザーがアクセスできる必要があります。

アプリケーション パッケージのキャプチャと格納

ThinApp は基盤のオペレーティング システムとそのライブラリおよびフレームワークからアプリケーションを切り離し、アプリケーションをアプリケーション パッケージと呼ばれる 1 つの実行可能ファイルにバンドルすることによって、アプリケーションの仮想化を実現します。

View Administrator で ThinApp アプリケーションを管理するには、ThinApp [セットアップ キャプチャ] ウィザードを使用してアプリケーションをキャプチャして MSI 形式でパッケージ化し、MSI パッケージをアプリケーション リポジトリに格納する必要があります。

アプリケーション リポジトリは Windows ネットワーク共有です。ネットワーク共有をアプリケーション リポジトリとして登録するには、View Administrator を使用します。複数のアプリケーション リポジトリを登録できます。

注: 複数のアプリケーション リポジトリがある場合は、サードパーティ ソリューションを使用して、ロード バランシングと可用性を管理できます。View には、ロード バランシングまたは可用性ソリューションが含まれていません。

ThinApp の機能の詳細および ThinApp [セットアップ キャプチャ] ウィザードの使用方法については、『Introduction to VMware ThinApp (VMware ThinApp 入門)』および『ThinApp ユーザーズ ガイド』を参照してください。

手順

1 アプリケーションのパッケージ化

アプリケーションをキャプチャしてパッケージ化するには、ThinApp [セットアップ キャプチャ] ウィザードを使用します。

2 Windows ネットワーク共有の作成

リモート デスクトップやプールに配布される MSI パッケージをホストするには、View Administrator で Windows ネットワーク共有を作成する必要があります。

3 アプリケーション リポジトリの登録

View Administrator で、MSI パッケージをホストする Windows ネットワーク共有をアプリケーション リポジトリとして登録する必要があります。

4 View Administrator への ThinApp アプリケーションの追加

ThinApp アプリケーションを View Administrator に追加するには、アプリケーション リポジトリをスキャンし、ThinApp アプリケーションを選択します。ThinApp アプリケーションを View Administrator に追加した後、その ThinApp アプリケーションをマシンやデスクトップ プールに割り当てることができます。

5 ThinApp テンプレートの作成

View Administrator でテンプレートを作成して、ThinApp アプリケーションのグループを指定できます。テンプレートを使用して、アプリケーションを機能、ベンダー、または組織に適したその他の論理グループでグループ化することができます。

アプリケーションのパッケージ化

アプリケーションをキャプチャしてパッケージ化するには、ThinApp [セットアップ キャプチャ] ウィザードを使用します。

前提条件

- <http://www.vmware.com/products/thinapp> から ThinApp ソフトウェアをダウンロードし、それをクリーンなコンピュータにインストールします。View は ThinApp バージョン 4.6 以降をサポートしています。
- 『ThinApp ユーザーズ ガイド』で ThinApp のソフトウェア要件とアプリケーションのパッケージ化手順を理解しておきます。

手順

- 1 ThinApp [セットアップ キャプチャ] ウィザードを起動し、ウィザードの指示に従います。
- 2 ThinApp [セットアップ キャプチャ] ウィザードでプロジェクトの場所の入力を求められたら、[MSI パッケージの構築] を選択します。
- 3 アプリケーションをリモート デスクトップにストリーミングする予定がある場合は、`package.ini` ファイルで MSIStreaming プロパティを 1 に設定します。

```
MSIStreaming=1
```

ThinApp [セットアップ キャプチャ] ウィザードによって、そのアプリケーション、つまりアプリケーションの実行に必要なすべてのコンポーネントとアプリケーション自体が MSI パッケージにカプセル化されます。

次のステップ

MSI パッケージを格納するための Windows ネットワーク共有を作成します。

Windows ネットワーク共有の作成

リモート デスクトップやプールに配布される MSI パッケージをホストするには、View Administrator で Windows ネットワーク共有を作成する必要があります。

前提条件

- ThinApp [セットアップ キャプチャ] ウィザードを使用して、アプリケーションをパッケージ化します。

- ネットワーク共有が、ThinApp アプリケーションを格納するための View 要件を満たしていることを確認します。詳細については、[ThinApp アプリケーションに対する View の要件](#)を参照してください。

手順

- 1 View 接続サーバ ホストとリモート デスクトップの両方にアクセス可能な、Active Directory ドメイン内のコンピュータに共有フォルダを作成します。
- 2 その共有フォルダに対するファイルおよび共有権限を構成して、ビルトイン Active Directory グループ ドメイン コンピュータに読み取りアクセス権を与えます。
- 3 ThinApp アプリケーションをドメイン コントローラに割り当てる予定がある場合は、ビルトイン Active Directory グループ ドメイン コントローラに読み取りアクセス権を与えます。
- 4 ストリーミングされた ThinApp アプリケーション パッケージを使用する予定がある場合は、ThinApp パッケージをホストするネットワーク共有の NTFS アクセス権をユーザーに対して Read&Execute に設定します。
- 5 MSI パッケージを共有フォルダにコピーします。

次のステップ

View Administrator で、Windows ネットワーク共有をアプリケーション リポジトリとして登録します。

アプリケーション リポジトリの登録

View Administrator で、MSI パッケージをホストする Windows ネットワーク共有をアプリケーション リポジトリとして登録する必要があります。

複数のアプリケーション リポジトリを登録できます。

前提条件

Windows ネットワーク共有を作成します。

手順

- 1 View Administrator で、[View 構成] - [ThinApp 構成] を選択し、[リポジトリの追加] をクリックします。
- 2 [表示名] テキスト ボックスに、アプリケーション リポジトリの表示名を入力します。
- 3 [共有パス] テキスト ボックスに、アプリケーション パッケージをホストする Windows ネットワーク共有へのパスを入力します。

ネットワーク共有パスは、¥¥*ServerComputerName*¥*ShareName* の形式である必要があります。
ServerComputerName はサーバ コンピュータの DNS 名です。IP アドレスを指定しないでください。

例：¥¥*server.domain.com*¥*MSIPackages*

- 4 [保存] をクリックして、View Administrator にアプリケーション リポジトリを登録します。

View Administrator への ThinApp アプリケーションの追加

ThinApp アプリケーションを View Administrator に追加するには、アプリケーション リポジトリをスキャンし、ThinApp アプリケーションを選択します。ThinApp アプリケーションを View Administrator に追加した後、その ThinApp アプリケーションをマシンやデスクトップ プールに割り当てることができます。

前提条件

View Administrator にアプリケーション リポジトリを登録します。

手順

- 1 View Administrator で、[カタログ] - [ThinApp] を選択します。

- 2 [サマリ] タブで、[新しい ThinApp をスキャン] をクリックします。

- 3 スキャンするアプリケーション リポジトリとフォルダを選択し、[次へ] をクリックします。

アプリケーション リポジトリにサブフォルダが含まれている場合は、ルート フォルダを展開してサブフォルダを選択できます。

- 4 View Administrator に追加する ThinApp アプリケーションを選択します。

<Ctrl> キーまたは <Shift> キーを押しながらクリックして、複数の ThinApp アプリケーションを選択できます。

- 5 [スキャン] をクリックして、選択した MSI パッケージのスキャンを開始します。

スキャンを停止する必要がある場合は、[スキャンを停止] をクリックできます。

View Administrator は、各スキャン操作のステータスと、View Administrator に追加された ThinApp アプリケーションの数を報告します。すでに View Administrator に存在するアプリケーションを選択しても、そのアプリケーションが再び追加されることはありません。

- 6 [終了] をクリックします。

新しい ThinApp アプリケーションが [サマリ] タブに表示されます。

次のステップ

(オプション) ThinApp テンプレートを作成します。

ThinApp テンプレートの作成

View Administrator でテンプレートを作成して、ThinApp アプリケーションのグループを指定できます。テンプレートを使用して、アプリケーションを機能、ベンダー、または組織に適したその他の論理グループでグループ化することができます。

ThinApp テンプレートを使用すると、複数のアプリケーションの配布を効率化できます。ThinApp テンプレートをマシンまたはデスクトップ プールに割り当てると、View Administrator は、現在そのテンプレートに含まれているすべてのアプリケーションをインストールします。

ThinApp テンプレートの作成はオプションです。

注: ThinApp テンプレートをマシンまたはデスクトップ プールに割り当てた後にそのテンプレートにアプリケーションを追加した場合、View Administrator はその新しいアプリケーションをマシンまたはデスクトップ プールに自動的に割り当てません。以前にマシンまたはデスクトップ プールに割り当てられた ThinApp テンプレートからアプリケーションを削除した場合、そのアプリケーションはマシンまたはデスクトップ プールに割り当てられたままになります。

前提条件

選択した ThinApp アプリケーションを View Administrator に追加します。

手順

- 1 View Administrator で、[カタログ] - [ThinApp] を選択し、[新規テンプレート] をクリックします。
- 2 テンプレートの名前を入力し、[追加] をクリックします。
使用可能なすべての ThinApp アプリケーションが表に表示されます。
- 3 特定の ThinApp アプリケーションを見つけるには、[検索] テキスト ボックスにアプリケーションの名前を入力し、[検索] をクリックします。
- 4 テンプレートに含める ThinApp アプリケーションを選択し、[追加] をクリックします。
<Ctrl> キーまたは <Shift> キーを押しながらクリックして、複数のアプリケーションを選択できます。
- 5 [OK] をクリックしてテンプレートを保存します。

マシンまたはデスクトップ プールへの ThinApp アプリケーションの割り当て

リモート デスクトップに ThinApp アプリケーションをインストールするには、View Administrator を使用して ThinApp アプリケーションをマシンまたはデスクトップ プールに割り当てます。

ThinApp アプリケーションをマシンに割り当てると、View Administrator は数分後に仮想マシンへのアプリケーションのインストールを開始します。ThinApp アプリケーションをデスクトップ プールに割り当てると、ユーザーがそのプール内のリモート デスクトップに初めてログインしたときに、View Administrator がアプリケーションのインストールを開始します。

ストリーミング

View Administrator は、リモート デスクトップに ThinApp アプリケーションへのショートカットをインストールします。このショートカットは、リポジトリをホストするネットワーク共有上の ThinApp アプリケーションを参照します。ストリーミングされた ThinApp アプリケーションを実行するには、ユーザーがそのネットワーク共有にアクセスできる必要があります。

フル

View Administrator は、ローカル ファイル システムに完全な ThinApp アプリケーションをインストールします。

ThinApp アプリケーションのインストールにかかる時間は、そのアプリケーションのサイズによって異なります。

重要: ThinApp アプリケーションは、仮想マシンベースのデスクトップおよび vCenter Server 仮想マシンを含む自動デスクトップ プールまたは手動プールに割り当てることができます。ThinApp アプリケーションを RDS デスクトップまたは従来の PC に割り当てることはできません。

■ ThinApp アプリケーションを割り当てるためのベスト プラクティス

ThinApp アプリケーションをマシンやデスクトップ プールに割り当てるときは、ベスト プラクティスに従ってください。

- **複数のマシンへの ThinApp アプリケーションの割り当て**
特定の ThinApp を 1 つ以上のマシンに割り当てることができます。
- **マシンに複数の ThinApp アプリケーションを割り当てる**
1 つ以上の ThinApp アプリケーションを特定のマシンに割り当てることができます。
- **複数のデスクトップ プールへの ThinApp アプリケーションの割り当て**
特定の ThinApp アプリケーションを 1 つ以上のデスクトップ プールに割り当てることができます。
- **デスクトップ プールへの複数の ThinApp アプリケーションの割り当て**
1 つ以上の ThinApp アプリケーションを特定のデスクトップ プールに割り当てることができます。
- **マシンまたはデスクトップ プールへの ThinApp テンプレートの割り当て**
ThinApp テンプレートをマシンまたはデスクトップ プールに割り当てることによって、複数の ThinApp アプリケーションの配布を効率化できます。
- **ThinApp アプリケーション割り当ての確認**
特定の ThinApp アプリケーションが現在割り当てられているすべてのマシンとデスクトップ プールを確認できます。また、特定のマシンまたはデスクトップ プールに割り当てられているすべての ThinApp アプリケーションを確認することもできます。
- **MSI パッケージ情報の表示**
ThinApp アプリケーションを View Administrator に追加した後、そのアプリケーションの MSI パッケージに関する情報を表示できます。

ThinApp アプリケーションを割り当てるためのベスト プラクティス

ThinApp アプリケーションをマシンやデスクトップ プールに割り当てるときは、ベスト プラクティスに従ってください。

- ThinApp アプリケーションを特定のリモート デスクトップにインストールするには、そのデスクトップをホストする仮想マシンにアプリケーションを割り当てます。マシンに共通する命名規則を使用すると、マシン割り当てを使用して、その命名規則を使用するすべてのマシンにアプリケーションを素早く配布することができます。
- ThinApp アプリケーションをデスクトップ プール内のすべてのマシンにインストールするには、そのデスクトップ プールにアプリケーションを割り当てます。デスクトップ プールを部門またはユーザーの種類ごとに構成すると、デスクトップ プール割り当てを使用して、特定の部門またはユーザーにアプリケーションを素早く配布することができます。たとえば、会計部門のユーザー用のデスクトップ プールがある場合は、アプリケーションをアカウントिंग プールに割り当てることによって、同じアプリケーションをアカウントिंग部門内のすべてのユーザーに配布できます。
- 複数の ThinApp アプリケーションの配布を効率化するには、それらのアプリケーションを ThinApp テンプレート内に含めます。ThinApp テンプレートをマシンまたはデスクトップ プールに割り当てると、View Administrator は、現在そのテンプレートに含まれているすべてのアプリケーションをインストールします。

- ThinApp テンプレートに、マシンまたはデスクトップ プールにすでに割り当てられている ThinApp アプリケーションが含まれている場合は、テンプレートをそのマシンまたはデスクトップ プールに割り当てないでください。また、別のインストール タイプを使用して同じマシンまたはデスクトップ プールに複数回 ThinApp テンプレートを割り当てることは避けてください。このどちらの場合も、View Administrator は ThinApp 割り当てエラーを返します。

複数のマシンへの ThinApp アプリケーションの割り当て

特定の ThinApp を 1 つ以上のマシンに割り当てることができます。

前提条件

アプリケーション リポジトリをスキャンし、選択した ThinApp アプリケーションを View Administrator に追加します。[View Administrator への ThinApp アプリケーションの追加](#)を参照してください。

手順

- 1 View Administrator で、[カタログ] - [ThinApps] を選択し、ThinApp アプリケーションを選択します。
- 2 [割り当てを追加] ドロップダウン メニューから [マシンを割り当てる] を選択します。

その ThinApp アプリケーションがまだ割り当てられていないマシンが表に表示されます。

オプション	操作
特定のマシンを検索する	[検索] テキスト ボックスにマシンの名前を入力し、[検索] をクリックします。
同じ命名規則に従うすべてのマシンを検索する	[検索] テキスト ボックスにマシン名の一部を入力し、[検索] をクリックします。

- 3 ThinApp アプリケーションを割り当てるマシンを選択し、[追加] をクリックします。
Ctrl キーまたは Shift キーを押しながらクリックして、複数のマシンを選択できます。
- 4 インストール タイプを選択し、[OK] をクリックします。

オプション	操作
ストリーミング	マシンにアプリケーションへのショートカットをインストールします。このショートカットは、リポジトリをホストするネットワーク共有上のアプリケーションを参照します。アプリケーションを実行するには、ユーザーがそのネットワーク共有にアクセスする必要があります。
フル	マシンのローカル ファイル システムにアプリケーション全体をインストールします。

両方のインストール タイプをサポートしていない ThinApp アプリケーションもあります。アプリケーション パッケージがどのように作成されたかによって、どのインストール タイプを使用できるかが決まります。

View Administrator は数分後に ThinApp アプリケーションのインストールを開始します。インストールが終了すると、仮想マシンによりホストされたリモート デスクトップのすべてのユーザーがそのアプリケーションを使用できるようになります。

マシンに複数の ThinApp アプリケーションを割り当てる

1 つ以上の ThinApp アプリケーションを特定のマシンに割り当てることができます。

前提条件

アプリケーション リポジトリをスキャンし、選択した ThinApp アプリケーションを View Administrator に追加します。 [View Administrator への ThinApp アプリケーションの追加](#) を参照してください。

手順

- 1 View Administrator で、[リソース] - [マシン] を選択し、[マシン] 列のマシン名をダブルクリックします。
- 2 [サマリ] タブで、ThinApp ペインの [割り当てを追加] をクリックします。
マシンにまだ割り当てられていない ThinApp アプリケーションが表に表示されます。
- 3 特定のアプリケーションを見つけるには、[検索] テキスト ボックスにアプリケーションの名前を入力し、[検索] をクリックします。
- 4 マシンに割り当てる ThinApp アプリケーションを選択し、[追加] をクリックします。
複数のアプリケーションを追加するには、この手順を繰り返します。
- 5 インストール タイプを選択し、[OK] をクリックします。

オプション	操作
ストリーミング	マシンにアプリケーションへのショートカットをインストールします。このショートカットは、リポジトリをホストするネットワーク共有上のアプリケーションを参照します。アプリケーションを実行するには、ユーザーがそのネットワーク共有にアクセスできる必要があります。
フル	マシンのローカル ファイル システムにアプリケーション全体をインストールします。

両方のインストール タイプをサポートしていない ThinApp アプリケーションもあります。アプリケーション パッケージがどのように作成されたかによって、どのインストール タイプを使用できるかが決まります。

View Administrator は数分後に ThinApp アプリケーションのインストールを開始します。インストールが終了すると、仮想マシンでホストされているリモート デスクトップのすべてのユーザーがアプリケーションを使用できるようになります。

複数のデスクトップ プールへの ThinApp アプリケーションの割り当て

特定の ThinApp アプリケーションを 1 つ以上のデスクトップ プールに割り当てることができます。

ThinApp アプリケーションをリンク クローン プールに割り当て、後でそのプールを更新、再構成、または再分散すると、View Administrator によってそのアプリケーションが自動的に再インストールされます。アプリケーションを手動で再インストールする必要はありません。

前提条件

アプリケーション リポジトリをスキャンし、選択した ThinApp アプリケーションを View Administrator に追加します。 [View Administrator への ThinApp アプリケーションの追加](#) を参照してください。

手順

- 1 View Administrator で、[カタログ] - [ThinApps] を選択し、ThinApp アプリケーションを選択します。

- 2 [割り当てを追加] ドロップダウン メニューから [デスクトップ プールを割り当てる] を選択します。

ThinApp アプリケーションがまだ割り当てられていないデスクトップ プールが表に表示されます。

オプション	操作
特定のデスクトップ プールを検索する	[検索] テキスト ボックスにデスクトップ プールの名前を入力し、[検索] をクリックします。
同じ命名規則に従うすべてのデスクトップ プールを検索する	[検索] テキスト ボックスにデスクトップ プール名の一部を入力し、[検索] をクリックします。

- 3 ThinApp アプリケーションを割り当てるデスクトップ プールを選択し、[追加] をクリックします。

Ctrl キーまたは Shift キーを押しながらクリックして、複数のデスクトップ プールを選択できます。

- 4 インストール タイプを選択し、[OK] をクリックします。

オプション	操作
ストリーミング	マシンにアプリケーションへのショートカットをインストールします。このショートカットは、リポジトリをホストするネットワーク共有上のアプリケーションを参照します。アプリケーションを実行するには、ユーザーがそのネットワーク共有にアクセスする必要があります。
フル	マシンのローカル ファイル システムにアプリケーション全体をインストールします。

両方のインストール タイプをサポートしていない ThinApp アプリケーションもあります。アプリケーション パッケージがどのように作成されたかによって、どのインストール タイプを使用できるかが決まります。

ユーザーがそのプール内のデスクトップに初めてログインしたときに、View Administrator は ThinApp アプリケーションのインストールを開始します。インストールが終了すると、デスクトップ プールのすべてのユーザーがそのアプリケーションを使用できるようになります。

デスクトップ プールへの複数の ThinApp アプリケーションの割り当て

1 つ以上の ThinApp アプリケーションを特定のデスクトップ プールに割り当てることができます。

ThinApp アプリケーションをリンク クローン プールに割り当て、後でそのプールを更新、再構成、または再分散すると、View Administrator によってそのアプリケーションが自動的に再インストールされます。アプリケーションを手動で再インストールする必要はありません。

前提条件

アプリケーション リポジトリをスキャンし、選択した ThinApp アプリケーションを View Administrator に追加します。 [View Administrator への ThinApp アプリケーションの追加](#) を参照してください。

手順

- 1 View Administrator で、[カタログ] - [デスクトップ プール] を選択し、プール ID をダブルクリックします。

- 2 [インベントリ] タブで、[ThinApp] をクリックし、[割り当てを追加] をクリックします。

プールにまだ割り当てられていない ThinApp アプリケーションが表に表示されます。

- 3 特定のアプリケーションを見つけるには、[検索] テキスト ボックスに ThinApp アプリケーションの名前を入力し、[検索] をクリックします。

- 4 プールに割り当てる ThinApp アプリケーションを選択し、[追加] をクリックします。

複数のアプリケーションを選択するには、この手順を繰り返します。

- 5 インストール タイプを選択し、[OK] をクリックします。

オプション	操作
ストリーミング	マシンにアプリケーションへのショートカットをインストールします。このショートカットは、リポジトリをホストするネットワーク共有上のアプリケーションを参照します。アプリケーションを実行するには、ユーザーがそのネットワーク共有にアクセスできる必要があります。
フル	マシンのローカル ファイル システムにアプリケーション全体をインストールします。

両方のインストール タイプをサポートしていない ThinApp アプリケーションもあります。アプリケーションパッケージがどのように作成されたかによって、どのインストール タイプを使用できるかが決まります。

ユーザーがそのプール内のデスクトップに初めてログインしたときに、View Administrator は ThinApp アプリケーションのインストールを開始します。インストールが終了すると、デスクトップ プールのすべてのユーザーがそれらのアプリケーションを使用できるようになります。

マシンまたはデスクトップ プールへの ThinApp テンプレートの割り当て

ThinApp テンプレートをマシンまたはデスクトップ プールに割り当てることによって、複数の ThinApp アプリケーションの配布を効率化できます。

ThinApp テンプレートをマシンまたはデスクトップ プールに割り当てると、View Administrator で、現在そのテンプレートに含まれている ThinApp アプリケーションがインストールされます。

前提条件

ThinApp テンプレートを作成します。以下を参照してください。 [ThinApp テンプレートの作成](#)。

手順

- 1 View Administrator で、[カタログ] - [ThinApp] を選択します。
- 2 ThinApp テンプレートを選択します。
- 3 [割り当てを追加] ドロップダウン メニューから [マシンを割り当てる] または [デスクトップ プールを割り当てる] を選択します。

すべてのマシンまたはデスクトップ プールが表に表示されます。

オプション	操作
特定のマシンまたはデスクトップ プールを検索する	[検索] テキスト ボックスにマシンまたはデスクトップ プールの名前を入力し、[検索] をクリックします。
同じ命名規則に従うすべてのマシンまたはデスクトップ プールを検索する	[検索] テキスト ボックスにマシン名またはデスクトップ プール名の一部を入力し、[検索] をクリックします。

- 4 ThinApp テンプレートを割り当てるマシンまたはデスクトップ プールを選択し、[追加] をクリックします。

複数のマシンまたはデスクトップ プールを選択するには、この手順を繰り返します。

5 インストール タイプを選択し、[OK] をクリックします。

オプション	操作
ストリーミング	マシンにアプリケーションへのショートカットをインストールします。このショートカットは、リポジトリをホストするネットワーク共有上のアプリケーションを参照します。アプリケーションを実行するには、ユーザーがそのネットワーク共有にアクセスできる必要があります。
フル	マシンのローカル ファイル システムにアプリケーション全体をインストールします。

両方のインストール タイプをサポートしていない ThinApp アプリケーションもあります。アプリケーションパッケージがどのように作成されたかによって、どのインストール タイプを使用できるかが決まります。

ThinApp テンプレートをマシンに割り当てると、View Administrator で、数分後にテンプレート内のアプリケーションのインストールが開始されます。ThinApp テンプレートをデスクトップ プールに割り当てると、ユーザーがそのデスクトップ プール内のリモート デスクトップに初めてログインしたときに、View Administrator で、テンプレート内のアプリケーションのインストールが開始されます。インストールが終了すると、マシンまたはデスクトップ プールのすべてのユーザーがそれらのアプリケーションを使用できるようになります。

ThinApp テンプレートに、マシンまたはデスクトップ プールにすでに割り当てられているアプリケーションが含まれている場合、View Administrator はアプリケーション割り当てエラーを返します。

ThinApp アプリケーション割り当ての確認

特定の ThinApp アプリケーションが現在割り当てられているすべてのマシンとデスクトップ プールを確認できます。また、特定のマシンまたはデスクトップ プールに割り当てられているすべての ThinApp アプリケーションを確認することもできます。

前提条件

[ThinApp アプリケーションのインストール ステータス値](#)で ThinApp インストール ステータス値について理解しておきます。

手順

- ◆ 確認する ThinApp アプリケーション割り当てを選択します。

オプション	操作
特定の ThinApp アプリケーションが割り当てられているすべてのマシンとデスクトップ プールを確認する	<p>[カタログ] - [ThinApp] を選択し、ThinApp アプリケーションの名前をダブルクリックします。</p> <p>[割り当て] タブに、そのアプリケーションが現在割り当てられているマシンとデスクトップ プール、およびインストール タイプが表示されます。</p> <p>[マシン] タブに、そのアプリケーションに現在関連付けられているマシン、およびインストール ステータス情報が表示されます。</p> <p>注: ThinApp アプリケーションをプールに割り当てた場合、そのプール内のマシンは、アプリケーションのインストール後に [マシン] タブに表示されます。</p>
特定のマシンに割り当てられているすべての ThinApp アプリケーションを確認する	<p>[リソース] - [マシン] を選択し、[マシン] 列のマシン名をダブルクリックします。</p> <p>[サマリ] タブの [ThinApp] ペインに、そのマシンに現在割り当てられている各アプリケーション、およびインストール ステータスが表示されます。</p>
特定のデスクトップ プールに割り当てられているすべての ThinApp アプリケーションを確認する	<p>[カタログ] - [デスクトップ プール] を選択し、プール ID をダブルクリックします。次に、[イベントリ] タブを選択し、[ThinApp] をクリックします。</p> <p>[ThinApp 割り当て] ペインに、そのデスクトップ プールに現在割り当てられている各アプリケーションが表示されます。</p>

ThinApp アプリケーションのインストール ステータス値

ThinApp アプリケーションをマシンまたはプールに割り当てると、View Administrator にインストールのステータスが表示されます。

表 12-1. ThinApp アプリケーションのインストール ステータス に、各ステータス値の説明を示します。

表 12-1. ThinApp アプリケーションのインストール ステータス

ステータス	説明
割り当て済み	ThinApp アプリケーションはマシンに割り当てられています。
インストール エラー	View Administrator が ThinApp アプリケーションをインストールしようとしたときにエラーが発生しました。
アンインストール エラー	View Administrator が ThinApp アプリケーションをアンインストールしようとしたときにエラーが発生しました。
インストール済み	ThinApp アプリケーションはインストールされています。
インストールの保留中	View Administrator は ThinApp アプリケーションをインストールしようとしています。 このステータスのアプリケーションを割り当て解除することはできません。 注: この値は、デスクトップ プール内のマシンには表示されません。
アンインストールの保留中	View Administrator は ThinApp アプリケーションをアンインストールしようとしています。

MSI パッケージ情報の表示

ThinApp アプリケーションを View Administrator に追加した後、そのアプリケーションの MSI パッケージに関する情報を表示できます。

手順

- 1 View Administrator で、[カタログ] - [ThinApp] を選択します。
[サマリ] タブに、現在使用可能なアプリケーションが一覧表示され、完全割り当てとストリーミング割り当ての数が表示されます。
- 2 ThinApp 列のアプリケーションの名前をダブルクリックします。
- 3 MSI パッケージに関する一般的な情報を表示するには、[サマリ] タブを選択します。
- 4 MSI パッケージに関する詳細情報を表示するには、[パッケージ情報] をクリックします。

View Administrator での ThinApp アプリケーションの保守

View Administrator での ThinApp アプリケーションの保守には、ThinApp アプリケーション割り当ての削除、ThinApp アプリケーションおよびアプリケーション リポジトリの削除、ThinApp テンプレートの変更や削除などのタスクが含まれます。

注: ThinApp アプリケーションをアップグレードするには、アプリケーションの古いバージョンを割り当て解除して削除し、新しいバージョンを追加して割り当てする必要があります。

- **複数のマシンからの ThinApp アプリケーション割り当ての削除**
特定の ThinApp アプリケーションへの割り当てを 1 つ以上のマシンから削除できます。
- **マシンからの複数の ThinApp アプリケーション割り当ての削除**
1 つ以上の ThinApp アプリケーションへの割り当てを特定のマシンから削除できます。
- **複数のデスクトップ プールからの ThinApp アプリケーション割り当ての削除**
1 つ以上のデスクトップ プールから、特定の ThinApp アプリケーションへの割り当てを削除できます。
- **デスクトップ プールからの複数の ThinApp アプリケーション割り当ての削除**
1 つ以上の ThinApp アプリケーション割り当てを特定のデスクトップ プールから削除できます。
- **View Administrator からの ThinApp アプリケーションの削除**
ThinApp アプリケーションを View Administrator から削除すると、そのアプリケーションをマシンやデスクトップ プールに割り当てることができなくなります。
- **ThinApp テンプレートの変更または削除**
アプリケーションを ThinApp テンプレートに追加したり、ThinApp テンプレートから削除したりできます。また、ThinApp テンプレートを削除することもできます。
- **アプリケーション リポジトリの削除**
アプリケーション リポジトリを View Administrator から削除できます。

複数のマシンからの ThinApp アプリケーション割り当ての削除

特定の ThinApp アプリケーションへの割り当てを 1 つ以上のマシンから削除できます。

前提条件

マシンにホストされているリモート デスクトップのユーザーに、アプリケーションを削除しようとしていることを通知します。

手順

- 1 View Administrator で、[カタログ] - [ThinApp] を選択して、ThinApp アプリケーションの名前をダブルクリックします。
- 2 [割り当て] タブで、マシンを選択し、[割り当ての削除] をクリックします。

Ctrl キーまたは Shift キーを押しながらクリックして、複数のマシンを選択できます。

View Administrator は数分後に ThinApp アプリケーションをアンインストールします。

重要: View Administrator が ThinApp アプリケーションをアンインストールしようとした時点でエンド ユーザーがそのアプリケーションを使用している場合、アンインストールは失敗し、アプリケーションのステータスが Uninstall Error (アンインストール エラー) に変わります。このエラーが発生した場合は、まず ThinApp アプリケーション ファイルをマシンから手動でアンインストールし、次に View Administrator で [デスクトップのアプリ ステータスを削除] をクリックする必要があります。

マシンからの複数の ThinApp アプリケーション割り当ての削除

1 つ以上の ThinApp アプリケーションへの割り当てを特定のマシンから削除できます。

前提条件

マシンでホストされているリモート デスクトップのユーザーに、アプリケーションを削除しようとしていることを通知します。

手順

- 1 View Administrator で、[リソース] - [マシン] を選択し、[マシン] 列のマシン名をダブルクリックします。
- 2 [サマリ] タブで、ThinApp アプリケーションを選択し、ThinApp ペインの [割り当ての削除] をクリックします。

別のアプリケーション割り当てを削除するには、この手順を繰り返します。

View Administrator は数分後に ThinApp アプリケーションをアンインストールします。

重要: View Administrator が ThinApp アプリケーションをアンインストールしようとした時点でエンド ユーザーがそのアプリケーションを使用している場合、アンインストールは失敗し、アプリケーションのステータスが Uninstall Error (アンインストール エラー) に変わります。このエラーが発生した場合は、まず ThinApp アプリケーション ファイルをマシンから手動でアンインストールし、次に View Administrator で [デスクトップのアプリ ステータスを削除] をクリックする必要があります。

複数のデスクトップ プールからの ThinApp アプリケーション割り当ての削除

1 つ以上のデスクトップ プールから、特定の ThinApp アプリケーションへの割り当てを削除できます。

前提条件

プール内のリモート デスクトップのユーザーに、アプリケーションを削除しようとしていることを通知します。

手順

- 1 View Administrator で、[カタログ] - [ThinApps] を選択して、ThinApp アプリケーションの名前をダブルクリックします。
- 2 [割り当て] タブで、デスクトップ プールを選択し、[割り当てを削除] をクリックします。

Ctrl キーまたは Shift キーを押しながらクリックして、複数のデスクトップ プールを選択できます。

ユーザーがそのプール内のリモート デスクトップに初めてログインした際に、View Administrator は ThinApp アプリケーションをアンインストールします。

デスクトップ プールからの複数の ThinApp アプリケーション割り当ての削除

1 つ以上の ThinApp アプリケーション割り当てを特定のデスクトップ プールから削除できます。

前提条件

プール内のリモート デスクトップのユーザーに、アプリケーションを削除しようとしていることを通知します。

手順

- 1 View Administrator で、[カタログ] - [デスクトップ プール] を選択し、プール ID をダブルクリックします。
- 2 [インベントリ] タブで、[ThinApp] をクリックし、ThinApp アプリケーションを選択して、[割り当ての削除] をクリックします。

複数のアプリケーションを削除するには、この手順を繰り返します。

ユーザーがそのプール内のリモート デスクトップに初めてログインしたときに、View Administrator は ThinApp アプリケーションをアンインストールします。

View Administrator からの ThinApp アプリケーションの削除

ThinApp アプリケーションを View Administrator から削除すると、そのアプリケーションをマシンやデスクトップ プールに割り当てることができなくなります。

組織で ThinApp アプリケーションを別のベンダーのアプリケーションに置き換えることを決定した場合は、その ThinApp アプリケーションの削除が必要になることがあります。

注: ThinApp アプリケーションがマシンまたはデスクトップ プールにすでに割り当てられている場合や、アンインストールの保留中状態にある場合は、その ThinApp アプリケーションを削除できません。

前提条件

現在、ThinApp アプリケーションがマシンまたはデスクトップ プールに割り当てられている場合は、そのマシンまたはデスクトップ プールから割り当てを削除します。

手順

- 1 View Administrator で、[カタログ] - [ThinApps] を選択し、ThinApp アプリケーションを選択します。

- 2 [ThinApp の削除] をクリックします。
- 3 [OK] をクリックします。

ThinApp テンプレートの変更または削除

アプリケーションを ThinApp テンプレートに追加したり、ThinApp テンプレートから削除したりできます。また、ThinApp テンプレートを削除することもできます。

ThinApp テンプレートをマシンまたはデスクトップ プールに割り当てた後にそのテンプレートにアプリケーションを追加した場合、View Administrator はその新しいアプリケーションをマシンまたはデスクトップ プールに自動的に割り当てません。以前にマシンまたはデスクトップ プールに割り当てられた ThinApp テンプレートからアプリケーションを削除した場合、そのアプリケーションはマシンまたはデスクトップ プールに割り当てられたままになります。

手順

- ◆ View Administrator で、[カタログ] - [ThinApps] を選択し、ThinApp テンプレートを選択します。

オプション	操作
ThinApp アプリケーションをテンプレートに追加するか、またはテンプレートから削除する	[テンプレートの編集] をクリックします。
テンプレートを削除する	[テンプレートを削除] をクリックします。

アプリケーション リポジトリの削除

アプリケーション リポジトリを View Administrator から削除できます。

アプリケーション リポジトリに格納されている MSI パッケージが必要なくなった場合や、MSI パッケージを別のネットワーク共有に移動する必要がある場合は、アプリケーション リポジトリの削除が必要になることがあります。View Administrator で、アプリケーション リポジトリの共有パスを編集することはできません。

手順

- 1 View Administrator で、[View 構成] - [ThinApp ThinApp 構成] を選択し、アプリケーション リポジトリを選択します。
- 2 [リポジトリを削除] をクリックします。

View Administrator での ThinApp アプリケーションの監視とトラブルシューティング

View Administrator は、ThinApp アプリケーションの管理に関連したイベントをイベントおよびレポート データベースに記録します。これらのイベントは、View Administrator の [イベント] ページで表示できます。

次の状況が発生した場合に、[イベント] ページにイベントが表示されます。

- ThinApp アプリケーションが割り当てられたか、またはアプリケーション割り当てが削除された
- ThinApp アプリケーションがマシンにインストールされたか、またはアンインストールされた

- ThinApp アプリケーションをインストールまたはアンインストールできない
- View Administrator で ThinApp アプリケーション リポジトリが登録、変更、または削除された
- ThinApp アプリケーションが View Administrator に追加された

ThinApp アプリケーションの管理に関する一般的な問題についてのトラブルシューティングのヒントを参照できます。

アプリケーション リポジトリを登録できない

View Administrator にアプリケーション リポジトリを登録できません。

問題

View Administrator でアプリケーション リポジトリを登録しようとすると、エラー メッセージが表示されます。

原因

View 接続サーバ ホストが、アプリケーション リポジトリをホストするネットワーク共有にアクセスできません。
[共有パス] テキスト ボックスに入力したネットワーク共有パスが正しくない可能性があるか、アプリケーション リポジトリをホストするネットワーク共有が View 接続サーバ ホストからアクセスできないドメイン内にあるか、またはネットワーク共有の権限が正しく設定されていません。

- ネットワーク共有パスが正しくない場合は、正しいネットワーク共有パスを入力します。IP アドレスを含むネットワーク共有パスはサポートされていません。
- ネットワーク共有がアクセス可能なドメイン内にない場合、View 接続サーバ ホストからアクセス可能なドメイン内のネットワーク共有にアプリケーション パッケージをコピーします。
- 共有フォルダに対するファイルおよび共有権限によって、ビルトイン Active Directory グループ ドメイン コンピュータに読み取りアクセス権が与えられていることを確認します。ThinApp をドメイン コントローラに割り当てる予定がある場合は、ファイルおよび共有権限によって、ビルトイン Active Directory グループ ドメイン コントローラにも読み取りアクセス権が与えられていることを確認します。権限を設定または変更すると、ネットワーク共有がアクセスできるようになるまで最大 20 分かかることがあります。

ThinApp アプリケーションを View Administrator に追加できない

View Administrator が ThinApp アプリケーションを View Administrator に追加できません。

問題

View Administrator で [新しい ThinApp をスキャン] をクリックしたときに、MSI パッケージが使用できません。

原因

アプリケーション パッケージが MSI 形式でないか、View 接続サーバ ホストがネットワーク共有内のディレクトリにアクセスできないかのどちらかです。

- アプリケーション リポジトリ内のアプリケーション パッケージが MSI 形式であることを確認します。
- ネットワーク共有が、ThinApp アプリケーションの View 要件を満たしていることを確認します。詳細については、[ThinApp アプリケーションに対する View の要件](#)を参照してください。

- ネットワーク共有内のディレクトリが正しい権限を持つことを確認します。詳細については、[アプリケーション リポジトリを登録できない](#)を参照してください。

アプリケーション リポジトリのスキャン時に、View 接続サーバ デバッグ ログ ファイルにメッセージが表示されます。View 接続サーバ ログ ファイルは View 接続サーバ ホストの `ドライブ:¥Documents and Settings¥All Users¥Application Data¥VMware¥VDM¥logs` ディレクトリにあります。

ThinApp テンプレートを割り当てることができない

ThinApp テンプレートをマシンまたはデスクトップ プールに割り当てることができません。

問題

ThinApp テンプレートをマシンまたはデスクトップ プールに割り当てようとすると、View Administrator が割り当てエラーを返します。

原因

マシンまたはデスクトップ プールにすでに割り当てられているアプリケーションが ThinApp テンプレートに含まれているか、または以前に別のインストール タイプを使用して ThinApp テンプレートがマシンまたはデスクトップ プールに割り当てられています。

マシンまたはデスクトップ プールにすでに割り当てられている ThinApp アプリケーションがテンプレートに含まれている場合は、そのアプリケーションが含まれていない新しいテンプレートを作成するか、または既存のテンプレートを編集してそのアプリケーションを削除します。新しいテンプレートまたは変更されたテンプレートをマシンまたはデスクトップ プールに割り当てます。

ThinApp アプリケーションのインストール タイプを変更するには、既存のアプリケーションの割り当てをマシンまたはデスクトップ プールから削除する必要があります。ThinApp アプリケーションがアンインストールされた後、別のインストール タイプを使用してそのアプリケーションをマシンまたはデスクトップ プールに割り当てることができます。

ThinApp アプリケーションがインストールされない

View Administrator が ThinApp アプリケーションをインストールできません。

問題

ThinApp アプリケーションのインストール ステータスに、Pending Install（インストールの保留中）または Install Error（インストール エラー）が表示されます。

原因

この問題の一般的な原因には次のようなものがあります。

- マシン上に、ThinApp アプリケーションをインストールするための十分なディスク領域がなかった。
- View 接続サーバ ホストとマシン間または View 接続サーバ ホストとアプリケーション リポジトリ間のネットワーク接続が切断されている。
- ネットワーク共有内で ThinApp アプリケーションにアクセスできなかった。

- ThinApp アプリケーションが以前にインストールされたか、ディレクトリまたはファイルがすでにマシン上に存在する。

問題の原因に関する詳細は、Horizon Agent と View 接続サーバのログ ファイルで参照できます。

Horizon Agent ログ ファイルは、マシンの *drive*:\ProgramData\VMware\VDM\logs にあります。

View 接続サーバ ログ ファイルは View 接続サーバ ホストの *ドライブ*:\Documents and Settings\All Users\Application Data\VMware\VDM\logs ディレクトリにあります。

解決方法

- 1 View Administrator で、[カタログ] - [ThinApp] を選択します。
- 2 ThinApp アプリケーションの名前をクリックします。
- 3 [マシン] タブで、マシンを選択し、[インストールを再試行] をクリックして ThinApp アプリケーションを再インストールします。

ThinApp アプリケーションがアンインストールされない

View Administrator で ThinApp アプリケーションをアンインストールできません。

問題

ThinApp アプリケーションのインストール ステータスに、Uninstall Error (アンインストール エラー) と表示されます。

原因

このエラーの一般的な原因には次のようなものがあります。

- View Administrator がアンインストールしようとしたときに、ThinApp アプリケーションがビジー状態だった。
- View 接続サーバ ホストとマシン間のネットワーク接続が切断されている。

問題の原因に関する詳細は、Horizon Agent と View 接続サーバのログ ファイルで参照できます。

Horizon Agent ログ ファイルは、マシンの *drive*:\Documents and Settings\All Users\Application Data\VMware\VDM\logs (Windows XP システムの場合) または *drive*:\ProgramData\VMware\VDM\logs (Windows 7 システムの場合) にあります。

View 接続サーバ ログ ファイルは View 接続サーバ ホストの *ドライブ*:\Documents and Settings\All Users\Application Data\VMware\VDM\logs ディレクトリにあります。

解決方法

- 1 View Administrator で、[カタログ] - [ThinApp] を選択します。
- 2 ThinApp アプリケーションの名前をクリックします。
- 3 [マシン] タブをクリックし、マシンを選択し、[インストールを再試行] をクリックしてアンインストール操作を再試行します。

- 4 アンインストール操作が依然として失敗する場合は、ThinApp アプリケーションをマシンから手動で削除し、[デスクトップのアプリ ステータスを削除] をクリックします。

このコマンドによって、View Administrator での ThinApp アプリケーション割り当てが解除されます。マシン内のファイルや設定は削除されません。

重要: このコマンドは、ThinApp アプリケーションをマシンから手動で削除した後にのみ使用してください。

MSI パッケージが無効

View Administrator が、アプリケーション リポジトリ内の無効な MSI パッケージを報告します。

問題

View Administrator が、スキャン操作中に MSI パッケージが無効であることを報告します。

原因

この問題の一般的な原因には次のようなものがあります。

- MSI ファイルが破損している。
- MSI ファイルが ThinApp によって作成されていない。
- MSI ファイルがサポートされていないバージョンの ThinApp で作成または再パッケージ化されている。
ThinApp バージョン 4.6 以降を使用する必要があります。

MSI パッケージに関する問題のトラブルシューティングについては、『ThinApp ユーザーズ ガイド』を参照してください。

ThinApp 構成例

ThinApp 構成例では、アプリケーションのキャプチャとパッケージ化から、インストールのステータスの確認までの標準的な ThinApp 構成を順に実行します。

前提条件

この例にある手順の実行方法の詳細については、次のトピックを参照してください。

- [アプリケーション パッケージのキャプチャと格納](#)
- [マシンまたはデスクトップ プールへの ThinApp アプリケーションの割り当て](#)

手順

手順

- 1 <http://www.vmware.com/products/thinapp> から ThinApp ソフトウェアをダウンロードし、それをクリーンなコンピュータにインストールします。

View は ThinApp バージョン 4.6 以降をサポートしています。

- 2 ThinApp [セットアップ キャプチャ] ウィザードを使用して、アプリケーションをキャプチャし、MSI 形式でパッケージ化します。
- 3 View 接続サーバ ホストとリモート デスクトップの両方にアクセス可能な Active Directory ドメイン内のコンピュータ上に共有フォルダを作成し、その共有フォルダに対するファイルおよび共有権限を構成して、ビルトイン Active Directory グループ ドメイン コンピュータに読み取りアクセス権を与えます。

ThinApp アプリケーションをドメイン コントローラに割り当てる予定がある場合は、ビルトイン Active Directory グループ ドメイン コントローラにも読み取りアクセス権を与えます。

- 4 MSI パッケージを共有フォルダにコピーします。
- 5 View Administrator で、共有フォルダをアプリケーション リポジトリとして登録します。
- 6 View Administrator で、アプリケーション リポジトリ内の MSI パッケージをスキャンし、選択した ThinApp アプリケーションを View Administrator に追加します。
- 7 ThinApp アプリケーションをマシンまたはデスクトップ プールに割り当てるかどうかを決定します。

マシンに共通する命名規則を使用すると、マシン割り当てを使用して、その命名規則を使用するすべてのマシンにアプリケーションを素早く配布することができます。デスクトップ プールを部門またはユーザーの種類ごとに構成すると、デスクトップ プール割り当てを使用して、特定の部門またはユーザーにアプリケーションを素早く配布することができます。

- 8 View Administrator で、マシンまたはデスクトップ プールに割り当てる ThinApp アプリケーションを選択し、インストール方法を指定します。

オプション	操作
ストリーミング	マシンにアプリケーションへのショートカットをインストールします。このショートカットは、リポジトリをホストするネットワーク共有上のアプリケーションを参照します。アプリケーションを実行するには、ユーザーがそのネットワーク共有にアクセスできる必要があります。
フル	マシンのローカル ファイル システムにアプリケーション全体をインストールします。

- 9 View Administrator で、ThinApp アプリケーションのインストール ステータスを確認します。

キオスク モードのクライアントの設定

13

View からクライアントのデスクトップへのアクセス権を取得できる無人クライアントを設定できます。

キオスク モードのクライアントは、Horizon Client を実行して View 接続サーバ インスタンスに接続し、リモート セッションを起動するシン クライアントまたはロックダウン PC です。エンド ユーザーは通常、ログインしなくてもクライアント デバイスにアクセスできますが、リモート デスクトップの一部のアプリケーションではエンド ユーザーに認証情報の入力を要求する場合があります。利用例には、医療データ入力ワークステーション、空港のチェックイン ステーション、顧客によるセルフサービス ポイント、公共の情報端末などがあります。

安全なトランザクションのための認証メカニズムをデスクトップ アプリケーションで実装し、物理ネットワークを改ざんや傍受から保護し、信頼されたデバイスのみがネットワークに接続するようにする必要があります。

キオスク モードのクライアントは、リモート セッションへの USB デバイス自動リダイレクトやロケーションベースの印刷など、リモート アクセスのための標準機能をサポートします。

View では、View 4.5 以降のフレキシブル認証機能を使用して、エンド ユーザーではなくキオスク モードのクライアント デバイスを認証します。MAC アドレスによって、または文字列「custom-」もしくは ADAM で定義した別のプレフィックス文字列で始まるユーザー名によって身元を識別するクライアントを認証するように View 接続サーバ インスタンスを構成できます。自動生成パスワードが付与されるようにクライアントを構成する場合は、デバイス上でパスワードを指定しなくても Horizon Client を実行できます。明示的パスワードを構成する場合は、このパスワードを Horizon Client に対して指定する必要があります。Horizon Client は通常はスクリプトから実行し、パスワードはスクリプトに平文で記述されるため、権限のないユーザーがスクリプトの内容を読めないようにする対策を講じる必要があります。

文字列「cm-」で始まり MAC アドレスが続くアカウント名、または、文字列「custom-」もしくは定義した別の文字列で始まるアカウント名を使った接続を受け付けることができるのは、キオスク モードのクライアントを認証できるように構成された View 接続サーバ インスタンスだけです。View 4.5 以降の Horizon Client では、これらの形式のユーザー名を手動で入力することはできません。

ベスト プラクティスとして、専用の View 接続サーバ インスタンスを使用してキオスク モードのクライアントを処理し、これらのクライアントのアカウントのために専用の組織単位およびグループを Active Directory に作成することをお勧めします。この方法により、これらのシステムが不正な侵入から保護されるだけでなく、クライアントの構成および管理が容易になります。

この章には、次のトピックが含まれています。

- キオスク モードのクライアントの構成

キオスク モードのクライアントの構成

キオスク モードのクライアントをサポートするように Active Directory および View を構成するには、いくつかのタスクを順に実行する必要があります。

前提条件

構成タスクを実行するために必要な権限があることを確認します。

- Domain Admins または Account Operators の認証情報。ドメイン内のユーザーおよびグループのアカウントに変更を加えるための Active Directory の認証情報です。
- 管理者、インベントリ管理者、またはこれらと同等のロール。View Administrator を使用して、リモート デスクトップを使用する資格をユーザーまたはグループに付与するために必要です。
- 管理者または同等のロール。vdmadmin コマンドを実行するために必要です。

手順

1 キオスク モードのクライアントのための Active Directory および View の準備

クライアント デバイスを認証するために作成するアカウントを受け入れるように Active Directory を構成する必要があります。グループを作成するときは常に、クライアントがアクセスするデスクトップ プールに対する資格をそのグループに付与する必要があります。クライアントが使用するデスクトップ プールを準備することもできます。

2 キオスク モードのクライアントに対するデフォルト値の設定

vdmadmin コマンドを使用して、キオスク モードのクライアントに対する組織単位、パスワード有効期限、および Active Directory グループ メンバーシップのデフォルト値を設定できます。

3 クライアント デバイスの MAC アドレスの表示

クライアントに対してその MAC アドレスに基づいたアカウントを作成する場合は、Horizon Client を使用して、クライアント デバイスの MAC アドレスを調べることができます。

4 キオスク モードのクライアント用アカウントの追加

vdmadmin コマンドを使用して、View 接続サーバ グループの構成にクライアントのアカウントを追加できます。クライアントを追加すると、クライアントの認証を有効にした View 接続サーバ インスタンスでそのクライアントを使用できるようになります。クライアントの構成を更新したり、クライアントのアカウントをシステムから削除することもできます。

5 キオスク モードのクライアントの認証の有効化

vdmadmin コマンドを使用して、View 接続サーバ インスタンス経由でクライアントのリモート デスクトップに接続しようとするクライアントの認証を有効にすることができます。

6 キオスク モードのクライアントの構成の確認

vdmadmin コマンドを使用すると、キオスク モードのクライアントや、そのようなクライアントを認証するように構成されている View 接続サーバ インスタンスについての情報を表示できます。

7 キオスク モードのクライアントからリモート デスクトップへの接続

コマンド ラインからクライアントを実行するか、またはスクリプトを使用して、クライアントをリモート セッションに接続することができます。

キオスク モードのクライアントのための Active Directory および View の準備

クライアント デバイスを認証するために作成するアカウントを受け入れるように Active Directory を構成する必要があります。グループを作成するときは常に、クライアントがアクセスするデスクトップ プールに対する資格をそのグループに付与する必要があります。クライアントが使用するデスクトップ プールを準備することもできます。

ベスト プラクティスとして、キオスク モードのクライアントの管理作業を最小限に抑えるために、そのようなクライアント用の独立した組織単位とグループを作成することをお勧めします。どのグループにも属さないクライアントのために個別のアカウントを追加できますが、この方法では、構成するクライアントの数が多くなってくると管理面のオーバーヘッドが大きくなります。

手順

- 1 Active Directory で、キオスク モードのクライアントのために使用する独立した組織単位およびグループを作成します。

グループには Windows 2000 以前の形式の名前を指定する必要があります。この名前は、vdmadmin コマンドでグループを識別するために使用します。

- 2 ゲスト仮想マシンのイメージまたはテンプレートを作成します。

vCenter Server によって管理される仮想マシンを自動プールのテンプレート、リンク クローン プールの親、または手動デスクトップ プールの仮想マシンとして使用できます。ゲスト OS にアプリケーションをインストールして構成することもできます。

- 3 無人状態が続いたときにクライアントがロックされないようにゲスト OS を構成します。

キオスク モードで接続するクライアントのログイン前メッセージは View により表示されません。画面のロックを解除して、メッセージを表示するイベントが必要な場合は、ゲスト OS で適切なアプリケーションを構成できます。

- 4 View Administrator で、クライアントが使用するデスクトップ プールを作成し、このプールに対する資格をグループに付与します。

たとえば、クライアント アプリケーションの要件に最も適したプールとして、流動割り当てのリンク クローン デスクトップ プールを作成することができます。1 つ以上の ThinApp アプリケーションをデスクトップ プールと関連付けることもできます。

重要: 1 つのクライアントまたはグループに、2 つ以上のデスクトップ プールに対する資格を付与しないでください。そのようにすると、View はクライアントが資格のあるプールの中から無作為にリモート デスクトップを割り当てて、警告イベントを発生させます。

- 5 クライアントに対しロケーションベースの印刷を有効にするには、Active Directory グループ ポリシー設定 AutoConnect Location-based Printing for VMware View を構成します。この設定は、Microsoft グループ ポリシー オブジェクト エディタの Computer Configuration の下の Software Settings フォルダにあります。

- 6 最適化する必要があるその他のポリシーを構成し、クライアントのリモート デスクトップのセキュリティを設定します。

たとえば、デスクトップの起動時またはデバイスをプラグインしたときにローカル USB デバイスをリモート デスクトップに接続するポリシーをオーバーライドします。Windows 用 Horizon Client のデフォルトでは、キオスク モードのクライアントに対してこれらのポリシーが有効です。

例：キオスク モードのクライアントのための Active Directory の準備

ある企業のイントラネットに MYORG というドメインがあり、この企業の組織単位の識別名が OU=myorg-ou,DC=myorg,DC=com であるとします。Active Directory で、組織単位 kiosk-ou（識別名は OU=kiosk-ou,DC=myorg,DC=com）とグループ kc-grp を作成して、キオスク モードのクライアント用にこれらを使用できます。

次のステップ

クライアントに関するデフォルト値を設定します。

キオスク モードのクライアントに対するデフォルト値の設定

vdadmin コマンドを使用して、キオスク モードのクライアントに対する組織単位、パスワード有効期限、および Active Directory グループ メンバーシップのデフォルト値を設定できます。

vdadmin コマンドは、クライアントがリモート デスクトップへの接続用に使用する View 接続サーバインスタンスと同じグループに属するいずれかの View 接続サーバ インスタンスで実行する必要があります。

パスワード有効期限および Active Directory グループ メンバーシップのデフォルト値を構成すると、これらの設定は同じグループに属するすべての View 接続サーバ インスタンス間で共有されます。

手順

- ◆ クライアントに対するデフォルト値を設定します。

```
vdadmin
-Q
-clientauth
-setdefaults [-b authentication_arguments] [-ouDN] [ -expirepassword | -noexpirepassword ]
[-groupgroup_name | -nogroup]
```

オプション	説明
-expirepassword	クライアント アカウントのパスワード有効期限を View 接続サーバ グループと同じ有効期限にするように指定します。グループでパスワード有効期限が定義されていない場合、パスワードは無期限になります。
-group group_name	クライアント アカウントを追加するデフォルト グループの名前を指定します。グループの名前は、Active Directory の Windows 2000 以前のグループ名として指定する必要があります。
-noexpirepassword	クライアント アカウントのパスワードを無期限にすることを指定します。

オプション	説明
-nogroup	デフォルト グループの設定をクリアします。
-ou DN	クライアント アカウントを追加するデフォルト組織単位の識別名を指定します。 例 : OU=kiosk-ou,DC=myorg,DC=com
	注: このコマンドを使用して組織単位の構成を変更することはできません。

このコマンドは、View 接続サーバ グループ内のクライアントのデフォルト値を更新します。

例：キオスク モードのクライアントに対するデフォルト値の設定

クライアントの組織単位、パスワード有効期限、およびグループ メンバーシップのデフォルト値を設定します。

```
vdadmin -Q -clientauth -setdefaults -ou "OU=kiosk-ou,DC=myorg,DC=com" -noexpirepassword -group kc-grp
```

次のステップ

MAC アドレスを認証に使用するクライアント デバイスの MAC アドレスを調べます。

クライアント デバイスの MAC アドレスの表示

クライアントに対してその MAC アドレスに基づいたアカウントを作成する場合は、Horizon Client を使用して、クライアント デバイスの MAC アドレスを調べることができます。

前提条件

クライアントのコンソールにログインします。

手順

- ◆ MAC アドレスを表示するには、プラットフォームに応じて適切なコマンドを入力します。

オプション	操作
Windows	<p>C:\Program Files (x86)\VMware\VMware Horizon View Client\vmware-view.exe -printEnvironmentInfo と入力します</p> <p>クライアントに対して構成したデフォルトの View 接続サーバ インスタンスが使用されます。デフォルト値を構成していない場合、クライアントから値の入力を求められます。</p> <p>このコマンドはクライアント デバイスの IP アドレス、MAC アドレス、およびマシン名を表示します。</p>
Linux	<p>次のコマンドを入力します。</p> <p>vmware-view --printEnvironmentInfo -s connection_server</p> <p>クライアントがデスクトップへの接続に使用する View 接続サーバ インスタンスの IP アドレスまたは FQDN を指定する必要があります。</p> <p>このコマンドは、クライアント デバイスの IP アドレス、MAC アドレス、マシン名、ドメイン、ログインしているユーザーの名前とドメイン、およびタイム ゾーンを表示します。</p>

次のステップ

クライアントのアカウントを追加します。

キオスク モードのクライアント用アカウントの追加

vdmadmin コマンドを使用して、View 接続サーバ グループの構成にクライアントのアカウントを追加できます。クライアントを追加すると、クライアントの認証を有効にした View 接続サーバ インスタンスでそのクライアントを使用できるようになります。クライアントの構成を更新したり、クライアントのアカウントをシステムから削除することもできます。

vdmadmin コマンドは、クライアントがリモート デスクトップへの接続用に使用する View 接続サーバ インスタンスと同じグループに属するいずれかの View 接続サーバ インスタンスで実行する必要があります。

キオスク モードのクライアントを追加すると、View はそのクライアントのユーザー アカウントを Active Directory に作成します。クライアントの名前を指定する場合は、「custom-」などのわかりやすいプレフィックス文字列または ADAM 内で定義した代替プレフィックス文字列で始まる 20 文字以内の名前にする必要があります。クライアントの名前を指定しない場合、View はクライアント デバイス用に指定した MAC アドレスから名前を生成します。たとえば、MAC アドレスが 00:10:db:ee:76:80 の場合、対応するアカウント名は cm-00_10_db_ee_76_80 です。この形式のアカウント名は、クライアントの認証を有効にした View 接続サーバ インスタンスでのみ使用できます。

重要: 同じ名前を複数のクライアント デバイスに使用しないでください。将来のリリースではこの構成がサポートされない可能性があります。

手順

- ◆ クライアントのドメインと名前または MAC アドレスを指定するには、`-domain` および `-clientid` オプションを使用して `vdmadmin` コマンドを実行します。

```
vdmadmin
-Q
-clientauth
-add [-bauthentication_arguments] -domaindomain_name-clientidclient_id [-password
"password" | -genpassword] [-ouDN] [-expirepassword | -noexpirepassword] [-groupgroup_name | -nogroup]
[-description "description_text"]
```

オプション	説明
<code>-clientid client_id</code>	クライアントの名前または MAC アドレスを指定します。
<code>-description "description_text"</code>	クライアント デバイスのアカウントの説明を Active Directory に作成します。
<code>-domain domain_name</code>	クライアントのドメインを指定します。
<code>-expirepassword</code>	クライアント アカウントのパスワード有効期限を、View 接続サーバ グループのパスワード有効期限と同じにすることを指定します。グループでパスワード有効期限が定義されていない場合、パスワードは無期限になります。
<code>-genpassword</code>	クライアント アカウントのパスワードを生成します。これは、 <code>-password</code> も <code>-genpassword</code> も指定しない場合のデフォルトの動作です。 生成されるパスワードは長さが 16 文字で、英大文字、英小文字、記号、および数字をそれぞれ 1 つ以上含み、同じ文字を繰り返し含めることができます。より強力なパスワードが必要な場合は、 <code>-password</code> オプションを使用してパスワードを指定します。

オプション	説明
-group <i>group_name</i>	クライアント アカウントを追加するグループの名前を指定します。グループの名前は、Active Directory の Windows 2000 以前のグループ名として指定する必要があります。以前にデフォルトのグループを設定した場合、クライアント アカウントはこのグループに追加されます。
-noexpirepassword	クライアント アカウントのパスワードを無期限にすることを指定します。
-nogroup	クライアント アカウントをデフォルトのグループに追加しないことを指定します。
-ou <i>DN</i>	クライアント アカウントを追加する組織単位の識別名を指定します。 例 : OU=kiosk-ou,DC=myorg,DC=com
-password "<i>password</i>"	クライアント アカウントの明示的パスワードを指定します。

コマンドを実行すると、クライアントの Active Directory ユーザー アカウントが、指定されたドメインおよびグループ（ある場合）内に作成されます。

例：クライアントのアカウントの追加

MAC アドレスで指定されたクライアントのアカウントを MYORG ドメインに追加します（グループ kc-grp のデフォルト設定を使用）。

```
vdadmin -Q -clientauth -add -domain MYORG -clientid 00:10:db:ee:76:80 -group kc-grp
```

MAC アドレスで指定されたクライアントのアカウントを MYORG ドメインに追加します（自動生成されたパスワードを使用）。

```
vdadmin -Q -clientauth -add -domain MYORG -clientid 00:10:db:ee:76:80 -genpassword
```

クライアントの名前を指定してアカウントを追加し、そのクライアントで使用するパスワードを指定します。

```
vdadmin -Q -clientauth -add -domain MYORG -clientid custom-Terminal21 -password "guest" -ou "OU=kiosk-ou,DC=myorg,DC=com" -description "Terminal 21"
```

クライアントの名前を指定してアカウントを追加します（自動生成されたパスワードを使用）。

```
vdadmin -Q -clientauth -add -domain MYORG -clientid custom-Kiosk11 -genpassword -ou "OU=kiosk-ou,DC=myorg,DC=com" -description "Kiosk 11"
```

次のステップ

クライアントの認証を有効にします。

キオスク モードのクライアントの認証の有効化

vdadmin コマンドを使用して、View 接続サーバ インスタンス経由でクライアントのリモート デスクトップに接続しようとするクライアントの認証を有効にすることができます。

vdadmin コマンドは、クライアントがリモート デスクトップへの接続用に使用する View 接続サーバ インスタンスと同じグループに属するいずれかの View 接続サーバ インスタンスで実行する必要があります。

個別の View 接続サーバインスタンスに対して認証を有効化できますが、グループ内のすべての View 接続サーバインスタンスがクライアント認証に関する他のすべての設定を共有します。クライアントのアカウントの追加が必要なのは 1 回だけです。View 接続サーバグループ内で、認証が有効されたすべての View 接続サーバインスタンスがクライアントを認証できます。

RDS ホスト上のセッションベースの View デスクトップでキオスクモードを使用する予定の場合、Remote Desktop User グループにユーザーアカウントを追加する必要があります。

手順

- 1 View 接続サーバインスタンス上でクライアントの認証を有効化します。

```
vdmadmin
-Q
-enable [-bauthentication_arguments] -sconnection_server [-requirepassword]
```

オプション	説明
-requirepassword	パスワードの入力をクライアントに要求することを指定します。 重要: このオプションを指定した場合、View 接続サーバインスタンスは自動生成されたパスワードを使用するクライアントを認証できません。View 接続サーバインスタンスの構成を変更してこのオプションを指定すると、そのようなクライアントは認証されず、「Unknown username or bad password (不明なユーザー名または不正なパスワード)」というエラーメッセージが表示されて認証に失敗します。
-s connection_server	クライアントの認証を有効にする View 接続サーバインスタンスの NetBIOS 名を指定します。

コマンドを実行すると、指定した View 接続サーバインスタンスによるクライアントの認証が有効になります。

- 2 Microsoft RDS ホストによりリモート デスクトップが提供される場合、RDS ホストにログインし、Remote Desktop User グループにユーザーアカウントを追加します。

たとえば、View server でユーザーアカウント custom-11 に、RDS ホスト上のセッションベースの View デスクトップへの資格を付与するとします。この場合、RDS ホストにログインし、[コントロール パネル] - [システムとセキュリティ] - [システム] - [リモートの設定] - [ユーザーの選択] - [追加] を順に選択して、ユーザー custom-11 を Remote Desktop User グループに追加する必要があります。

例：キオスクモードのクライアントの認証の有効化

View 接続サーバインスタンス csvr-2 に対しクライアントの認証を有効にします。自動生成されたパスワードを使用するクライアントは、パスワードを入力しなくても認証されます。

```
vdmadmin -Q -enable -s csvr-2
```

View 接続サーバインスタンス csvr-3 に対しクライアントの認証を有効にして、パスワードを Horizon Client に指定するようクライアントに要求します。自動生成されたパスワードを使用するクライアントは認証されません。

```
vdmadmin -Q -enable -s csvr-3 -requirepassword
```

次のステップ

View 接続サーバ インスタンスおよびクライアントの構成を確認します。

キオスク モードのクライアントの構成の確認

vdadmin コマンドを使用すると、キオスク モードのクライアントや、そのようなクライアントを認証するように構成されている View 接続サーバ インスタンスについての情報を表示できます。

vdadmin コマンドは、クライアントがリモート デスクトップへの接続用に使用する View 接続サーバ インスタンスと同じグループに属するいずれかの View 接続サーバ インスタンスで実行する必要があります。

手順

- ◆ キオスク モードのクライアントおよびクライアント認証についての情報を表示します。

```
vdadmin
-Q
-clientauth
-list [-b authentication_arguments] [-xml]
```

このコマンドは、キオスク モードのクライアントと、クライアント認証を有効にした View 接続サーバ インスタンスについての情報を表示します。

例：キオスク モードのクライアントに関する情報の表示

クライアントについての情報をテキスト形式で表示します。クライアント cm-00_0c_29_0d_a3_e6 のパスワードは自動生成されており、エンド ユーザーまたはアプリケーション スクリプトにはこのパスワードを Horizon Client に指定する必要はありません。クライアント cm-00_22_19_12_6d_cf のパスワードは明示的に指定されており、エンド ユーザーはこのパスワードを入力する必要があります。View 接続サーバ インスタンス CONSVR2 は、自動生成されたパスワードを使用するクライアントからの認証要求を受け付けます。CONSVR1 は、キオスク モードのクライアントからの認証要求を受け付けません。

```
C:\> vdadmin -Q -clientauth -list
Client Authentication User List
=====
GUID                :94be6344-0c9b-4a92-8d54-1brc1c2dc282
ClientID            :cm-00_0c_29_0d_a3_e6
Domain              :myorg.com
Password Generated:true

GUID                :471d9d35-68b2-40ee-b693-56a7d92b2e25
ClientID            :cm-00_22_19_12_6d_cf
Domain              :myorg.com
Password Generated:false

Client Authentication Connection Servers
=====
Common Name         :CONSVR1
Client Authentication Enabled :false
Password Required    :false
```

Common Name	:CONSVR2
Client Authentication Enabled	:true
Password Required	:false

次のステップ

クライアントがそのリモート デスクトップに接続できることを確認します。

キオスク モードのクライアントからリモート デスクトップへの接続

コマンド ラインからクライアントを実行するか、またはスクリプトを使用して、クライアントをリモート セッションに接続することができます。

展開先のクライアント デバイス上で Horizon Client を実行するには通常、コマンド スクリプトを使用します。

注: Windows または Mac クライアントで、リモート デスクトップ セッションの開始時にクライアント上の USB デバイスが別のアプリケーションまたはサービスで使用されている場合、デフォルトではそれらのデバイスは自動転送されません。すべてのクライアントで、ヒューマン インターフェイス デバイス (HID) およびスマート カード リーダーはデフォルトでは転送されません。

手順

- ◆ リモート セッションに接続するには、プラットフォームに応じて適切なコマンドを入力します。

オプション	説明
Windows	<p>次のコマンドを入力します。</p> <pre>C:\Program Files (x86)\VMware\VMware Horizon View Client\vmware-view.exe -unattended [-serverURL <i>connection_server</i>] [-userName <i>user_name</i>] [-password <i>password</i>]</pre> <p>-password<i>password</i> クライアント アカウントのパスワードを指定します。アカウントにパスワードを定義した場合は、このパスワードを指定する必要があります。</p> <p>-serverURL<i>connection_server</i> Horizon Client がそのリモート デスクトップに接続するために使用する View 接続サーバインスタンスの IP アドレスまたは FQDN を指定します。クライアントがそのリモート デスクトップへの接続に使用する View 接続サーバインスタンスの IP アドレスまたは FQDN を指定しない場合、クライアント用に構成したデフォルトの View 接続サーバインスタンスが使用されます。</p> <p>-userName<i>user_name</i> クライアント アカウントの名前を指定します。クライアントの MAC アドレスを使用せずに、「custom-」などのわかりやすいプレフィックス文字列で始まるアカウント名を使用してクライアントを認証する場合は、この名前を指定する必要があります。</p>
Linux	<p>次のコマンドを入力します。</p> <pre>vmware-view --unattended -s <i>connection_server</i> [--once] [-u <i>user_name</i>] [-p <i>password</i>]</pre> <p>--once エラーが発生した場合に Horizon Client が接続を再試行しないことを指定します。</p> <p>重要: 通常はこのオプションを指定し、終了コードを使ってエラーを処理することをお勧めします。指定しない場合、vmware-view プロセスをリモートから強制終了することが難しい場合があります。</p> <p>-p<i>password</i> クライアント アカウントのパスワードを指定します。アカウントにパスワードを定義した場合は、このパスワードを指定する必要があります。</p> <p>-s<i>connection_server</i> クライアントがそのデスクトップへの接続に使用する View 接続サーバインスタンスの IP アドレスまたは FQDN を指定します。</p> <p>-u<i>user_name</i> クライアント アカウントの名前を指定します。クライアントの MAC アドレスを使用せずに、「custom-」などのわかりやすいプレフィックス文字列で始まるアカウント名を使用してクライアントを認証する場合は、この名前を指定する必要があります。</p>

サーバがキオスク クライアントを認証し、リモート デスクトップが利用可能であれば、リモート セッションが開始されます。

例：キオスク モードのクライアント上での Horizon Client の実行

アカウント名がクライアントの MAC アドレスに基づいており、自動生成パスワードを使用する Windows クライアント上で Horizon Client を実行します。

```
C:\Program Files (x86)\VMware\VMware Horizon View Client\vmware-view.exe -unattended -serverURL  
consvr2.myorg.com
```

割り当てられた名前およびパスワードを使用する Linux クライアント上で Horizon Client を実行します。

```
vmware-view -unattended -s 145.124.24.100 --once -u custom-Terminal21 -p "Secret1!"
```

View のトラブルシューティング

View の使用中に発生する可能性のある問題を診断および解決するために、さまざまな手順を使用できます。トラブルシューティングの手順を使用して問題の原因を調べ、解決を試みることも、VMware のテクニカル サポートから支援を受けることもできます。

デスクトップおよびデスクトップ プールのトラブルシューティングについては、「View でのデスクトップ プールおよびアプリケーション プールの設定」を参照してください。

この章には、次のトピックが含まれています。

- システム健全性の監視
- View でのイベントの監視
- View の診断情報の収集
- サポート要求の更新
- セキュリティ サーバと View 接続サーバのペアリングの失敗のトラブルシューティング
- View Server の証明書失効チェックのトラブルシューティング
- スマート カードでの証明書失効チェックのトラブルシューティング
- トラブルシューティングの追加情報

システム健全性の監視

View Administrator のシステム健全性ダッシュボードを使用すると、View の動作またはエンド ユーザーによるリモート デスクトップへのアクセスに影響を及ぼす可能性のある問題を素早く調べることができます。

View Administrator の表示の左上にあるシステム健全性ダッシュボードには、View の動作に関するレポートを表示するために使用できるリンクがいくつかあります。

セッション	[セッション] 画面へのリンクを提供します。この画面には、リモート デスクトップおよびアプリケーション セッションのステータスに関する情報が表示されます。
問題のある vCenter 仮想マシン	[マシン] 画面へのリンクを提供します。この画面には、View が問題があるとフラグ付けした vCenter 仮想マシン、RDS ホスト、その他のマシンに関する情報が表示されます。
問題のある RDS ホスト	[マシン] 画面の [RDS ホスト] タブへのリンクを提供します。このタブには、View が問題があるとフラグ付けした RDS ホストに関する情報が表示されます。

イベント	エラー イベントおよび警告イベントを表示するようにフィルタ処理された Events (イベント) 画面へのリンクを提供します。
システムの健全性	[ダッシュボード] 画面へのリンクを提供します。この画面には、View コンポーネント、vSphere コンポーネント、ドメイン、デスクトップのステータス、およびデータストア使用量の概要が表示されます。

システム健全性ダッシュボードには、各項目に対して番号付きのリンクが表示されます。この番号は、リンク先のレポートによって詳細情報が提供される項目の数を示します。

View でのイベントの監視

イベント データベースは、View 接続サーバ ホストまたはグループ、Horizon Agent、および View Administrator で発生したイベントの情報を格納し、ダッシュボードでイベントの数をユーザーに通知します。Events (イベント) 画面でイベントの詳細を調べることができます。

注: イベントは、一定の時間、View Administrator インターフェイスに一覧表示されます。この時間が経過すると、イベントは履歴データベース テーブルにのみ表示されます。データベース テーブル内のイベントを調べるには、Microsoft SQL Server または Oracle データベース レポート ツールを使用できます。詳細については、『VMware View の統合』を参照してください。

View Administrator でのイベントの監視に加えて、イベント データが分析ソフトウェアからアクセスできるように、View イベントを Syslog 形式で生成できます。[「オプションを使用した Syslog 形式での View イベント ログ メッセージの生成」](#)および『View のインストール』の「Syslog サーバのイベント ログを構成する」を参照してください。

前提条件

イベント データベースを作成し、構成します。『View のインストール』を参照してください。

手順

- 1 View Administrator で、[監視] - [イベント] を選択します。
- 2 (オプション) Events (イベント) ウィンドウでは、イベントの時間範囲を選択し、イベントにフィルタ処理を適用し、一覧表示されたイベントを 1 つ以上の列によって並べ替えることができます。

View イベント メッセージ

View では、システムの状態が変更されるか、システムに問題が発生した場合は、常にイベントが報告されます。これらのイベント メッセージの情報をを使用して、適切な処置を取ることができます。

[表 14-1. View が報告するイベントのタイプ](#)に、View が報告するイベントのタイプを表示します。

表 14-1. View が報告するイベントのタイプ

イベントのタイプ	説明
監査失敗または監査成功	管理者またはユーザーが View の動作または構成に対して行った変更の成否を報告します。
エラー	失敗した View の動作を報告します。

イベントのタイプ	説明
情報	View 内の正常な動作を報告します。
警告	時間の経過とともにより深刻な問題を引き起こす可能性がある、動作または構成設定の小さな問題を報告します。

監査失敗、エラー、または警告イベントに関連付けられたメッセージが表示された場合は、何らかの処置が必要になることがあります。監査成功または情報イベントについては、処置は必要ありません。

View の診断情報の収集

VMware のテクニカル サポートが View の問題を診断して解決する際に役立つ診断情報を収集できます。

View の各種コンポーネントから診断情報を収集できます。この情報の収集方法は、View のコンポーネントによって異なります。

■ [Horizon Agent 用のデータ収集ツール バンドルの作成](#)

VMware のテクニカル サポートによる Horizon Agent のトラブルシューティングを支援するため、`vdadmin` コマンドを使用してデータ収集ツール (DCT) バンドルを作成することが必要になる場合があります。`vdadmin` を使用せずに、手動で DCT バンドルを取得することもできます。

■ [Horizon Client の診断情報の保存](#)

Horizon Client の使用中に問題が発生し、一般的なネットワークトラブルシューティングテクニックでそれらを解決できない場合は、ログ ファイルのコピーと構成に関する情報を保存できます。

■ [サポート スクリプトを使用した View Composer の診断情報の収集](#)

View Composer のサポート スクリプトを使用して、View Composer の構成データを収集し、ログ ファイルを生成することができます。この情報は、View Composer で発生した問題を VMware カスタマー サポートで診断する際に役立ちます。

■ [View 接続サーバの診断情報の収集](#)

サポート ツールを使用して、View 接続サーバのログ レベルを設定し、ログ ファイルを生成することができます。

■ [コンソールからの Horizon Agent、Horizon Client、または View 接続サーバの診断情報の収集](#)

コンソールに直接アクセスできる場合、サポート スクリプトを使用して、View 接続サーバまたは Horizon Client のログ ファイル、あるいは Horizon Agent が動作しているリモート デスクトップのログ ファイルを生成できます。この情報は、これらのコンポーネントで発生した問題を VMware のテクニカル サポートで診断する際に役立ちます。

Horizon Agent 用のデータ収集ツール バンドルの作成

VMware のテクニカル サポートによる Horizon Agent のトラブルシューティングを支援するため、`vdadmin` コマンドを使用してデータ収集ツール (DCT) バンドルを作成することが必要になる場合があります。`vdadmin` を使用せずに、手動で DCT バンドルを取得することもできます。

`vdadmin` コマンドを View 接続サーバ インスタンスで使用して、DCT バンドルをリモート デスクトップから要求すると便利です。バンドルは View 接続サーバに返されます。

別の方法として、特定のリモート デスクトップにログインし、そのデスクトップ上に DCT バンドルを作成する **support** コマンドを実行することもできます。ユーザー アカウント制御 (UAC) をオンにした場合は、この方法で DCT バンドルを取得する必要があります。

手順

- 1 必要な権限を持つユーザーとしてログインします。

オプション	アクション
View 接続サーバで vdadmin を使用	View 接続サーバの標準インスタンスまたはレプリカ インスタンスに 管理者ロールを持つユーザーとしてログインします。
リモート デスクトップ上	管理者権限を持つユーザーとしてリモート デスクトップにログインします。

- 2 コマンド プロンプトを開き、DCT バンドルを生成するコマンドを実行します。

オプション	アクション
View 接続サーバで vdadmin を使用	出力バンドル ファイル、デスクトップ プール、マシンの名前を指定するには、 vdadmin コマンドで -outfile 、 -d 、および -m オプションを使用します。 <pre>vdadmin-A [-bauthentication_arguments] -getDCT-outfile local_file-ddesktop-mmachine</pre>
リモート デスクトップ上	ディレクトリを <code>c:\Program Files\VMware\VMware View\Agent\DCT</code> に変更して、次のコマンドを実行します。 <pre>support</pre>

このコマンドを実行すると、指定した出力ファイルにバンドルが書き込まれます。

例：vdadmin を使用した Horizon Agent のバンドル ファイルの作成

デスクトップ プール dtpool2 のマシン machine1 用の DCT バンドルを作成して、zip ファイル `C:\myfile.zip` に書き込みます。

```
vdadmin -A -d dtpool2 -m machine1 -getDCT -outfile C:\myfile.zip
```

次のステップ

既存のサポート要求がある場合は、この DCT バンドル ファイルを添付してサポート要求を更新できます。

Horizon Client の診断情報の保存

Horizon Client の使用中に問題が発生し、一般的なネットワークトラブルシューティング テクニックでそれらを解決できない場合は、ログ ファイルのコピーと構成に関する情報を保存できます。

診断情報を保存して VMware のテクニカル サポートに問い合わせる前に、Horizon Client の接続の問題の解決を試みることができます。詳細については、『View でのデスクトップ プールおよびアプリケーション プールの設定』の「Horizon Client と View 接続サーバの接続の問題」を参照してください。

手順

- 1 Horizon Client で [サポート情報] をクリックするか、リモート デスクトップ メニューで [オプション] - [サポート情報] を選択します。
- 2 [サポート情報] ウィンドウで、[サポートデータの収集] をクリックし、確認が求められたら、[はい] をクリックします。

コマンド ウィンドウに、情報の収集の進捗が表示されます。このプロセスには数分かかることがあります。

- 3 コマンド ウィンドウで、Horizon Client の構成をテストする View 接続サーバ インスタンスの URL を入力し、必要に応じて View プロセスの診断ダンプを生成するように選択して、プロンプトに応答します。

情報がクライアント マシンのデスクトップ上のフォルダ内の zip ファイルに書き込まれます。

- 4 VMware Web サイト上の Support (サポート) ページでサポート要求を提出し、出力 zip ファイルを添付します。

サポート スクリプトを使用した View Composer の診断情報の収集

View Composer のサポート スクリプトを使用して、View Composer の構成データを収集し、ログ ファイルを生成することができます。この情報は、View Composer で発生した問題を VMware カスタマー サポートで診断する際に役立ちます。

前提条件

View Composer がインストールされているコンピュータにログインします。

サポート スクリプトを実行するには、Windows Script Host ユーティリティ (cscript) を使用する必要があるため、cscript の使い方を理解しておきます。<http://technet.microsoft.com/library/bb490887.aspx> を参照してください。

手順

- 1 コマンド プロンプト ウィンドウを開いて、C:\Files\\View Composer ディレクトリに移動します。

デフォルト ディレクトリにソフトウェアをインストールしなかった場合は、該当するドライブ文字とパスで置き換えてください。

- 2 svi-support スクリプトを実行するコマンドを入力します。

```
cscript ".\svi-support.wsf" /zip
```

/? オプションを使用して、スクリプトで使用可能な他のコマンド オプションに関する情報を表示できます。

スクリプトの実行が終了すると、出力ファイルの名前と場所が通知されます。

- 3 VMware の Web サイト上の Support (サポート) ページでサポート要求を提出し、出力ファイルを添付します。

View 接続サーバの診断情報の収集

サポート ツールを使用して、View 接続サーバのログ レベルを設定し、ログ ファイルを生成することができます。

サポート ツールは View 接続サーバのログ データを収集します。この情報は、View 接続サーバで発生した問題を VMware のテクニカル サポートで診断する際に役立ちます。サポート ツールは、Horizon Client または Horizon Agent の診断情報の収集には使用できません。その代わりに、サポート スクリプトを使用する必要があります。[コンソールからの Horizon Agent、Horizon Client、または View 接続サーバの診断情報の収集](#)を参照してください。

前提条件

View 接続サーバの標準インスタンスまたはレプリカ インスタンスに 管理者 ロールのユーザーとしてログインします。

手順

- 1 [スタート] - [すべてのプログラム] - [VMware] - [View 接続サーバ ログ レベルの設定] を選択します。
- 2 [選択] テキスト ボックスに数値を入力してログ レベルを設定し、Enter キーを押します。

オプション	説明
0	ログ レベルをデフォルト値にリセットします。
1	通常のログ レベルを選択します。
2	デバッグのログ レベルを選択します (デフォルト)。
3	完全なログを選択します。

選択した詳細レベルでのログ情報の記録が開始されます。

- 3 View 接続サーバの動作に関する十分な情報を収集したら、[スタート] - [すべてのプログラム] - [VMware] - [View 接続サーバ ログ バンドルの生成] の順に選択します。
サポート ツールによって、View 接続サーバ インスタンスのデスクトップ上の `vdm-sdct` というフォルダにログ ファイルが書き込まれます。
- 4 VMware の Web サイト上の Support (サポート) ページでサポート要求を提出し、出力ファイルを添付します。

コンソールからの Horizon Agent、Horizon Client、または View 接続サーバの診断情報の収集

コンソールに直接アクセスできる場合、サポート スクリプトを使用して、View 接続サーバまたは Horizon Client のログ ファイル、あるいは Horizon Agent が動作しているリモート デスクトップのログ ファイルを生成できます。この情報は、これらのコンポーネントで発生した問題を VMware のテクニカル サポートで診断する際に役立ちます。

前提条件

情報を収集するシステムにログインします。管理権限を持つユーザーとしてログインする必要があります。

- Horizon Agent の場合、Horizon Agent がインストールされている仮想マシンにログインします。
- Horizon Client の場合、Horizon Client がインストールされているシステムにログインします。
- View 接続サーバの場合、View 接続サーバ ホストにログインします。

手順

- 1 コマンド プロンプト ウィンドウを開いて、診断情報を収集する View コンポーネントの該当するディレクトリに移動します。

オプション	説明
Horizon Agent	C:\¥Files¥View¥¥ ディレクトリに移動します。
Horizon Client	C:\¥Files¥View¥¥ ディレクトリに移動します。
View 接続サーバ	C:\¥Files¥View¥¥ ディレクトリに移動します。

デフォルト ディレクトリにソフトウェアをインストールしなかった場合は、該当するドライブ文字とパスで置き換えてください。

- 2 サポート スクリプトを実行するコマンドを入力します。

```
.\support.bat [loglevels]
```

詳細ログを有効にする場合は、loglevels オプションを指定し、ログ レベルの数値の入力が求められたら入力します。

オプション	説明
0	ログ レベルをデフォルト値にリセットします。
1	通常のログ レベルを選択します。
2	デバッグのログ レベルを選択します (デフォルト)。
3	完全なログを選択します。
4	PColP の情報ログを選択します (Horizon Agent および Horizon Client のみ)。
5	PColP のデバッグ ログを選択します (Horizon Agent および Horizon Client のみ)。
6	仮想チャネルの情報ログを選択します (Horizon Agent および Horizon Client のみ)。
7	仮想チャネルのデバッグ ログを選択します (Horizon Agent および Horizon Client のみ)。
8	仮想チャネルのトレース ログを選択します (Horizon Agent および Horizon Client のみ)。

スクリプトによって、デスクトップ上の vdm-sdct フォルダに、zip 形式ログ ファイルが書き込まれます。

- 3 VMware View Composer Guest Agent ログは C:\¥Files¥Files¥¥Composer Guest Agent svi-ga-support ディレクトリにあります。
- 4 VMware の Web サイト上の Support (サポート) ページでサポート要求を提出し、出力ファイルを添付します。

サポート要求の更新

サポート Web サイトで、既存のサポート要求を更新できます。

サポート要求を提出すると、VMware のテクニカル サポートから、support スクリプトまたは svi-support スクリプトの出力ファイルの提供を依頼する電子メールが送信される場合があります。スクリプトを実行すると、出力ファイルの名前と場所が通知されます。この出力ファイルを添付して電子メール メッセージに返信してください。

添付ファイルとしては出力ファイルが大きすぎる（10 MB 以上）場合は、VMware のテクニカル サポートに連絡し、サポート要求番号を伝え、FTP アップロードの方法を確認してください。または、サポート Web サイトで、既存のサポート要求に出力ファイルを添付できます。

手順

- 1 VMware の Web サイトの [サポート] ページに移動して、ログインします。
- 2 [サポート要求履歴] をクリックして、該当するサポート要求番号を見つけます。
- 3 サポート要求を更新し、support スクリプトまたは svi-support スクリプトを実行して取得した出力を添付します。

セキュリティ サーバと View 接続サーバのペアリングの失敗のトラブルシューティング

セキュリティ サーバは、View 接続サーバ インスタンスとのペアリングに失敗すると、動作しない場合があります。

問題

セキュリティ サーバが View 接続サーバとのペアリングに失敗すると、次のセキュリティ サーバ問題が発生する可能性があります。

- 2 度目にセキュリティ サーバをインストールしようすると、セキュリティ サーバは View 接続サーバに接続できません。
- Horizon Client が View に接続できません。次のエラー メッセージが表示されます。View 接続サーバ認証に失敗しました。デスクトップへの安全な接続に利用できるゲートウェイがありません。ネットワーク管理者にお問い合わせください。
- View Administrator ダッシュボードで、セキュリティ サーバが **停止** と表示されます。

原因

セキュリティ サーバのインストールを開始し、セキュリティ サーバの ペアリング パスワードを入力した後に、セキュリティ サーバ操作がキャンセルまたは中止された場合に、この問題が発生する可能性があります。

セキュリティ サーバを View 環境に保持する場合は、次の手順を実行します。

- 1 View Administrator で、[View 構成] - [サーバ] を選択します。
- 2 [セキュリティ サーバ] タブで、セキュリティ サーバを選択し、[その他のコマンド] ドロップダウン メニューから [アップグレードまたは再インストールを準備] を選択して [OK] をクリックします。
- 3 [接続サーバ] タブで、セキュリティ サーバとペアリングする View 接続サーバ インスタンスを選択し、[その他のコマンド] ドロップダウン メニューから [セキュリティ サーバのペアリング パスワードを指定] を選択し、パスワードを入力して [OK] をクリックします。
- 4 セキュリティ サーバを再度インストールします。

View 環境からセキュリティ サーバ エントリを削除する場合は、`vdadmin -S` コマンドを実行します。

例：`vdadmin -S -r -s security_server_name`

View Server の証明書失効チェックのトラブルシューティング

サーバの SSL 証明書で証明書失効チェックを実行できない場合、安全な Horizon Client 接続に使用されるセキュリティ サーバまたは View 接続サーバ インスタンスが View Administrator で赤色に表示されます。

問題

セキュリティ サーバまたは View 接続サーバ アイコンが、View Administrator ダッシュボードで赤色で表示されます。View server の状態には、次のメッセージが表示されます。サーバ証明書はチェックできません。

原因

組織がインターネット アクセスにプロキシ サーバを使用しているか、View 接続サーバ インスタンスが、ファイアウォールなどの制御が原因で証明書失効チェックを提供するサーバにアクセスできない場合は、証明書失効チェックに失敗することがあります。

View 接続サーバ インスタンスは、自身の証明書および自身にペアリングされているセキュリティ サーバの証明書について証明書失効チェックを実行します。デフォルトでは、VMware Horizon View 接続サーバ サービスは LocalSystem アカウントで開始されます。サービスが LocalSystem で実行されると、View 接続サーバ インスタンスは、Internet Explorer で構成されているプロキシ設定を使用して CRL DP URL にアクセスしたり、OCSP レスポンダを使用して証明書の失効ステータスを判断することはできません。

Microsoft Netshell コマンドを使用してプロキシ設定を View 接続サーバ インスタンスにインポートすると、サーバはインターネット上の証明書失効チェック サイトにアクセスできるようになります。

解決方法

- 1 View 接続サーバ コンピュータで、[管理者として実行] 設定を使用してコマンドライン ウィンドウを開きます。
たとえば、[スタート] をクリックし、「cmd」と入力し、cmd.exe アイコンを右クリックして、[管理者として実行] を選択します。
- 2 「netsh」と入力し、Enter キーを押します。
- 3 「winhttp」と入力し、Enter キーを押します。
- 4 「show proxy」と入力し、Enter キーを押します。

Netshell により、プロキシが直接接続に設定されたことが示されます。この設定では、組織でプロキシが使用されている場合は、View 接続サーバ コンピュータはインターネットに接続できません。
- 5 プロキシ設定を構成します。

たとえば、netsh winhttp> プロンプトで「import proxy source=ie」と入力します。

プロキシ設定が View 接続サーバ コンピュータにインポートされます。
- 6 「show proxy」と入力して、プロキシ設定を確認します。
- 7 VMware Horizon View 接続サーバ サービスを再起動します。
- 8 View Administrator ダッシュボードで、セキュリティ サーバまたは View 接続サーバ アイコンが緑色になっていることを確認します。

スマート カードでの証明書失効チェックのトラブルシューティング

スマート カードが接続されている View 接続サーバ インスタンスまたはセキュリティ サーバは、スマート カード証明書失効チェックを構成しない限り、サーバの SSL 証明書で証明書失効チェックを実行できません。

問題

組織でインターネット アクセスのためにプロキシ サーバを使用している場合や View 接続サーバ インスタンスまたはセキュリティ サーバが、ファイアウォールまたは他の制御が理由で失効チェックを提供するサーバに到達できない場合、証明書失効チェックは失敗する可能性があります。

重要: CRL ファイルが最新であることを確認します。

原因

View は、証明書失効リスト (CRL) および Online Certificate Status Protocol (OCSP) による証明書失効チェックをサポートします。CRL は、証明書を発行した CA (Certificate Authority) によって公開される、失効した証明書のリストです。OCSP は、X.509 証明書の失効ステータスを取得するために使用される証明書検証プロトコルです。View 接続サーバまたはセキュリティ サーバ ホストから CA にアクセスする必要があります。この問題は、スマート カード証明書の失効チェックを構成した場合に限って発生します。[スマート カードでの証明書失効チェックの使用](#) を参照してください。

解決方法

- 1 View server のパスを使用して CA の Website から最新の CRL をダウンロードするための自分用の手順を（手動で）作成します。
- 2 View 接続サーバ ホストまたはセキュリティ サーバ ホスト上で、SSL ゲートウェイ構成フォルダ内の `locked.properties` ファイルを作成または編集します。

例: `install_directory\VMware\VMware View\Server\sslgateway\conf\locked.properties`
- 3 `locked.properties` ファイルの `enableRevocationChecking` および `crlLocation` プロパティを CRL が保存されているローカル パスに追加します。
- 4 変更を反映するため、View 接続サーバ サービスまたはセキュリティ サーバ サービスを再起動してください。

トラブルシューティングの追加情報

トラブルシューティングの追加情報は、VMware ナレッジベースの記事に掲載されています。

VMware ナレッジベース (KB) は、VMware 製品の新しいトラブルシューティング情報が追加されて継続的に更新されています。

View のトラブルシューティングの詳細については、VMware KB の Web サイトで利用可能な KB の記事を参照してください。

<http://kb.vmware.com/selfservice/microsites/microsite.do>

vdmadmin コマンドの使用

vdmadmin コマンド ライン インターフェイスを使用して、View 接続サーバ インスタンスに対するさまざまな管理タスクを実行できます。

vdmadmin を使用すると、View Administrator のユーザー インターフェイス内からは実行できない管理タスクや、スクリプトから自動的に実行する必要がある管理タスクを実行できます。

View Administrator、View コマンドレット、vdmadmin で実行可能な操作の比較については、『View との連携』ドキュメントを参照してください。

- [vdmadmin コマンドの使用方法](#)

vdmadmin コマンドの構文によって、コマンドの動作が制御されます。

- [-A オプションを使用した Horizon Agent のログの構成](#)

vdmadmin コマンドと -A オプションを使用して、Horizon Agent によるログの記録を構成できます。

- [-A オプションを使用した IP アドレスの上書き](#)

vdmadmin コマンドと -A オプションを使用して、Horizon Agent によって報告される IP アドレスを上書きできます。

- [-C オプションを使用した View 接続サーバ グループの名前の設定](#)

vdmadmin コマンドと -C オプションを使用して、View 接続サーバ グループの名前を設定できます。

Microsoft System Center Operations Manager (SCOM) コンソールには、SCOM 内でグループを識別できるようにこの名前が表示されます。

- [-F オプションを使用した外部セキュリティ プリンシパルの更新](#)

vdmadmin コマンドと -F オプションを使用して、デスクトップの使用が許可されている Active Directory 内の Windows ユーザーの外部セキュリティ プリンシパル (FSP) を更新できます。

- [-H オプションを使用した健全性モニターの一覧表示および詳細表示](#)

vdmadmin コマンドと -H オプションを使用して、既存の健全性モニターを一覧表示し、View コンポーネントのインスタンスを監視し、特定の健全性モニターまたはモニター インスタンスの詳細を表示することができます。

- [-I オプションを使用した View の動作レポートの一覧表示および結果表示](#)

vdmadmin コマンドと -I オプションを使用して、View の動作について利用可能なレポートを一覧表示し、いずれかのレポートの実行結果を表示することができます。

- **-I オプションを使用した Syslog 形式での View イベント ログ メッセージの生成**

vdmadmin コマンドと -I オプションを使用して、View イベント メッセージを Syslog 形式でイベント ログ ファイルに記録できます。サードパーティ製分析製品の多くでは、分析操作のために入力としてフラット ファイル Syslog データが必要です。

- **-L オプションを使用した専用マシンの割り当て**

vdmadmin コマンドと -L オプションを使用して、専用プールのマシンをユーザーに割り当てることができます。

- **-M オプションを使用したマシンに関する情報の表示**

vdmadmin コマンドと -M オプションを使用して、仮想マシンまたは物理コンピュータの構成に関する情報を表示できます。

- **-M オプションを使用した仮想マシン上のディスク領域の再利用**

vdmadmin コマンドと -M オプションを使用すると、リンク クローン仮想マシンをディスク領域再利用の対象として指定することができます。View は、リンク クローン OS ディスク上の未使用領域が View Administrator で指定した最小しきい値に達するのを待たずに、ESXi ホストにその OS ディスク上のディスク領域を再利用するように指示します。

- **-N オプションを使用したドメイン フィルタの構成**

vdmadmin コマンドと -N オプションを使用して、View によって、エンド ユーザーからアクセス可能にするドメインを制御できます。

- **ドメイン フィルタの構成**

ドメイン フィルタを構成して、View 接続サーバ インスタンスまたはセキュリティ サーバによって、エンド ユーザーからアクセス可能にするドメインを制限することができます。

- **-O および -P オプションを使用して資格を持たないユーザーのマシンとポリシーを表示する**

vdmadmin コマンドと -O および -P オプションを使用して、システムを使用する資格を失ったユーザーに割り当てられている仮想マシンとポリシーを表示できます。

- **-Q オプションを使用したキオスク モードのクライアントの構成**

vdmadmin コマンドと -Q オプションを使用すると、キオスク モードのクライアントのデフォルト値を設定してアカウントを作成し、これらのクライアントの認証を可能にし、それらの構成に関する情報を表示することができます。

- **-R オプションを使用したマシンの最初のユーザーの表示**

vdmadmin コマンドと -R オプションを使用して、管理対象仮想マシンの初期の割り当てを確認できます。たとえば、LDAP データが失われた場合、仮想マシンを再度ユーザーに割り当てるためにこの情報が必要になることがあります。

- **-S オプションを使用した View 接続サーバ インスタンスまたはセキュリティ サーバのエントリの削除**

vdmadmin コマンドと -S オプションを使用して、View 接続サーバ インスタンスまたはセキュリティ サーバのエントリを View の構成から削除できます。

- **-T オプションの使用による管理者の 2 番目の認証情報の提供**
vdmadmin コマンドを使用するときに -T オプションを指定すると、Active Directory の 2 番目の認証情報を管理者ユーザーに提供できます。
- **-U オプションを使用したユーザーに関する情報の表示**
vdmadmin コマンドと -U オプションを使用して、ユーザーに関する詳細情報を表示できます。
- **-V オプションを使用した仮想マシンのロック解除またはロック**
vdmadmin コマンドと -V オプションを使用して、データセンター内の仮想マシンをロック解除またはロックできます。
- **-X オプションを使用した LDAP エントリ コリジョンの検出と解決**
vdmadmin コマンドと -X オプションを使用して、View 接続サーバ グループ内の複製された View 接続サーバ インスタンスに LDAP エントリ コリジョンがあるかどうかを検出し、それらを解決できます。

vdmadmin コマンドの使用方法

vdmadmin コマンドの構文によって、コマンドの動作が制御されます。

Windows コマンド プロンプトで、次の形式の vdmadmin コマンドを使用します。

```
vdmadmin
command_option [additional_optionargument] ...
```

使用できる追加のオプションは、コマンド オプションによって異なります。

デフォルトでは、vdmadmin コマンドの実行可能ファイルのパスは C:\Program Files\VMware\VMware View\Server\tools\bin です。コマンド ラインにパスを入力するのを避けるには、*PATH* 環境変数にパスを追加します。

- **vdmadmin コマンドでの認証**
指定した操作を正常に実行するためには、vdmadmin コマンドを Administrators（管理者） ロールのユーザーとして実行する必要があります。
- **vdmadmin コマンドの出力形式**
一部の vdmadmin コマンド オプションでは、出力情報の形式を指定できます。
- **vdmadmin コマンド オプション**
vdmadmin コマンドで実行する操作を指定するには、コマンド オプションを使用します。

vdmadmin コマンドでの認証

指定した操作を正常に実行するためには、vdmadmin コマンドを Administrators（管理者） ロールのユーザーとして実行する必要があります。

View Administrator を使用して Administrators（管理者） ロールをユーザーに割り当てることができます。[6 章 ロールベースの委任管理の構成](#)を参照してください。

十分な権限を持たないユーザーとしてログインしている場合に、`-b` オプションを使用して、Administrators（管理者）ロールが割り当てられているユーザーとしてコマンドを実行できます。ただし、そのユーザーのパスワードを知っている必要があります。`-b` オプションを指定すると、特定のドメインで特定のユーザーとして `vdadmin` コマンドを実行できます。次に示す `-b` オプションの使用形式は同等です。

```
-b
username
domain [password | *]
```

```
-b
username@domain [password | *]
```

```
-b
domain\username [password | *]
```

パスワードの代わりにアスタリスク (*) を指定した場合は、パスワードを入力するように求められます。`vdadmin` コマンドは、機密パスワードがコマンド行のコマンド履歴に残らないようにします。

`-b` オプションは、`-R` および `-T` オプションを除くすべてのコマンド オプションとともに使用できます。

vdadmin コマンドの出力形式

一部の `vdadmin` コマンド オプションでは、出力情報の形式を指定できます。

表 15-1. 出力形式を選択するためのオプション に、出力テキストの形式を指定できる `vdadmin` コマンド オプションを示します。

表 15-1. 出力形式を選択するためのオプション

オプション	説明
<code>-csv</code>	出力の形式をカンマ区切り値として指定します。
<code>-n</code>	ASCII (UTF-8) 文字を使用して出力を表示します。これは、カンマ区切り値およびテキスト形式出力のデフォルトの文字セットです。
<code>-w</code>	Unicode (UTF-16) 文字を使用して出力を表示します。これは、XML 出力のデフォルトの文字セットです。
<code>-xml</code>	出力形式を XML として指定します。

vdadmin コマンド オプション

`vdadmin` コマンドで実行する操作を指定するには、コマンド オプションを使用します。

表 15-2. `vdadmin` コマンド オプション に、View の操作を制御および確認するために `vdadmin` コマンドで利用できるコマンド オプションを示します。

表 15-2. vdmadmin コマンド オプション

オプション	説明
-A	Horizon Agent がログ ファイルに記録する情報を管理します。 -A オプションを使用した Horizon Agent のログの構成 を参照してください。 Horizon Agent によりレポートされる IP アドレスを上書きします。 -A オプションを使用した IP アドレスの上書き を参照してください。
-C	View 接続サーバ グループの名前を設定します。 -C オプションを使用した View 接続サーバ グループの名前の設定 を参照してください。
-F	Active Directory 内のすべてのユーザーまたは指定されたユーザーの外部セキュリティ プリンシパル (FSP) を更新します。 -F オプションを使用した外部セキュリティ プリンシパルの更新 を参照してください。
-H	View サービスの健全性についての情報を表示します。 -H オプションを使用した健全性モニターの一覧表示および詳細表示 を参照してください。
-I	View の動作に関するレポートを生成します。 -I オプションを使用した View の動作レポートの一覧表示および結果表示 を参照してください。
-L	ユーザーに専用デスクトップを割り当てます。または割り当てを削除します。 -L オプションを使用した専用マシンの割り当て を参照してください。
-M	仮想マシンまたは物理コンピュータの情報を表示します。 -M オプションを使用したマシンに関する情報の表示 を参照してください。
-N	View 接続サーバ インスタンスまたはグループで Horizon Client に提供されるドメインを構成します。 -N オプションを使用したドメイン フィルタの構成 を参照してください。
-O	ユーザーに割り当てられたリモート デスクトップのうち、ユーザーが資格を失っているデスクトップを表示します。 -O および -P オプションを使用して資格を持たないユーザーのマシンとポリシーを表示する を参照してください。
-P	資格のないユーザーのリモート デスクトップに関連付けられているユーザー ポリシーを表示します。 -O および -P オプションを使用して資格を持たないユーザーのマシンとポリシーを表示する を参照してください。
-Q	キオスク モードのクライアント デバイスの Active Directory アカウントおよび View 構成を設定します。 -Q オプションを使用したキオスク モードのクライアントの構成 を参照してください。
-R	リモート デスクトップに最初にアクセスしたユーザーを報告します。 -R オプションを使用したマシンの最初のユーザーの表示 を参照してください。
-S	View 接続サーバ インスタンスの構成エントリを View の構成から削除します。 -S オプションを使用した View 接続サーバ インスタンスまたはセキュリティ サーバのエントリの削除 を参照してください。
-T	Active Directory の 2 番目の認証情報を管理者ユーザーに提供します。 -T オプションの使用による管理者の 2 番目の認証情報の提供 を参照してください。
-U	ユーザーに関する情報 (リモート デスクトップに対する資格や ThinApp 割り当て、管理者のロールなど) を表示します。 -U オプションを使用したユーザーに関する情報の表示 を参照してください。
-V	仮想マシンをロック解除またはロックします。 -V オプションを使用した仮想マシンのロック解除またはロック を参照してください。
-X	複製された View 接続サーバ インスタンス上で重複する LDAP エントリを検出して解決します。 -X オプションを使用した LDAP エントリ コリジョンの検出と解決 を参照してください。

-A オプションを使用した Horizon Agent のログの構成

vdmadmin コマンドと -A オプションを使用して、Horizon Agent によるログの記録を構成できます。

構文

```
vdmadmin
-A [-b authentication_arguments] -getDCT-outfile local_file -d desktop -m machine
```

```
vdmadmin
-A [-b authentication_arguments] -getlogfile logfile-outfile local_file -d desktop -m machine
```

```
vdmadmin
-A [-b authentication_arguments] -getloglevel [-xml] -d desktop [-m machine]
```

```
vdmadmin
-A [-b authentication_arguments] -getstatus [-xml] -d desktop [-m machine]
```

```
vdmadmin
-A [-b authentication_arguments] -getversion [-xml] -d desktop [-m machine]
```

```
vdmadmin
-A [-b authentication_arguments] -list [-xml] [-w | -n] -d desktop -m machine
```

```
vdmadmin
-A [-b authentication_arguments] -setloglevel level -d desktop [-m machine]
```

使用上の注意

VMware のテクニカル サポートによる Horizon Agent のトラブルシューティングを支援するため、データ収集ツール (DCT) バンドルを作成することができます。さらに、ログ レベルを変更し、Horizon Agent のバージョンおよびステータスを表示して、各ログ ファイルをローカル ディスクに保存することもできます。

オプション

表 15-3. Horizon Agent でのログ構成オプション に Horizon Agent でのログを構成するために指定できるオプションを示します。

表 15-3. Horizon Agent でのログ構成オプション

オプション	説明
<code>-d desktop</code>	デスクトップ プールを指定します。
<code>-getDCT</code>	データ収集ツール (DCT) バンドルを作成して、ローカル ファイルに保存します。
<code>-getlogfile logfile</code>	コピーを保存するログ ファイルの名前を指定します。

オプション	説明
<code>-getloglevel</code>	Horizon Agent の現在のログ レベルを表示します。
<code>-getstatus</code>	Horizon Agent ステータスを表示します。
<code>-getversion</code>	Horizon Agent のバージョンを表示します。
<code>-list</code>	Horizon Agent のログ ファイルを表示します。
<code>-m <i>machine</i></code>	デスクトップ プール内のマシンを指定します。
<code>-outfile <i>local_file</i></code>	DCT バンドルまたはログ ファイルのコピーを保存するローカル ファイルの名前を指定します。
<code>-setloglevel <i>level</i></code>	Horizon Agent のログ レベルを設定します。
	デバッグ エラー、警告、およびデバッグ イベントをログに記録します。 正常 エラーおよび警告イベントをログに記録します。 トレース エラー、警告、情報、およびデバッグ イベントをログに記録します。

例

デスクトップ プール dtpool2 に属するマシン machine1 の Horizon Agent のログ レベルを表示します。

```
vdadmin -A -d dtpool2 -m machine1 -getloglevel
```

デスクトップ プール dtpool2 に属するマシン machine1 の Horizon Agent のログ レベルを debug に設定します。

```
vdadmin -A -d dtpool2 -m machine1 -setloglevel debug
```

デスクトップ プール dtpool2 に属するマシン machine1 の Horizon Agent ログ ファイルのリストを表示します。

```
vdadmin -A -d dtpool2 -m machine1 -list
```

デスクトップ プール dtpool2 に属するマシン machine1 の Horizon Agent ログ ファイル log-2009-01-02.txt のコピーを、C:\mycopiedlog.txt として保存します。

```
vdadmin -A -d dtpool2 -m machine1 -getlogfile log-2009-01-02.txt -outfile C:\mycopiedlog.txt
```

デスクトップ プール dtpool2 に属するマシン machine1 の Horizon Agent のバージョンを表示します。

```
vdadmin -A -d dtpool2 -m machine1 -getversion
```

デスクトップ プール dtpool2 に属するマシン machine1 の Horizon Agent のステータスを表示します。

```
vdadmin -A -d dtpool2 -m machine1 -getstatus
```


デスクトップ プール dtpool2 のマシン machine1 用の DCT バンドルを作成して、zip ファイル C:\myfile.zip に書き込みます。

```
vdmadmin -A -d dtpool2 -m machine1 -getDCT -outfile C:\myfile.zip
```

-A オプションを使用した IP アドレスの上書き

vdmadmin コマンドと -A オプションを使用して、Horizon Agent によって報告される IP アドレスを上書きできます。

構文

```
vdmadmin
-A [-bauthentication_arguments] -override-iip_or_dns-ddesktop-mmachine
```

```
vdmadmin
-A [-bauthentication_arguments] -override-list-ddesktop-mmachine
```

```
vdmadmin
-A [-bauthentication_arguments] -override-r-ddesktop [-mmachine]
```

使用上の注意

Horizon Agent は、自身が実行されているマシンの検出済み IP アドレスを、View 接続サーバ インスタンスに報告します。Horizon Agent によって報告された値を View 接続サーバ インスタンスが信頼することができない安全な構成では、Horizon Agent によって提供された値を上書きして、管理対象マシンで使用する IP アドレスを指定することができます。Horizon Agent によって報告されたマシンのアドレスが、定義されたアドレスと一致しない場合は、Horizon Client を使用してそのマシンにアクセスできません。

オプション

表 15-4. IP アドレスの上書きのためのオプション に IP アドレスを上書きするために指定できるオプションを示します。

表 15-4. IP アドレスの上書きのためのオプション

オプション	説明
-d desktop	デスクトップ プールを指定します。
-i ip_or_dns	IP アドレスまたは DNS で解決できるドメイン名を指定します。
-m machine	デスクトップ プールのマシンの名前を指定します。
-override	IP アドレスの上書きの操作を指定します。
-r	上書きされた IP アドレスを削除します。

例

デスクトップ プール dtpool2 のマシン machine2 の IP アドレスをオーバーライドします。

```
vdmadmin -A -override -i 10.20.54.165 -d dtpool2 -m machine2
```

デスクトップ プール dtpool2 のマシン machine2 に定義されている IP アドレスを表示します。

```
vdmadmin -A -override -list -d dtpool2 -m machine2
```

デスクトップ プール dtpool2 のマシン machine2 に定義されている IP アドレスを削除します。

```
vdmadmin -A -override -r -d dtpool2 -m machine2
```

デスクトップ プール dtpool3 のデスクトップに定義されている IP アドレスを削除します。

```
vdmadmin -A -override -r -d dtpool3
```

-C オプションを使用した View 接続サーバ グループの名前の設定

vdmadmin コマンドと -C オプションを使用して、View 接続サーバ グループの名前を設定できます。Microsoft System Center Operations Manager (SCOM) コンソールには、SCOM 内でグループを識別できるようにこの名前が表示されます。

構文

```
vdmadmin
-C [-b authentication_arguments] [-c groupname]
```

使用上の注意

View コンポーネントの状態の監視と管理に SCOM を使用する予定の場合は、View 接続サーバ グループに名前を付ける必要があります。View Administrator ではグループの名前が表示されません。名前を付けるグループのメンバーでコマンドを実行します。

グループの名前を指定しない場合、このコマンドはローカルの View 接続サーバ インスタンスが属するグループの GUID を返します。GUID を使用して、View 接続サーバ インスタンスが、別の View 接続サーバ インスタンスと同じ View 接続サーバ グループのメンバーであるかどうかを確認できます。

View で SCOM を使用方法については、『View の統合』ドキュメントを参照してください。

オプション

-c オプションは View 接続サーバ グループの名前を指定します。このオプションを指定しない場合、コマンドはグループの GUID を返します。

例

View 接続サーバ グループの名前を VCSG01 に設定します。

```
vdadmin -C -c VCSG01
```

グループの GUID を返します。

```
vdadmin -C
```

-F オプションを使用した外部セキュリティ プリンシパルの更新

vdadmin コマンドと -F オプションを使用して、デスクトップの使用が許可されている Active Directory 内の Windows ユーザーの外部セキュリティ プリンシパル (FSP) を更新できます。

構文

```
vdadmin
-F [-bauthentication_arguments] [-udomain\user]
```

使用上の注意

ローカル ドメイン以外のドメインを信頼する場合は、外部ドメインのセキュリティ プリンシパルがローカル ドメインのリソースにアクセスするのを許可します。Active Directory では、信頼された外部ドメインのセキュリティ プリンシパルを表すために FSP を使用します。信頼された外部ドメインのリストを変更する場合は、ユーザーの FSP を更新できます。

オプション

-u オプションは、FSP を更新するユーザーの名前およびドメインを指定します。このオプションを指定しない場合、コマンドは Active Directory 内のすべてのユーザーの FSP を更新します。

例

EXTERNAL ドメインのユーザー Jim の FSP を更新します。

```
vdadmin -F -u EXTERNAL\Jim
```

Active Directory 内の全ユーザーの FSP を更新します。

```
vdadmin -F
```

-H オプションを使用した健全性モニターの一覧表示および詳細表示

vdadmin コマンドと -H オプションを使用して、既存の健全性モニターを一覧表示し、View コンポーネントのインスタンスを監視し、特定の健全性モニターまたはモニター インスタンスの詳細を表示することができます。

構文

```
vdmadmin
-H [-bauthentication_arguments] -list-xml [-w | -n]
```

```
vdmadmin
-H [-bauthentication_arguments] -list-monitorid monitor_id -xml [-w | -n]
```

```
vdmadmin
-H [-bauthentication_arguments] -monitorid monitor_id -instanceid instance_id -xml [-w | -n]
```

使用上の注意

表 15-5. 健全性モニターに、View のコンポーネントの健全性を監視するために使用される健全性モニターを示します。

表 15-5. 健全性モニター

モニター	説明
CBMonitor	View 接続サーバインスタンスの健全性を監視します。
DBMonitor	イベント データベースの健全性を監視します。
DomainMonitor	View 接続サーバ ホストのローカル ドメインおよび信頼されるすべてのドメインの健全性を監視します。
SGMonitor	セキュリティ ゲートウェイ サービスおよびセキュリティ サーバの健全性を監視します。
VCMonitor	vCenter サーバの健全性を監視します。

コンポーネントに複数のインスタンスがある場合、コンポーネントの各インスタンスを監視するための別個のモニター インスタンスが View によって作成されます。

このコマンドを実行すると、健全性モニターおよびモニター インスタンスに関するすべての情報が XML 形式で出力されます。

オプション

表 15-6. 健全性モニターの一覧表示と詳細表示のためのオプションに健全性モニターを一覧表示し、詳細を表示するために指定できるオプションを示します。

表 15-6. 健全性モニターの一覧表示と詳細表示のためのオプション

オプション	説明
-instanceid <i>instance_id</i>	健全性モニター インスタンスを指定します。
-list	健全性モニター ID を指定しない場合は、既存の健全性モニターが表示されます。

オプション	説明
<code>-list -monitorid <i>monitor_id</i></code>	指定した健全性モニター ID のモニター インスタンスを表示します。
<code>-monitorid <i>monitor_id</i></code>	健全性モニター ID を指定します。

例

既存のすべての健全性モニターを、Unicode 文字を使用した XML で一覧表示します。

```
vdmdadmin -H -list -xml
```

vCenter モニター (VCMonitor) のすべてのインスタンスを、ASCII 文字を使用した XML で一覧表示します。

```
vdmdadmin -H -list -monitorid VCMonitor -xml -n
```

指定した vCenter モニター インスタンスの健全性を表示します。

```
vdmdadmin -H -monitorid VCMonitor -instanceid 4aec2c99-4879-96b2-de408064d035 -xml
```

-I オプションを使用した View の動作レポートの一覧表示および結果表示

vdmdadmin コマンドと -I オプションを使用して、View の動作について利用可能なレポートを一覧表示し、いずれかのレポートの実行結果を表示することができます。

構文

```
vdmdadmin
-I [-b authentication_arguments] -list [-xml] [-w | -n]
```

```
vdmdadmin
-I [-b authentication_arguments] -report report -view view [-startdate yyyy-MM-dd-HH:mm:ss]
[-enddate yyyy-MM-dd-HH:mm:ss] [-w | -n] -xml | -csv
```

使用上の注意

このコマンドを使用して、利用可能なレポートおよびビューを表示し、指定したレポートおよびビューに View によって記録された情報を表示できます。

vdmdadmin コマンドと -I オプションを使用して、syslog 形式の View ログメッセージを生成することもできます。[-I オプションを使用した Syslog 形式での View イベント ログメッセージの生成](#)を参照してください。

オプション

[表 15-7. レポートおよびビューの一覧表示と結果表示のためのオプション](#) にレポートおよびビューを一覧表示し、結果を表示するために指定できるオプションを示します。

表 15-7. レポートおよびビューの一覧表示と結果表示のためのオプション

オプション	説明
<code>-enddate yyyy-MM-dd-HH:mm:ss</code>	表示する情報の日付の上限を指定します。
<code>-list</code>	利用可能なレポートおよびビューを一覧表示します。
<code>-report report</code>	レポートを指定します。
<code>-startdate yyyy-MM-dd-HH:mm:ss</code>	表示する情報の日付の下限を指定します。
<code>-view view</code>	ビューを指定します。

例

利用可能なレポートおよびビューを、Unicode 文字を使用した XML で一覧表示します。

```
vdadmin -I -list -xml -w
```

2010 年 8 月 1 日以降に発生したユーザー イベントのリストを、ASCII 文字を使用したカンマ区切り値として表示します。

```
vdadmin -I -report events -view user_events -startdate 2010-08-01-00:00:00 -csv -n
```

-I オプションを使用した Syslog 形式での View イベント ログ メッセージの生成

vdadmin コマンドと -I オプションを使用して、View イベント メッセージを Syslog 形式でイベント ログ ファイルに記録できます。サードパーティ製分析製品の多くでは、分析操作のために入力としてフラット ファイル Syslog データが必要です。

構文

```
vdadmin
-I
-eventSyslog
-disable
```

```
vdadmin
-I
-eventSyslog
-enable
-localOnly
```

```
vdadmin
```

```
-I
-eventSyslog
-enable
-path
path
```

```
vdmadmin
-I
-eventSyslog
-enable
-path
path
-user
DomainName\username
-password
password
```

使用上の注意

このコマンドを使用して、View イベント ログ メッセージを Syslog 形式で生成できます。Syslog ファイルで、View イベント ログ メッセージはキーと値のペアでフォーマットされるため、ログ データに分析ソフトウェアからアクセスできます。

vdmadmin コマンドと -I オプションを使用して、使用可能なレポートおよびビューを一覧にして、指定したレポートの内容を表示することもできます。[-I オプションを使用した View の動作レポートの一覧表示および結果表示](#)を参照してください。

オプション

eventSyslog オプションは無効または有効にできます。Syslog 出力はローカル システムのみまたは別の場所にダイレクトできます。Syslog サーバへの直接 UDP 接続は、View 5.2 以降でサポートされています。『View のインストール』の「Syslog サーバのイベント ログを構成する」を参照してください。

表 15-8. Syslog 形式で View イベント ログ メッセージを生成するためのオプション

オプション	説明
-disable	Syslog ログを無効にします。
-e -enable	Syslog ログを有効にします。
-eventSyslog	View イベントが Syslog 形式で生成されるように指定します。
-localOnly	Syslog 出力をローカル システムのみに保存します。-localOnly オプションを使用した場合、Syslog 出力のデフォルトの宛先は %PROGRAMDATA%\VMware\VDM\events\ です。
-password <i>password</i>	Syslog 出力の指定された宛先パスへのアクセスを認証するユーザーのパスワードを指定します。

オプション	説明
<code>-path</code>	Syslog 出力の宛先 UNC パスを決定します。
<code>-u -user <i>DomainName\username</i></code>	Syslog 出力の宛先パスにアクセスできるドメインとユーザー名を指定します。

例

Syslog 形式での View イベントの生成を無効にします。

```
vdadmin -I -eventSyslog -disable
```

View イベントの Syslog 出力をローカル システムのみにダイレクトします。

```
vdadmin -I -eventSyslog -enable -localOnly
```

View イベントの Syslog 出力を指定されたパスにダイレクトします。

```
vdadmin -I -eventSyslog -enable -path path
```

View イベントの Syslog 出力を、認証されたドメイン ユーザーによるアクセスを必要とする指定されたパスにダイレクトします。

```
vdadmin -I -eventSyslog -enable -path \\logserver\share\ViewEvents -user mydomain\myuser
  -password mypassword
```

-L オプションを使用した専用マシンの割り当て

vdadmin コマンドと -L オプションを使用して、専用プールのマシンをユーザーに割り当てることができます。

構文

```
vdadmin
-L [-bauthentication_arguments] -ddesktop -m machine -udomain\user
```

```
vdadmin
-L [-bauthentication_arguments] -ddesktop [-mmachine | -udomain\user] -r
```


使用上の注意

View は、ユーザーが初めて専用デスクトップ プールに接続するときに、そのユーザーにマシンを割り当てます。状況によっては、事前にマシンをユーザーに割り当てた方がよい場合があります。たとえば、ユーザーが最初に接続する前に、ユーザーのシステム環境を準備しておくことができます。View によって専用プールから割り当てられたリモート デスクトップにユーザーが接続すると、そのデスクトップをホストする仮想マシンは、その有効期間を通して同じユーザーに割り当てられたままになります。専用プールに属する単一のマシンにユーザーを割り当てることができます。

資格のある任意のユーザーにマシンを割り当てることができます。これは、View 接続サーバ インスタンス上での View LDAP データの損失から復旧する場合、または特定のマシンの所有権を変更する場合に行うことをお勧めします。

View によって専用プールから割り当てられたリモート デスクトップにユーザーが接続すると、そのリモート デスクトップは、デスクトップをホストする仮想マシンの有効期間を通して同じユーザーに割り当てられたままになります。ユーザーが組織を離れた場合、デスクトップへのアクセスが不要になった場合、または今後別のデスクトップ プールのデスクトップを使用する場合は、そのユーザーへのマシンの割り当てを削除する必要があることがあります。特定のデスクトップ プールにアクセスするすべてのユーザーへの割り当てを削除することもできます。

注: `vdadmin -L` コマンドは、所有権を View Composer 通常ディスクに割り当てません。通常ディスクを含むリンク クローン デスクトップをユーザーに割り当てするには、View Administrator で [ユーザーを割り当てる] メニュー オプションを使用するか、View PowerCLI `Update-UserOwnership cmdlet` を使用します。

`vdadmin -L` を使用して通常ディスクを含むリンク クローン デスクトップをユーザーに割り当てる場合、状況によっては予期しない結果になる場合があります。たとえば、通常ディスクを切断し、それを使用してデスクトップを再作成した場合、再作成されたデスクトップは元のデスクトップの所有者に割り当てられません。

オプション

表 15-9. 専用デスクトップの割り当てのオプション に、デスクトップをユーザーに割り当てたり、割り当てを削除したりするために指定できるオプションを示します。

表 15-9. 専用デスクトップの割り当てのオプション

オプション	説明
<code>-d desktop</code>	デスクトップ プールの名前を指定します。
<code>-m machine</code>	リモート デスクトップをホストする仮想マシンの名前を指定します。
<code>-r</code>	指定したユーザーへの割り当て、または指定したマシンへのすべての割り当てを削除します。
<code>-u domain\user</code>	ユーザーのログイン名およびドメインを指定します。

例

デスクトップ プール `dtpool1` のマシン `machine2` を、CORP ドメインのユーザー `Jo` に割り当てます。

```
vdadmin -L -d dtpool1 -m machine2 -u CORP\Jo
```

CORP ドメインのユーザー Jo に対する、プール dtpool1 のデスクトップの割り当てを削除します。

```
vdmadmin -L -d dtpool1 -u Corp\Jo -r
```

デスクトップ プール dtpool3 のマシン machine1 に対するユーザーの割り当てをすべて削除します。

```
vdmadmin -L -d dtpool3 -m machine1 -r
```

-M オプションを使用したマシンに関する情報の表示

vdmadmin コマンドと -M オプションを使用して、仮想マシンまたは物理コンピュータの構成に関する情報を表示できます。

構文

```
vdmadmin
-M [-b authentication_arguments] [-m machine | [-u domain\user][-d desktop]] [-xml | -csv] [-w
| -n]
```

使用上の注意

このコマンドを実行すると、リモート デスクトップの基盤となる仮想マシンまたは物理コンピュータに関する情報が表示されます。

- マシンの表示名
- デスクトップ プールの名前
- マシンの状態

マシンの状態は、UNDEFINED、PRE_PROVISIONED、CLONING、CLONINGERROR、CUSTOMIZING、READY、DELETING、MAINTENANCE、ERROR、LOGOUT のいずれかの値になります。

このコマンドでは、View Administrator では表示される 接続済み や 切断されました などのすべての動的なマシンの状態が表示されるわけではありません。

- 割り当てられているユーザーの SID
- 割り当てられているユーザーのアカウント名
- 割り当てられているユーザーのドメイン名
- 仮想マシンのインベントリ パス（該当する場合）
- マシンが作成された日付
- マシンのテンプレート パス（該当する場合）
- vCenter Server の URL（該当する場合）

オプション

表 15-10. マシンに関する情報を表示するためのオプション に、詳細を表示するマシンを指定するために使用できるオプションを示します。

表 15-10. マシンに関する情報を表示するためのオプション

オプション	説明
<code>-d desktop</code>	デスクトップ プールの名前を指定します。
<code>-m machine</code>	仮想マシンの名前を指定します。
<code>-u domain\user</code>	ユーザーのログイン名およびドメインを指定します。

例

CORP ドメインのユーザー Jo に割り当てられているプール dtpool2 内のリモート デスクトップの基盤となるマシンに関する情報を表示し、出力の形式を ASCII 文字を使用した XML に設定します。

```
vdmin -M -u CORP\Jo -d dtpool2 -xml -n
```

マシン machine3 に関する情報を表示し、出力の形式をカンマ区切り値に設定します。

```
vdmin -M -m machine3 -csv
```

-M オプションを使用した仮想マシン上のディスク領域の再利用

vdmin コマンドと -M オプションを使用すると、リンク クローン仮想マシンをディスク領域再利用の対象として指定することができます。View は、リンク クローン OS ディスク上の未使用領域が View Administrator で指定した最小しきい値に達するのを待たずに、ESXi ホストにその OS ディスク上のディスク領域を再利用するように指示します。

構文

```
vdmin
-M [-b authentication_arguments] -d desktop -m machine -markForSpaceReclamation
```

使用上の注意

このオプションを使用すると、デモまたはトラブルシューティングの目的で特定の仮想マシン上でディスク領域再利用を開始することができます。

停電期間が有効なときは、このコマンドを実行しても、領域の再利用は行われません。

vdmin コマンドと -M オプションを使用してディスク領域を再利用するには、以下の前提条件を満たしている必要があります。

- View が vCenter Server および ESXi バージョン 5.1 以降を使用していることを確認します。

- vSphere バージョン 5.1 以降で提供される VMware Tools が仮想マシンにインストールされていることを確認します。
- 仮想マシンが仮想ハードウェア バージョン 9 以降であることを確認します。
- View Administrator で、vCenter Server に対して、[領域再利用を有効にする] オプションが選択されていることを確認します。[vSphere でリンク クローン仮想マシンのディスク領域を再利用できるようにする](#)を参照してください。
- View Administrator で、デスクトップ プールに対して [VM ディスク スペースを再利用] オプションが選択されていることを確認します。詳細については、『View でのデスクトップ プールとアプリケーション プールの設定』の「リンク クローン デスクトップのディスク領域を再利用する」を参照してください。
- 領域再利用操作を開始する前に、仮想マシンがパワーオンされていることを確認します。
- 停電期間が有効でないことを確認します。詳細については、『View でのデスクトップ プールとアプリケーション プールの設定』の「リモート デスクトップで ESXi 操作の停電期間を設定する」を参照してください。

オプション

表 15-11. 仮想マシンのディスク領域を再利用するためのオプション

オプション	説明
<code>-d desktop</code>	デスクトップ プールの名前を指定します。
<code>-m machine</code>	仮想マシンの名前を指定します。
<code>-MarkForSpaceReclamation</code>	仮想マシンをディスク領域再利用の対象として指定します。

例

デスクトップ プール pool1 の仮想マシン machine3 を、ディスク領域再利用の対象として指定します。

```
vdmadmin -M -d pool1 -m machine3 -markForSpaceReclamation
```

-N オプションを使用したドメイン フィルタの構成

vdmadmin コマンドと -N オプションを使用して、View によって、エンド ユーザーからアクセス可能にするドメインを制御できます。

構文

```
vdmadmin
```

```
-N [-b authentication_arguments] -domains {-exclude | -include | -search} -domain domain -add [-s connsvr]
```

```
vdadmin
-N [-b authentication_arguments] -domains-list [-w | -n] [-xml]
```

```
vdadmin
-N [-b authentication_arguments] -domains-list-active [-w | -n] [-xml]
```

```
vdadmin
-N [-b authentication_arguments] -domains {-exclude | -include | -search} -domain domain -remove [-s connsvr]
```

```
vdadmin
-N [-b authentication_arguments] -domains {-exclude | -include | -search} -removeall [-s connsvr]
```

使用上の注意

-exclude、-include、または -search オプションのいずれかを指定して、それぞれ除外リスト、包含リスト、または検索除外リストに操作を適用します。

ドメインを検索除外リストに追加すると、そのドメインは自動ドメイン検索から除外されます。

ドメインを包含リストに追加すると、そのドメインは検索結果に含まれます。

ドメインを除外リストに追加すると、そのドメインは検索結果から除外されます。

オプション

表 15-12. [ドメイン フィルタの構成のオプション](#) にドメイン フィルタを構成するために指定できるオプションを示します。

表 15-12. ドメイン フィルタの構成のオプション

オプション	説明
-add	ドメインをリストに追加します。
-domain <i>domain</i>	フィルタ処理するドメインを指定します。 ドメインを指定する場合は、ドメインの DNS 名ではなく NetBIOS 名を使用する必要があります。
-domains	ドメイン フィルタ処理を指定します。
-exclude	除外リストへの操作を指定します。
-include	包含リストへの操作を指定します。
-list	各 View 接続サーバ インスタンスと View 接続サーバ グループの検索除外リスト、除外リスト、および包含リストに構成されているドメインを表示します。

オプション	説明
<code>-list -active</code>	コマンドを実行した View 接続サーバインスタンスに使用可能なドメインを表示します。
<code>-remove</code>	ドメインをリストから削除します。
<code>-removeall</code>	すべてのドメインをリストから削除します。
<code>-s <i>connsvr</i></code>	View 接続サーバインスタンスのドメイン フィルタに操作を適用することを指定します。View 接続サーバインスタンスは名前または IP アドレスで指定できます。 このオプションを指定しないと、検索構成に対して行った変更が、グループ内のすべて View 接続サーバインスタンスに適用されます。
<code>-search</code>	検索除外リストへの操作を指定します。

例

View 接続サーバインスタンス `csvr1` の検索除外リストにドメイン `FARDOM` を追加します。

```
vdadmin -N -domains -search -domain FARDOM -add -s csvr1
```

View 接続サーバグループの除外リストにドメイン `NEARDOM` を追加します。

```
vdadmin -N -domains -exclude -domain NEARDOM -add
```

グループ内の View 接続サーバインスタンスとグループの両方のドメイン検索構成を表示します。

```
C:\ vdadmin -N -domains -list
```

```
Domain Configuration
```

```
=====
```

```
Cluster Settings
```

```
Include:
```

```
Exclude:
```

```
Search :
```

```
FARDOM
```

```
DEPTX
```

```
Broker Settings:CONSVR-1
```

```
Include:
```

```
(*)Exclude:
```

```
YOURDOM
```

```
Search :
```

```
Broker Settings:CONSVR-2
```

```
Include:
```

```
Exclude:
```

```
Search :
```

View によって、グループ内の各 View 接続サーバホストでのドメイン検索が制限され、ドメイン `FARDOM` および `DEPTX` が除外されます。CONSVR-1 の除外リストの横にある文字 (*) は、CONSVR-1 でのドメイン検索の結果から View によって `YOURDOM` ドメインが除外されることを示しています。

ASCII 文字を使用した XML で、ドメイン フィルタを表示します。

```
vdmadmin -N -domains -list -xml -n
```

ローカル View 接続サーバ インスタンス上の View で使用できるドメインを表示します。

```
C:\ vdmadmin -N -domains -list -active
```

```
Domain Information (CONSVR)
```

```
=====
```

```
Primary Domain:MYDOM
```

```
Domain:MYDOM DNS:mydom.mycorp.com
```

```
Domain:YOURDOM DNS:yourdom.mycorp.com
```

```
Domain:FARDOM DNS:fardom.mycorp.com
```

```
Domain:DEPTX DNS:deptx.mycorp.com
```

```
Domain:DEPTY DNS:depty.mycorp.com
```

```
Domain:DEPTZ DNS:deptz.mycorp.com
```

ASCII 文字を使用した XML で、使用可能なドメインを表示します。

```
vdmadmin -N -domains -list -active -xml -n
```

View 接続サーバ グループの除外リストからドメイン NEARDOM を削除します。

```
vdmadmin -N -domains -exclude -domain NEARDOM -remove
```

View 接続サーバ インスタンス csvr1 の包含リストからすべてのドメインを削除します。

```
vdmadmin -N -domains -include -removeall -s csvr1
```

ドメイン フィルタの構成

ドメイン フィルタを構成して、View 接続サーバ インスタンスまたはセキュリティ サーバによって、エンド ユーザーからアクセス可能にするドメインを制限することができます。

View は、View 接続サーバ インスタンスまたはセキュリティ サーバが存在するドメインから始めて、信頼関係をたどってアクセスできるドメインを決定します。ドメインのセットが小さく、適切に接続されている場合、View は短時間でドメインの完全なリストを決定できますが、ドメインの数が増えたり、ドメイン間の接続が不十分であったりすると、この処理に要する時間は長くなります。View では、リモート デスクトップにログインしたユーザーに提供しない方がよいドメインも検索結果に含まれる場合があります。

ドメイン列挙の繰り返しを制御する Windows レジストリ キー (HKEY_LOCAL_MACHINE¥¥, Inc.¥VDM¥) の値を以前に false に設定した場合は、ドメイン検索の繰り返しが無効になっているため、View 接続サーバ インスタンスによってプライマリ ドメインのみが使用されます。ドメインのフィルタ処理機能を使用するには、そのレジストリ キーを削除するか、値を true に設定して、システムを再起動します。このキーを設定したすべての View 接続サーバ インスタンスに対して、この操作を実行する必要があります。

表 15-13. [ドメイン リストのタイプ](#) に、ドメインのフィルタ処理を構成するために指定できるドメイン リストのタイプを示します。

表 15-13. ドメイン リストのタイプ

ドメイン リストのタイプ	説明
検索除外リスト	自動検索中に View でたどることができるドメインを指定します。検索除外リストに含まれるドメインは検索で無視され、除外されたドメインに信頼されるドメインの特定は試行されません。プライマリ ドメインは検索から除外できません。
除外リスト	View でのドメイン検索の結果から除外するドメインを指定します。プライマリ ドメインは除外できません。
包含リスト	View でのドメイン検索の結果から除外しないドメインを指定します。その他のドメインは、プライマリ ドメイン以外すべて除外されます。

自動ドメイン検索では、検索除外リストで指定したドメインと、それらの除外ドメインに信頼されるドメイン以外のドメインのリストを取得します。View によって、空でない最初の除外リストまたは包含リストが次の順序で選択されます。

- 1 View 接続サーバ インスタンスに構成されている除外リスト
- 2 View 接続サーバ グループに構成されている除外リスト
- 3 View 接続サーバ インスタンスに構成されている包含リスト
- 4 View 接続サーバ グループに構成されている包含リスト

View によって最初に選択されたリストのみが検索結果に適用されます。

結果に含めるようにドメインを指定しても、そのドメインのドメイン コントローラに現在アクセスできない場合、そのドメインは View によりアクティブ ドメインのリストに含められません。

View 接続サーバ インスタンスまたはセキュリティ サーバが属するプライマリ ドメインは除外できません。

ドメインを含めるフィルタ処理の例

包含リストを使用して、View でのドメイン検索の結果から除外しないドメインを指定できます。その他のドメインは、プライマリ ドメイン以外すべて除外されます。

ある View 接続サーバ インスタンスがプライマリの MYDOM ドメインに属していて、YOURDOM ドメインとの信頼関係があるとしします。YOURDOM ドメインには、DEPTX ドメインとの信頼関係があるとしします。

この View 接続サーバ インスタンスについて、現在アクティブなドメインを表示します。

```
C:\> vdmadmin -N -domains -list -active
```

```
Domain Information (CONSVR)
```

```
=====
```

```
Primary Domain:MYDOM
```

```
Domain:MYDOM DNS:mydom.mycorp.com
```

```
Domain:YOURDOM DNS:yourdom.mycorp.com
```

```
Domain:FARDOM DNS:fardom.mycorp.com
```

```
Domain:DEPTX DNS:deptx.mycorp.com
```

```
Domain:DEPTY DNS:depty.mycorp.com
```

```
Domain:DEPTZ DNS:deptz.mycorp.com
```


DEPTY および DEPTZ ドメインがこのリストに表示されるのは、DEPTX ドメインに信頼されるドメインであるためです。

この View 接続サーバ インスタンスで、プライマリの MYDOM ドメイン以外に YOURDOM および DEPTX ドメインのみを使用可能にするように指定します。

```
vdadmin -N -domains -include -domain YOURDOM -add
vdadmin -N -domains -include -domain DEPTX -add
```

YOURDOM および DEPTX ドメインを含めた後、現在アクティブなドメインを表示します。

```
C:\ vdadmin -N -domains -list -active
```

```
Domain Information (CONSVR)
=====
Primary Domain:MYDOM
Domain:MYDOM DNS:mydom.mycorp.com
Domain:YOURDOM DNS:yourdom.mycorp.com
Domain:DEPTX DNS:deptx.mycorp.com
```

View によって包含リストがドメイン検索の結果に適用されます。ドメイン階層が非常に複雑で、ネットワーク接続に問題のあるドメインがある場合は、ドメイン検索に時間がかかることがあります。そのような場合は、代わりに検索除外を使用します。

ドメイン除外のフィルタ処理の例

除外リストを使用して、View でのドメイン検索の結果から除外するドメインを指定できます。

CONSVR-1 および CONSVR-2 という 2 つの View 接続サーバ インスタンスのグループが、プライマリの MYDOM ドメインに属していて、YOURDOM ドメインとの信頼関係があるとします。YOURDOM ドメインには、DEPTX および FARDOM ドメインとの信頼関係があるとします。

FARDOM ドメインは地理的に離れた場所にあり、このドメインへのネットワーク接続は低速で高レイテンシーのリンクを経由しています。FARDOM ドメインのユーザーが MYDOM ドメインの View 接続サーバ グループにアクセスできるようにする必要はありません。

この View 接続サーバ グループのメンバーについて、現在アクティブなドメインを表示します。

```
C:\ vdadmin -N -domains -list -active
```

```
Domain Information (CONSVR-1)
=====
Primary Domain:MYDOM

Domain:MYDOM DNS:mydom.mycorp.com
Domain:YOURDOM DNS:yourdom.mycorp.com
Domain:FARDOM DNS:fardom.mycorp.com
Domain:DEPTX DNS:deptx.mycorp.com
Domain:DEPTY DNS:depty.mycorp.com
Domain:DEPTZ DNS:deptz.mycorp.com
```

DEPTY および DEPTZ ドメインは DEPTX ドメインに信頼されるドメインです。

Horizon Client の接続パフォーマンスを改善するために、View 接続サーバ グループによる検索から FARDOM ドメインを除外します。

```
vdmadmin -N -domains -search -domain FARDOM -add
```

検索から FARDOM ドメインを除外した後、次のコマンドを実行して現在アクティブなドメインを表示します。

```
C:\ vdmadmin -N -domains -list -active
```

```
Domain Information (CONSVR-1)
```

```
=====
```

```
Primary Domain:MYDOM
```

```
Domain:MYDOM DNS:mydom.mycorp.com
```

```
Domain:YOURDOM DNS:yourdom.mycorp.com
```

```
Domain:DEPTX DNS:deptx.mycorp.com
```

```
Domain:DEPTY DNS:depty.mycorp.com
```

```
Domain:DEPTZ DNS:deptz.mycorp.com
```

検索除外リストを拡張して、グループ内のすべての View 接続サーバ インスタンスでのドメイン検索から、DEPTX ドメインとそのドメインに信頼されるすべてのドメインを除外します。さらに、YOURDOM ドメインも CONSVR-1 で使用可能なドメインから除外します。

```
vdmadmin -N -domains -search -domain DEPTX -add
```

```
vdmadmin -N -domains -exclude -domain YOURDOM -add -s CONSVR-1
```

ドメイン検索の新しい構成を表示します。

```
C:\ vdmadmin -N -domains -list
```

```
Domain Configuration
```

```
=====
```

```
Cluster Settings
```

```
Include:
```

```
Exclude:
```

```
Search :
```

```
FARDOM
```

```
DEPTX
```

```
Broker Settings:CONSVR-1
```

```
Include:
```

```
(*)Exclude:
```

```
YOURDOM
```

```
Search :
```

```
Broker Settings:CONSVR-2
```

```
Include:
```

```
Exclude:
```

```
Search :
```

View によって、グループ内の各 View 接続サーバ ホストでのドメイン検索が制限され、ドメイン FARDOM および DEPTX が除外されます。CONSVR-1 の除外リストの横にある文字 (*) は、CONSVR-1 でのドメイン検索の結果から View によって YOURDOM ドメインが除外されることを示しています。

CONSVR-1 で、現在アクティブなドメインを表示します。

```
C:\ vdmadmin -N -domains -list -active
```

```
Domain Information (CONSVR-1)
```

```
=====
```

```
Primary Domain:MYDOM
```

```
Domain:MYDOM DNS:mydom.mycorp.com
```

CONSVR-2 で、現在アクティブなドメインを表示します。

```
C:\ vdmadmin -N -domains -list -active
```

```
Domain Information (CONSVR-2)
```

```
=====
```

```
Primary Domain:MYDOM
```

```
Domain:MYDOM DNS:mydom.mycorp.com
```

```
Domain:YOURDOM DNS:yourdom.mycorp.com
```

-O および -P オプションを使用して資格を持たないユーザーのマシンとポリシーを表示する

vdmadmin コマンドと -O および -P オプションを使用して、システムを使用する資格を失ったユーザーに割り当てられている仮想マシンとポリシーを表示できます。

構文

```
vdmadmin
-O [-b authentication_arguments] [-ld | -lu] [-w | -n] [-xml [-noxslt | -xsltpath path]]
```

```
vdmadmin
-P [-b authentication_arguments] [-ld | -lu] [-w | -n] [-xml [-noxslt | -xsltpath path]]
```

使用上の注意

通常の仮想マシンまたは物理システムに対するユーザーの資格を失効させても、関連付けられたリモート デスクトップの割り当ては自動的に失効しません。ユーザーのアカウントを一時的にサスペンドする場合やユーザーが長期休暇中の場合は、この状況でも問題がない可能性があります。資格を再度有効にすると、そのユーザーは以前と同じ仮想マシンを引き続き使用することができます。ユーザーが組織を離れた場合は、他のユーザーはその仮想マシンにアクセスできないため、その仮想マシンは孤立しているとみなされます。資格のないユーザーに割り当てられているポリシーを調べることも必要になります。

オプション

表 15-14. 資格のないユーザーのマシンおよびポリシーを表示するためのオプション に、資格のないユーザーの仮想マシンとポリシーの表示に指定できるオプションを示します。

表 15-14. 資格のないユーザーのマシンおよびポリシーを表示するためのオプション

オプション	説明
-ld	出力エントリの順序をマシン別に設定します。
-lu	出力エントリの順序をユーザー別に設定します。
-noxslt	XML 出力にデフォルトのスタイルシートを適用しないことを指定します。
-xsltpath <i>path</i>	XML 出力を変換するために使用するスタイルシートのパスを指定します。

表 15-15. XSL スタイルシート に、XML 出力を HTML に変換するために適用できるスタイルシートを示します。これらのスタイルシートは、ディレクトリ C:¥Files¥¥View¥¥ にあります。

表 15-15. XSL スタイルシート

スタイルシート ファイル名	説明
unentitled-machines.xsl	ユーザーまたはシステム別にグループ化された、現在ユーザーに割り当てられている資格のない仮想マシンのリストを含むレポートを変換します。これはデフォルトのスタイルシートです。
unentitled-policies.xsl	資格のないユーザーに適用されているユーザー レベルのポリシーのある仮想マシンのリストを含むレポートを変換します。

例

資格のないユーザーに割り当てられている仮想マシンを仮想マシン別にグループ化して、テキスト形式で表示します。

```
vdmadmin -O -ld
```

資格のないユーザーに割り当てられている仮想マシンをユーザー別にグループ化して、ASCII 文字を使用した XML 形式で表示します。

```
vdmadmin -O -lu -xml -n
```

独自のスタイルシート C:¥¥.xsl を適用して、出力をファイル uu-output.html にリダイレクトします。

```
vdmadmin -O -lu -xml -xsltpath "C:\tmp\unentitled-users.xsl" > uu-output.html
```

資格のないユーザーの仮想マシンに関連付けられているユーザー ポリシーをデスクトップ別にグループ化して、Unicode 文字を使用した XML 形式で表示します。

```
vdmadmin -P -ld -xml -w
```

独自のスタイルシート C:¥¥.xsl を適用して、出力をファイル uu-output.html にリダイレクトします。

```
vdmadmin -P -ld -xml -xsltpath "C:\tmp\unentitled-policies.xsl" > up-output.html
```

-Q オプションを使用したキオスク モードのクライアントの構成

vdmadmin コマンドと -Q オプションを使用すると、キオスク モードのクライアントのデフォルト値を設定してアカウントを作成し、これらのクライアントの認証を可能にし、それらの構成に関する情報を表示することができます。

構文

```
vdmadmin
-Q
-clientauth
-add [-b authentication_arguments] -domain domain_name-clientid client_id [-password "password"
| -genpassword] [-ou DN] [-expirepassword | -noexpirepassword] [-groupgroup_name | -nogroup] [-description
"description_text"]
```

```
vdmadmin
-Q
-disable [-b authentication_arguments] -s connection_server
```

```
vdmadmin
-Q
-enable [-b authentication_arguments] -s connection_server [-requirepassword]
```

```
vdmadmin
-Q
-clientauth
-getdefaults [-b authentication_arguments] [-xml]
```

```
vdmadmin
-Q
-clientauth
-list [-b authentication_arguments] [-xml]
```

```
vdmadmin
-Q
-clientauth
-remove [-b authentication_arguments] -domain domain_name-clientid client_id
```

```
vdmadmin
-Q
```

```
-clientauth
-removeall [-b authentication_arguments] [-force]
```

```
vdmadmin
-Q
-clientauth
-setdefaults [-b authentication_arguments] [-ou DN] [ -expirepassword | -noexpirepassword ] [-group
group_name | -nogroup]
```

```
vdmadmin
-Q
-clientauth
-update [-b authentication_arguments] -domain domain_name-clientid client_id [-password
"password" | -genpassword] [-description "description_text"]
```

使用上の注意

vdmadmin コマンドは、クライアントがリモート デスクトップに接続するために使用する View 接続サービンスと同一グループに属するいずれかの View 接続サービンスで実行する必要があります。

パスワード有効期限および Active Directory グループ メンバーシップのデフォルト値を構成すると、これらの設定は同じグループに属するすべての View 接続サービンス間で共有されます。

キオスク モードのクライアントを追加すると、View はそのクライアントのユーザー アカウントを Active Directory に作成します。クライアントの名前を指定する場合は、文字列「custom-」、または ADAM で定義可能な別の文字列で始まる 20 文字以内の名前にする必要があります。指定した各名前は 1 台のクライアント デバイスでのみ使用します。

「custom-」の代わりに使用するプレフィックスは、View 接続サービンスの ADAM 内の cn=common,ou=global,ou=properties,dc=vdi,dc=vmware,dc=int で、pae-ClientAuthPrefix 複数値属性で定義できます。これらプレフィックスを通常のユーザー アカウントと一緒に使用しないようにしてください。

クライアントの名前を指定しない場合、View はクライアント デバイス用に指定した MAC アドレスから名前を生成します。たとえば、MAC アドレスが 00:10:db:ee:76:80 の場合、対応するアカウント名は cm-00_10_db_ee_76_80 です。この形式のアカウント名は、クライアントの認証を有効にした View 接続サービンスでのみ使用できます。

一部のシンクライアントは、キオスク モードで使用するアカウント名として、文字列「custom-」または「cm-」で始まるもののみ許可しています。

自動生成されるパスワードは長さが 16 文字で、大文字、小文字、記号、および数字をそれぞれ 1 文字以上含み、同じ文字を繰り返し含めることができます。より強力なパスワードが必要な場合は、-password オプションを使用してパスワードを指定する必要があります。

-group オプションを使用してグループを指定するか、以前にデフォルトのグループを設定している場合は、View がこのグループにクライアントのアカウントを追加します。-nogroup オプションを指定して、アカウントがグループに追加されないようにすることができます。

View 接続サーバ インスタンスでキオスク モードのクライアントを認証できるようにする場合は、オプションでクライアントがパスワードを入力する必要があることを指定できます。認証を無効にすると、クライアントはリモート デスクトップに接続できません。

個別の View 接続サーバ インスタンスに対して認証を有効または無効にできますが、グループ内のすべての View 接続サーバ インスタンスがクライアント認証に関する他のすべての設定を共有します。グループ内のすべての View 接続サーバ インスタンスに対しクライアントを 1 回追加するだけで、クライアントからの要求を受け付けることができるようになります。

認証を有効にする場合に `-requirepassword` オプションを指定すると、View 接続サーバ インスタンスは自動生成パスワードを使用するクライアントを認証できません。View 接続サーバ インスタンスの構成を変更してこのオプションを指定すると、そのようなクライアントは認証されず、「Unknown username or bad password(不明なユーザー名または不正確なパスワード)」というエラー メッセージが表示されて認証に失敗します。

オプション

表 15-16. キオスク モードのクライアントの構成のオプション にキオスク モードのクライアントを構成するために指定できるオプションを示します。

表 15-16. キオスク モードのクライアントの構成のオプション

オプション	説明
<code>-add</code>	キオスク モードのクライアントのアカウントを追加します。
<code>-clientauth</code>	キオスク モードのクライアントの認証を構成する操作を指定します。
<code>-clientid <i>client_id</i></code>	クライアントの名前または MAC アドレスを指定します。
<code>-description "<i>description_text</i>"</code>	クライアント デバイスのアカウントの説明を Active Directory に作成します。
<code>-disable</code>	指定した View 接続サーバ インスタンスでのキオスク モードのクライアントの認証を無効にします。
<code>-domain <i>domain_name</i></code>	クライアント デバイスのアカウントのドメインを指定します。
<code>-enable</code>	指定した View 接続サーバ インスタンスでのキオスク モードのクライアントの認証を有効にします。
<code>-expirepassword</code>	クライアント アカウントのパスワードの有効期限を View 接続サーバ グループと同じ有効期限にするように指定します。グループでパスワード有効期限が定義されていない場合、パスワードは無期限になります。
<code>-force</code>	キオスク モードのクライアントのアカウントを削除する場合に、確認のプロンプトを無効にします。
<code>-genpassword</code>	クライアント アカウントのパスワードを生成します。これは、 <code>-password</code> も <code>-genpassword</code> も指定しない場合のデフォルトの動作です。
<code>-getdefaults</code>	クライアント アカウントの追加に使用されるデフォルト値を取得します。
<code>-group <i>group_name</i></code>	クライアント アカウントを追加するデフォルト グループの名前を指定します。グループの名前は、Active Directory の Windows 2000 以前のグループ名として指定する必要があります。

オプション	説明
<code>-list</code>	キオスク モードのクライアントと、キオスク モードのクライアントの認証を有効にした View 接続サーバ インスタンスに関する情報を表示します。
<code>-noexpirepassword</code>	アカウントのパスワードを無期限にすることを指定します。
<code>-nogroup</code>	クライアントのアカウントを追加する場合は、クライアントのアカウントをデフォルト グループに追加しないことを指定します。 クライアントのデフォルト値を設定する場合は、デフォルト グループの設定をクリアします。
<code>-ou <i>DN</i></code>	クライアント アカウントを追加する組織単位の識別名を指定します。 例：OU=kiosk-ou,DC=myorg,DC=com 注： <code>-setdefaults</code> オプションを使用して組織単位の構成を変更することはできません。
<code>-password "<i>password</i>"</code>	クライアント アカウントの明示的パスワードを指定します。
<code>-remove</code>	キオスク モードのクライアントのアカウントを削除します。
<code>-removeall</code>	キオスク モードのすべてのクライアントのアカウントを削除します。
<code>-requirepassword</code>	キオスク モードのクライアントはパスワードを入力する必要があることを指定します。View は新しい接続に対して生成されたパスワードを受け付けません。
<code>-s <i>connection_server</i></code>	キオスク モードのクライアントの認証を有効または無効にする View 接続サーバ インスタンスの NetBIOS 名を指定します。
<code>-setdefaults</code>	クライアント アカウントの追加に使用されるデフォルト値を設定します。
<code>-update</code>	キオスク モードのクライアントのアカウントを更新します。

例

クライアントの組織単位、パスワード有効期限、およびグループ メンバーシップのデフォルト値を設定します。

```
vdadmin -Q -clientauth -setdefaults -ou "OU=kiosk-ou,DC=myorg,DC=com" -noexpirepassword -group kc-grp
```

クライアントの現在のデフォルト値をテキスト形式で取得します。

```
vdadmin -Q -clientauth -getdefaults
```

クライアントの現在のデフォルト値を XML 形式で取得します。

```
vdadmin -Q -clientauth -getdefaults -xml
```

MAC アドレスで指定されたクライアントのアカウントを MYORG ドメインに追加し、グループ kc-grp のデフォルト設定を使用します。

```
vdadmin -Q -clientauth -add -domain MYORG -clientid 00:10:db:ee:76:80 -group kc-grp
```


MAC アドレスで指定されたクライアントのアカウントを MYORG ドメインに追加し、自動生成されたパスワードを使用します。

```
vdmadmin -Q -clientauth -add -domain MYORG -clientid 00:10:db:ee:76:80 -genpassword -ou "OU=kiosk-ou,DC=myorg,DC=com" -group kc-grp
```

クライアントの名前を指定してアカウントを追加し、そのクライアントで使用するパスワードを指定します。

```
vdmadmin -Q -clientauth -add -domain MYORG -clientid custom-Terminal21 -password "guest" -ou "OU=kiosk-ou,DC=myorg,DC=com" -description "Terminal 21"
```

新しいパスワードと説明のテキストを指定してクライアントのアカウントを更新します。

```
vdmadmin -Q -clientauth -update -domain MYORG -clientid custom-Terminal21 -password "Secret1!" -description "Foyer Entry Workstation"
```

MAC アドレスで指定されたキオスク クライアントのアカウントを MYORG ドメインから削除します。

```
vdmadmin -Q -clientauth -remove -domain MYORG -clientid 00:10:db:ee:54:12
```

削除の確認を求めずに、すべてのクライアントのアカウントを削除します。

```
vdmadmin -Q -clientauth -removeall -force
```

View 接続サーバ インスタンス csvr-2 に対しクライアントの認証を有効にします。自動生成されたパスワードを使用するクライアントは、パスワードを入力しなくても認証されます。

```
vdmadmin -Q -enable -s csvr-2
```

View 接続サーバ インスタンス csvr-3 に対しクライアントの認証を有効にして、パスワードを Horizon Client に指定するようクライアントに要求します。自動生成されたパスワードを使用するクライアントは認証されません。

```
vdmadmin -Q -enable -s csvr-3 -requirepassword
```

View 接続サーバ インスタンス csvr-1 に対しクライアントの認証を無効にします。

```
vdmadmin -Q -disable -s csvr-1
```

クライアントについての情報をテキスト形式で表示します。クライアント cm-00_0c_29_0d_a3_e6 のパスワードは自動生成されており、エンド ユーザーまたはアプリケーション スクリプトにはこのパスワードを Horizon Client に指定する必要はありません。クライアント cm-00_22_19_12_6d_cf のパスワードは明示的に指定されており、エンド ユーザーはこのパスワードを入力する必要があります。View 接続サーバ インスタンス CONSVR2 は、自動生成されたパスワードを使用するクライアントからの認証要求を受け付けます。CONSVR1 は、キオスク モードのクライアントからの認証要求を受け付けません。

```
C:\ vdmadmin -Q -clientauth -list
Client Authentication User List
=====
GUID                : 94be6344-0c9b-4a92-8d54-1brc1c2dc282
ClientID            : cm-00_0c_29_0d_a3_e6
Domain              : myorg.com
```

```

Password Generated: true

GUID                : 471d9d35-68b2-40ee-b693-56a7d92b2e25
ClientID            : cm-00_22_19_12_6d_cf
Domain              : myorg.com
Password Generated: false

```

Client Authentication Connection Servers

```

=====
Common Name          : CONSVR1
Client Authentication Enabled : false
Password Required    : false

```

```

Common Name          : CONSVR2
Client Authentication Enabled : true
Password Required    : false

```

-R オプションを使用したマシンの最初のユーザーの表示

vdmadmin コマンドと -R オプションを使用して、管理対象仮想マシンの初期の割り当てを確認できます。たとえば、LDAP データが失われた場合、仮想マシンを再度ユーザーに割り当てるためにこの情報が必要になることがあります。

注: vdmadmin コマンドでの -R オプションの使用は、View Agent 5.1 より前の仮想マシンでのみ動作します。

View Agent 5.1 以降および Horizon Agent 7.0 以降のバージョンが実行される仮想マシンでは、このオプションは動作しません。仮想マシンの最初のユーザーを検索するには、イベント データベースを使用してマシンにログインしたユーザーを指定します。

構文

```

vdmadmin
-R
-i
network_address

```

使用上の注意

特権ユーザーとして、-b オプションを使用してこのコマンドを実行することはできません。管理者ロールを持つユーザーとしてログインします。

オプション

-i オプションで、仮想マシンの IP アドレスを指定します。

例

IP アドレス 10.20.34.120 の仮想マシンに最初にアクセスしたユーザーを表示します。

```
vdadmin -R -i 10.20.34.120
```

-S オプションを使用した View 接続サーバ インスタンスまたはセキュリティ サーバのエントリの削除

vdadmin コマンドと -S オプションを使用して、View 接続サーバ インスタンスまたはセキュリティ サーバのエントリを View の構成から削除できます。

構文

```
vdadmin  
-S [-b authentication_arguments] -r-s server
```

使用上の注意

高可用性を確保するため、View では View 接続サーバ グループ内に 1 つ以上のレプリカの View 接続サーバ インスタンスを構成できます。グループの View 接続サーバ インスタンスを無効にしても、そのサーバのエントリは View の構成内に存続します。

また、vdadmin コマンドと -S オプションを使用して、セキュリティ サーバを View 環境から削除することもできます。セキュリティ サーバを恒久的に削除せずにアップグレードまたは再インストールする予定がある場合は、このオプションを使用する必要はありません。

恒久的に削除するには、次のタスクを実行します。

- 1 View 接続サーバ インストーラを実行して、Windows Server コンピュータから View 接続サーバ インスタンスまたはセキュリティ サーバをアンインストールします。
- 2 プログラムの追加と削除 ツールを実行して、Windows Server コンピュータから Adam Instance VMwareVDMDS プログラムを削除します。
- 3 別の View 接続サーバ インスタンスで、vdadmin コマンドを使用して、アンインストールした View 接続サーバ インスタンスまたはセキュリティ サーバのエントリを構成から削除します。

元のグループの View 構成を複製しないで、削除したシステムに View を再インストールする場合は、再インストールを実行する前に、元のグループのすべての View 接続サーバ ホストを再起動します。これにより、再インストールされた View 接続サーバ インスタンスは元のグループから構成の更新を受け取りません。

オプション

-s オプションは、削除する View 接続サーバ インスタンスまたはセキュリティ サーバの NetBIOS 名を指定します。

例

View 接続サーバ インスタンス connsvr3 のエントリを削除します。

```
vdadmin -S -r -s connsvr3
```

-T オプションの使用による管理者の 2 番目の認証情報の提供

vdadmin コマンドを使用するときに -T オプションを指定すると、Active Directory の 2 番目の認証情報を管理者ユーザーに提供できます。

構文

```
vdadmin
-T [-b authentication_arguments] -domainauth
{-add | -update | -remove | -removeall | -list} -ownerdomain\user-userdomain\user [-passwordpassword]
```

使用上の注意

View 接続サーバ ドメインと一方向の信頼関係を持つドメイン内にユーザーとグループが存在する場合は、View Administrator で管理者ユーザーの 2 番目の認証情報を指定する必要があります。2 番目の認証情報がないと、管理者は一方向で信頼されているドメインへのアクセス権を付与できません。一方向で信頼されているドメインは、外部ドメインまたは推移的なフォレストの信頼のドメインになります。

2 番目の認証情報は、エンド ユーザーのデスクトップまたはアプリケーション セッションではなく、View Administrator セッションでのみ必要になります。2 番目の認証情報が必要なのは管理者ユーザーだけです。

2 番目の認証情報をユーザーごとに構成するには、vdadmin コマンドを使用します。グローバルに指定された 2 番目の認証情報を構成することはできません。

フォレストの信頼の場合、通常はフォレストのルート ドメインのみに 2 番目の認証情報を構成します。こうすることで、View 接続サーバはフォレストの信頼の子ドメインを列挙できるようになります。

一方向で信頼されているドメインのユーザーが最初にログオンした場合にのみ、Active Directory アカウントのロック、無効化、およびログオン時間のチェックを実行できます。

ユーザーの PowerShell 管理およびスマート カード認証は、一方向で信頼されているドメインではサポートされません。一方向で信頼されているドメインのユーザーの SAML 認証はサポートされません。

2 番目の認証情報のアカウントには次の権限が必要です。標準のユーザー アカウントには、デフォルトでこれらの権限が付与されています。

- 内容の一覧表示
- すべてのプロパティの読み取り
- アクセス許可の読み取り
- tokenGroupsGlobalAndUniversal の読み取り ([すべてのプロパティの読み取り] により暗黙に含まれる)

オプション

表 15-17. 2 番目の認証情報を提供するためのオプション

オプション	説明
<code>-add</code>	所有者アカウントの 2 番目の認証情報を追加します。 Windows ログインが実行され、指定した認証情報が有効かどうかを検証されます。View LDAP のユーザーに対して Foreign Security Principal (FSP) が作成されます。
<code>-update</code>	所有者アカウントの 2 番目の認証情報を更新します。 Windows ログインが実行され、更新済みの認証情報が有効かどうかを検証されます。
<code>-list</code>	所有者アカウントのセキュリティ認証情報を表示します。パスワードは表示されません。
<code>-remove</code>	所有者アカウントからセキュリティ認証情報を削除します。
<code>-removeall</code>	所有者アカウントからセキュリティ認証情報をすべて削除します。

例

指定した所有者アカウントの 2 番目の認証情報を追加します。Windows ログインが実行され、指定した認証情報が有効かどうかを検証されます。

```
vdadmin -T -domainauth -add -owner domain\user -user domain\user -password password
```

指定した所有者アカウントの 2 番目の認証情報を更新します。Windows ログインが実行され、更新済みの認証情報が有効かどうかを検証されます。

```
vdadmin -T -domainauth -update -owner domain\user -user domain\user -password password
```

指定した所有者アカウントの 2 番目の認証情報を削除します。

```
vdadmin -T -domainauth -remove -owner domain\user -user domain\user
```

指定した所有者アカウントの 2 番目の認証情報をすべて削除します。

```
vdadmin -T -domainauth -removeall -owner domain\user
```

指定した所有者アカウントの 2 番目の認証情報をすべて表示します。パスワードは表示されません。

```
vdadmin -T -domainauth -list -owner domain\user
```

-U オプションを使用したユーザーに関する情報の表示

`vdadmin` コマンドと `-U` オプションを使用して、ユーザーに関する詳細情報を表示できます。

構文

```
vdmadmin  
-U [-b authentication_arguments] -u domain\user [-w | -n] [-xml]
```

使用上の注意

このコマンドは、Active Directory および View から取得したユーザーに関する情報を表示します。

- Active Directory から取得したユーザーのアカウントの詳細
- Active Directory グループのメンバーシップ
- マシンに対する資格（マシン ID、表示名、説明、フォルダ、およびマシンが無効になっているかどうかなど）
- ThinApp 割り当て
- 管理者のロール（ユーザーの管理者権限、その権限が付与されているフォルダなど）

オプション

-u オプションは、ユーザーの名前およびドメインを指定します。

例

ASCII 文字を使用した XML で、CORP ドメインのユーザー Jo に関する情報を表示します。

```
vdmadmin -U -u CORP\Jo -n -xml
```

-V オプションを使用した仮想マシンのロック解除またはロック

vdmadmin コマンドと -V オプションを使用して、データセンター内の仮想マシンをロック解除またはロックできます。

構文

```
vdadmin
-V [-b authentication_arguments] -e -d desktop -m machine ...
```

```
vdadmin
-V [-b authentication_arguments] -e -vcdn vCenter_dn -vmpath inventory_path
```

```
vdadmin
-V [-b authentication_arguments] -p -d desktop -m machine [-mmachine] ...
```

```
vdadmin
-V [-b authentication_arguments] -p -vcdn vCenter_dn -vmpath inventory_path
```

使用上の注意

vdadmin コマンドは、リモート デスクトップを不正な状態にする問題が発生した場合に、仮想マシンをロック解除またはロックするためにのみ使用してください。正常に動作しているリモート デスクトップを管理する目的ではこのコマンドを使用しないでください。

リモート デスクトップがロックされ、その仮想マシンのエントリが ADAM に存在しなくなった場合は、-vmpath および -vcdn オプションを使用して、仮想マシンおよび vCenter Server のインベントリ パスを指定します。vCenter Client を使用して、Home/Inventory/VMs and Templates の下にリモート デスクトップの仮想マシンのインベントリ パスを見つけることができます。ADAM ADSI Edit を使用して、OU=Properties 見出しの下に vCenter Server の識別名を見つけることができます。

オプション

表 15-18. 仮想マシンをロック解除またはロックするためのオプション に仮想マシンをロック解除またはロックするために指定できるオプションを示します。

表 15-18. 仮想マシンをロック解除またはロックするためのオプション

オプション	説明
-d desktop	デスクトップ プールを指定します。
-e	仮想マシンをロック解除します。
-m machine	仮想マシンの名前を指定します。
-p	仮想マシンをロックします。
-vcdn vCenter_dn	vCenter Server の識別名を指定します。
-vmpath inventory_path	仮想マシンのインベントリ パスを指定します。

例

デスクトップ プール dtpool3 の仮想マシン machine1 および machine2 のロックを解除します。

```
vdmadmin -V -e -d dtpool3 -m machine1 -m machine2
```

デスクトップ プール dtpool3 の仮想マシン machine3 をロックします。

```
vdmadmin -V -p -d dtpool3 -m machine3
```

-X オプションを使用した LDAP エントリ コリジョンの検出と解決

vdmadmin コマンドと -X オプションを使用して、View 接続サーバ グループ内の複製された View 接続サーバ インスタンスに LDAP エントリ コリジョンがあるかどうかを検出し、それらを解決できます。

構文

```
vdmadmin
-X [-bauthentication_arguments] -collisions [-resolve]
```

使用上の注意

重複する LDAP エントリが複数の View 接続サーバ インスタンス上に作成された場合、View 内の LDAP データの整合性に問題が発生する場合があります。たとえば、アップグレード中に LDAP レプリケーションが機能していないときにこの状態になることがあります。このエラー状態が発生しているかどうかは View によって定期的にチェックされますが、vdmadmin コマンドをグループ内の View 接続サーバ インスタンスで実行することで LDAP エントリ コリジョンを手動で検出して解決できます。

オプション

表 15-19. LDAP エントリ コリジョンを検出して解決するためのオプション に LDAP エントリ コリジョンを検出して解決するために指定できるオプションを示します。

表 15-19. LDAP エントリ コリジョンを検出して解決するためのオプション

オプション	説明
-collisions	View 接続サーバ グループ内の LDAP コリジョンを検出するための操作を指定します。
-resolve	検出されたすべての LDAP コリジョンを解決します。

例

View 接続サーバ グループ内の LDAP エントリ コリジョンを検出します。

```
vdmadmin -X -collisions
```


LDAP エントリ コリジョンを検出して解決します。

```
vdmadmin -X -collisions -resolve
```